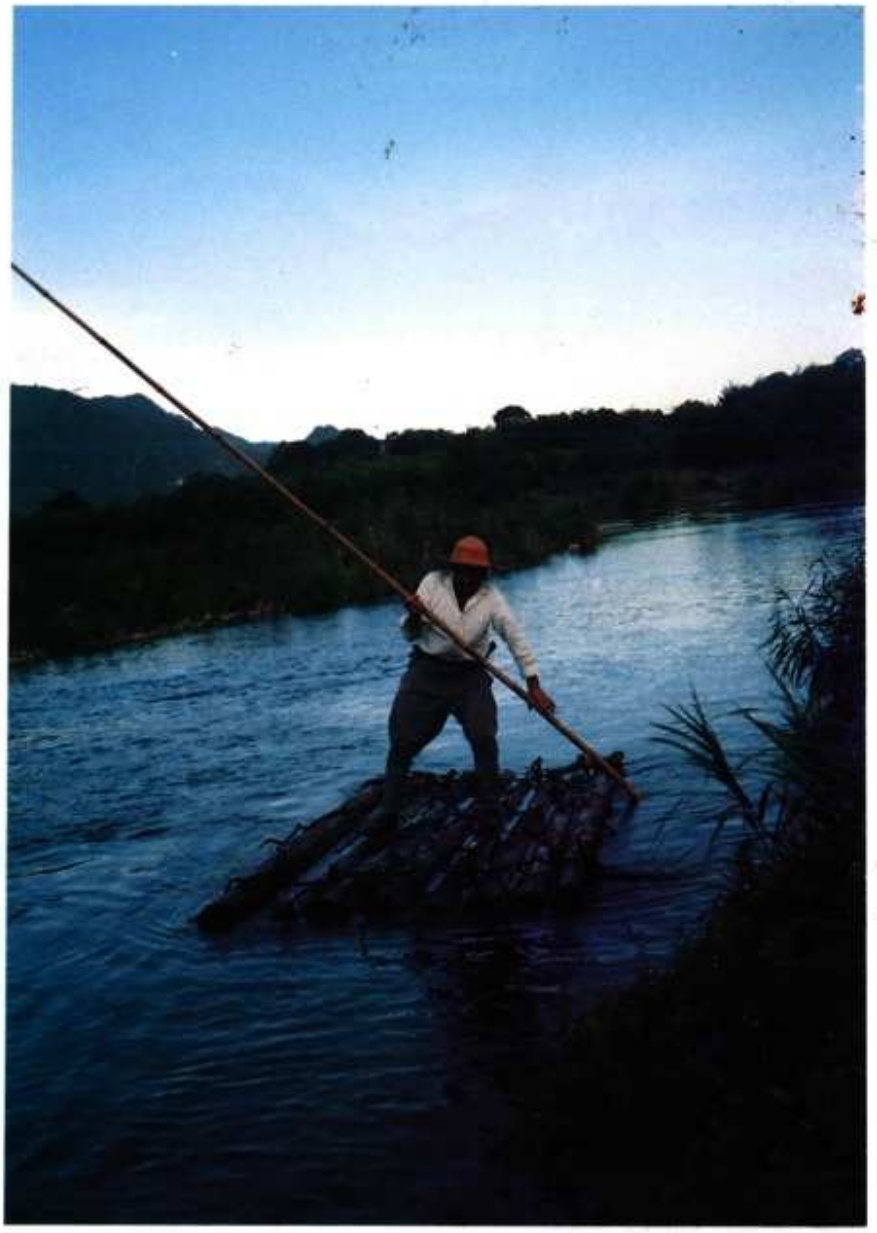
昭和六十二・六十三年度調査

群馬県の民謡

―民謡緊急調査報告書―

群馬県教育委員会



「吾妻川の筏流し」

材木を筏で、吾妻川から前橋の大渡りの集木場へ運んだ。
竹は千葉県の野田醤油工場へ運んだ。　　（吾妻地域「筏乗りうた」）

「赤城の馬子」

赤城山の小沼からの氷を、馬の背で、蚕の種屋へ運んだ。
春が暖かいと種が孵化するので、それを氷でくい止めた。

（中毛地域「上州馬子唄」）

「赤わん節」

音頭とりが、ひたいのところに扇子をかざして歌っている。
これは盆ヤグラの出来る以前の音頭とりが、「自分が歌い手なんだ」という証である。

（中毛地域「赤わん節」）

序

群馬県には、古くから伝承されてきた数多くの民謡がありました。

それらの民謡は、地域の生業や祭のなかから生まれ、歴史や風土にはぐくまれてきました。

しかしながら、最近の生産形態や社会構造の変化には著しいものがあり、民謡を支えてきた基盤である生活そのものが様変りしてしまいました。そのため、民謡を歌う人も歌われる機会も失われ、急速に忘れ去られようとしています。

このような状況のなかで、県教育委員会では、国の助成を受けて、昭和六十二年度・六十三年度の二か年にわたり、現在でも歌うことのできる県内の民謡を調査し、録音テープに収録いたしました。

この報告書は、その結果をまとめたもので、貴重な民俗文化財の記録保存として、多くのみなさまに活用されることを願っております。

終わりに、この調査に御協力をいただきました各地の民謡伝承者の皆様方をはじめ、調査員各位の御労苦に対し、衷心からお礼を申しあげます。

平成元年三月

群馬県教育委員会

教育長　千吉良　覚

例言

一、本書は、群馬県教育委員会が昭和六十二年度・六十三年度に、国庫補助を受けて実施した「群馬県民謡緊急調査」の報告書である。

二、報告書は、採録した八五〇曲余の歌詞の中七一九曲を掲載した。

三、民謡の分類については、原則として文化庁の分類に従った。（第一章「群馬県民謡緊急調査の実施概要」三、調査対象の項参照）

四、報告書は、第一章が調査の実施概要、第二章を全県的な民謡の概観、第三章は調査と同様に群馬県内を五地域に分け、地域ごとの概観と伝承民謡を掲載し、第四章に市町村別・調査員別の掲載民謡一覧や市町村別・種類別の掲載民謡数一覧表および文献目録などの資料を掲載した。

五、本書の執筆は、第一章「群馬県民謡緊急調査の実施概要」一五、調査組織の項に記した者が分担し、編集は群馬県教育委員会文化財保護課が行った。

六、その他報告書記載上の留意事項

(1) 伝承民謡の掲載順は、①地域を建制順に配列、②地域内を三に示した民謡の大（第一）・中（第二）分類順に配列、③同分類内は市町村単位で建制順に配列した。なお、地域名の中毛、西毛等の呼称は本県独特の言い方で、「毛」は「毛野国＝上野国」を意味し、中毛とは「中部」と同様の意である。

(2) 各民謡ごとに名称、伝承地、伝承者、歌詞を掲載したが、民謡やその歌詞内の語句などについて、簡単な注釈を付したものもある。

(3) 民謡の名称については、原則として伝承状態のままとし、とくに名称の定めのないものは、歌い出しや用途（例えば「手まり歌」など）等を適宜名称に用いた。

(4) 伝承地とは普通伝承者の居所であり、伝承者については生年を付したが、年号は次の記号を用い、数字はその年を示す。

M……「明治」　T……「大正」　S……「昭和」

（例　「M35」は「明治三十五年生まれ」の意。）

なお、伝承者が多数の場合は、代表者に限って掲載した。

(5) 歌詞において、歌唱の順序が定められているものは、歌詞番号を一、二、三……の漢数字で表記し、とくに歌唱の順序が定められていないものは、　の記号を用いて歌詞の歌い出し、区切りとした。

また、数え歌や一番のみの歌詞である場合には、歌詞番号を付けると見にくいので省略したものもある。

(6) 本書の中には、ひわいなことば、乱暴なことば、職業等をさげすんだことば、旧身分制度時代のことば、その他人権尊重の精神から差別用語と判断されることばが使われている民謡がある。

これらのことばは、本来使用してはならないものもあるが、今後の学術研究に資するという調査報告書の性格により、伝承のまま記載したものなので、この趣旨を十分に御理解のうえ、活用いただきたい。

なお、本書に記載した伝承者、調査員等の氏名については、すべて敬称を省略したので御了解願いたい。

目次

序……一
例言……二
第一章　群馬県民謡緊急調査の実施概要……五
第二章　群馬県の民謡の概観……十一
第一節　群馬県の風土と民謡……十二
第二節　群馬県の民謡発生の背景……十六
第三節　群馬県の祭と唄……二〇
第三章　地域別調査民謡……二三
第一節　中毛地域……二三
一、中毛地域の概観……二四
二、調査民謡
A　労作歌……二八
B　祭り歌・祝い歌……三八
C　踊り歌・舞謡……五〇
D　座興歌……六二
E　語り物・祝福芸の歌……六三
F　子守歌……六四
G　わらべ歌……六五
第二節　西毛地域……九一
一、西毛地域の概観……九二
二、調査民謡
A　労作歌……九四
B　祭り歌・祝い歌……九七
C　踊り歌・舞謡……一〇六
D　座興歌……一一九
E　語り物・祝福芸の歌……一二〇
F　子守歌……一二二
G　わらべ歌……一二三
第三節　吾妻地域……一四一
一、吾妻地域の概観……一四二
二、調査民謡
A　労作歌……一四五
B　祭り歌・祝い歌……一四八
C　踊り歌・舞謡……一五一

D 座興歌……一五六
E 語り物・祝福芸の歌……一五九
F 子守歌……一六二
G わらべ歌……一六三
第四節 利根地域……一七一
一、利根地域の概観……一七二
二、調査民謡
A 労作歌……一七七
B 祭り歌……一八四
C 踊り歌・舞謡……一九〇
D 座興歌……一九五
E 語り物・祝福芸の歌……一九九
F 子守歌……二〇五
G わらべ歌……二〇九
第五節 東毛地域……二四三
一、東毛地域の概観……二四四
二、調査民謡
A 労作歌……二五〇
B 祭り歌……二五五
C 踊り歌……二六〇
D 座興歌……二六三
E 語り物・祝福芸の歌……二六九
F 子守歌……二七〇
G わらべ歌……二七一
第四章 資料……二七五
一、市町村別・調査員別の掲載民謡一覧……二七五
二、市町村別・民謡種類別の掲載民謡数一覧表……二九五
三、群馬県民謡関係文献目録……二九六
あとがき……二九七

第一章　群馬県民謡緊急調査の実施概要

一、調査目的

人々の生活の中から生まれ、伝承されてきた民謡は、人々の生活心情や生業などの姿を今に伝える貴重な民俗文化財である。群馬県内にも、それぞれの地域の風土や歴史に根ざし、古くから伝承されてきた数多くの民謡がある。

しかしながら、近年における産業・経済の発展、社会構造の変化などにより、わが国の伝統的な生活様式・風俗・習慣等が急変し、有形・無形の文化財が消滅しつつある。民謡も例外ではなく、他の民俗文化財と同様に、人々の気づかないまま、衰退に瀕しつつあり、また、盛んにうたわれている民謡も歌謡調に変容したりしている。

したがって、今のうちにその実態把握と保存を組織的に行わなければ、久しく伝承されてきた数多くの民謡が、永久に消え失せてしまうことが憂慮される。

そこで、現在各地に何とか伝承されているこれらの民謡を緊急に調査し、系統的に記録にとどめようとするものである。また、その成果を地域の文化活動や社会教育・学校教育の場で生かしたり、今後の現地公開や専門家・研究者等の利用に役立てるなどして、民謡という伝統文化の保存・伝承に資することを目的とする。

二、調査主体・調査期間

群馬県教育委員会（文化財保護課）

昭和六十二年度・昭和六十三年度の二か年

三、調査対象

(1) 調査地域

県内七〇の全市町村を対象とし、調査は中毛地区、西毛地区、吾妻地区、利根地区、東毛地区の五地区に分けて各々をひとまとまりに、市町村別に実施した。

(2) 調査対象とすべき民謡

ア、それぞれの地域に古くから伝承されてきた民謡で、現在なお伝承されているもの。

イ、民謡の種類と分類

A 労作歌

a 農耕に関するもの（草刈歌、田打歌、田植歌、田の草取り歌、稲刈歌、麦打歌、麦搗歌、粟搗歌、粉挽歌、米搗歌、その他）

b 山樵に関するもの（柮歌、木下ろし歌、木挽歌、樋引き歌、その他）

c 魚労に関するもの（船卸歌、船歌、網起し歌、網曳歌、鯨歌、浜歌、塩焚歌、藻採歌、その他）

d 諸職に関するもの（大工歌、綿打歌、茶摘歌、酒屋歌、油絞歌、たたら歌、地搗歌、紙漉き歌、糸繰り歌、桑摘歌、蚕歌、糸挽歌、機織歌、土羽（場）打歌、湯揉み歌、その他）

e 交通・運搬に関するもの（木流し歌、船頭歌、馬子歌、牛追い歌、木遣り歌、櫓歌、道中歌、その他）

B 祭り歌・祝い歌

a 祭りに関するもの（神迎え歌、神送り歌、宮入り歌、その

他）

b　祝儀に関するもの（嫁入り歌、家移り歌、酒盛り歌、年祝い歌、その他）

c　行事に関するもの（正月歌、鳥追い歌、道祖（陸）神、成り木責め、節分の虫封じ、七夕、ななばんげ、お盆、彼岸、亥の子搗、もぐら打歌（十日夜）、綱曳き歌、田遊び歌、その他）

d　念仏・和讃（念仏、和讃、御詠歌など）

C　踊り歌・舞謡

a　踊り歌・舞謡（神楽歌、獅子舞歌、盆踊り歌、風流歌、狂言謡、カンカン節、その他）

D　座興歌

a　座興歌（酒宴の折の興歌の類）

E　語り物・祝福芸の歌

a　語り物（瞽女歌など）

b　祝福芸の歌（万歳、大黒舞の歌、春駒歌、飴屋歌など）

c　口説

F　子守歌

a　子守歌

G　わらべ歌

a　遊戯歌（道具のない遊び歌、道具のある遊び歌、言葉遊びの歌、悪口歌など）

b　唱えごと（占い歌、まじない歌など）

c　その他（自然の歌、動物の歌、植物の歌、喧嘩歌など）

四、調査内容

(1)　文書による調査

伝承民謡のそれぞれについて、次の諸事項を記載した調査票により調査した。

・名称　・現地での歌の種類　・伝承地　・伝承者及び伝承状態　・歌われる機会・日時・場所　・歌う人の人数及び歌い方　・歌う人の資格　・音楽的特色　・歌に伴う楽器の有無（写真）　・歌に伴う身体の動き（写真）　・歌詞（文献）　・歌にまつわる由来（文献）　・風土等民謡の背景　・録音テープまたはレコード　・採譜の有無

(2)　録音テープによる収録

原則として調査票による調査の際に同時に録音を行うものとした。

なお、次の諸事項を記載した収録記録票を作成し、収録に活用した。

・名称　・テープ番号　・伝承地域及び収録場所　・収録年月日　・収録者氏名　・トラック　・カウント　・速度　・録音機名　・演唱（奏）者氏名、生年月日、性別、職業、住所、生地・環境・音楽的素養

収録テープはカセットテープを用い、保存状態を良くするためにオープンテープに複製した。

(3)　写真による収録

歌に伴う身体の動き、楽器・実演場面等について写真により記録し、調査票の写真の欄に添付した。

五　調査組織

学識経験者、教員、民俗学研究者などから調査員を委嘱し、各教育事務所管内ごとに主任調査員を配置して調査にあたっての指導・助言をいただくとともに、主任調査員会を組織して各地域の調査水準の平均化を図った。主任調査員会には会長、副会長、全県指導者を置き、全県的な視野から指導・助言をいただいた。まとめと報告書作成は事務局の文化財保護課が担当した。

(1)　主任調査員（担当調査地ほか、報告書の「執筆」分担ほか）

・萩原　進（会長、「群馬県の風土と民謡」）
・近藤　義雄（副会長、「群馬県の民謡発生の背景」）
・都丸十九一（全県指導、「群馬県の祭と唄」）
・塚本　靖彦（中毛地域、前橋市、「中毛地域の概観」）
・金城　厚（西毛地域、高崎市・箕郷町・群馬町、「西毛地域の概観」）
・飯島　一彦（吾妻地域、吾妻東村・吾妻町、「吾妻地域の概観」）
・酒井　正保（利根地域、沼田市・白沢村・利根村・川場村・月夜野町・水上町・新治村・昭和村、「利根地域の概観」「東毛地域の概観」（後半・民謡関係）、「群馬県民謡関係文献目録」、全曲ダビング、写真提供）
・五十嵐富夫（東毛地域、新田郡、「東毛地域の概観」）

(2)　調査員

ア、中毛地域（担当調査地、グループでの調査もあり、調査地が重複するところがある。）

・金子緯一郎（佐波郡・伊勢崎市）
・矢島　三郎（伊勢崎市・佐波郡・前橋市）
・新保　一美（前橋市・北橋村・榛東村・吉岡村）
・矢口　恭子（前橋市・北橋村・榛東村・吉岡村・大胡町）
・中川　博友（前橋市・北橋村・榛東村・吉岡村・富士見村）
・生方　穣衛（渋川市・子持村・小野上村・伊香保町）
・西川　事子（粕川村・赤城村）
・東宮　惇允（宮城村・勢多東村・黒保根村）
・小林　俊美（前橋市・新里村）
・小出　森夫（昭和六十三年度、渋川市・子持村・小野上村）

イ、西毛地域（担当調査地）

・横田　金治（富岡市・安中市・下仁田町）
・関口　正己（藤岡市・鬼石町）
・三沢　義信（万場町・中里村・上野村）
・飯塚ツヤ子（高崎市・榛名町・箕郷町）
・真砂知恵子（妙義町）
・久保信太郎（吉井町・榛名町）
・今井　幹夫（南牧村）
・北田　英人（高崎市）
・千木良英一（昭和六十二年度、新町）
・磯貝みほ子（昭和六十二年度、松井田町）
・君島　政美（昭和六十三年度、榛東村・北橋村・倉渕村）

ウ、吾妻地域（担当調査地）

・奈良　秀重（中之条町・高山村）
・千川　健一（嬬恋村・長野原町）
・山本　清司（昭和六十二年度、六合村）
・山本　忠雄（昭和六十三年度、六合村・草津町）

エ、利根地域（担当調査地）

・真庭　唯芳（月夜野町・川場村・昭和村・沼田市・水上町）
・小野信太郎（白沢村・利根村）
・阿部　孝（新治村・昭和村）
・千明　英雄（昭和六十二年度、片品村）
・木村　好次（昭和六十二年度）
・大竹　將彦（昭和六十三年度、片品村）

オ、東毛地域（担当調査地）

・木村義一郎（太田市・明和村・邑楽町）
・川村　勝保（新田郡・千代田町・大泉町・邑楽町）
・神山　勇（桐生市・大間々町）
・宮田　茂（板倉町）
・堀越　靖久（桐生市・大間々町）
・三枝　友治（昭和六十二年度、千代田町）
・川島　維知（昭和六十二年度、館林市）

カ、事務局（職名、報告書の「執筆」分担）

・梅澤　重昭（文化財保護課長、「あとがき」）
・田辺　巌（同総括課長補佐）
・奈良部清満（同課長補佐兼文化財保護係長、主担当係長）
・若林　宏宗（同主幹兼専門員、主担当、「例言」「第一章・群馬県民謡緊急調査の実施概要」「掲載民謡一覧」）
・松浦　利隆（同文化財保護主事、「掲載民謡一覧」「市町村別・民謡種類別の掲載民謡数一覧表」）
・君島　政美（同文化財保護主事、昭和六十二年度主担当）

群馬県民謡緊急調査票

通し番号		調査員	市町村名		種類別記号		種類別番号
		控番号	地区番号				
調査年月日	昭和　年　月　日	調査員					
1．名称	正式名称						
	通称・異称			昔の名称			
2．現地での歌の種類							
3．伝承地	（現行市町区画）都市　町村　字			（旧行政区画）都市　町村　字			
4．伝承者及び伝承状態		氏名	生年	性別	住所（電話）	伝承状態	
	多数					A歌詞・曲とも完全に伝承 B思い出して教えるもの C歌詞のみ伝承	
	少数						
5．歌われる機会・日時・場所	機会						
	日時			場所			
6．歌う人の人数及び歌い方	1人　多数　1人対1人の交替（男と男、女と女、男と女）　1人対多数 その他（　）						
7．歌う人の資格	性別（男、女）　年齢（　歳～　歳）　神主　巫女　不特定 その他（　）						
8．音楽的特色	テンポが早い　テンポがおそい　にぎやか　静か　歌い方が難しい 歌い方が易しい　その他（　）						
9．歌に伴なう楽器の有無	有	三味線（　）　尺八（　）　小鼓（　）　太鼓（　） 締太鼓（　）　大太鼓（　）大拍子（　）すり鉦（　） 銅拍子（　）笛（　）　その他（　）					
	無	いつごろから使用されているか （　）					
10．歌に伴なう身体の動き	有 無						

11．歌詞	○歌詞はできるだけもとの番数を記入する。 ○囃子詞も忘れずに記入する。 ○表記は、歌詞部分は漢字平仮名まじり、囃子詞は片仮名とする。 ○歌い手が交替する場合は、区切りをつける。 ○方言・地名などには注をつける。
従来の印刷物等の名称	

（群馬県教育委員会）

調査票（裏）

12. 歌にまつわる由来				（写真貼付、その他記載欄）
13. 風土等民謡の背景				
14. 録音テープまたはレコードの有無	今回の収録	有　無	テープ番号	
	従来の収録	有　無（録音テープ、レコード）	収録年（　年）　録音状態（良・不良） 所有者（　）	
15. 譜の有無	有 無	譜の種類	五線譜　数字譜 その他（　）	採譜者
		所在場所		

収録記録票		通し番号	種類別記号	種類別番号

名　称		テープ番号	
伝承地域及び収録場所	市 郡　町 村　字	収録場所（　）	
収録年月日	昭和　年　月　日	収録者氏名	
トラック	A　B	カウント	速　度	録音機名

演唱(奏)者氏名	生年月日	性別	職　業	住　所	生地、環境音楽的素養
	明・大・昭				
	明・大・昭				
	明・大・昭				
	明・大・昭				
	明・大・昭				
	明・大・昭				
	明・大・昭				

備　考（音楽的記事、身体の動きに関する記事）

（群馬県教育委員会）

第二章　群馬県の民謡の概観

群馬県

群馬県５地域・全市町村地図

第一節　群馬県の風土と民謡

群馬県の風土的な特色は、世俗に言われる『かみなりとかかあでんかにからっ風』に代表されるイメージとされてきた。その後の風土の研究から、上州のからっ風は文字通り群馬が主力である（和達清夫「日本の気象」）ことが公認され、気象庁の『日本気候図』によると群馬の雷は全国一であることを示している。上越国境の山系がもたらした気象上の特性である。かつて和辻哲郎博士が『風土』において「砂漠的風土」「季節風的風土」「牧場的風土」に分類したが、群馬県は日照時間が全国でも上位にある明るい県であり、乾燥度もこれまた全国上位を保っている。この「明るい」「乾く」風土の中に、群馬県の歴史と文化は育くまれた。それに冬から春先にかけての乾燥した大地を吹きまくるからっ風で、正に砂漠的風土の一面がプラスされた。

わが国の民謡を最初に手がけ、全国津々浦々まで調査し、『日本民謡大観』の大著を遺された町田佳声（嘉章）先生は群馬県伊勢崎市出身であるが、前橋市立図書館にお出になった折に、旧前橋中学校のクラスメートであった島岡利二先生の病床を見舞いたいというのでお供をした。お二人が若い頃に日本音楽に惹かれた話が出た。島岡先生が三味線をよく弾き、本県の邦楽界を引き立てたことと町田先生の民謡研究のルーツを始めて知った。その町田先生が『日本民謡大観』関東編の群馬県の解説に、

諷ふことも踊ることも余り好きでないと云ふのが上州人古来からの性格であるが、その中でこの盆踊だけは稍例外である。利根郡の月夜野村に変わった盆踊が残されてゐるが、これは三国街道を通じての越後方面からの移入である。又栃木県の条下にも記したやうに、房総常陸の小念仏は、武蔵では「万作」と呼ばれ大いに行はれたが、利根川一つ隔てた埼玉県方面の農民は盛んに踊り狂ってゐるのに上州人は我不関焉である。これは鳥渡面白い一風景である。（原文のまま）

と記している。しかしその上州でも八木節だけは別だとし、

この上州人の気風を単的に歌で表現したものは八木節である。八木は地名で現在御厨町と呼ばれ、栃木県足利郡に属するが、これは本県との県境に近く、同じ旧日光例幣使街道の一駅である県内新田郡木崎町に起った盆踊が八木地方にまで及び八木節となった。

と述べている。上州の代表的民謡が八木節であることは他の方が詳しく述べられる筈であるが、いずれにしても全国的な眼で見た場合に群馬県は決して民謡の宝庫ではないという指摘は一応心にとめておく必要がある。その上州から日本民謡の父ともいうべき町田先生を出したことも併せ考えて見るべきであろう。

群馬県の民謡不毛地帯を裏書きするように、それは上州人の問題であり、さらにつきつめてゆけば群馬県の風土によって形成される文化そのものの問題でもあろう。明るい風土と陽性な文化、陰惨な風土と陰性な文化はそこに介在する人間にかかわってくることは、上越県境によって相接する越後と上州の民謡を比較するまでもなく明らかである。

近代詩人の萩原朔太郎は、エッセイの『我が故郷を語る』（雑誌『若草』昭和十一年六月号）の中で、

上州といふ所は、荒寥とした平野の中に展開されている。空にはいつ

も烈風が吹きすさび、地上には侘しい砂埃が立ち迷ってゐる。（略）荒寥地方のイメーヂである。その上にまた上州では、地方的な伝統文化といふものが少しもなかった。越後とか金沢とか、尾張とか、紀州とかいふ所には（略）夫々伝統的な地方文化を建設してゐた。然るに代官政治の上州には、さうした地方文化を創造する根拠がなかった。（略）風流とか雅趣とかいふ、文化情操そのものを知らないのである。（原文のまま）

と鋭い指摘をし、風土や政治が上州に豊かな情操文化を育てなかったと見ている。

県民性を科学的に究明した宮城音弥博士の『日本人の性格ー県民性と代表的人物』（朝日新聞社刊）によると、群馬県は分裂質型は少なくて躁鬱質型が多い県に分類されている。明るくて陽性でよく反応し、人づきあいもよい。気分がムラで時に落ちこむなどの点をあげている。『なんでもランキング』（読売新聞社）によると、自家用自動車の人口当り台数、女性のオーナードライバーは全国一とある。新しものがり屋で古いものに執着を持たないと解されている。

しっとりとした風土がなく、乾いたしかも砂っぽい風土、明るい風土が、どういう人間性を形成するかという学問的なデータは一つもないが、群馬県が伝統文化の保持という点で全国的に上位にないことは認めざるを得ないと思うが、従来わが国の民謡を集録した文献である『日本歌謡類聚』（明治三十一年大和田建樹編）『日本民謡全集』（明治四十年前田林外編）や、江戸時代の『山家鳥虫歌』（昭和八年刊）『鄙廼（ひなの）一曲（ひとふし）』などにも群馬の民謡は全くないかあっても少ない。昭和二年刊行の高野辰之編『日本歌謡集成』（春秋社）のぼう大な民謡集などにもあまり収録されていない。

では群馬には民謡は伝わっていなかったのであろうか。全く民謡の不毛地帯だったのであろうか。これについては後半において述べることにするが、田植え、麦打ち、鳥追い、木挽き地搗きといった作業は群馬でも他の地方に劣らず行われていたのであるから、それらの作業歌はかならず歌われていたはずである。民謡の大部分は作業の労働に対応するために自然発生したものが多いとすれば、上州人だけ無言でやったとは考えられない。また豊年祝いや棟上げ、祖霊供養から発した盆踊りをやっているからそうしたときどきの祝い歌や盆踊りがあったはずである。民謡の一部というより大きな比重を占めていたわらべ唄など、児童の生活がすべて歌で進行していたことを思うとこれも群馬県だけにないとは考えられない。ないと見られたのは次の二点から生じたことではなかったかと思える。

㈠古いものを捨てる県民性から棄ててしまい、社会の表面に存在し得なかった。

㈡研究調査を志す人が少なかったために、表面下にまで立ち入って採訪しなかった。

流行に敏感であればあるほど、古いものは勇敢に捨て去る県民性、そうさせた風土なくしては群馬県の民謡は考えられないのである。民謡だけではない。古美術品の収集家や愛蔵家も群馬県は多い県とは言えないようである。隣りの新潟県や長野県、栃木県などと比較してもこのことははっきり指摘できる。文化遺産を伝え、保護してゆこうとする伝統文化保持の上からも民謡は考察されなければならないことを示唆しているのである。

私は終戦後の郷土再発見の仕事として、敗戦を期にさらに多くの伝統文化財が消滅することを予感して、能う限り水面下にもぐって僅かに遺っ

ているものを徹底的に調べて記録することを発意した。長い間県民の娯楽を支えてきた地芝居、人形芝居、歌舞伎舞台の芸能がその一分野であった。これらの領域は有形的なものが半分、人間その人に保持されている属人的なものが半分であるから、物を人に亙って調べてゆくことになった。

いま一分野が伝承芸能の中でも人間そのものにだけ伝わってきている民謡、わらべ唄の調査であった。群馬だけが民謡不毛地帯ということはないことを前提にしたいわば冒険にひとしかった。しかも保持者が年ごとに老齢化してゆく中で、一刻も早く着手すべきであることの判断から、未開の分野に鍬を入れることになった。

ちょうど県文化財保護課で、県下の地域別の民俗調査を実施することを知り、私は芸能をその中に加えることを提言した。おそらく当初は芸能は調査の中になかったのであるが、それ以後毎年芸能だけは私個人の仕事として認められるようになり民俗調査の中に一つの位置を与えられた。

「群馬に民謡はない」という「伝説」は、実際に片品村、六合村、上野村、板倉町と採集してゆく中で砕くことができた。ただいままで顧みられなかったために「無い」とされていたのである。板倉町の藻採り歌や田植え歌、境町島村の船歌、上野村では近世に長崎、大坂、江戸を風靡したカンカンノウが今の群馬の地に生きていることを確かめられた。町田佳声先生が注目した赤城山麓の「ヤーハー」系統の田植唄もぞくぞくと各地で採集できた。単調な民謡のみと言われた群馬に、中世歌謡の痕跡を遺す民謡としてにわかに注目されてきたが、ただ私の調査に致命的な欠落があった。それは採譜能力が私には全く無いということであった。町田先生の業績の一つが五線の譜面化にあったことを思うと、歌詞のみの民謡調査は二分の一の仕事の価値しかなかった。幸い酒井正保さんが民謡を手がけていることを知り、民俗調査に加わってもらい、はじめて完全な民謡調査ができるようになったのである。

群馬県社会教育課で、緊急調査事業として昭和四十四年度に『群馬県民謡集』の編さん事業を計画し、作成委員に民俗の今井善一郎、都丸十九一、上野勇、群大教授の後藤重樹、塚本靖彦、音楽部門から山田直次郎、酒井正保などの皆さんが選ばれ、小生も一員に加えてもらい、四十六年に『郷土民謡集群馬県』の完成を見たのである。これに加えて、今回の民謡調査によって、「現在伝承されている」という条件で全県的な調査を始めたのであるが、従来群馬の風土と民謡で、不毛と言われ、無視されてきた本県の民謡をはじめて全国レベルで答えることになったのであって、まことに意義ある資料として後世に伝えられることになった。

調査委員はすべて音楽の権威であり、民謡調査に深くかかわってきたベストメンバーによるもので、群馬県の伝統文化財民謡調査資料にふさわしい成果を得られたというべきである。

今後民謡ブームと言われる生涯学習のさかんな時代に、本県の文化遺産である民謡をどう活用するかであるが、民謡の大部分が農作業や生活の中に生まれ育くまれてきたものだけに、作業形態が全く姿を消し、生活慣習も一新されている中でどう活かすかはきわめてもむずかしい課題と言えよう。しかし、従来ともすると民謡不毛地帯とされた群馬県にもたしかに「民謡はあった」という自信を与えた戦後の本県民謡史のしめくくりとしての今回の調査は群馬の文化全体を捉える手がかりとして評価されるであろう。民謡だけではない。今後の文化財は学際的に関連する隣接の知識や新しい機器を導入することによってさらに精細な研究成果が期待できるが、今回の民謡調査はそうした最先端の技術も導入され

ただけに、民謡の科学的研究の一つとしても価値ある調査報告書といっても過言ではない。

第二節　群馬県の民謡発生の背景

一、はじめに

民謡は心のふるさとといわれるように、その土地の風土や産業を背景に生まれ、生活を端的に表現している。そのため、歌詞はもとより、メロディーもその地方の生活や産業を反映し、永い年月の間に自然と地方的特色をもつようになる。

例えば、盆踊唄は同じ歌詞を歌っていても、そのリズムは地域により異なる。新潟県に近い新治村猿ケ京で聞いた盆踊唄は四ツ足踊りと称してテンポが遅く、月夜野町では六ツ足踊りといい若干早くなり、平野部では一層テンポが早い。八木節は盆踊りから発展したといわれ、その源流と見られる新田町の木崎音頭や玉村町の横樽音頭はともにゆるやかな調子であるが、その中毛から東毛地方にかけて盛んになった八木節はテンポが早く、利根郡や吾妻郡地方にはそう流行しない。八木節が流行した地方は、それを受容する風土性、住民感覚が合致したからである。

このように、民謡は風土や産業を背景に生まれ、成長し、親しまれてきた文化遺産であり、群馬の民謡を理解するためには、群馬の風土や産業の特色を考えねばならない。以下群馬の民謡を地形や気象、特色ある産業との関係を概観的にみていくこととする。

二、風土と民謡

群馬県は、西部・北部を中心に県土の三分の二は標高五〇〇メートル以上の丘陵地と山地である。その下の三〇〇メートル前後の丘陵も西部に多く分布し、東南部の洪積台地と沖積低地は、最低標高一五メートルの低湿地、そして、中央部を流れる利根川により県土は東西に二分されている。

このような地形から当然生産活動にも地域差が生じ、民謡にも異なったものが生まれ育っている。山地の三国・碓氷・十石などの峠の近くの地域では、それぞれ若干の相違をもっているがいずれも馬子唄が伝承され、山麓の原野に接した地帯には、旧幕時代の秣場（まぐさば）へ採草に通った人々の草刈馬追唄があった。また、山奥から材木を伐出した人々には、木挽き唄やさ流し唄が謡われていた。

一方、県土の東南部の低湿地帯では、水害に苦しめられ、幾度となく築堤作業が繰り返され、そこには堤防の土を固める土羽唄（土端唄）があり、最初の土をならす「ならし唄」から「棒打ち唄」作業に合わせて歌の調子も若干変る。また、堪水（たまりみず）の湖沼から肥料源の藻を刈りとるつぎのようなモクトリウタ（藻取り唄）がある。

わたしゃ板倉のもくとり野郎（娘）で
もくをとるせいかお色が黒い
お色黒くも味みやさんせ
味は大和のつるし柿、味は大和のつるし柿

（『板倉町の民俗』）

このような地形の影響とともに、気象条件も特色ある民謡を生む。万治三年（一六六〇）の「高崎古代并諸雑記」によると、当時の上野国内の田畑の割合は、畑地が七四パーセントを占め、石高においても畑地が五〇パーセントを占めていたので、畑作には適度の雨量が不可欠であっ

た。旱天の慈雨、それは夏の雷雨であり、山村や山麓の村々ではその慈雨をもたらす雨乞いがさかんにおこなわれ、榛名山、赤城山をはじめ雷雲発生の山に雨乞いを祈願する信仰があり、雨乞い唄をうたい神に祈った。山中領とよばれた多野郡神流川上流では、古い形式の雨乞いがおこなわれていた。その古式を伝える上野村乙父(おっぷ)では、三日間も神社にお籠りし、雨乞い唄をうたい竜神に祈願した。その雨乞い唄はつぎのようなもので音頭取りに合わせて村人たち大勢で歌った。

神寄の雨雲、乙父沢泣き晴れ、雨を三粒たもうぞ。雨ためえ竜王ナ、神寄の明神、乙父沢山諏訪さま、乙父神社に集まり、竜王権現様と相談して、雨も降らせ給うれ。（中略）

豆の葉もゴソゴソ、アズキの葉もゴソゴソ、なにひとつとれないぞ、榛名神社へ早飛脚、榛名のお池のお水をば、ハスの葉に包んで、乙父郷へ撒いたなら、なんにもかんにも豊作で、乙父さまは大よろこび（以下略）

（『上野村の民俗』）

夏の旱天から慈雨をもたらす雷雨とともに冬の風も「上州からっ風」と呼ばれ名物の気象現象である。前橋気象台の記録では、十一月から五月始めまで強風の日があり、特に三月が強く、平均風速三・四メートル、平均最大風速一二・八メートルで、瞬間最大風速では二〇メートルを越える強風が吹き、その風は県土の西から東へ吹き抜けた。詩人伊藤信吉氏はこの風の道を「上州烈風ライン」と称し、この線上に湯浅半月、大手拓次、山村暮鳥、萩原朔太郎、萩原恭次郎、石原和三郎らの近代詩の先覚者たちが生まれたという。同氏は『風色の望郷歌』のなかで、氏の郷里前橋市元総社町で子供のころ「晩方うたった叫び唄」として

風々　吹くな　西の山が燃えるぞ。
風々　山へ行って　鬼の飯(まんま)を食ってこい。

などとわらべ唄を紹介している。

このように秋から春にかけて吹く烈風のラインは、また、八木節の流行した地帯でもあり、夏の雷とともに県民性に影響し、テンポの早いからっとした八木節を発展させた地帯でもあった。

三、生産生業と民謡

近代群馬は、耕地の三分の二が畑作であり、その畑の中心作物は麦作で、近世末には桑畑が急増した。いまでこそ群馬の穀倉地帯と呼ばれる邑楽郡東部は、利根川と渡良瀬川に挟まれた低湿地帯で、毎年のように洪水に襲われ、麦作に依存していたためか米の渡来伝説はなく、麦の種を弘法大師が持ってきた伝説をもっている。そのため、作業唄でも田植え唄より麦打唄がよく残っている。その麦打唄も茨城県古河市の文化圏地帯だったためか

古河のサアー二丁目の、アアドッコイドッコイ、あぶらやの娘（以下略）

で始まる唄がよくうたわれた。しかし、最近では、堪水(たまりみず)は揚水機で排水され、機械化が進んで労働形態が大きく変わり、麦打唄は聞かれなくなった。

県央部は、早くから水田の広く開かれた地帯であり、田植え唄がよく残っていた地域である。元来県央部は条里制が行われた水田地帯で、近年まで田植え時期には遠く新潟方面からも早乙女が出稼ぎにきた。また、ほとんどの農家が、田植えは「ええ」と呼ぶ「ゆい」による共同作業でおこなわれ、大勢による一斉作業がなされた。この一斉作業の厳しい労働の進行的な役割を果たした田植え唄は、山間の谷地水田よりも広々とした平野部の水田地帯に適したのだろう。山間地には水田のあるところでも田植え唄はそう聞いていない。

群馬の産業で最も大きな特色をもっているのは、養蚕・製糸・織物関係である。この群馬の養蚕関係の仕事は、既に古代にも注目されていた。『続日本紀』の和銅六年（七一三）五月の条には「自今以後、絁・布並進」とみえ、翌七年には

和銅七年正月甲申、令三相模・常陸・上野・武蔵・下野五国始輸二絁調一、

とあり、東国五〇国は絁（あしぎぬ）の生産地とされ、『延喜式』（九二七年編）では、上野国は絁一疋（二反）が稲九〇束分とし、全国の絁八五〇疋中、上野国は五〇疋を納めていた。このような絁の生産は、当然養蚕や機織の神の信仰となり、式内十二社中に機織の神である倭文神社（現伊勢崎市）が加えられていてる。中世末には、仁多山絹・日野絹の名が諸書に見えているが、仁多山絹は近世桐生織物の濫觴であり、日野絹は藤岡絹や高崎絹の前身であった。

やがて近世に入ると、商品流通が盛んになり、保水力に貧しい火山の裾野を広く有する地方は桑園に適したので養蚕が盛んになる。正徳二年（一七一二）現吉岡村の馬場重久が『蚕養育手鑑』を著して本邦養蚕書の先鞭をつければ、渋川の吉田芝渓は寛政六年（一七九四）『養蚕須知』を著すなど、養蚕技術は進み、養蚕は農家経営の中心に位置する地帯が多くなった。赤城南面の現富士見村の船津家における養蚕収入は、嘉永二年（一八四九）には総収入の五〇パーセントを超えるまでになった。このような養蚕業の発展は、東毛の糸市、西毛の絹市に全国各地から仲買人が殺到し、京都の西陣織の原料糸も「上州の登せ糸」が多く利用されるにいたった。

このような養蚕・製糸・機織の絹糸業を更に急速に発展させたものに安政六年（一八五九）の横浜開港があった。開港後は生糸の値段は急上昇し、僅か十年間に四倍に高騰した。生糸は幕末から明治期にかけて日本の輸出品の王座を占め、群馬はその頂点に立っていた。

このような生糸産業の好況の背景では、養蚕や製糸にしても早朝から夜間におよぶ重労働が続き、人々はこの重労働に耐えるため様々な歌をうたった。ときには卑猥な歌で眠気をさました。住谷修氏の採集した蚕唄は『毛府桑中歌』として出版されたが、このなかには卑猥な歌が実に多く収録されている。それだけ養蚕が厳しい苛酷な重労働であったことを示している。つぎに、茂木近之助・東宮一雄共編の『上州民謡集』（昭和九年刊）から蚕唄の一部をあげておく。

一つとや　東の空のあけぬうちあけぬうち、
　桑つむ乙女のしほらしさしほらしさ
三つとや　みなりもふりもいとひなくいとひなく、
　ねむるまもなくすぐおきる
十とや　とつ国人もほめそやすほめそやす、
　生糸のほまれは世界一世界一

明治期に入ると、群馬の生糸業も全国一を誇るまでになり、その中心は前橋であった。前橋市内には製糸工場の煙突が林立し、特に生繭出荷期は「夏三月」と称し多忙を極めた。工女は一日に繭七升から八升を割当てられ苛酷な仕事を余儀なくされた。その多くの工女は隣県からも集められ、前橋市の人口統計はいつも女性が数千人多く、最盛期には一万人もの工女がいた。日曜日ともなると、この多くの工女がどっと市内に溢れ、町は蛹の臭いがただよったとまでいわれた。

このような集団労働では、必ず苦しさに耐えるための歌がうたわれた。そのいくつかを前掲『上州の民謡』からあげてみよう。

前橋よいとこ生糸の産地
　工場見せたやこの繁昌

糸や切れるな座繰りよ廻れ
　晩のしまひが遅くなる
細く細くは主人の仰せ
　糸は細らず目は細る
三度三度に菜っ葉を食べて
　何で糸目が出るものか
いやでいやでも泣く程やでも
　金で買われりや是非もない

絹織物の機場も、桐生地方を中心に幕末期から大きく変化してきた。天保年間（一八三〇～四四）には、桐生地方にマニュファクチュア経営がはじまり、貸機で分散していた機織が織子を工場に集めて生産する方式が生まれた。やがて工場化は一層進み、機械のリズムに合わせて歌が流れ、厳しい労働を慰やした。そのいくつかを前掲『上州の民謡』からあげておこう。

機が織れない機神様よ
　どうぞこの手が上るよに
糸は千本切れてもつなぐ
　主と切れてはつながれぬ
可愛い男は通れど寄らぬ
　憎い男は日に幾度

以上のように、養蚕・製糸・機織は、かつての群馬を支えた産業であり、その繁栄の影には歌にはげまされた多くの人々が様々な民謡を口にした。しかし、今や産業構造は大きく変わり、これら多くの作業唄がほとんど聞かれなくなった。

なお、作業歌ではないが、群馬県の北から西にかけての山間地には多くの温泉が湧出し、伊香保・草津・四万・水上などの温泉地にも各々の民謡があった。湯治客は今日のように一泊や二泊の客でなく、往時は一か月も滞在する浴客があり、その人たちは土地の風土や名物を歌にした音頭や甚句を謡い覚えて各地に伝播させた。なかでも草津節が広く世に伝えられたのは、草津の湯の特殊な薬効から遠来の湯治客も多く、しかもその多くが長逗留するので、浴客は草津節を遠方に伝播させた。このため、群馬には多くの温泉があるが、草津節だけは県外広く遠方まで早くから伝播されたのであろう。浴客はまた民謡伝播に一役果していたのである。

第三節　群馬県の祭りと唄

はじめに

祭りをあまりうるさく規定すると、これにつらなる唄は少なくなってしまう。が、これをしだいに広げていけばまた尨大になりすぎる。例えば祭りに伴う芸能である神楽唄、獅子舞、万歳唄などとなれば、数は多い。また、年中行事なども、鳥追い祭りなどといって祭りの中に入れる場合もある。

本稿では、それらをすべて含めて考察してゆくこととしよう。

一、祭りの唄

祭りの唄には、それを唄と呼べない種類のものも多い。単なる唱えごと、祝詞、囃しといったごく短い句も多い。長くとも歌にならない単なる文言もある。これらは一応圏外におくとしても、なおこれらが民謡発生の基盤をなし、あるいは民謡化への過程にあることも考えられるので、見過すわけにはいかない。

そうしたなかで、伊勢崎市上之宮町の倭文(しとり)神社の田遊び神事がある。これは、祭りの名とともに、歌詞には予祝の意味がこめられている。また中世歌謡の面影を伝えているのでその前段だけをあげておこう。

えいとう　えいとう　えいとう／まえだの鶯がおしろ田へぎろり／ぎろぎろめくのはなんだんぼ／一本植えれば千本になる／とうとうぼうしの種子

これと並んで知られる玉村町樋越しの神明宮の春鍬祭りと、性格的には同じであるが、歌詞はきれぎれで、呪詞といえよう。

春の祭りの中で、利根郡新治村の北部の小集落ごとに祭られる十二神社（山の神）の祭りは、狩猟生活の面影を残すものとして注目されるが、そのときの詞はむしろ呪詞である。

東山のシシ（猪）のサンメエガタ（急所）／西山のシシのサンメエガタ／南山のシシのサンメエガタ／テンショウムショウヤリッパナシ

これなどは、民謡への一過程にあるものではなかろうか。秋祭りでも、利根郡各地の諏訪祭りや武尊神社の祭りその他に、こうした詞を伝えるものが多くあり、注目してよいと思われる。

二、年中行事唄

年中行事唄は、そのほとんどが正月と盆月に集中する。ほかにもないわけではないが他月には少ない。

正月行事として唄を伴うものには、道祖神祭・鳥追い祭りなどがあげられる。前者のものが単なる呪詞やふざけ唄が多いのに対して、後者の鳥追い唄は、鐘・太鼓も伴い、歌詞も整っている。この行事が残存しているのは、吾妻郡に多く、安中市の一部ほかにも僅かある。秋におしよせる害鳥を予め追い払って豊穣を願おうとするもので、歌詞にもその趣がよく出ているが、各地のものが類型的である。

鳥追いだ　鳥追いだ／アリャアどこの鳥追いだ／〇〇どんの鳥追いだ／さらばちっと追い申せ／頸切って尻切って／佐渡が島へ　ホーイホイ

のような形をもつ。〇〇部分に、地頭・金重・ギッチョウなどの人を入れる問答形式になっている。ほとんどがこの形式のものであるが、ほかに、子供が奉賀をもらうための催促唄等と称すべきものがある。

盆を中心とした行事には、火揚げ、百万遍、七晩焼、地蔵様などがあ

り、いずれも若干の唄を伴う。これらのうち旧群馬郡を中心として行われてきた地蔵様は、地蔵御興の村内巡幸に際して和讃をうたう。その和讃は、一村落で百首をこえる場合もあり、内容は多彩である。これを大別すると(1)仏徳を讃えるもの、(2)村内諸事を讃えるもの、(3)叙事（中将姫・国定忠治など）(4)辻・立会い和讃などと呼ばれる掛けあいのものなどとなる。うち(2)の茶和讃の例をあげる。

帰命頂礼　只今は　お茶の馳走に預りて　お庭つくづく眺むれば　相生松を植えおいて　下には蔦をからまいて　中に鶯巣をたててお家繁盛と初音だす　とよナンマイダー（高崎市浜川町）

和讃に関連して、御詠歌・念仏などもある。和讃・念仏などは、葬送のほかにも女人講の際などにも奉唱され、いずれも芸能化されているので注目される。

なお、盆踊り及びこれから発した八木節は、本格的な民謡であるので他でとりあげる。

三、神楽唄

神社の例祭には神楽が奉納される場合が多い。たいていは氏子によって舞われるが、中には他団体に依頼する場合もなる。神楽は一種の演劇であるから、その中における地の文と唄の部分は分かち難い場合も多い。

県内の主な神楽としては、古風を残す榛名神社の神代舞をまずあげなければならない。この中には、巫女舞などの伝統も伝えるが、歌詞にも古いものが多い。そのうちの「採物歌」の「榊」を掲げると次のごとくである。

（本歌）さかき葉の香をかぐはしみとめくれば（末歌）かみかきのみむろのやまのさかきばはかみのみまへにしげりあひけりしげりあひけり

神代舞が厳粛な神楽であるに対して、県内の大部分の神楽は、里神楽系に属する。その代表的なものとして、桐生市の賀茂神社、邑楽郡板倉町の雷電神社などに行われるものをあげることができる。これらでは興舞とよばれる要素が強く加味される。とくに雷電神社の宮比神楽では、「火吹男踊り」など、ユーモア味豊かに演じられる。

この里神楽に近いもので、山伏神楽の系統をひくものに、甘楽郡南牧村の檜沢神社のものがある。また勢多郡北橘村の下南室赤城神社の神楽も、この系統とみてよかろう。この赤城神社の場合では、全二七座、うち式舞七座、興舞二〇座。式舞は当然神楽本来のものであるが、興舞は民衆芸能が進んで、ユーモア要素を強くし、かつ生活に直結したものとなっている。例えば「種子まき」「大工の舞」「養蚕の舞」「鍛冶屋の舞」「鯛釣の舞」など、諸色に関したものや、予祝・豊産に関したものが多くなり、生活に密着したものになっていることが注目される。そうした中でも、「鯛釣の舞」のように、古い三番の舞の面影を残しているものもある。

四、獅子舞唄

獅子舞も神社の例祭などの折に行われるが、ほかにも道祖神祭、鳥追い、雨乞い、悪疫流行などに際して行われるところも多い。やはりこの芸能が、悪霊退散、地域社会の安泰などを主たる願いとしているところによるものであろう。

獅子舞は、神楽に比べてその伝来が古く近世初頭以前に遡るものも多いと思われる。また、その普及度も広く、県内には二五〇組もの獅子組があるといわれる。その流派も非常に多く、稲荷流、関白流、文挟み流、黒能流、坂東助作流、長岡流その他があり、まことに多彩である。

獅子舞は、一人だちと二人だちとに大別できるが、獅子頭もさまざまな面貌をもっている。それを被った踊り手は、獅子にあわせて無言で踊

る。したがってそれをリードする囃子方は重要な立場にある。楽器としては、笛と太鼓があり、これらはほとんどの獅子舞に共通する。まま、笛吹きがいなくなったために獅子舞そのものが消滅してしまう場合すらある。そのほかに、カンカチ、法螺貝、ササラ、錫杖、すり鉦などが用いられる場合もある。うちカンカチは短い金棒で、これを舞いながらうちあわせる。ササラは、竹製の茶の湯の茶せん様のもの。これを両手に持ってすりあわせる。

前述のように、獅子そのものはほとんど無言で、稀に掛け声を発する程度であるが、これに唄をつけるのは「唄い方」である。この獅子唄も、前掲和讃にみるような、ほめ唄的なものがある。むしろ、こちらの方が先行して和讃がこれをとり入れたものといえよう。即ち村内巡幸にあたっての、諸方への儀礼的なものである。一例をあげる。

参り来て諏訪の御手洗眺むれば、いつも尽きせぬ鯉と鮒、鯉と鮒（白沢村生枝）

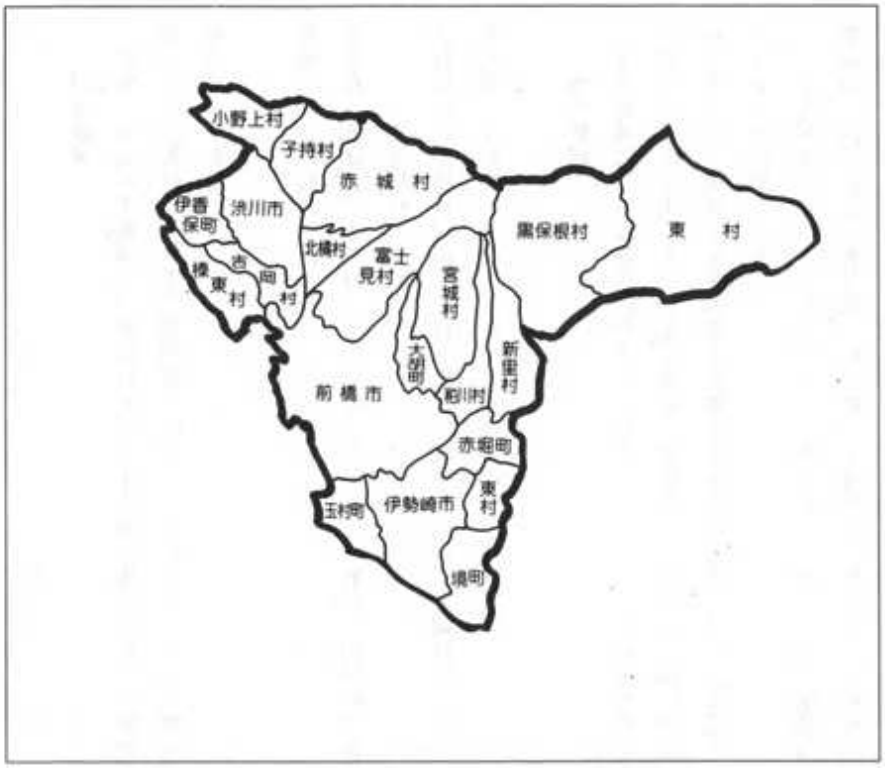
このほかに、獅子舞の内容を説明したものや、地蔵和讃にみた叙事的なもの（八百屋お七など）もまま見受けられる。さらに、演者を観客との間に、一定の詞をもってやりとりをする場合があってこれを「ほめ言葉」という。これは、必ずしも唄とはいい難いが、単なる散文でもない。そこに独特な芸能鑑賞の雰囲気を知ることができて興味深い。内容説明の一例をあげ、ほめ言葉は省略する。

思いもよらぬ朝霧が降りて、ここで女獅子を隠しとられた
なんと女獅子を隠すとも、これのお庭で尋ねあうべし（水上町藤原）

おわりに

祭りに伴う芸能で唄を伴うものはほかにも多い。妙義町八木連その他に伝承される万歳、邑楽郡方面の豊年踊り、各地の盆踊りや八木節なども、祭りを機会に行われる。しかし、それらは、芸術的要素が濃厚で、祭りからしだいに離れているので、ここからは割愛しておこう。

第三章　地域別調査民謡



「八木節」

昔は、お盆の時、お寺の境内に、ヤグラを組んで八木節が歌われ、みんなで踊った。

一、中毛地域の概観

(一) 対象地域

対象となる中毛地域は、教育行政では中部教育事務所管内と区別され、該当する市町村は（三市三郡四町一四村）である。それらの市町村名は、次の通りである。

前橋市、伊勢崎市、渋川市、
勢多郡（北橘村、赤城村、富士見村、大胡町、宮城村、粕川村、新里村、黒保根村、東村）
北群馬郡（子持村、小野上村、伊香保町、榛東村、吉岡村）
佐波郡（赤堀町、東村、境町、玉村町）

(二) 地域概観

中毛地域は、ほぼ群馬県の中央に位置し、そのシンボル的存在である赤城山の雄大な山容を、中毛全域から望むことができる。西には榛名山が一望でき、赤城と榛名の間を利根川が流れる。まことに、心底から清々するような展望である。

この赤城山の東面から西面にかけて古代から発展してきた前橋市、伊勢崎市、渋川市と、勢多郡、佐波郡、北群馬郡の地域は、古墳や史跡も多く、早くから拓かれた土地柄であり、人の流通も多かったことが立証されている。

これらの一番良い立地条件のところに広々と開けた県都前橋市。機業地として全国に知られる伊勢崎市と、その原料となる糸を生産する周辺の養蚕地帯と佐波郡。名湯伊香保の玄関、三国・善光寺・清水・会津などの諸街道の合する交通の要地である渋川市。赤城の懐に抱かれたような勢多郡。榛名の東ふもと北群馬郡。太古の昔から人類が住める条件が揃っていた場所で、群馬県の中心的な地域である。

(三) 地域風土

人は、その風土によって育てられる。その土地の芸能も、そこの風土に深く影響されている。即ち、その土地の民謡も、そこの風土と表裏一体である。この地域の土地柄は、普段仰ぎ見ている赤城山、榛名山や、利根川や気候風土等の立地条件によって作られている面が大きい。

例えば、赤城山は見ての通り、関東平野の果てに左右へ長々とひいた裾野をみせ、雄大ではあるがきわめて開放的で、戦国乱世的築城には向かない山であり土地柄である。一見無防備な土地柄で、昔から為政者は、戦場としてより農地としての価値の方を重視していたと思われる。

したがって、古来より全国に覇を唱えるような武将は居着いたことがないところである。攻められれば逃げるしかない。守備不能で、戦略的な価値は、あまり無いところである。

それに加えて、昔は大自然が今より猛威を振っていたわけで、赤城の山洪水や暴れ利根川を何とも出来なかった。中央の人間は、北関東の僻地ぐらいに思っていた時代も長い。だから、ここに居着いた人間は、本

質的には農耕民族である。当然、ここの民謡も農耕に関係した唄が多い。歴史的には、当地の人々は大きな争いを避け、権力者が変わる度に素早く順応して生き延びる道を選んでいる。ここの庶民にとって政変とは、日常的生活は変わり無いところで、何処かお城の中で、トップの首がすげ変わっただけのことであったのではなかろうか。

ここの土地柄は、根は意外と平和である。何かと物騒な戦国時代より、近代兵器など無かった古代の方が栄えた形跡がある。

中毛の民謡は、中毛の庶民の気質が反映している。かかあ天下で開けっ広げ。女の方が積極的な文句も多い。猥雑で直接的である。空っ風が吹き抜けるような地形からか、排他的でなくおおらか。陰に籠るのを嫌い、物事に淡白だ。みんなさらさらと流してしまう。また、上から押さえつけられるのを嫌い反骨である。

そのくせ、生き延びる上での農民の持つ素早い大勢順応性。荒い自然からくる、荒い言葉。気が短く、熱し易く冷め易い。したがって、物事を丹念に記録し保存するという気質は少ない。例えば、じっくり書く小説家より、詩人のほうが輩出している。腹はなく、初手からポンポンといくのが好きだ。威勢がよい。人の流通や離合集散も多かった為か、新し物好きである。これらの特長的気質が民謡にも反映していて面白い。その意味では、後で触れる八木節ほど興味深いものはない。

昔の社会的流通機構は、今の県区分と必ずしも一致しておらず、昔の人も結構宿場単位で、広く関東全域を活動していたようだ。したがって、江戸、越後、東北、遠く京・大阪あたりの唄も当地に到来しただろうし、中毛的に変質し根付いたものも多いだろう。

何時の時代にも、どこの地方でも、多くの庶民の中には唄の才能に恵まれた人材はいた筈であり、中毛地域も例外ではない。長い間、群馬には民謡らしいものは少なく、不毛とされていたが、学術的民謡研究が進んできた現在では、それは浅薄な見方と断ぜるをえない資料がいろいろと出てきている。ただ単に昔の公式的な記録が少ないというだけのことではないのか。職種唄などは、全国視野で相当多様な展開が行われていた筈だ。

唄は世に連れ、世は唄に連れで、庶民はみな唄が大好きである。今の中毛地域を見ても、どこの酒場もカラオケ天国である。即ち、人の在るところ唄ありで、古来から当地でも、必ずや多くの唄が人の口にのぼったであろうことは想像に難くない。

(四) 中毛の民謡と現状

＊この度の緊急民謡調査では、県単位の調査方針として前出のように(A~G)の七区分十八項目に分類して採集しているが、中毛地域では最早かなりの項目について採集録音することが出来なかった。集まった資料により、現時点で生き残っている中毛の民謡を要約すると、大きく次の四つに分けることが出来る。

①田植唄や諸職種唄などの労作歌
②八木節に代表される口説・盆踊り唄
③念仏・和讃、行事などの宗教歌
④わらべ歌や、子守歌などの系列

このうち、現在も隆盛を極め、将来とも存続に何の不安も感じないものは八木節だけである。

＊八木節保存会・愛好会は、現在、前橋だけで三八団体、県下では二〇九団体もあり、他県をまたいで近年益々盛んである。(なお、この数字は群馬県文化事業団・昭和五七年度発行「群馬の八木節」のデータか

ら引用したものである。）その他の中毛では、伊勢崎市で十四団体、渋川市で四団体、勢多郡では北橘村七団体、赤城村三団体、富士見村・大胡町・宮城村・粕川村・新里村・東村で各一団体、黒保根村二団体。北群馬郡では小野上村・榛東村で各一団体・吉岡村三団体。佐波郡では赤堀町四団体、境町七団体、東村・玉村で各一団体となっている。他の地域を含めて、八木節の盛んな所の分布図を見ると、赤城山を中心に広域的に栄えていることが、このデータから分かっている。このように、中毛の民謡の実態は、飛び抜けて八木節の存在が大きく、その意味では、群馬県のどこへ行っても、民謡は八木節に始まり八木節に終わるといっていい状況である。今回の調査でも、八木節に関してなら、何処へ行っても採集録音に困るということはない好ましい状態にあった。

但し、諸家の研究にあるように、八木節は複雑な経緯を経て現在の形に集大成されたものであるが、その源流になったいろいろな民謡群、例えば、各地の口説節、八木節以前の各地の盆踊り唄などは、急速に失われつつあるのが現状である。また口演内容も、昔はいろいろな演目を一演題につき延々十番から二十番ぐらいは唄っていたと思われるが、今は二・三番さわりを唄うとすぐ終わり言葉「アァー、続く文句はまだあるなれど、あまり長いはお耳の障り、…」となり、ストーリーが正しく伝承されているかというと、演題の後の文句は忘れ去られているものが多い。

八木節は元々ホットなニュースを、即、次の日には唄うのが身上であり、その即興性が八木節の今日ある大きな要素の一つであるので、記録保存が苦手な県民性からすると致し方ないかも知れない。

最近、八木節以前の源流を探る研究が段々盛んになってきているが、さて調査となると、よく話に出てくる「説教祭文」とか「新保広大寺口説」などが語れる人は今回資料として出てこなかった。前橋の小坂子に祭文唄（デロレン祭文）が語れる人がいたそうだが、今回はもう無理のようだ。八木節以前の盆踊り唄で、利根郡から北群馬郡榛東村あたりにかけて分布する、四つ足・六つ足といわれる盆踊り唄や、十二足・石投げ音頭（前橋市箱田町）、稲荷藤節（佐波郡境町）、赤椀節（佐波郡境町）横樽音頭（佐波郡玉村町）、木崎音頭（新田郡新田町）など、有名な割に殆ど後継者がいないのが現状である。

＊次に、念仏・和讃などの宗教歌や行事であるが、これは根本に宗教があるわけで、端的に言うならば、日本で仏教が滅びない限りは、細々ながらも命脈は保たれていくであろうと思われる。しかし、宗教歌の場合、当地に大本山があるなら別だが、各宗派によって、それぞれやる内容が決められており、地域に関係なく各宗派の大本山縦割りの念仏・和讃があるとすれば、何か大事件があり、そこにある寺の何時の代かの住職が作って広めている場合だろう。念仏・和讃を作り布教するには、相当な仏教的専門知識を必要とするので、僧侶の主導でなければ出来ない。

当地でその痕跡が残っている大事件は、天明三年（一七八三年）七月八日の浅間山大爆発であろう。この時の災害は大規模で、いろいろな書物に登場するので、詳細は省くが、第一次災害の後、翌年は大飢饉が起こり、更に疫病が流行し、ここ中毛地域も相当の死者が出たという記録がある。この時期、中毛地域でも亡くなった子どものための地蔵尊建立、無病息災加持祈祷、念仏・和讃等の供養が熱心に行われた。前橋市日輪寺の「なんまいだんぼ」はその時から行われているもので、そのほか総社の「道祖神の唄」、古市の二十二夜和讃、総社の絹笠和讃、別系列だが二子山由来和讃、荻窪の念仏等、以上は前橋だけの例だが、各地、各

寺院に伝わるものを合わせると相当な数にのぼると思われる。但し、その採集分類は難しいところだ。

＊現在存続の危ぶまれるものは、田植唄や麦打ち唄、糸ひき唄、木遣り唄、馬子唄という諸職種唄である労作歌であろう。例えば、田植や麦打ち、糸ひきも、今は機械化するのにともない、田植唄や麦打ち唄、糸ひき唄も、段々唄われなくなり、今は田畑等で唄われるのを聞くこともなくなって久しい。馬子唄や木遣り唄も、今は馬で旅をする人はいないし、林業も機械化するしで、もはやその存在意味を失っている。

一般的に言って、絶えてしまった職種や作業にまつわる唄は、よほどの名曲でもない限り、絶滅の運命にあることは致し方ない。中毛でまだ僅かに残っている唄は田植唄で、「朝露に、髪結いあげて花摘めば、男が色で、花はたまらぬ…以下略（朝の歌・昼の歌・夕方の歌あり）」が広い地域で唄われていたようである。

その他、桑摘み唄、蚕唄、糸挽き唄、糸繰り唄、機織唄、藻採り唄、他の草取唄、稲刈り唄、麦打ち唄、麦つき唄、草刈り唄、米つき唄、碓氷馬子唄、上州馬子唄、赤城馬子唄、鎌原馬子唄、雲助唄、追分節、酒屋節、流し唄、甚摺唄、数とり唄、娘づくし唄、仕込唄、（伊勢道中唄その一・その二・中仙道など）、三転（サンコロ）、地搗き唄、木遣り唄、樋引き唄、さ流し唄、木挽き唄、踏付け唄、土羽打ち唄、船唄、と多様だが、今どれほど残っているだろうか。

＊わらべ唄についても同様である。採集の詳細は各論に譲るとして、この度の調査ではっきりしたことは、従来的な意味でのわらべ歌は危機的状況であるということであった。

今の幼児・児童は、託児所の零歳児保育に始まって、三歳児保育、保育園、幼稚園、小学校と、小さいときから諸施設で他人の手で育てられることが多い。集団管理の中で育てられるから、そこで唄われるわらべ歌も、先生サイドの選曲にならざるを得ない。

大体全国画一で、レコードやテレビ、大手出版社の歌の楽譜をもとに、ピアノ・オルガンにより教え込まれる。内容も七音音階的な戦後の作品が多く、たまに五音音階的なものが入る程度である。最早当の児童からは、なかなか採集出来ない。わらべ歌を古老に歌って貰うという現象は、文化的断絶を意味する社会問題である。

(五) 小まとめ

＊中毛地域も都市化と代替りに伴い、多くの民謡が失われつつある。マスメディアの発達により、地域差が少なくなり、有名な民謡は全国で歌われるかわり、群馬なら八木節というように一極集中した。他は淘汰され、民謡の歌謡ショー化が進んでいるのが現状である。

二、調査民謡

A 労作歌

○木遣歌

伝承地　前橋市城東町
伝承者　中村　常男（S7）
前橋高伝統文化保存会

ごよはめでたの若松様よ
枝も栄えて葉も茂る
峯の小松に　ひなづるかけて
谷の流れで　亀遊ぶ

（注）　これを基本として歌う

祝詞（ノント）

〽あーやりょーいぇーい　よい
いゃーい　かけろ　えんやーあらろー
よいさ　よいさのせー　いえーよー
えんや
ごよはめでたの　やれこりゃ　若松様よ
えんや　あらよー　よいさー　よいさの
せー　いえーよー　えんやー
みねの小松に　こりゃね　ひなづるかけ
て　はらよー　たにのよいさよいさ
のせー　えーんや　えんやねー

まなづる（ヤリゴエ）

〽よそおい飾る　錦の袖
かざす扇の　翁草

テコ

〽よーいやりょえーや　よいやんせー
えーい　これはせ　は　よいやんせ
えいこせー　えんやねぇーい　よいこりゃ
ねー　今日の良き日に　これはせー
よい　えんやれせ　いえーいよいこりゃ
ねー
庭に鶴亀　これはせー　良い
えんやれえー

トビカケ

〽おいーまつは　はいそーそりゃ　よいさ
よいさありゃ　あいぇーいんやー
ありゃ　やれこりゃね
ごよは　めでたの　やれこりゃねー
若松様よ　やれこりゃねー
枝も栄えて　葉もー　やえしげる
えーい　こりゃんせ　あれはせー　アと
こりゃ　よいさ　やーやんやはー　あり
ゃりゃん　はもいえーはいーんや　はる
はあいそ

鎌倉

〽おーいごよはめでたあーこりゃね
あーなー　こりゃね
なーはよんいえー　やれこりゃね
は　ごよはめでたの若松様よ　は　葉も茂
いえーやいえーる　みねの小松になー
は　よいえー　えいえー　みねの小松に
ひなづるかけて　ああ　谷の流れに
あーかめあそ　いえーいえい　あいえー
そぶ

手締め

〽あーやよおーいやれこりゃね　えい
そこいらで　あこりゃねーえーい　しめろ

はーやんれ　いえーい　まかせて
えーいせー　こーえかけろー
はー　これはいなー　いよー　よいやれ
こりゃね

○田植唄

伝承地　前橋市下小出町
伝承者　船津きくえ（M44）

〽朝露に　髪結い上げて　ホー　ホー
いやはの花摘めば　ホー　ホー
ハーマダマダヨ　ホー　ホー
花摘めば　男が招く
いやはの花はつもらぬ

（注）この唄は紅花摘みの労作歌であるともいわれる。

〽十七を　使いに出せば　ホー　ホー
いやはの山陰で
ハーマダマダヨ　ホー　ホー
山陰で　帯とき寝ろと
ハーマダマダ
いやはの若い衆が

〽今日の日のとき　うつ鐘は　ホー　ホー
いやはの幾つ打つ
ハーマダマダヨ　ホー　ホー
幾つ打つ　七つも八つも
マーマダーダヨ
いやはの九つも

〽夕暮れに　浜辺を行けば　ホー　ホー
いやはの千鳥鳴く
アマダマダヨ　ホー　ホー
千鳥鳴く鳴く　鳴けよ千鳥
マダマダヨ
いやはの声くらべ

○田植唄

伝承地　前橋市筑井町
伝承者　細渕　わか（M43）

〽玉村の　女郎衆とねては
イヤノ
なにもろうた　ソートモ　ソートモ
イヤノ
ひぜんと　かさと

一の谷の　あつもりどのは
イヤノ
熊谷どのの
イヤノ
手にかかる

○麦打唄

伝承地　前橋市筑井町
伝承者　細渕　わか（M43）

富士の白雪は
朝日にとける
とけて流れて　三島の宿に入る
三島女郎衆の　コリヤドッコイ
化粧の水

世の中は
とうふのようで
まめで　四角で
コリヤ　ドッコイ
やわらかく

○麦打唄

伝承地　前橋市下小出町
伝承者　船津きくえ（M44）

ホー
〽富士の白雪や　朝日でとける
　アーブッコケブッコケ
とけて流れて　三島に落ちる

ホー
〽三島女郎衆の化粧の術
ホー
お化粧なさるなら　薄化粧なされ
　アーブッコケブッコケ
あまり厚いのは　醜いものよ

○麦打ち歌

伝承地　前橋市荻窪町
伝承者　吉沢佐四郎（M41）

〽可愛いお方と羽織の紐は
アーブッコケブッコケ
固く結んでハッドコイ胸に置く
雨は降ってくる　庭のまきはしみる
アーブッコケブッコケ
背中でがきゃ泣く釜のめしはこげる
楽なよな毎晩　立たせておかぬ
アーブッコケブッコケ
寄ればなお茶も出すおこたもあるよ
俺が隣のみそ玉娘　嫁に行くとて
洗濯までしたが　へそが出べそで
アーブッコケブッコケ
アホントニきらわれた

○糸ひき唄

伝承地　前橋市平和町
伝承者　中村　ふじ

〽糸は千度(ぜんたび)切れても繋ぐ
主と切れればね　繋がらぬだんちょね
〽糸ひきするから　おめしも着れる
家じゃおまんまね　くい喰いかねるだんちょね
〽糸よ切れるな座繰よまわれ
晩のしまいがね　遅くなるだんちょね
〽糸目でてくれない目はいらぬ
繭にあるだけね　出れば良いだんちょね

○糸ひき歌

伝承地　前橋市
伝承者　不明

〽赤城下しの北風よりも
主さんの言葉が　身に浸みるかね
〽こんな悪い繭　ひかせておいて
優等だせとは　無理じゃないかね
〽繭のみずらに　主人がほれて
工女泣かせの　お女郎繭かね
〽寝るのうれしさ　起きるのつらさ
仕事ごとはなけりゃ良いかね
〽糸は切れ役　わしゃ繋ぎ役
回り見番さん　怒り役かね
〽いやで　いやで　泣く程やでも
親のためなら　是非もないかね
〽早く行きたい　あの山越えて
可愛がられた　親のそばかね
〽娘今かと　言われた時は

うれし涙が　先に立つかね
やっしょい　やっしょい
負けてたまるか
やっしょい　やっしょい

〽越後でるときゃ涙で出たが
今じゃ　越後の風もいやかね

〽糸よ切れるな　座繰よまわれ
晩のしまいが　遅くなるかね

〽糸ひきしまえば　銭湯が頼り
銭湯かずけに　主のそばかね

〽雨の降る日と　日の暮方は
思い出します　故郷のことかね

〽男伊達なら　あの利根川の
水の流れを　止めてみよかね

○田植唄

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　細井喜三郎

一、（歌詞がはっきり聞きとれず）
二、十七が　向いで招く
橋がない橋がない
我が身を橋に
渡らせる

三、夕暮れに　浜辺をゆけば
千鳥なく　千鳥なく
もっとなけ　千鳥
声くらべ

○田植唄

伝承地　伊勢崎市今井町
伝承者　上柿きよみ（M42）

鎌倉の
お寺の屋根は　なにでふく
なにでふく
ちがやとかやで
かささぶき

玉村の
お女郎とねてはなにもろうた
なにもろうた
ひぜんとかさと
文もろうた

○田植唄

伝承地　伊勢崎市山王町
伝承者　山口新二郎（S5）

鎌倉の　八ツ棟造り　ヤーハーノ
なにでふく　なにでふく
桧とさわら　ヤーハーノ
こけらぶき　ハー　マダマダ

夕暮に川辺を行けば　ヤーハーノ
千鳥鳴く　千鳥鳴く
鳴け　千鳥鳴け　ヤーハーノ
声くらべ　ハー　マダマダ

○麦打唄

伝承地　伊勢崎市今井町
伝承者　矢島　いし（M28）

嫁にゆくとて
せんたくまでしたが
へそが　出べそで
きらわれた
真石も粉になれ
富士の白雪は

朝日でとける
とけて流れて　三島へおちる
三島女郎衆の
化粧の水

○糸挽き唄

伝承地　伊勢崎市今井町
伝承者　矢島　いし（M28）

糸挽き　しまえば
七つの銭湯
銭湯　かずけに
主のそば

腹が立つなら
この子を　おだき
仲の良いとき
できた子だ

糸を挽くなら
むらなく　細く
あげて　かならず
切れぬよに

糸じゃ前橋
桐生じゃ　お召
花の伊勢崎
太りじま

○桑摘み唄

伝承地　伊勢崎市山王町
伝承者　山口新二郎（S5）

上州島村　蚕の本場ヨ　サットサ
私も行きたい　サイショ
桑摘みにァ　ホンチョサン
蚕上手な嫁御をもらいヨ　サットサ
細い身上も　サイショ
太り縞ァ　ホンチョサン

花のような若殿様がヨ　サットサ
かせぐ武士（ダンナ）の　サイショ
蚕場でァ　ホンチョイサ

調子揃えて　桑摘み唄をヨ　サットサ
乙女姿の　サイショ
赤だすきァ　ホンチョサン

（注）桑摘み唄は、剛志、島村が発祥地

○土端打歌

伝承地　伊勢崎市山王町
伝承者　山口新二郎（S5）

私しゃ上州　太田の生まれ　コノザンザ
人の情に　花が咲く
エンヤラヤノ　粋者で気は　ザンザラヨ
あらまたね　なんだい　そこいらでね
ハー　ヨイショ　ヨイショ　ドントネ

朝も早うから　利根川通い　コノザンザ
揃い土端打ち　あざやかさ
エンヤラヤノ　粋者で気は　ザンザラヨ
あらまたね　なんだい　そこいらでね
ハー　ヨイショ　ヨイショ　ドントネ

世良田東照宮は　名代の神よ　コノザンザ
徳川様の　お国元
エンヤラヤノ　粋者で気は　ザンザラヨ
あらまたね　なんだい　そこいらでね
ハー　ヨイショ　ヨイショ　ドントネ

秋の板倉　黄金の波よ　コノザンザ
この家繁盛の　お蔵米
エンヤラヤノ　粋者で気は　ザンザラヨ
あらまたね　なんだい　そこいらでね

ハー　ヨイショ　ヨイショ　ドントネ

山家育ちの　炭焼き娘　コノザンザ
いつか世に出て　花と咲く
エンヤラヤノ　粋者の気は　ザンザラヨ
あらまたね　なんだい　そこいらでね
ハー　ヨイショ　ヨイショ　ドントネ

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）

○湯ノ上よいとこ

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）
伊藤　マキ（M38）

アー　嫁に行くなら湯ノ上においで
米とたきぎにゃ困りゃせぬ
アー　有馬田圃のいなごでさえも
湯ノ上恋しと飛んで来る

（注）湯ノ上は行幸田と同じ。モッカの湯といって鉱泉が出ている。明治天皇が行幸されて行幸田（みゆきだ）と改正した。有馬（ありま）は隣りの集落。

○ジジーババー

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）

ジジーババー
寝てろ
勘太起きて
火もせ

（注）シジーババーは山蘭の異名でもある。

○木遣り歌

伝承地　渋川市金井
伝承者　北原留三郎（T10）

前読み
今日の佳き日を寿（ことほ）みて
めでたく
祝い参らせん
真鶴（まなづる）（遣り声）
よォーうーウーやァーれーえーよォーを
手古（て）
芯（しん）　「よォいやァられェて
側（がわ）　綱メ　「こォせェーえェ
中棒　いーィよォーを
シッ立　ほォいーやァーね　本棒
芯　「しめェわァよいィぞ
側　綱メ　「これわせェーえ
中棒　いーィよォーを
シッ立　ほォいーやァーね　本棒
芯　「目出度ァーく
側　綱メ　「これわせェー
中棒　えエいーィよォーを
シッ立　ほォいーやァーね本棒
真鶴（遣り声）
よォをーうーウーやァーれーえーよォーを

仕手（略）

手古は間拍子に合った捨声を入れたもので、本棒から中棒まで捨声を入れる。中棒から始まった木遣りは中棒で終る。次の仕手は、中棒から本棒まで捨声を入れると木遣りもまた本棒に納まる。木遣りは二つで落ち棒は三本となる。

（注）渋川宿は三国街道に面していて、五職工（大工・鳶・土工・左官・屋根職）の太子講があり、善請・祝儀・不祝儀・開店・売り出し等に「渋川木遣り」として歌われていた。

○上州田植唄

伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

朝
へハア　マダマダ

朝露に髪　ホイ　結いあげて
ハア　マダマダ　イヤーハーノ
花摘めば　花摘めば　ホイ
こづまがぬれて　ハア　マダマダ
イヤハイ　花摘めぬ
昼

〽ハアマダマダ
利根越えて　八幡ホイの桜
ハア　マダマダ　イヤーハーノ
幾重咲く　幾重咲く（ホイ）
七重　ホイ　八重も　イヤーハーノ
九重も（ヤーマダマダ）

〽ハア　マダマダ
夕暮に　浜辺ホイをゆけば
ハア　マダマダ
イヤハー　千鳥鳴く　千鳥鳴く
千鳥　ホイ
千鳥鳴け　千鳥　ハーマダマダ
イヤーハーノ　声くらべ

〽ハー　マダマダ

〽ハイハイ
赤城しぐれて　ハア　沼田はよ　雨よ
ハイハイ
明日は水上よ　ハア
湯桧曽まで　ハイハイ

〽ハイハイト
山で床とりゃ　ハア　木の根がよ枕
コラハイト
落ちる木の葉がよ　ハア
夜具となる　コラ　ハイト

〽ハイハイト
北山しぐれて　ハア　越後はよ　ハア
雪よ　ハイハイ
あの雪消えねばよ　ハア
あわれない　ハイハイ

〽ハイハイト
可愛いい男に　ハア　馬方を　ハア
させてよ　ハイハイト
鈴の鳴るたびよ　ハア
出てみたい　ハイハイト
ドウ　ドウ　ドウ　ドウ

〽ハイハイト
一夜泊まりの道者にほれて
ついてゆかれぬ　泣きわかれ

〽ハイハイ

三国峠で　鳥に鳴かれ
かかあが身持ちで　気がもめる

○越後松前節（追分）
伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

〽ソイソイーソイソイッ
えぞや松前　やらずの雨が
七日八日も降ればよい
ソイソイソイソイ
お前越後か　私も越後　コリャ
お国なまりが　出てならぬ
越後出る時　涙が出たがね　ソイ
コリャ　今じゃ越後の風もいや

アーエンヤラヤノヤ
エンヤラヤノエンヤラヤノ
エンヤラヤノヤ

〽ソイーソイソイ
雨だれの音にだまされ
おぬしと思い　枕幾たびあげたやら
わしとおぬしで　しんしょう持つ時は
欅柱に瓦屋根　金銀造りの硝子の窓よね
うぐいす張りの長廊下

○上州馬子唄
伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

ひと足忍べば　ホーホケキョ
ふた足忍べば　ホーホケキョ
共にしらがのはゆるまで

○碓氷の馬子唄

伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

〽ハイハイ
碓氷峠の　真中頃で　ハイハイ
又も　ハア聞こえる　鹿の声
〽ハイハイ
下る碓氷の　追分塚でよ　ハイハイ
なびく　ハア　浅間の白煙よ
〽ハイハイ　コラハイト
西は追分　東はよ関所　ハイハイ
せめて　ハア　峠の茶屋までも
ハイハイト　ハイハイ

○上州木挽き唄

伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

〽ハア　シャレコン　シャレコン
さあ山で切る木はよ
かずかずあれどよ
思いきる木は　更にないよ
〽ハア　シャレコン　シャレコン
さあ七分二枚のよ
板ひくよりもよ
可愛あの子のさあ
そでをひくよ
〽ハア　シャレコン　シャレコン
さあ鳴け鳴け鳥よ
この家の屋根でよ
今日も明日もああ
かんじょう取りよ
〽ハア　シャレコン　シャレコン
さあ親の代からよ
木挽きはすれどよ
木の実　かやの実さあ
食べやせぬよ

○麦打ち唄

伝承地　勢多郡富士見村石井
伝承者　本山　福司（M38）

〽浅間山から　鬼がけつつん出した
ブッコケ　ブッコケ
なたで　ぶっきるような
雲が出た
ブッコケ　ブッコケ
〽私しゃ太田の金山育ち
ほかに　きはない
松ばかり
ブッコケ　ブッコケ
〽色は黒雲　ばかにはするな
味はやまとの
つるし柿
ブッコケ　ブッコケ

○われらの鉄道

伝承地　北群馬郡子持村上白井
伝承者　猪熊　秋巳（S4）

こらさんと（線路工手の兄貴株の発唱）
こいこらしょ（三人の工手が続いて発唱）
こらさんと（発唱）
こいこらしょ（続き）
こらさんと（発唱）
こいこらしょ（続き）
われらの鉄道（発唱、らの鉄道と発音）
われらの鉄道（続き）
目ぞ打ちこめ（発唱）
目ぞうちこめ（続き）

保線の魂（発唱、線の魂と発音する）

保線の魂（続き）

（歌も唄い方も短調なので、線路わきなど人が通りかかると、何か冗談的なことばを入れて歌った。）

おじいちゃんどこへ行く
母ちゃんの弁当持って
弁当のオカズは何だ
千メートル美人がやってきた
来てみたらオカメだった（千メートル美人とは遠くの方では美人のように見える人）

（注）国鉄保線区の工夫が線路枕木下に砂利を入れて、線路が定位置になるよう、つるはしを振って作業するときに唱えたもの。
歌いながらつるはしを振り上げ、歌いながら打ち下ろす身体の動きがある。そして枕木を移動していく。レールとレールの継ぎ目は特によく砂利を入れるから、唄う声にも張りがある。
この歌は上越線・吾妻線で唄われていた。

○嫁に行くなら

伝承地　北群馬郡子持村白井
伝承者　埴田あさ子（T7）

嫁にいくなら
白井はおよし
田なし水なし
井戸深し

（注）清水越往還（現国道）からもはずれ、近年までの白井の環境をうたったもの。

○小野上農協　火の用心の歌

伝承地　北群馬郡小野上村村上
伝承者　石井　シマ（M34）

一、もしもし皆さん皆さんよ
世界のうちで火災ほど
危険であぶないものはない
もし一旦火事がおこりなば

二、見るまに火の海、灰の原
日本中で一年中
何億宝を灰にする
皆さん火の元御用心

（注）小野上農協で製糸工場を経営していた頃、組合長の斉藤梅雄が作詞して「もしもし亀よ」の譜で女工に糸を挽きながら歌わせた六〇、六五年前のもの

○桑つみ唄

伝承地　佐波郡境町中島
伝承者　小林　定吉（M38）

〽上州島村蚕の本場ね　サットサァ
富士の山ほど　サイショまゆの山ね　サットサァ
〽揃った揃ったよ　サット赤だすきよ　サットサァ
わしも行きたい　サット桑つみに　サットサァ
〽蚕あがれば沼田の城下ね　サットサァ
連れて行くから　サット辛抱しろよ　サットサァ

（注）演唱者（伝承者）によれば、実際に桑をつみながら唄っていた時は、右のように囃子詞の詞と、入れる箇所はその時の調子で一定していなかったという。現在では次のような歌詞・囃子詞が一般的になっている。その一部を抄出。

〽剛志島村蚕の本場よサットサァ　わしも行きたや　サイショ桑つみに　アーホンチョサン
剛志村・島村は現境町の一部を成す旧村名。

○田植唄

伝承地　佐波郡玉村町南玉
伝承者　原　喜一郎（T13）

〽玉村の八幡さまは

イャーノ　なにで葺く
ひのきとさわら
イャーノ　こけら葺き
〽利根川越えて八幡の森の
イャーノ　八重ざくら
八重ざくら
八重には咲かないで
イャーノ　九重に

○麦打唄

伝承地　佐波郡玉村町南玉
伝承者　原　喜一郎（T13）

〽わたしゃね　玉村住吉(すんきち)育ちよ
ハァ　ヨイショ
〽ほかにね　気はないただまつばかりよ
スットン　スットン　トント
〽わたしゃね　太田の金山育ちよ
ハァ　ヨイショ
〽ほかにね　気はないただまつばかりよ
スットン　スットン　トント

（注）住吉―玉村町南玉の鎮守神。
金山―群馬県太田市にある山。

B　祭り歌・祝い歌

○二十二夜和讃

伝承地　前橋市古市町
伝承者　高橋　サト（M31）

がしゃく　しょじょう
　しょわく　ごうかい
ゆうむ　しとんじん　しょじょう
しんごん　しょじょう
一切が今回懺悔
　繰り返し（2反）

がんにちふどう　じょどせい
こくぼう　らんしん
ほうじょう　あんらく

　二十二夜様

〽帰命頂来　有難や
二十二夜様　待つ人は
秘密改め　しょしんし
胸に悪心持たずして
信心堅固に身を持ちて
菩薩を拝し　給ふべし
女人菩薩の　ごかんには
あまた女人の　身替りに
地の池地獄に落ちんとて
既に入らんとし給えば
あら有難や不思議なり
池より蓮華が現れて
紫雲たなびく御仏の
そのまま蓮華に座し給へ
左右の御手にみどり子を
いだき上げさせ給うべし
右の御手を顔に当て
女人を救わん方便に
感ぜ給いて　有難や
左の御手で　招きつつ
我を念ずる輩（ともがら）は
前世未来をたすくべし
さてまた現世のごかんには
ちしゃく　けっかい　血の病
ながち　しらちの病でも
薬感応ましまして
たちまち快気を致すべし
子のなき女人に子を授け
末長久と守るべし
かいたるしたる女人には
産前産後の大難を
安産させていさすべし
なおまた未来ごかんには
死出の病や産づかば
血の池地獄に致るまで
女人菩薩が手を取りて
阿弥陀如来が来迎し
勢至菩薩ももろともに
回向くんじのはなふりて
極楽浄土へ引導し
来世は一蓮託生で
有難かりし次第なり
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

○二子山由来和讃

伝承地　前橋市東大室
伝承者　中沢　一郎
　他10名

〽帰命頂礼　上野の勢多の郡は大室の
二子の山の由来をば　尋ねてみれば
其の昔　辱（かたじ）けなくも天皇は
十一代の御帝　垂仁帝の御代のこと
東の蝦夷を鎮定（おしずめ）　普く文化を洽（ひろ）めんと
皇子（すめみこ）豊城入彦の命をはじめ御子孫の
御諸別（みもろわけ）や荒田別（あらたわけ）　其のた文武の軍人（いくさびと）

下し給うて住わせば　此の毛の国は
命等の　御徳治く治まれり

其の後凡そ二千年　御陵の知れざれば
朝廷にては両毛の　国中隅なく調べけり
頃は明治の十年秋
前の二子を掘りたるに
数多の土器や埴輪など
古代の品々出でにけり
届けによりて内務省宮内省などその筋の
係りの人や学者達　篤と調べをなし給う
前後の二子は皆共に　林の中に鎮まりて
中の二子は御霊なる沼につつまれ神々し

二子の山の其の東　御霊神社の祭神は
御諸別の命にて　築き祭られ在しけり
二子の山は三つあり
前中後の三つにして
形はいづれも同じにて　前方後円高き塚

其の石室の築き方　出土品にて二子こそ
尊貴方の御陵と　推定するに難からず
老人会の人々は　来る年毎の彼岸会に
護国の神と尊みて
念仏称えて上ぐるなり

南無阿弥陀仏阿弥陀仏
南無阿弥陀仏阿弥陀仏

○念　仏

伝承地　前橋市荻窪町
伝承社　橋詰　あざ（M31）
他3名

無常盞々無明の法役
せんもんごうりをあいのうことごとし
われ今けんもんしじゅをすることを得たり
願わくば野郎犬しんじゅつ
じょうげしたてまつる
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨
南無阿弥陀　南無阿弥陀
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
繰り返し（9反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨
十王十体エンマ大王　しょはんの念仏
南無阿弥陀
繰り返し（7反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨
道の端の六地蔵　唱え申す御威徳に
しょくせきのがるる南無阿弥陀
繰り返し（13反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取捨
融通念仏南無阿弥陀　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀
繰り返し（10反）
（注）三人がこの念仏を唱え、一人は「一日二日十四日……」の句を同時に唱えるが聞き取り不能

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨
高時地蔵のなおさせ給う念仏は
おくり六体六観音の　六方浄土に
弘法薬師　こちの如来　十万億土の
七十三仏　三世のしょうしゃく
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀
繰り返し（8反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨
西は西方極楽浄土のおじが池の蓮の蓮華
は　一反申せば三本開いて　みしま高野
へ輝やき渡れば　すなわち仏に疑いなし

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

繰り返し（8反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨

西国三十三番よ　坂東が三十三番よ

秩父が三十四番の観音　あわせて百番

大悲大悲の観世音

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

繰り返し（6反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨

南無不動釈迦文殊普賢地蔵弥勒薬師観音

勢至阿弥陀阿閦大日虚空蔵

南無十三仏　南無阿弥陀

繰り返し（12反）

光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨

オン　アバキャベ　ロシャナ　マカボサラ

マニハンドバジンバラハラハリタヤ

繰り返し（6反）

オン　アバキャベロシャナ　マカボサラ

マニハンドバジンバラハラハリタタヤウン

○道祖神の歌

伝承地　前橋市総社町

伝承者　不明

道祖神が燃えますよ

はや夜が明けますよ

○鳥追い唄

伝承地　前橋市総社町山王

伝承者　不明

〽鳥追いだ　鳥追いだ

ありゃ誰が　鳥追いだ

次郎どんの　鳥追いだ

頭切って　尻切って

しょいだる　さべ込んで

佐渡が島へ　ぶん流せ

ほーほいや　ほーほいや

じらんぼっくり　おっかねー

○御詠歌

伝承地　伊勢崎市連取元町

伝承者　植木みつ江（S4）

宝輪の

もとに立たせし

大悲尊

ほだいの種を

人にささげん

○鳥追い歌

伝承地　渋川市行幸田

伝承者　清水銀次郎（T3）

奥泉倉三郎（T7）

石井　清（T4）

関口　清一（S3）

伊藤　九平（M42）

鳥追いだ鳥追いだ

あれはどこの鳥追いだ

源五ジジーの鳥追いだ

頭切って尻取って

醤油樽にたたこんで

佐渡が島につん流せ

オーホイヤーオーホイヤ

（注）一月十三日夕方道祖神を焼くとき、同時に唄われる。

○道祖神小屋立て振れの歌

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）外

道祖神が立ちますよ
縄一房、なた一丁持って
出てくんなんしょ

○こで小屋焼き振れ歌

起きさっせ
起きさっせ
道祖神が燃えますよ

（注）小屋焼き歌の「起きさっせ」は一月十四日朝もしの北区が歌うもの。

○秋ヤ待ちの歌

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　養蚕寺マサ子（T11）外

秋ヤ待ち出てくんなよ
宿（やど）は辻の家だよ

（注）秋ヤ待ちは秋葉待ちのこと、秋葉様は火伏せの神で、冬期火の用心の行事として、お祭りをした。辻（つじ）は小字の名で宿（やど）が変われば、別の名で唄う。

○七草の歌

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）

七草なずな　唐土の鳥が　日本の土地へ
渡らぬさきに
何たたく　せりたたく

○道祖神の歌

伝承地　渋川市石原
伝承者　登坂　万平（M39）
高橋　久平（M38）

十三日の午後、太鼓をたたいて村中を回る。

縄一房持って
道祖神づくりに
出てくんなんしょ

十四日の未明、道祖神を燃やす振れ太鼓と共に歌う。

起きさっせ
起きさっせ
道祖神が燃えますよ

（注）現在は育成会の指導で行われる。

○十日夜

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）
伊藤　善市（T4）

十日夜いいもんだ
朝そば切りに昼団子
夕もち食っちゃ腹太鼓
番場のやつら喧嘩に来い
石がなけりゃ拾って来い

（注）石がなけりゃ拾って来いの文句がおもしろい。

○高砂

伝承地　勢多郡北橘村上真壁
伝承者　荻原直次郎（M44）
荻原　藤吉（T5）

「高砂」

〽高砂や此の浦舟に帆をあげて
月もろともに　いでしおの
波のあわじの　島かげや

遠くなるおの　沖すぎて
はやすみのえに　つきにけり

「四　海　波」

〽四海波静かにて　国もおさまるときつ風
枝をならさぬ　みをなれや
相に相生の松こそ　めでたかりけり
げに仰ぎけも　こともおろかや
かかる世に住める民とて　ゆたかなる
君のめぐみぞ　ありがたき

「千　秋　楽」

〽千秋楽には　民をなで
萬歳らくには　命をのぶ
相生の松風
さあさつの声ぞ　たのしむ
さあさつの声ぞ　たのしむ

（注）花嫁が婚家の庭先に入った時点で高砂が歌われ、宴会の途中で四海波が歌われる。千秋楽は結婚のとり結びが終わってから歌われる。

○念佛

伝承地　勢多郡北橘村上真壁
伝承者　萩原直次郎（M44）
萩原　藤吉（T5）

仲澤　はつ（M39）
高橋　フサ（T11）

〽なむあみだ　なむあみだ
なむあみだ佛　なむあみだ
〽なむあみだ　なむあみだ
えんま大王　なむあみだ
〽なむあみだ　なむあみだ
南無十三佛　なむあみだ
〽なむあみだ　なむあみだ
じゅう王十体　なむあみだ
〽なむあみだ　なむあみだ
ゆうずう念佛　なむあみだ

（注）葬式でなおらい（お清め）が終わっておいとまする時にうたう。十三佛の名を全部唱えることもある。次に十三佛の名を記しておく。

1不動ふどう
2釈迦しゃか
3文殊もんじゅ
4普賢ふげん
5地蔵じぞう
6彌勒みろく
7薬師やくし
8勢至せいし
9観音かんのん
10阿閦あしゅく
11阿弥陀あみだ
12大日だいにち
13虚空蔵こくぞう
南無十三佛なむまいだ

○お念佛のご和讃

伝承地　勢多郡富士見村石井
伝承者　濱田よしを（M44）

〽諸行無常の　鐘の声
静かに暮るる　夕日影
金色西の　空に映え
そぞろに偲ぶ　弥陀の国
〽唯ひとすじに　立ちのぼる
香煙ちりの　世を隔て
念佛三昧　澄みわたる
心の淵の　藍の色
〽そよとも聞かぬ　物の音
一心不乱　きわまりて
南無阿弥陀佛　一世界
我も佛も　なかりけり
〽頼む心も　佛なり
唱うる声も　佛なり
佛のほかに　我が身なく

我が身のほかに　佛なし
〽まかせまつりて　唱うれば
名号の徳　おのずから
無碍の光明　身にあまり
無量の寿命　頼みあり
さてもめでたき　浄土かな
一切衆生　もろともに
親とぞ仰ぐ　阿弥陀佛
今もうつつに　おわします

○ご詠歌

伝承地　勢多郡富士見村石井
伝承者　濱田よしを（M44）

〽声あれど
声なきよりも
さびまさる
念佛のこえ
めでたかりけり

○百萬陀羅念佛

伝承地　勢多郡富士見村石井
伝承者　本山　福司（M33）

〽南無阿弥陀佛　六遍十唱

南無地蔵念佛

〽南無地蔵　南無阿弥陀　十唱

無縁法界念佛

〽無縁法界　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀　十唱

十三佛念佛

〽南無不動釈迦文殊普賢地蔵
弥勒薬師勢至観音阿しゅく
阿弥陀大日虚空蔵南無十三佛
南無阿弥陀　十三唱

十王十体念佛

〽十王十体南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀　十唱

融通念佛

〽融通念佛　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀　十唱

差上念佛

〽今日（今晩）申したお念佛を
黄金のお盆に積みあげて
佛様に差し上げて
おいとま申して　いざ帰る
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀　十唱

／

○石投げ音頭

伝承地　勢多郡富士見村小暮
伝承者　大竹　輝男（S11）

〽さあえ　ここに過ぎにし　その物語
国は中国　その名も高い
武家の家老に　一人のせがれ
平井ごん八　名を乗りこそは
犬のけんかが　いこんとなりて
同じ家中の　本庄氏を
〽さあえ　同じ家中の　本庄氏を
うって立ち退き　あずまをさして
下る道にて　桑名の渡し
わずかばかりの　船賃故に
あまた船頭に　取り囲まれて
既に危うし　その折からに

○念仏・和讃

伝承地　北群馬郡子持村白井
伝承者　小見シャウ（M38）
広山とくえ（M42）
小菅　シナ（M45）

三遍返し（三十三回）
（高音）南無阿弥
陀仏
（中音）
（低音）

十三仏（十三回）
南無　不動　釈迦　文殊　普賢　地蔵　弥勒
薬師　観音　勢至　阿弥陀　阿閦　大日　虚空蔵
南無十三仏南無阿弥陀

鐘は真中をはたくこと、
はじ（端のこと）ははたくな、
信仰をしないから
はじをはくのだと
（真中をはたくと音色がよい）
（注）明治初年（一八六五～）から、白井城入り口の不動尊の祭日（一月二十八日）に唱えられ、又葬式のあと、追い出し念仏としても唱えられている。

○雙林寺和讃（入定節）

伝承地　北群馬郡子持村中郷
伝承者　死亡

赤城榛名東西　子持を後に聳え立つ
景仲公の開かれし　山は最大雙林寺
歴史は長し利根の川　法灯ここに五百年
蛇頭の水は澄み渡り　真如の月は影清し
月江禅師の御教は　暗夜を照らす灯びか
道をし辿る世の人の　正しき文化のその標
法の灯び標にて　金剛杖の身を鍛え
地軸砕けて驚かず　天柱砕けてたじろがず
南無大悲道了尊　南無大悲大薩埵

道了大薩埵和讃（入定節）
はく命頂礼道了尊　心は末世に止どめられ
不思議な威力に火を負うて　三宝興隆国の
花　咲かす心に家栄え　忠孝仁義の身は円
く　治る御代の慈悲桜　自然に合はす合掌
に　拝む一如の妙色身　嗚呼有難や大菩薩

道了大薩埵御詠歌（楊柳節）
最大の道を悟りし御姿を
拝む心も白井尊とサ
南無道了尊　南無道了尊

水害御和讃（入定節）
時しも昭和十年の　秋も中半の九月末
二十五日も黄昏に　風雨もろとも繁くなり
県内各所の水害は　吾妻碓氷群馬郡
利根水上も諸共に　田畑や橋ばし人家まで
流れし数は多くして　老いも若きもいとい
なく　救いの声より水の音　聞く度び毎に
哀れなり　行方不明の人びとの　藻屑とな
りし御霊をば　仰ぎましては
（中和讃にて）
身はちぎれ心はいずくにゆくやらん　くら
きはもとのすみかなり　無念こつつい如何
ばかり　されば諸人今ここに　霊を慰めま
つるには　念仏唱えて祈るべし　南無阿弥
陀仏　南無阿弥陀仏　阿弥陀仏
（注）雙林寺僧であった時田貞道（M34生れ、後の玄棟院住職）が中郷住民に与えた和讃集に集録されていたもので、昭和十年（一九三五）頃の作である。唱えられる者はすべて死亡した。

○正月大師の歌

伝承地　北群馬郡小野上村村上
伝承者　石川　シマ（M34）

お正月三月の日
大師様のお祭で
おばさんとこへ行ったらば

芋の煮たのをつん出した
かぶ煮てつん出した
あんまりうまいので
も一つ呉れと言ったらば
でっかい目をしてにんらめた

（注）小野上村に七、八〇年前に子供たちの間に歌われたものである。

○御詠歌「柳澤寺」

伝承地　北群馬郡榛東村山子田
伝承者　千木良愛子（T7）
高橋　シメ（M41）

唱え奉る御本尊千手千眼観世音菩薩の御詠歌に。
かすみ立つ
春の山子田
風吹けば
緑をながす
柳澤寺。

（注）この御詠歌は寺に伝わっている観音像に書かれた、作者不明の詞に沼田市の天台宗の寺の住職丸岡師の作ったものである。三三の礼所を廻る時にうたうので実際には足に合わせたテンポでうたう。これはこの寺の行事の時にいつもうたう。

○道祖神のうた（その一）

伝承地　北群馬郡榛東村山子田
伝承者　千木良愛子（T7）
高橋　シメ（M41）
他和讃の会の人十二名

前夜のうた
〽なわ一ぼもって
道祖神の小屋を作りに　出てくんなしょ

当日の早朝
〽道祖神の小屋が燃えますよ
はや夜が明けますよ
玉子の親父が鳴きますよ

道祖神のうた（その二）
前夜のうた
〽道祖神になわ一ぼもって
小屋作りに出てくんなしょ

燃やす時（深夜一時か二時）
〽道祖神がもえますよ
はや夜が明けますよ

○地蔵和讃

伝承地　北群馬郡榛東村広馬場
伝承者　大山　傳三（M38）
他和讃の会の人8名

「五　徳」
〽五徳のなやみに　ソウトモ
漂よいてな　悪渕にぞしずみける
無明の眠り深ければ
夢とどろく　ソラヨイヨイ
こともなく　トヨ　なむまいだ

「三　徳」
〽三徳しまの　ソウトモ　なやみにて
五塵六欲深ければ
心のなやみ路に迷いきて
「三界がたくと」　ソラヨイヨイ
まわりぬる　トヨ　なむまいだ

「榛　名　山」
〽煩命頂礼榛名山　ソウトモ
鞍掛岩に九十九岩
御神前には御福石
阿弥陀ケ岳を拝むには
拝むとすれば雲かかる
いかなる邪険の雲じゃやら
雲に邪険はなけれども
「心が邪険で」　ソラヨイヨイ

拝まれぬ　トヨ　なむまいだ

「白鳩」

〽帰命頂礼白鳩が　ソウトモ
門の扉に巣をかけて
「門さえ開けば」　ソラヨイヨイ
月輝く　トヨ　なむまいだ

「輪廻の車」

〽輪廻の車は　ソウトモ
止まらず　いくとせぶりの夢のせて
三界流転の廻りきて
「邪法舌禍の」　ソラヨイヨイ
露の身は　トヨ　なむまいだ

「六根」

〽六根けだつの　ソウトモ
道に入り　七辺無妙の赤月は
こち六代の空晴れて
「七かく八生の」　ソラヨイヨイ
道すぐに　トヨ　なむまいだ

「門和讃」

〽帰命頂礼極楽に　ソウトモ
あかずの御門が三つござる
金銀力であかばこそ
「南無の六字で」　ソラヨイヨイ
さらりとあく　トヨ　なむまいだ

「地蔵尊」

〽帰命頂礼地蔵尊　ソウトモ
一念迷いし初めより
無明の暗き闇に入り
一夜の眠り深ければ
「妄執の夢」は　ソラヨイヨイ
さめがたく　トヨ　なむまいだ

「宿かり和讃」

帰命頂礼巡りきてソウトモ
一夜をここにかりの宿
地蔵菩薩を引き入れて
われらも共にこの家の悪事と災難を
「板わせ給う」　ソラヨイヨイ
ありがたき　トヨ　なむまいだ

「お茶禮」

〽帰命頂礼巡りきて　ソウトモ
お茶は朝陽か　あべの茶か
これは山城　宇治の茶か
さてはお手作か
「旅の疲れで」　ソラヨイヨイ
呑みしれぬ　トヨ　なむまいだ

「島田さん」

〽帰命頂礼島田さん　ソウトモ
何が祈願でかどに立つ
何も祈願はなけれども
「可愛い男に」　ソラヨイヨイ
顔見せに　トヨ　なむまいだ

「辻　和　讃」

〽帰命頂礼道辻に　ソウトモ
地蔵菩薩をおがむなら
危うき難をのがれつつ
無事に我が家に帰りくる
「これも地蔵の」　ソラヨイヨイ
威徳なり　トヨ　なむまいだ

「禮　念　佛」

〽帰命頂礼向うより　ソウトモ
念佛申して来る人は
釈迦のお弟子の舎利佛か
笠の印は弥陀如来
地蔵菩薩のお使いか
しばし旅の話など
「宿に帰りて」　ソラヨイヨイ
物語り　トヨ　なむまいだ

「橋　和　讃」

〽帰命頂礼高野山　ソウトモ
無明の橋とて橋一つ
念ある人には橋広く
罪ある人には橋せまし
「ただ念佛で」　ソラヨイヨイ
渡る橋　トヨ　なむまいだ

「大　日」

〽大日大慈の　ソウトモ
弥陀如来大慈ほうげん
めぐらして光明辺照へだてなし
「十方世界を」　ソラヨイヨイ
あわれみて　トヨ　なむまいだ

（注）お地蔵様は子供の守り神様である

○地蔵和賛

伝承地　北群馬郡榛東村広馬場
伝承者　一倉　敦敏（－18）
他親睦会員　十一名

「地蔵和賛」

〽大慈大悲の深きこと
地蔵菩薩に　ソラヨイヨイ
しくはなし　トヨ　なんまいだ

「辻和賛」

〽帰命頂礼この辻は
又路の辻とて道三筋
祈願御地蔵の　ソラヨイヨイ
しのの道　トヨハーなんまいだ

「お茶和賛」

〽帰命頂礼このお茶は
新茶か古茶か宇治　茶か
旅の疲れで　呑むしれぬ
お茶のお礼は富士筑波
宿に帰りて物語り
これぞ御地蔵の　ソラヨイヨイ
いくとせ　トヨハーなんまいだ

「礼和賛」

〽帰命頂礼有難や
礼は言葉で盡くされぬ
何処で申そう
極楽の弥陀の御前で　ソラヨイヨイ
しかと申そう　トヨハーなんまいだ

（注）天明の飢きんの時から子育て地蔵として発足した

○十日夜

伝承地　北群馬郡吉岡村大久保陣場
伝承者　羽鳥　善市（M40）他5名

〽とうかん夜はいいもんだ
朝そばきりに　昼だんご
夜餅食って　腹でいこ

（注）わらを束ねて作った「わら鉄砲」で地面を打ってもぐらを追う。

○大師祭り

伝承地　北群馬郡吉岡村大久保陣場
伝承者　羽鳥　善市（M40）他5名

〽お正月の三日の日
大師さまのお祭で
おばさんのところへ行ったらば
芋煮てつん出し
餅煮てつん出し
も一つおくれと言ったらば
大きな目玉でにらまれた

○道祖神

伝承地　北群馬郡吉岡村大久保陣場
伝承者　羽鳥　善市（M40）他5名

〽道祖神がもえますよ
早や夜が明けますよ
玉子のおとっさんが鳴きますよ

○七草の唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山　マサ（M3）

〽七草なずな
唐土の鳥と

日本の鳥と
日本の橋を
渡らぬうちに
すここん　こん　こん

(注) まな板の上にのせた七草がゆの材料を、包丁、火箸、まな箸を束ねて手で持ち、叩きながら唄った。

○赤わん節

伝承地　佐波郡境町下武士
伝承者　吉野勘重郎（S9）
国定忠治

〽ハァー　エー
またもでましたとうなす野郎が
よせばよいのに出かけてしゃべる
〽北は広瀬よ南は利根よ
中にはさまる境の町よ
〽わたしゃ武士の赤わん弟子で
これが武士の赤わん節よ
〽文句ちがいはおゆるしめされ
おゆるしなされば文句にかかる
〽国はどこよとたずねたならば
国は上州国定ごうり
〽音に聞こえし国定村で
音に聞こえた国定村で
〽そのや村にて一二といわれ
親の代まで名主をつとめ
〽二番むすこがすなはち忠治
二番むすこがすなはち忠治
〽生まれつきから侠客肌で
力自慢で武芸がすきで
〽人のためなら喧嘩もなさる
人のためなら喧嘩もなさる
〽親は見限り是非ないことと
地頭役所へ願いをすれば
〽殿の威光で無宿となりて
近所近辺悪事をたてる
〽聞くにまされる悪党者よ
聞くにまされる悪党でござる
〽一の子分はその名も高い
両刀づかいの円蔵というて
〽二番子分が板割浅太
次に名高い三ッ木の文蔵
〽それにつづくが忠治のうちで
四天王といわれた男
〽さって満場のみなさま方へ
もっとこの先よみたいけれど
〽もはや受け持ちご時間なれば
ここらあたりで止めおきまして
〽おあと先生にお願いいたすが
ハァー

(注) 歌詞の二行毎に間奏が入る。楽器は現在、太鼓、笛、すり鉦、鼓。八木節流行以前の盆踊唄の一つ。明治の半ば頃、上武士村（現境町）の池田高次郎（M6）が最初に唄い出したものという。池田が唄うと顔面が紅潮して赤うるし碗のようになるので「赤わん節」の呼び名も、ここから生まれたという伝えもある。

○横樽音頭

伝承地　佐波郡玉村町南玉
伝承者　原　喜一郎（T13）
国定忠治

〽ハァー　さって集まるみなさま方よ
ハァ　ドシタイ　ドシタイ
それじゃこれからよみあげまする
上州名物国定忠治
ハァ　ドシタイ　ドシタイ
〽ハァー　音に聞こえし国定村で
ハァ　ドシタイ　ドシタイ
親の名前が忠兵衛というて
そこで三っ子が忠治でござる

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

〽ハァー　生まれついての侠客さまで

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

力自慢で武芸がすきよ

人のためなら喧嘩もなさる

ハァ　ドシタ　イドシタイ

〽ハァー　力自慢で武芸がすきよ

ハァ　ヤッショイ　ヤッショイ

人のためなら喧嘩もなさる

そこでつづけて忠告なさる

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

〽ハァー　意見さわぎに律気でませる

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

そこでぜひなく見限り申して

あわれ勘当で無宿となって

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

〽ハァー　もっとつないでよみたいけれど

ハァ　ドシタイ　ドシタイ

ちょうど受け持ち時間となって

おあとさしかえまたよみまする

ハァ　ヤッショイ　ヤッショイ

（注）歌詞の三行毎に間奏が入る。楽器は酒樽（四斗入空樽）笛、すり鉦。樽は横に倒して鏡と胴の部分を叩く。音頭取りは楽器を持たず歌のみ。囃子詞は樽叩きが主に入れる。

C　踊り歌・舞謡

○八木節

伝承地　前橋市古市町

伝承者　飯野　進（T8）

この調子で宜敷く頼む

〽はー今日は前橋祭りの日にち
こんな立派な舞台を借りて
何か一言つまんでしゃべる
いきるからよと皆さん方よ
今だ身共は練習中なれば
うまい訳には参らぬけれど
八十婆さん豆かむように
ぼつりぼつりと読み上げまするが
おーいさね

〽はー俺が畑にとんだこと出来た
なすときゅうりの喧嘩ができた
なすが黒くなって　とげだして怒る
きゅうりゃ青くなって　つるだして怒る
そこで仲裁とうなすかぼちゃ
赤い顔して黄色な声で
何がなんでもきゅうりが悪い
他人の地所までつるだすからだよ
おーいさね

〽はーかかる文句は　そいつぁ何なんと
今は昔のその物語り　ままの三ちゃん
あけくれそうね　故郷はどこよと尋ねて
みれば　故郷は武蔵で秩父の郡
真門村にて　改村なって　もとは由ある
百姓なれど　今の代より零落いたし
田地田畑人出に渡す

〽はー今じゃ小作の日傭をとりて
巡る月日が貧苦にせまる
今年また来る北亜米利加で
異国騒ぎが品川沖で
新規築立て
お台場普請　それと聞くより
百姓の喜八　鍬をかついで稼いで来よと
支度整え　我が家をいずる

〽はー支度整え我が家を出ずる
後は喜八が後添えおたく
ままの三次を明け暮共に
むごく育てる横しまじゃけん
つらくあたればまま子の三次

〽はーつらく当たればまま子の三次
親に孝行すなおな生れ
産みの親より育ての親と
機嫌とりとり弁当持って

〽はー母の詰めたる弁当持って
双紙かかえて寺屋に急ぐ
三次精出し手習いすれど
人形かく子に絵を画く子供
習い終わりてもう昼時よ

〽はー習い終わりてもう昼時よ
皆が弁当　三次も共に
重を開いて昼食せんと
箸を取らんとしたその時に
飯にたかった　あまたの蠅が

〽はー飯にたかったあまたの蠅が
ころりころりと皆死にうせる
それを見つめたお師匠さんが
やーれ哲く　その飯待ちない
されど高座のみなさん方よ
もっとこの先ゃ読みたいなれど
まずはこれにて段止めまする

○十二足

伝承地　前橋市箱田町
伝承者　吉本　友好（S20）
菊池　将五（S9）
他

セーノ
〽出たよ出ました　出鱈目野郎が
出たよ出ました　出鱈目野郎が
四角四面の櫓の上で

音頭取るとは　恐れ乍ら
音頭取るとは　恐れ乍ら
音頭取るとは　恐れ乍ら
ハイ　オセオセ

何か一言おしゃべりまする
何か一言おしゃべりまする
何か一言おしゃべりまする
オセオセ

わしの音頭じゃ踊りにくかろが
わしの音頭じゃ踊りにくかろが
わしの音頭じゃ踊りにくかろが
オセオセ
わしの音頭じゃ踊りにくかろが

わしの音頭じゃ踊りにくかろが
わしの音頭で　宜敷く頼む
オセオセ

わしの音頭で宜敷く頼む
わしの音頭で　二回り三回り
わしの音頭で　二回り三回り
オセオセ

おあと大先生がお茶飲むあいだ
おあと大先生がお茶飲むあいだ
許しなされば　文句にかかる
オセオセ

八百屋お七を読み上げまする
八百屋お七を読み上げまする
八百屋お七は可愛想で読めぬ
オセオセ

八百屋お七は可愛想で読めぬ
八百屋お七は可愛想で読めぬ
八百屋お七は可愛想で読めぬ
オセオセ

おあと大先生に宜敷く頼む

おあと大先生が控えてなさる
おあと大先生に宜敷く頼む
オセオセ

かわりましたよ　かわられました
かわりましたよ　かわられました
かわりましたよ　かわられました
ハーオセオセ

前橋帰りにちょっと寄って見たら
前橋帰りにちょっと寄って見たら
花の蝶々が賑やかなれど
ハーオセオセ

ちょいと先生のお茶飲む間
四角四面を借り受けまして
何か一言おしゃべりまする
ハ　オンドリャドウシタネト

田中田んぼの稲穂が靡く
田中田んぼの稲穂がなびく
靡くはずだよ箱田の娘
ハー　オセオセ

箱田娘は　器量が良くて

てんできれいで働き者で
竹を割ったようで　良く気がきいて
ハ　ドウシタドウシタ

嫁に来るなら　箱田へおいで
嫁を取るのも箱田の娘
嫁にくるなら　箱田へおいで
ハー　ソレカラドウシタ

何というても　俄かにこうで
うまい訳には読めないけれど
故郷の訛は　お許しなされ
アー　オセオセ

許しなされば文句にかかる
わしのおはこの十八番で
まま子三次で宜敷く頼む
アー　オセオセ

故郷はどこよと尋ねたならば
故郷は武蔵で秩父の郡
真門村にて百姓の喜八
アー　オセオセ

もとはよしある百姓なるが
親の代より零落致し
田地田畑皆売りつくす
アー　オセオセ

いまじゃ小作の日傭ば取りて
送る月日も貧苦にせまる
送る月日も貧苦にせまる
ア　オセオセ

もっともっともっともっともっともっと
（繰り返し）
もっとこの先あの先までも
ア　オセオセ

読んで見たいはやまやまなれど
読んで見たいはやまやまなれど
見れば音頭取りも疲れた様子
アオセオセ

野郎やめろの声ないうちに
ここらあたりで段切りまして
野郎やめろの声なきうちに
アー　オセオセ

水の流れは土俵でとめて
わしの音頭もここらでとめて
今日の踊り子後悔なさる
アオセオセ

○石投げ音頭

伝承地　前橋市箱田町
伝承者　菊池　将五（S9）
他

セーノ
〽かわりましたよ　かわられました
かわりましたよ　かわられました

さっき出たのが私の師匠
今度出たのは　出鱈目野郎で

先生程には読めないけれど
何か一言　おしゃべりまする

愛染かつらを読み上げましょか
愛染かつらは映画で読めぬ
ア　エイガデヨメヌ

まま子三次を読み上げましょか
まま子三次は可愛想で読めぬ
ア　オセオセ

読めぬ読めぬじゃ文句にならぬ
読めぬ読めぬじゃ文句にならぬ
ア　デッカイウンコカワナガレト

八十婆さん豆かむように
ボツラボツラとつまんでしゃべる

秋の大根うろ抜くように
あちらこちらでつまんでしゃべる
ア　デッカイバケツガスイスイ　ヤスイトオモッタラ　ソコヌケダ

さてさてさて皆さんよ
さては上州の踊り子さんよ
ア　ドウシタドウシタ

わしが今晩文句じゃないが
四角四面を借り受けまして

何か一言おしゃべりまする
何か一言おしゃべりいたす

さっき出たのが箱田で一よ
今度出たのが前橋で一よ

前橋どころか群馬で一よ
群馬どころが関東で一よ

関東どころが日本で一よ
日本どころか世界で一よ
ア　ソウカイ　ソウカイ　ソウカイネ

一は一でもあとから一よ
一は一でもおしまいから一よ

さてさてさて　さて皆さんよ
毎度毎夜じゃ踊り疲れにて

見れば踊り子も疲れた様子
見れば音頭取りも疲れた様子
ア　ソウカイ　ソウカイ　ソウカイネ

水の流れは土俵でとめて
赤子泣くのは　おちちでとめて

わしの音頭もここらでとめて
あとの踊りと交替なさる

○稲荷藤節

伝承地　前橋市泉沢町
伝承者　喜楽　福意（T2）

〽はーさーて皆さんさて皆さんよ
又も出ました頓馬な私
出なきゃ良いのにまた出てやがる
揃った揃ったよ踊り子が揃った
ドッコイ　ドッコイ　ドッコイナト
稲の手踊りまた良く揃った

〽はーかかる文句を何やと聞けば
ここに哀れな心中噺
所四谷の新宿町の
紺の暖簾に金地の紋は
ドッコイ　ドッコイ　ドッコイナト
音に聞こえし橋本屋とて

〽はー音に聞こえし橋本屋とて
許多（あまた）お女郎の数あるなかで
御職お女郎の白糸さんは
年は十六今咲く花よ
ドッコイ　ドッコイ　ドッコイナト
器量良ければ皆人さんが

〽はー器量良ければ皆人さんが

吾も吾もと名指してあがる
奥でお客はどなたと聞けば
春は花咲く青山辺の
ドッコイ　ドッコイ　ドッコイナト
鈴木主水という侍よ

へはーさーて皆さんさて皆さんよ
もっとこの先読んだるならば
ことの理解も分かるでしょうが
もはや時間と相成りまして
またの機会で読み上げまする

○八木節　国定忠治

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　中里　明康（S25）
以下7名

前唄
ハーアー
御来場なる皆様方よ
ひらに御免をこうむりまして
何か一節読み上げまする
読んであげますその芸題は
皆も良く知る国定忠治
これも細かにや読めないけれど
悪声ながら読みあげまするが
オーイサネー

一、国は上州　佐位郡にて
音に聞こえし　国定村の
博徒忠治の　生立ちこそは
親の代まで　名主をつとめ
人に知られし　大身なるが
大事息子は　即ち忠治
蝶よ花よと　育てるうちに

二、二十五才の　厄年なれば
全て万事に　大事を取れと
丁度其の頃　無職の頭
音に聞こえし　島村伊三
彼と争う　其の始まりは
かすり場所にて　三度も四度も
胸をこらえて　がまんをしたが

三、一の子分の　文三がきかぬ
腰にさしたる　商売なれば
飯の喰い上げ　捨ておかれんと
聞いて忠治は　小首をかしげ
さらば此れから　喧嘩の用意
いずれ頼むと　強者ばかり
頃は午年　七月二日

四、鎖りかたびら　着込みを着し
わらじ脚絆で　身軽の仕度
伊達の鉢巻　皆それぞれに
手勢すぐって　境の町で
様子伺う　忍びの人数
夫と知らずに　島村伊三
子分引連れ　石切島へ

五、五人連れにて　なじみの茶屋で
酒をつがせる　銚子の口が
もげて盃みじんと砕け
けちな事よと　顔色変えて
虫が知らすか　此の世の不思議
酒手払って　お茶屋を出れば
何時に変わって　此の胸さわぎ

六、扨ても今夜は　安心せぬと
左右前后に　守護する子分
道にゃ目配り　よく気をつけて
目くぎしめして　小山へかかる
気丈激しき　大親方は
一寸身の丈　六尺二寸
音に聞こえし　大刀無双

七、哀れ命は　もくずのこやし
しかも其の夜は雨しんしんと
闇を幸い　国定組は
子分引連れ　小山へかかる
夫を知らずに　伊三親方も
五人連れにて　小山へかかる

今は忠治は　大音声で

八、名乗りかければ　伊三親方は
聞いてにっこり　けなげな奴等
命知らずの　うじむしなれど
抜けば玉散る　氷の刃
互い互いに　上段下段
右へ打込む　左で受ける
受けつ流しつ　又振り上げて

九、秋の木の葉が　とび散る如く
火花散らして　斗ううちに
運の尽きかや　伊三親方は
胸をつかれて　急所の痛み
弱る所を　突き込む忠治
首をかき切り　勝閧上げて
しめたしめたの　声諸共に
義理と人情の　はな咲くところ

まめに働く　女房のことも
かかあ天下と　世に知れわたる
群馬よいとこ　一度はおいで

二、春はつつじよ　秋には紅葉
赤城榛名に　妙義の山よ
北にそびえて　南に開く
関東平野の　源なして
中を一條　坂東太郎
八州うるおす　恵の川で
清き流れは　銚子にそそぐ

三、上州湯どころ　出湯の郷よ
草津水上　伊香保に四万と
磯部老神　まだまだござる
四季を通して　愈のところ
なびく湯煙り　たにまに沿うて
出湯娘が　笑顔で招く
またも来ました　湯の香を恋うて

四、桐生伊勢崎　筬の音ひびく
錦織りなす　機場の街よ
広い販路は　海外までも
外貨稼いで　お国のためよ
秋の祭の　豊年踊り
晴の舞台の　あのこのお召
兄さ笛吹きゃ　一目で惚れる

後唄

御来場なる　皆様方よ
もっと此の先　読んだるなれば
事の仔細も　解るでしょうが
余り長いは　お耳のさわり
それに受持つ　時間であれば
先はこの場で　止めおきまして
又の御縁に　読み上げまするが
オオイサネー

○八木節　上州名物

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　秋元　操（S9）
以下6名
須藤　豊一（作）

一、一寸御免を　こうむりまして
上州名物　八木節音頭
国定忠治は　弱きの味方

○八木節　越後口説

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　加藤　和江（S12）
以下6名

一、国は越後で　蒲原郡
お名を申せば　赤沢村よ
雨が三年　日照りが四年
不作続きで　暮らしが立たぬ
田んぼ小作で　売ること出来ぬ
娘売ろうと　相談いたし

二、娘売ろうと　相談いたし
姉にしようか　妹にしようか
姉はじゃんかで　目かちでびっこ
せむし鯛口　てんかんやみで

これじゃどうにも　売物にゃならぬ
妹売ろうと　相談いたす

五年五ヶ月　二五両二分で
三、五年五ヶ月　二五両二分で
栗の握りめし　横ちょにしょって
行くは上州　板鼻宿よ

碓氷峠の　真中頃で
雨が降り出す　日は暮れかかる
わらじ切れたと　女衒に云えば
おめこさせなきゃ　草鞋はやらぬ

四、おめこさせなきゃ　草鞋はやらぬ
雉はケンケン　山鳥バッタバッタ
鹿の遠音に　こだまが呼んで
阿呆鳥が　駈え急ぐ

唯れも通らぬ　此の山中で
木の根枕に　落葉の布団
そこで泣き泣き　新鉢されたが
オオイサネー

○八木節　五郎正宗孝子伝

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　糸井　貞秋（T12）
以下6名

一、国は相州　鎌倉おもて
雪の下にと　住居をなさる
玄関かまえの　建物造り
さても立派な　かじやであれば
弟子は日増しに　ふえ行くばかり
今日はお盆の　十六日で

二、盆の休みで　弟子達どもは
ひまを貰って　我家に行けば
後に残るは　五郎が一人
そこで行光　五郎をよんで
今日は幸い　皆んなが留守よ
是非に聞きたい　そなたの身上
つつみかくさず　話しておくれ

三、言えば五郎は　目にもつ涙
聞いて下さい　親方様よ
家のはじをば　話すじゃないが
国は京都の　三条通り
宿屋の家業で　暮していたが
つもる災難　さて是非もない
火事の為にて　焼出されて

四、わしと母様　乞食と同じ
九尺二間の　裏だなすまい
母は縫針　洗濯仕事
わたしゃ近所の　お使いなどて
細い煙で　暮して来たが
ある日近所の　使いの帰り
悪い子供が　大勢よって

五、五郎さんには　父親がいない
父のない子は　てなし子じゃと
言われましたよ　のう母様よ
わしに父親　あることなれば
どうか逢わせて　下さる様と
泣いて頼めば　母親言うに
父は関東で　刀けんかじゃ

六、さほど逢いたきゃ　逢わせてやろうと
家の道具は　皆売り払い
わずかばかりの　、路用をもって
なれぬ旅路は　東をさして
下る道にて　箱根の山で
持ったお金は　ぞくにと取られ
母は持病の　さしこみがきて

七、手に手をつくした　そのかいもなく
遂にはかない　あの世の旅路
母がいまわに　この短刀を
父のかたみと　私にくれた
母に別れて　どうしょうぞいと
西も東も　分からぬ故に
死がい取りつき　なげいていたら

八、通りかかった　桶やの爺が
わしを助けて　下さいました
恩は決して　忘れはしない

父に逢いたい　桶屋をやめて
刀かじやに　なりましたのじゃ
訳というのは　こういう湧けよ
聞いて行光　不思議に思い

九、五郎もったる　短刀とりて
なかみあらため　びっくりいたす
五郎引寄せ　顔打ちながめ
さては我子であったか　五郎
親はなくとも　子は育つ
そちの尋ねる　父親こそは
わしじゃ藤六　行光なるぞ

一〇、思いがけない　親子のなのり
様子立ち聞く　まま母お秋
障子おしあけ　とびこみきたり
やいのやいのと　胸ぐらとれば
これさ待たれよ　これこれ女房
わしの言う事　よく聞きゃんせ
実はしかじか　こういうわけと

二、一ぶしじゅうの　話をすれば
その日其のまま　すんだるけれど
思い出しては　お秋のやつが
じゃまになるのは　五郎が一人
今にどうする　覚えて居れと
くやしくやしが　病気となって
日増し日増しに　病気はつのる

三、軽くなるのは　三度の食事
そこで五郎は　心配いたし
生みの親より　育ての親と
子供ながらも　利口のもので
親の病気を　なおさん為に
夜の夜中に　人目を忍び
そっとぬけ出し　井戸にと行きて

○八木節　紺屋高尾

伝承地　伊勢崎市波志江町
伝承者　馬見塚又次郎（T13）
以下6名

一、此こは神田の　お玉ケ池に
紺屋渡世の　六兵衛さんは
あまた職人　数ある中に
越後生まれで　久三というは
年の頃なら　二十と二、三
桜見物　その折り柄に
高尾みそめて　さめてもねても

二、忘れられぬが　恋路の道よ
俺も男と　生まれたからにゃ
ああいう女と　唯一度でも
逢って話が　してみたいなと
言った所が　兄弟子達に
ダメだよせよと　言われた故に
いっそ死のうと　思った所

三、助けられたよ　親方さんに
わけを話せば　これ久三よ
たとえ紺屋の　職人だとて
金があるなら　おいらん買える
無ふん別をば　しちゃならないと
言われ久三　気を取り直し
それじゃ親方　伺いますが

四、それじゃ親方　伺いますが
一度行には　何んほでしょうか
そうさ一度で　十五両かかる
其れをためるに　三年かせげ
それじゃかせごと　仕事にかかる
ねる間ねないで　三年の内
そこで久三が　溜めたる金が

五、十と八両二分二朱　あれば
内を十五両　ふとこに入れて
やって来たのが　あの吉原よ
くればくるわは　皆まんどうろう
今は全勢　高尾太夫
部屋は上品　あの奥二階
タンス鏡台　錦のふくさ

六、このや座敷で　久三こそは
やぐをかぶって　目ばかり出して

起きてよいやら　ねて悪いやら
床の中にて　もじもじすれば
これを見るより　高尾太夫
そばに近寄り　両の手ついて
目ざめましたか　ねえ主さんよ

七、近い内には　お出を願う
言えば久三　にっこり笑い
私じゃこのまま　こうして居たい
明日も来たいよ　又あさっても
しかしおいらん　私の身分
実は紺屋の　職人なれば
一度来るには　十五両かかる

八、年に五両の　給金なれば
十五両ためるにゃ　三年かかる
そこで一ぺん　又三年に
しかしおいらん　貴女の気りょう
長くくるわに　居らないでしょう
お金持ちにと　身受けをされて
立派なお方に　なるやも知れぬ

九、もしや途中で　逢ったる時にゃ
ツンとすまして　横をば向かず
お前無事かと　言ってくれたなら
これが久三の　一生のたのみ
願いますぞい　のう　おいらんと
ひざにすがって　ワッと泣き出せば

一〇、これを聞いたる　高尾太夫
ほろり落とした　涙のしずく
申し主さん　久三さんえ
うそとうそとの　この里に来て
恥もかまわず　身分の程を
よくも打明け　下さいました
主の様なる　正直ものを

二、見るも聞くのも　今はじめてよ
主の正直　心に惚れて
初会惚れても　わしゃ恥しや
女郎がお客に　惚れたと言えば
客は来もせず　又来ると言う
主の言う事　ほんとうなれば
来る三月　わしゃ年明けよ

三、年が明けたら　あなたのそばに
きっと行きます　久三さんよ
どうか見捨てて　下さいますな
其れと聞いたる　久三こそは
もうしおいらん　わしゃ馬鹿だから
そちの言う事　本当にするぜ
何んでうそゆて　よかろうものか

〇八木節　まま子三次

伝承地　伊勢崎市波志江町

伝承者　品川　常雄（S3）
以下6名

一、頃は安政元年なるが
国は武蔵で秩父郡
真門（まかど）村にて百姓の喜八
元は由ある百姓なるが
親の代より零落いたし
田地田畑皆売りつくし

今じゃ小作の日傭をとりて
送る月日は貧苦にせまる

二、今年又そろ北亜米利加の
異国騒ぎに品川沖は
新規築立てお台場普請
それを聞くより百姓の喜八
土をかついでかせいでこようと
したくととのひ我が家を出づる

三、後は喜八が後添おたく
ままの三次を明けくれ共に
むごく育つる横しまじゃけん
つらくあたれば三次郎こそは
親に孝行すなほな生れ
産みの親よりそだての親と
機嫌とりとり後かたづけて

四、母の詰めたる弁当持ちて
双紙かかいて寺屋に急ぐ

三次精出手習しようと
人形かくるや恥かく子供
習ひ残れどもう昼時と
皆が弁当三次も共に
重を開いて昼食せんと
（以下略）

○行幸田八木節

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　都丸　周作（T3）
　　奥泉　富治（T3）
　　狩野　重雄（S7）

ハアー
またも出ました三角野郎が
四角四面の櫓の上で
音頭とるとはおそれながら
ひらにその儀はお許しなされ
八十ばあさん豆かむように
河原ひきずるとびんのような
声を張り上げおしゃべりいたす
ひらにその儀はお許しなされ
お許しなされば文句にかかる
ハアー
かかる文句を何をと問えば
ここに珍し侠客くどき
国定忠治を読みあげまする
国は上州あの佐波郡
音に聞こえた国定村よ
親の名前を忠兵衛というて
二番息子が忠次でござる
生まれついての侠客はだし
人のためなら喧嘩もなさる
ハアー
そこで忠兵衛意見をすれど
意見そら耳きき入れず
あわれ勘当で無宿となりて
諸国方々さまよい歩く
子分子分もその数多く
一の子分はその名も高し
両刀使いの日光の円蔵
二番子分が板割浅太
清水巌鉄成塚三代太
これが忠次の子分の中で
四天王といわれた男
ハアー
頃は弘化の三年九月　秋の最中に犬小屋立
てて勝負勝負でその日を送る
あまり長いと皆さんの迷惑ちょいとここら
で段とめまして　あとは先生大先生に　あ
とは先生大先生に　あとはよろしくお願い
申す

○神代舞獅子

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　関口　清一（S3）

・大岡崎の舞（略）
・契床の舞（略）
・渡り拍子の舞（略）
・ドウジャネ舞（略）
・庭の舞
　入違い（略）
　天狗拍子
我は我は大山育地の者なれば
お山ではやるは天狗拍子やな
お山ではやるは天狗拍子やな
トッピーヒャーヒャ　トーロロ　コロロ
コロロ
ヒッピーヒャーヒャ　トーロロ　コロロ
コロロ
ヒャヒヒヤーリト　ヒャヒヤーリト
トーヒャ　トーヒャ　トーロロ　コロロ
コロロー
ヒーヒャ　ヒヤヒヤ　ヒヤキリ

ヒー　トーロロ　コロロ　コロロー

鹿島切（略）

伊勢切（略）

三拍子（略）

羽子休ミ（中入）（略）

立歌（略）

真庭　居寝

京カラ降リタカライノ屏風ヲ

一重ニサリト　日ガ回サレタ

ヒャヒャヒャヒャーオー・・・・

八～九回ピー

イ　参リ来テ之ノ御庭デ獅子振ラバ

神モ喜ブ　氏子繁盛トーヒャヒー

トーヒャーヒー

ロ　（豊年歌）

何ガ鳴ルト出テ見レバ

稲穂揃ウリト秋風ノ音

ハ　茶屋ノ娘ニ目ガクレテ

立ツニ立タレヌ掛川ノ宿

ニ　レニ来テ之ノ玄関ヲ良ク見レバ

ホ　此ノ堂ハ誰ガ建テタト見テミレバ

飛騨ノ巧ガクサビ一本

大岡崎　大岡崎　大岡崎ヒャオヒャオ

大岡崎　大岡崎　大岡崎ヒャオヒャオ

ヒーヒャーヒャオ　ヒヤーオ　ヒャヒャ

ーオー　ヒャ

ヒーヒャーヒャオ　ヒャーオ　ヒャヒャ

ーオー　ヒャ

ヒートーヒャーヒー

ヒートーヒャーヒー

ヒートーヒャーヒー

立山雀（略）

牝獅子隠シ（略）

納歌（句里）

○中尾獅子舞の歌

伝承地　北群馬郡小野上村村上

伝承者　石川　広吉（M37）

トーリトノリーリ　リーリートノリーク

リートノノウーリーリランリヤーウ　リー

トノリーリランリヤーウ

（これを四度唱えて、次の歌に入る）

咲いた桜になぜ駒つないだ　駒が勇めばハ

ー花が散るナヨ花が散る　花は散りてもま

た春咲くよ　駒が勇めばヒーひと盛りナヨ

ひと盛り

デンスケドーシタオイラモドーシタ　ドー

シタドーシタ

向かい小山の七子（しちこ）の竹は　本は尺八中程笛に

うらの小枝はフー笛の軸　ナヨ筆の軸

デンスケドーシタオイラモドーシタ　ドー

シタドーシタ

トーヒーレウレーウレーウ　ヒーヒートヒ

ートロヒートロガ　チャウロレーウロ

トーロリレウレレウレレウレヒー

道行トーロリ

トーロリレウレウ　トヒレウラーリ

レーウロニチャラフロニ

チャラフレーウラーリ

道行岡崎

岡崎ジョーロシュシュ　ヒーロラレート

ノロ　オーカザキジョンジョロショハヨイ

ジョロショ　オーカザキオーカザキオーカ

ザキヨイジョロショ

門くぐり

岡崎ジョロショハジョロショハジョロショ

ハ　岡崎ジョンジョロショハ　ヨイジョロ

ショー　岡崎ジョンジョロショハ　ヨイジ

ョロショー

宮めぐり

チャーリーローロ　チャーラウラーリ

チャーラウトーロリ　チャーラウトーロ

トーローヒートヒヤリコノ　チャラウラー

リ　トーローヒートヒヤリコノ　チャーラ

ウラーリ（以下略）

（注）村社佐久間神社例祭日に、約三百年前から奉納。現在は勤労感謝の日に、獅子舞にあわせて歌う。中尾獅子舞保存会が組織されていて村指定無形文化財となっている。

D 座興歌

岩噛む水に砕けつつ
金波銀波の波静か

○行幸田小唄

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　マキ（M38）
　　伊藤　九平（M42）

行幸田名物カジ久保
つつじ枝は東西
葉は中筋で
花は番場のチョト宿中よ
散って落ちるが畑中
箒で掃き出す谷地清水

（注）カジ久保・東西・中筋・番場・宿中・畑中・谷地清水すべて行幸田の小字名

○長尾村遠遥の歌

伝承地　北群馬郡子持村白井
伝承者　金井　ツル（M40）

一、吾妻川の北の岸
子持の山を背に負いて
緑したたる松ケ枝に
かかれる月の影清し

二、この懐かしき山里は
世乱の昔景仲が
居城定めし要害ぞ
縁りも深き長尾なる
我れわが友よ立てよ立て
栄華の夢をむさぼるな

（注）白井城など長尾村の風土を歌ったもの

○吾妻小唄

伝承地　北群馬郡小野上村
伝承者　佐藤　菊次（大元）

一、降るか曇るか三国の山よ
アッチャネ　アッチャネ
雪もちらちら荒れて来る
吾妻よいとこ温泉所よ
お湯に来やんせ　まいりゃんせ

二、略

（注）昭和二、三年ごろ、女子青年団に入っていた十六歳ごろ、生地の吾妻郡太田村（現吾妻町）泉沢あたりでうたった湯治の歌である。

○小野上応援歌

伝承地　北群馬郡小野上村
伝承者　石和　イト（M43）

一、榛名赤城妙義山
れいろう高く気をうけて
鍛えし群馬の健男児
いざやふるえん小野上　フレーフレー

二、優勝の杯にないとる
群馬男児の満心の
心血そそぐ時は来ぬ
いざふるえ小野上　フレーフレー

（注）大正時代に小野上小学校の運動会に歌われた応援歌である。

E　語り物・祝福芸の歌

○春駒歌

伝承地　前橋市荻窪町
伝承者　吉沢佐四郎（M43）

〽春の始めに舞い込む駒は
年もよい年お祝い申す
アーハネコメ　ハネコメ
トコ太夫さん色では無いぞえ
金の指輪のことかいな
〽四ットモセェ宵のうちから紙もんで
おいてして寝る者もある
トコ太夫さん色では無いぞえ
箱枕のことかいな
〽五ットモセェいやがる者を無理矢理に
入れて泣かせる者もある
トコ太夫さん色では無いぞえ
竜の鳥ではないかいな
〽六ットモセェ無理にも毛を分けはめたがる
元まで届かぬ気持の悪さ
トコ太夫さん色では無いぞえ
金銀かんざしのことかいな
〽七ットモセェ何が何でも今晩は
二ばんささなきゃ寝かせない
トコ太夫さん色では無いぞえ
ヘボ将棋のことかいな
〽八ットモセェやってもらえばいい気持
今夜は横になって待ってます
トコ太夫さん色では無いぞえ
按摩さんではないかいな
〽九ットモセェ小供も大人もむざむざと
やたらむしょうにさしたがる
トコ太夫さん色では無いぞえ
熊ン蜂ではないかいな
〽十トモセェお父さんの前でも遠慮なく
ひろげてささせる者もある
トコ太夫さん色では無いぞえ
蛇の目傘ではないかいな

（注）村の人達の集まり（宴会の席）のような所でうたった。一対一の太夫と戈蔵の掛け合いでうたう。歌詞は即興的な卑猥なものもある。特に正月に歌われる歌ではない。

○万歳（かぞえ歌）

伝承地　勢多郡北橘村上真壁
伝承者　仲澤　ハツ（M39）

〽一ットモセェ人目もあるのに乗れ乗れと
乗れば行きます走ります
トコ太夫さん色では無いぞえ
輪力車のことかいな
〽二ットモセェ二人抱き合い丸はだか
お尻たたいている者もある
トコ太夫さん色では無いぞえ
お相撲さんではないかいな
〽三ットモセェ見れば見るほどはめたがる
娘心の一筋に

F 子守歌

○子守歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

坊やはよい子だ　ねんねしな
坊やのお守りは　どこへいった
あの山越えて　里へいった
里のみやげに　なにもろうた
デンデンたいこに　笙の笛
ホラヨイ　ホラヨイ　ホラヨイ
ホラヨイよ
ホラヨイ畑の西瓜の皮でも
とっとけ漬けときな
ホラヨイ　ホラヨイ　ホラヨイよ

○子守歌

伝承地　伊勢崎市連取元町
伝承者　植木みつ江（S4）

身を切るような　北風に
ふけあい　きょくの　姉いもうと
晩まで急ぐ野中道
八つぐらいの　女の子

○子守歌

伝承地　北群馬郡吉岡村大久保・陣場
伝承者　羽鳥　善市（M40）
岡田　やゑ（M39）
田中登美子（T3）
小渕シゲ子（T8）
石井　モト（T9）
小沢　正（T11）

「でんでん太鼓」

〽ねんねんころりよ　おころりよ
坊やのお守りはどこへ行った
あの山越えて　里へ行った
里のみやげに　何もろた
デンデン太鼓に笙の笛
起き上がり小法師に犬張子

「柳のお箸」

〽ねんねんよ　かんかんよ
ねんねして起るとお乳やる
お乳の出ばながいやならば
お米のご飯にととそえて
柳のお箸でさらさらと

○子守歌

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽たんと泣きゃがれ
いま一、二年
年が明ければ
家（うち）帰る

（注）昭和初年の頃まで、養蚕の盛んな島村では埼玉県方面などから守りっ子（子守）を雇う家が多かった。この唄は、この守りっ子たちが子守りをしながら盛んに唄っていたものという。

○子守歌

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽ねんねんころりよ
おころりよ
クニちゃんはいい子だ
ねんねしな
里のみやげになにもろった
でんでん太鼓に
しょうの笛

（注）「クニちゃん」、子守り相手の子どもの実名。

G　わらべ歌

○一年数え歌

伝承地　前橋市荻窪町
伝承者　つる

〽正月とせ　障子あければ万才が
鼓の音やら　歌の声　おや歌の声
二月とせ　にんだらまんだら寺参り
明日は彼岸のお仲日　おやお仲日
三月とせ　桜花よりおひなさま
飾って見事に内裏様　おや内裏様
四月とせ　死んでまた来るお釈迦様
竹の子びしゃくでお茶かけろ
おやお茶かけろ
五月とせ　ごんごんばやりの前掛けを
かけずになくしてお腹立ち
おやお腹立ち
六月とせ　ろくに取らない田の草を
お米がないとてお腹立ち　おやお腹立ち
七月とせ七に置いたり流したり
質屋の番頭さんが忙しや　おや忙しや
八月とせ　蜂にさされて泣く子供
姉ちゃんお薬頂戴ね　おや頂戴ね
九月とせ　草の中からひきがえる
姉ちゃん一匹頂戴ね　おや頂戴ね
十月とせ　重箱さげて　どこ行くの
明日はお恵比須講で買物に
おや買物に

○毬つき歌

伝承地　前橋市筑井町
伝承者　細渕　わか（M43）

とんとん　小袖が　百七つ
これほどまとめて　やるからにゃ
お嫁に行っても　出てくるな
朝早く　二十五枚の戸を明けて
すみからすみまで　掃き出して
手元のあかりで　髪結って
じいさん　ばあさん　おきさっせ
今朝のおかずは　なんじゃいな
豆腐を　一丁かいましょか
それで　まず　まず　一貫　かしました

○毬つき歌

伝承地　前橋市筑井町
伝承者　細渕　わか（M43）

一ばんはじめは　一の宮
二また　日光中禅寺
三また　佐倉の宗五郎
四また　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つは　村々鎮守様
七つは　成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の金剛山
十で　東京心願寺
これほど　心願かけたのに
浪子の　病はなおらない
武夫が戦争に　いく時は
白い　真白い　ハンカチを
ふりふりながら　ねー　あなた
早く帰って　下さいな
ごう　ごう　ごう　と　なる汽車は
武夫と浪子の　別れ汽車
再び逢えない　汽車の窓
鳴いて血を吐く　ほととぎす

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市連取元町
伝承者　植木みつ江（S4）

さらばり
さらばりと
人に渡す
黄金の　ゆうびんは
鬼の知らぬ間に
一寸　かくなして

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市連取元町
伝承者　植木みつ江（M4）

みっちゃん
みち　みち　うんこ　たれて
紙がないので
手でふいて
もったいないから
なめちゃった

ドレみっちゃん
耳だれ　目が　やんめ
頭の横ちょに
はげがある
それは　シラミの運動会
なんて便利な
はげでしょう

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市上諏訪町
伝承者　石原　愛路（T12）

ビーシャト　ビーシャト
さんだいしょ
おらが　神谷の　さんだいしょ
さんだいしょ
蚤についた　巻たばこ
はいれよ　はいれよ
にげろ
（注）神谷は地名。神谷は紙屋ではないか！という説もある。

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市美茂呂町
伝承者　金子　しげ（T11）

ソーダ村の　村長さんが
ソーダのんで　死んだソーダ
そうしきまんじゅが
でっかい　ソーダ
なかに　あんこが
ないソーダ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　大沢　正男（T14）

ちちぐも　ちちぐも
天上へあがれ
下に火事があるかれ
天上へあがれ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

いろはに金平糖
金平糖は　白い
白いは　うさぎ
うさぎは　はねる

はねるは　のみ
のみは　赤い
赤いは　ほうずき
ほうずきは　鳴る
鳴るは　おなら
おならは　臭い
臭いは　うんこ
うんこは　黄色い
黄色いは　バナナ
バナナは　高い
高いは　二階
二階は　こわい
こわいは　幽れい
幽れいは　消える
消えるは　電気
電気は　光る
光るは　親父の　なめあたま

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

今年の牡丹は　よい牡丹
お耳を　からげて　スッポン　ポン
もひとつ　おまけに　スッポン　ポン
私　まぜないか
いやだよ
どうして
かまうもの
それじゃ　家の前へ来たら　天秤棒でぶったたく
じゃー　まぜる
今年の牡丹は　よい牡丹
お耳をからげて　スッポン　ポン
私　おひるだから　帰る
おひるの　おかずは　なーに
蛇のくろやき

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

勝ってうれしい　花いちもんめ
負けてくやしい　花いちもんめ
ふるさとまとめて　花いちもんめ
誰ちゃんとりたい　花いちもんめ
誰ちゃんとりたい　花いちもんめ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

かごめ　かごめ
かごの中の　鳥は
いつ　いつ　出やる
夜明けの　晩に
つるとかめと　すべった
うしろの正面　だあれ

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

あんたがたどこさ
肥後さ
肥後どこさ
熊本さ
熊本どこさ
せんばさ
せんば山には
狸がおってさ
それを猟師が
鉄砲で撃ってさ
煮てさ
焼いてさ
食ってさ

それを木の葉で
ちょいとおっかぶせ

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

おじょうさん　おはいりよ
おにごっこ　いたしましょ
ジャンケンポン
負けたら　さっさと
おにげなさい

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

ずいずい　ずっころがし
ごまみそ　ずい
茶つぼに　おわれて　ドッピン　シャン
抜けたら　ドンドコショ
俵のねずみが　米くって　チュー
チュー　チュー　チュー
お父さんが　呼んでも
お母さんが　呼んでも
いぎっこ　なしよ
井戸のまわりで
お茶わんかいたの　だーれ

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

松原里の　花の木に
黄い花を　さしあげる
ねずみが一匹　にげてゆく
すべりと　すべりと
チュウ　チュウ　チュウ

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　石原　利子（S9）

紅葉の枝に　手をかけて
すみれのハンカチ　振りあげて
ねー　武夫さん　武夫さん
あの山みれば　なんという
あの山ですか　あの山は
金剛山と　いいますよ　いいますよ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市上諏訪町
伝承者　植木よし子（S8）

セッセッセの　よい　よい　よい
一かけ　二かけて　三かけて
四かけて　五かけて　橋の上
橋のらんかん　腰をかけ
はるか向こうをながむれば
十七、八の姉さんが
花や線香　手にもって
姉さん　姉さん　どこ行くの
私は九州　鹿児島へ
切腹なされた　父上の
お墓の前に　手をあわせ
ナムアミダブツ　じゃんけんぽん

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

坊さん　坊さん　どこ行くの
私はたんぼの　稲刈りに
お前がきては　じゃまになる
うしろのチョンマゲ　あててごらんよ
ランヨ　ランヨ　ランヨ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

青山どてから
東をみればね　みればね
門の扉に　源次郎さんと　書いてね
源次郎親子は　ダテ者で　こまるね
ダテ者　にほんの　七月　八月ね
きじはケンケン
山鳥りゃ　バッサ　バサ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

ホー　ホー　ほたるこい
ほたるのおやじは　金持ちで
夜はちょうちん　たかのぼり
ひるまは　草葉のかげにおる
ホー　ホー　ほたるこい

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

一つ　がんがらみ
二つ　さんしょの木
三つ　みかんの木
四つ　よいじょの木
五つ　いちょうの木
六つ　むくれんじ
七つ　なんてん木
八つ　八重桜
九つ　小梅の木
十で　おさまえて
山ちんぐり　カッちんぐり
いま一つ　おまけに　がんがらみ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

お月さま　いくつ　十三　七つ
まだ　年は　若いね
若子を産んで　おまんにだかして
おまんどこいく　油買い　さかい
油屋のえんねに　氷が張って
油一升こぼして　すべって　ころんで
うちの前で　おっかさんに　しかられて
お父さんに　ほめられて
家のまわり　まわって
ぜにかけ　ひろって
飴買って　なめて
それで　よう　よう　だまった

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

おらがおばごは　四十九で島田
嫁に行くとき　孫子にわら（わ）れ
孫子わらうな　薩摩の国へ
トンボ　チョウチョバコ　一升だる　さげて
猫が餅つく　うさぎが　手合わす
そばで地蔵さんが
くいたくって　くいたくって
のどならす　のどならす
まず　まず　一貫　かし申した

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

げんが弟の　長太郎の馬鹿が
江戸の二丁目の　カルトに負けた

負けた　負けた　が　いっくらほど　負けた
金が三百両に　小袖が七つ
七つ小袖を　おげんに着せて
おげん　どこ行く　東山のぼる
東山から　谷底みれば
小さな子供が　小石をひろい
紙にくるんで　お小屋へ投げた
お小屋女郎衆は　金だと思い
金でござらん　小石でござる
キンカンや　なにするの
オッカちゃんにだかって　乳のむの
キンキン着物　着せてやれ
カンカンかんざし　さしてやれ
お馬がきたから　はたよけな
おかごがきたから　はじよけな
学校の生徒　かまうなよ
かまうと先生に　いつけるぞ
まず　まず　一貫　かし申した

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

あの山で　光るものは
月か　星か　ほたるか
月なれば　おがみましょうよ
ほたるなれば　手にとる　手にとりて
お不動様へ　一銭あげようと　参ります
そこどなりの　酒屋の亭主が
へびに　命をとられて
そのへびは　どこだと聞いたら
かなだち山の　青大将
木にからまり　柳にからまり
うらの椿に　からまり
デレさん　デレさん
まず　まず　一貫かし申した

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

てんとうさん　てんとのおばさん
この辺で　鎌倉街道を　通るとき
白鳥　黒鳥　真くろ黒鳥
高崎やしろで　奴が米つく
こぬかが　はみでる　かっこめ　かっこめ
一ちょめっこサッサ　二ちょめっこサッサ
高いとこの竹の子　低いとこのひきがえる
海っぱたの　どじょっこ
うちの猫に　くれたらば
しょうが強くて　たべらんない
隣の猫に　くれたらば
しょうがからくて　たべらんない
酒屋の狐に　くれたらば
も少したべたい　スココン　コンコン
まず　まず　一貫　かし申した

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

大門口　ぎあ町　みのうら　たかうら
米屋のきみきみ　道中見事の　こと春先
向えば　花むらさき
相川　千代川　藍色に染めたる　信濃の善光寺
あのせ　このせ　奴の　このせ
あれ見さい　お向こう見さい
帆かけ舟が　二丁続く　二丁続く
三丁続く続いて間に　おんじょろのせて
おん客のせて　あとから　屋形が
おしかける　おしかける
舟頭が止める　お止めて　あいらの
ごしょいらの　ごしょいらの
さんごしょいらの　さんしき屋敷に
出てはやす　出てはやす　お江戸ではやす

お江戸の名主の中娘
色白で　い桜色で　色さき庄屋へ貰われて
あの庄屋は　あでてな庄屋で
なになに　着せてあげます
絹、紬の金らんどんすを　六重ね　重ねて
七重ね　七重ね　八重ね　重ねて
衣　染めておくれよ　紺屋さん
紺屋の役なら　染めてもあげます
張ってもあげます
お型はなに型　おつきやれ
うしろにゃ　キジのめん鳥
前には　白サギ　白ねずみ
ひーやよ　みーやよ　五、六じゃ昔の
なんびょう屋敷じゃ
九の　十じゃ　一貫さ

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市宮古町
伝承者　徳江　わか（M38）

一じょう飯塚　二じょう韮塚
三じょう山王道の　おつやさんの　子娘な
んぞ　お舟にあぶないとって
一文めには飯坂屋
二文めには新倉屋
三文めには魚屋
四文めには、しいたか屋
五文めには呉服屋
六文めには　ローソク屋
テテは　マンガ押す
母は　ハナドリする
小豆や　ねっころがす
ドンドロ屋敷じゃ　一貫さ

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市堀口町
伝承者　浅井　恒美（S11）

向山の　鳴く鳥は
チュウチュウ　鳥か　みどりか
忠三郎のみやげに
なにとなにを　もらった
金のかんざし　もらった
藪の中に　おいたなら
チュウチュウ　ねずみが　引いてった
どこからどこまで　引いてった
鎌倉街道の　まんなかで
一泣き　二泣き　三泣き　四泣き
五葉松柳　柳の下の坊さんが
蜂におつむをさされて
痛いともいわず　かいいともいわず
ただ　泣くばかり
まず　まず　一貫　貸し申したよね

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

一文めの一助さんは　一の字が大好きで
一万一千一百億
一斗　一斗　一斗豆
おくらに供えて　二文めに渡そう
二文めの二助さんは　二の字が大好きで
二万二千二百億
二斗　二斗　二斗豆
おくらに供えて　三文めに渡そう
三文めの三助さんは　三の字が大好きで
三万三千三百億
三斗　三斗　三斗豆
おくらに供えて　四文めに渡そう
四文めの四助さんは　四の字が大好きで
四万四千四百億

四斗　四斗　四斗豆
おくらに供えて　五文めに渡そう

五文めの五助さんは　五の字が大好きで
五万五千五百億

五斗　五斗　五斗豆
おくらに供えて　六文めに渡そう
（以下同じ）

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

一(いち)リットラ　ラットリットセ
すが　ホケキョウの
高千穂の　トンガリメ

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

びわの形に　似たりとて
その名は　近江の湖の
鏡の如き　水の面
朝のながめは　八ッの景

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

月　火　水　木　金　土
山のかぜ　さよふけば
となりの母さん
さんざあす　さんざあす
お次の方は
おはいんなさい

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

さきの　はやねの　ねかた
きわしんぶり　きんざいの
玉椿　一丁　貸したね

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市柴町
伝承者　中山　幸子（S16）

お姉さま　お入んなさい
おにごっこ　いたしましょ
一時　二時　三時　四時　五時　六時
七時　八時　九時　十時
もうそろそろ十二時だ
ジャンケンポン　あいこでしょ
ジャンケンポン
勝ったら　サッサとおにげなさい

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂町
伝承者　大沢　正男（T14）

大さむ　小さむ
山から小僧が
とんできた

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市茂呂
伝承者　大沢　正男（T14）

とうかん夜　とうかん夜
夕めし　喰っちゃ
ぶったたけ

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

いせ
にいがた
みかわ
しんしゅう
こうべ
むさし
なごや
とうきょう
けんぶつ
おわり

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

おんさか　さかさか
酒屋で　どんちゃん
四ッ谷で　どんちゃん
明日　赤坂　通り道
ちゃらちゃら　おひるだ
お茶の水
お茶の水の　真中で

一　二　三　四　五　六　七　八　九　十
十から下った　お芋屋さん
お芋は　一貫匁　いくらです
三百三十三もんめ
スチャラカ　ホイ
そんなに　負けたら　損だもの
お前のことだら　まけてやる
あゝ　うれしいやら
こうれしい
となりの　おとっちゃん
ちょっと　おいで
となりの　おっかちゃん
ちょっと　おいで

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

下駄かんじょ　かんじょ
お玉が　しゃんぐり　しゃんぐり
火のまた用心
大きくなるよに
ひょうたん
ぼっくり　ぼっくり
つんぬけた　つんぬけた

まごろく　すごろく
十三さぶろくよ
ぬけた

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

俵のねずみが　一ぴきしょ
それ　二ひきしょ
それ　三びきしょ
そら　一ぴきおにげ
二ひき　おにげ
三びき　おにげ
おしまい

○お手玉

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

おひとつ　おひとつ　おひとつ　おひとつ　おひとつ
おっさらい
おふたつ　おふたつ　おのこり　おっさらい
おみっつ　おのこり　おっさらい

おみんな　おとして　おっさらい
お手のせ　お手のせ　お手のせ　お手のせ　お手のせ
おっさらい
おはさみ　おはさみ　おはさみ　おはさみ　おはさみ
おとして　おっさらい
おちりん　おちりん　おちりん　おちりん　おちりん
おっさらい
おひだり、だり　だり　だり　だり
おとして　おっさらい
お手っぱさき　お手っぱさき　お手っぱさき
お手っぱさき　お手っぱさき
おとして　おっさらい
おてぶし　ぶしの花、菜の花　えんどう豆
そら豆　おとして　おっさらい
たいこ橋わたれ　たいこ橋わたれ　たいこ橋わたれ
たいこ橋わたれ　たいこ橋わたれ
おとして　おっさらい
おかき　おかきの一丁よ
ちょんぎら　おとして　おっさらい
おみんな　おとして　おっさらい
一貫　おとして　おっさらい

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市平和町
伝承者　下田　幸子（S11）

向う山の　なき鳥は
ちゅうちゅう鳥か　みどりか
源三郎の　みやげ
なにも　かにも　もらった
金のかんざし　もらった
やぶのかげに　おいたらば
ちゅうちゅうねずみが　引いてった
どこからどこまで　引いてった
鎌倉街道の　まんなかで
一泣き　二泣き　三泣き　さくら
五葉松　柳　柳の下で坊さんが
はちにおつむ　さされて
いたいともいわず
かいいともいわず
ただ　泣くばかり
まずまず　一貫　かし申したよね
一貫さ

向う山の　なき鳥は
ちゅうちゅう鳥か　うすどりか
うすの中に　田を入れて
その田の　米を
一刈かっちゃ　しんごんご
ふた刈かっちゃ　しんごんご
帰りにゃ　海の中へ　とびこんで
波にゆられて　血を吐いて
かんかん堂へ　ないてって
チャッチャッポッポの　木の下で
おじさん　いっぱい　あがらんか
おばさん　いっぱい　あがらんか
高いところの　竹の子
低いところの　ひきがえる
こけの中の
ごうだか　なったら
たらんこ　たらんこ
一貫さ

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市若葉町
伝承者　和久井きみ（T12）

天神様と　いう方は
おん名は　菅原道実公
学問深く　徳高く
君に忠義の　心あつく
時の大臣　時平の
そねみを受けて　九州へ

流されたれの　天皇は
いささか　うらに
たてまつらん

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市若葉町
伝承者　和久井きみ（T12）

柳の下から　お化けが
ゆらゆらと　でましたよ
お姉さんの　お針箱
兄さんの　玉手箱
はまぐりは　虫の毒でございますよ
まずまず　一貫
かし申したよね

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市馬見塚町
伝承者　横堀　芳江（T10）

ホー　ホー　ほたるこい
やんぶし　こい
あっちの　水はにがいぞ
ごっちの　水はあまいぞ
ほしけりゃ　とんでこい
ホー　ホー　ほたるこい
やんぶし　こい
あんどの光で　とんでこい
夜はちょうちん　竹のぼり
ひるまは草葉の　つゆのかげ
ホー　ホー　ほたるこい

○羽つき歌

伝承地　伊勢崎市馬見塚町
伝承者　横堀　芳江（T10）

ひとり　来な
ふたり　来な
三人　来たら
よって　きな
いつきて　みても
ななこの　おびを
やの字に　しめて
くるりと　まわっちゃ
一貫さ

○おはじき歌

伝承地　伊勢崎市馬見塚町
伝承者　横堀　芳江（T10）

いっすん　おしゃらか
にんどに　まわれ
さんど　ぽっちゃん
ドッコイショ　ドッコイショ

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市馬見塚町
伝承者　横堀　芳江（T10）

一（ひ）　二（ふ）　三（み）　四（よ）
五つのあつかい
手先の　はたらき
一つに　うけて
さらりと　投げれば
乱れて　とびかう
花のまい　花のまい

白　黒　赤　紫
加えて　五つのお手玉
あやに　飛んだり
千鳥に　ぬけたり
飛びかえ　行きかう
蝶のまい　蝶のまい

○毬つき歌

伝承地　伊勢崎市上之宮町
伝承者　山口　とみ（M40）

そこ　どんぶり屋の
みずやの亭主が
へびに　命をとられて
そのへびが　どこだと聞いたら
からたち山の青大将
木にからまり
柳にからまり
一　二　三　四　五　六　七　八　九　十
丁度　一貫　かし申した

○お手玉歌

伝承地　伊勢崎市上之宮町
伝承者　山口　とみ（M40）

一（ヒト）二（フタ）三（ミ）四（ヨ）五（イツ）六（ムイ）七（ナナ）八（ヤ）九（コノ）十（トオ）
（これを十回くり返す）

○わらべ歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

子どもと子どもが　けんかして
薬屋さんが　止めて
なかなか　とまらない
人たちゃ　笑う
おやたちゃおこる

○縄とび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

郵便やさん　走らぬか
もう　そろそろ　十二時だ
一時　二時　三時　四時　五時　六時　七時
八時　九時　十時　十一時　十二時。

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

かごめ　かごめ
かごの中の鳥は
いつ　いつ　でやる
夜明けの晩に
つるとかめが　すべった
うしろの正面　だぁれ

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

ひらいた　ひらいた
れんげの花が　ひらいた
ひらいたとおもったら
いつのまにか　つぼんだ
つぼんだ　つぼんだ
なんの花が　つぼんだ
れんげの花がつぼんだ
つぼんだとおもったら
いつのまにか　ひらいた

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

こうもり　こうもり
飛んでこい
てめえのぞうりは
くそぞうり
おれのぞうりは
金ぞうり
ぞうりがほしけりゃ
飛んでこい

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

桃　栗　三年
柿　八年
ゆずのばか芽は
十八年

○あそび歌

伝承地　伊勢崎市昭和町
伝承者　矢島きよ子（S3）

すうとめ　すうとめ
たばこ　すっちゃ
とまれ

○手遊び歌

伝承地　伊勢崎市長沼町
伝承者　秋山　雅子（S37）

〽お餅つき　お餅つき
トッテン　トッテン　トッテント
おっこねて　おっこねて
おっこね　おっこね　おっこねて
トッテン　トッテント
トッテン　トッテン　トッテント

（注）二人向き合い、餅つきの所作をしながら唱和する。

○ジャンケン遊びの唄

伝承地　伊勢崎市長沼町
伝承者　秋山　雅子（S37）

（二人で向き合って行う）

〽おちゃらか　おちゃらか
おちゃらかほい（ジャンケンをする）
（勝った子はバンザイをしながら）
〽おちゃらか勝ったよ　おちゃらかほい
（負けた子はおじぎをしながら）
〽おちゃらか負けたよ　おちゃらかほい
（あいこの場合は、お互いに肩をたたきながら一緒に）
〽おちゃらか同点　おちゃらかほい

○鬼ごっこの唄

伝承地　伊勢崎市長沼町
伝承者　秋山　雅子（S37）

鬼になった子（一人）を中央にして、そのまわりに、みんなが手をつないで円陣を作り、唄いながらまわり出す。しゃがんでいる鬼をかまどに見立てる。

〽あんぶくたった煮えたった
煮えたかどうか食べてみよう
ムシャムシャムシャシャ（食べるまね）
まだ煮えない
あんぶくたった煮えたった
煮えたかどうか食べてみよう
ムシャムシャムシャシャ（食べるまね）
もう煮えた

みんな「かまどを置いておこう」「そうしよう」といって、かまど（鬼の子）を屋外に見たてた隣に移す。ふたたび円陣を作り、唄いながらまわり出す。

〽今年のぼたんはよいぼたん
くるっと廻してすっとんとん
もうひとつおまけにすっとんとん

みんな「もう帰ろう」「そうしよう」といって、部屋の中に見立てたもとの場所にもどる。鬼になった子、歩いてきてドアをノックするまねをしながら、部屋の中のみんなと問答をする。

鬼「トントントン」みんな「何の音？」
鬼「風の音」みんな「ああよかった」
鬼「トントントン」みんな「何の音？」

鬼「雨の音」みんな「ああよかった」
鬼「トントントン」みんな「何の音？」
鬼「ヘビの音」みんな「キャア」
ここで、みんなはキャアと逃げる。この時、鬼につかまった子が次回の鬼となる。鬼との問答は「ヘビの音」が、かならず最後にくる。

○数え唄

伝承地　伊勢崎市長沼町
伝承者　秋山　雅子（S37）

一つ二つはいいけれど
三つ三か月はげがある
四つ横ちょにはげがある
五ついつでもはげがある
六つむこうにはげがある
七つ斜めにはげがある
八つやっぱりはげがある
九つここにもはげがある
十でとうとうはげだらけ

○寿命流し

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）

寿命流し
ひーふーみーよの
天下っぴ
（注）こま廻し競争のとき、この歌の「……天下っぴ」と叫んで駒を投げつけた。長さを競うのであるから、闘ごまのように相手にたたきつけることはない。

○一人来な

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　シン（M36）外

一人来な、二人来な
三人来たなら
寄ってぎな
（注）羽根つき歌である。

○なんごの歌

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　藤谷　エイ（M43）外

おさらい
おひとつおとして
おさらい
おふたつおとして
おさらい
おみんで
おさらい
（次のような文句も入ることがある）
なかよせ
つまよせ
さらってお手つき
おっさらい
だァりだァりだァりだり
（注）お手玉の歌であるが、当地ではなんごの歌といっている。

○なんごの歌

伝承地　渋川市石原
伝承者　木村　テル（T2）
小谷野ミツ（T8）

一にたちばな
二かきつばた
三に下り藤
四に獅子牡丹
いつついやまの千本桜
むっつきらさき
ななつ南天

八つ八重桜
九つ小梅をちらちにそめて
十で殿様一生ごけ団子しょ

○毬つき歌

伝承地　渋川市中村
伝承者　木村　テル（T5）

いっせ（伊勢）
にいがた（新潟）
みかわ（三河）
しんしゅう（信州）
こうべ（神戸）
むさし（武蔵）
なごや（名古屋）
はこだて（函館）
きゅうしゅう（九州）
とうきょう（東京）
きょうと（京都）
おおさか（大阪）
おわりおわり（尾張）

（注）終わりのところは手の上に乗せて「一貫かしました」ともいう。小一から小五ぐらいまでの子供が毬つきに歌った。

○ここはどこの細道じゃ

伝承地　渋川市金井
伝承者　北原　ひさ（T8）

ここはどこの細道じゃ
天神様の細道じゃ
どうぞ通して下しゃんせ
御用のないもの通しゃせん
この子の七つのお祝いに
お札をおさめに参ります
行きはよいよい帰りはこわい
こわいながらも
通りゃんせ通りゃんせ

（注）県内どこでもある手まり歌である。所によって歌詞に少々違いがある。

○一かけ二かけ

伝承地　渋川市金井
伝承者　北原　ひさ（T8）

一かけ二かけて三かけて
四かけて五かけて橋をかけ
橋のらんかん手を腰に
はるかかなたを眺むれば
十七八の姉さんが
花や線香手に持って
姉さん姉さんどこいくの
私は九州鹿児島の
西郷隆盛娘です
明治十年の戦いに
討たれて死んだ父上の
お墓参りに参ります
（お墓の前で手を合わせ）
（拝んだあとから幽霊が）
（フーワリフワリと飛んでます）
（柳が芽を出した）
（はさみでちょん切るぞ）
（エッサッサ）

（注）県内どこにでもある手まり歌である。所によって歌詞に少々の違いがある。

○かごめかごめ

伝承地　渋川市金井
伝承者　北原　ひさ（M8）

かごめかごめ
かごの中の鳥は
夜明けに出しょか
日暮れに出しょか
つんつんとつんむぐれ

（注）何人かが輪になって手をつなぎ、鬼になっ

た一人が真中にしゃがんで目をつむっている。手をつないだ子どもたちは、鬼の周りを回りながら、この歌を唄う。歌が終わると鬼は自分のうしろの子の名をいう。あたると鬼を交代して遊びを続ける。

○ほたるこい

伝承地　渋川市石原
伝承者　登坂　ナミ（M43）
　　松岡　セウ（M37）

ほたるこい
ほたるこい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水は甘いぞ
ほ、ほ、ほたるこい

（注）ほたるこい、やんぶしこいと歌う歌い方もある。やんぶしとは源氏ぼたるのような大きなほたるをいう。

○からすからす

伝承地　渋川市行幸田
伝承者　伊藤　九平（M42）

からすからす
寒がらす
足を洗って
どこへ行く
おっさむ山（お諏訪山）に
登る

（注）畑の麦もよく生えた、寒くなって寒ダメもよくきくと下肥をまいた。山の鳥がそれを見ていて、下りてきて食べる。夕方になったぞ、お諏訪山へ登るのなら足を洗って行け・・。

○かぞえ歌（まりつき）

伝承地　勢多郡北橘村上真壁
伝承者　仲澤　はつ（M39）

〽正月せ　障子あければ万歳が
つづみや太鼓ではやし立て
オヤ　はやし立て
〽二月せ　二日三日は寺参り
明日は彼岸のお中日　オヤ　お中日
〽三月せ　桜花よりおひな様
飾って立派な内裏様　オヤ内裏様
〽四月せ　死んでまたくるお釈迦様
竹の子柄杓で甘茶かけ　オヤ　甘茶かけ
〽五月　せごんごん桜の前掛けを
正月しめよと裁っておいた
オヤ　裁っておいた
〽六月せ　ろくに吸わない巻煙草
兄ちゃんにとられてお腹立ち
オヤ　お腹立ち
〽七月せ　質屋のお蔵は混雑で
入れたり出したり流したり
オヤ　流したり
〽八月せ　蜂に刺されて目があけぬ
何かお薬りゃあるまいか
オヤ　あるまいか
〽九月せ　草の中にもひき蛙
姉ちゃん一匹頂戴な　オヤ頂戴な
〽十月せ　重箱抱えてどこへ行く
私しゃお恵比寿講のおよばれに
オヤ　およばれに

○かぞえ歌（お手玉）

伝承地　勢多郡北橘村上真壁
伝承者　高橋　フサ（T11）

一番始めは一の宮
二は日光中禅寺
三また桜の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社

六つは村々鎮守様
七つは成田の不動尊（様ともいう）
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の高野山
十で東京しん願寺
これ程心願かけたのに
浪子の病は癒らない

○かぞえ歌（羽根つき）

伝承地　勢多郡北橋村上真壁
伝承者　高橋　フサ（T11）

一人きな二人きな
三人来たなら寄っとくれ
いつ来てみても
七子の帯を　八の字に結んで
しゃれかけ十よ

○教訓いろは歌

伝承地　勢多郡北橋村真壁
伝承者　仲澤　はつ（M39）

一家団らん睦まじく
炉端に寄るが何よりぞ　何よりぞ
話にぶても姑には
にこにこ顔で良く仕え　良く仕え
骨惜しみせず働いて
部屋の隅まではき清め　はき清め
年寄り小供をいたわりつ
近くの交際丸くせよ　丸くせよ
利口ぶらずにへり下り
縫いはり洗濯怠らず　怠らず
留守には戸締まり固くして
おりおりおがめ神佛　神佛
若き時代は二度と無し
かせぐに貧乏追いつかず　追いつかず
余分の宝貯えて
足らざる時の用意せよ　用意せよ
礼儀作法に身を正し
粗そうせぬよう気をつけて　気をつけて
常に我が家の経済を
ねても起きても忘るなよ　忘るなよ
内助は妻の務めぞや
楽のあとには苦あるぞと　苦あるぞと
昔の人の言いおけり
うかうか世渡りする人は　する人は
猪鹿の類におとる可し
のん気陰気にならぬよう
親の言うこと良くきいて　良くきいて
くやしきことのありとても
やたらに腹をば立てるなよ　立てるなよ
負けるが勝ちのたとえあり
賢母良妻我が身ぞと
ふだん夫に操立て
子をば充分教育し
縁談前の娘には
手料理・花いけ・琴や茶も
朝な夕なに習わせよ
咲いた桜も散るならい
昨日の花嫁　今日の姥　今日の姥
夢と月日は過ぎやすし
迷惑かけず　義理かかず　義理かかず
身にはつづれをまとうとも
子孫の繁栄祈るべし　祈るべし
（注）えひもせすんのうたはない
母が娘に家庭で「しつけ」としてうたって
聞かせた

○かぞえ歌（羽根つき）

伝承地　勢多郡北橋村上真壁
伝承者　仲澤　はつ（M39）

一つとや　人々忠義を第一に　第一に
誠を尽くして世を渡れ　世を渡れ
二つとや　二人の親ごを大切に　大切に

思えや深き父の恩　母の恩

〽三つとや　幹は一つの枝と枝　枝と枝
仲良く暮らせよ兄弟　姉妹

〽四つとや　良きこと互いに褒め合い　褒め合い
悪しきを練めよ人と人　人と人

〽五つとや　偽り言わぬが子供らの　子供らの
学びの始めぞ慎めよ　慎めよ

〽六つとや　昔を考え今を知れ　今を知れ
他人に迷惑かけるなよ　かけるなよ

〽七つとや　雛儀するのも心から　心から
笑って暮せよ毎日を　毎日を

〽八つとや　病は口から入るという　入るという
飲み物食い物気を付けよ　気を付けよ

〽九つとや　心は必ず高くもて　高くもて
たとえ身分は低くとも　軽くとも

〽十とや　遠き祖先の教えをも　教えをも
守りて尽くせよ君の為　国の為

（注）羽根つきでは一から十まで全部つけることはまれで、ほとんど歌のみ最後まで歌っていた。

○羽根つき歌

伝承地　北群馬郡小野上村
伝承者　石川　シマ（M34）

一人来な　二人来な
三人来たなら　寄ってきな（寄っといで）
いつ来て見ても　ななこの帯を
やの字にしめて　しゃれかけ十よ（ここの前で　いっかんしょ）

（注）村に伝わる俗謡でここに集録したのはその一つである。

○一番初めは

伝承地　北群馬郡小野上村村上
伝承者　斉藤　カネ（M32）

一番初めは一ノ宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つ村むら鎮守様
七つは成田の不動様
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の高野山
十で東京心願寺
これ程心願かけたのに
浪子の病いはなおらない
武夫が戦に行く時に
白い真白いハンケチを
打ち振りながらネーあなた
早く帰って頂戴な
ゴーゴーゴーと行く汽車は
武夫と浪子の別れ汽車

（鳴いて血を吐くほととぎす）

（注）北群馬郡北部に歌われたまりつき歌であり、子持村、小野上村、渋川などに伝わっている。徳富芦花の『ほととぎす』の名作の武夫と浪子の悲恋の別れがにじんでいる。特に武夫の名字の川島は伊香保仁泉亭の下の村落、当時の全島村大字川島からとったものであるから、この近辺ではよく歌われた。

○おっさらい

伝承地　北群馬郡小野上村小野子
伝承者　佐藤　梅乃（M39）

おっさらい
おひとつおとしておとして
おとしておとして
おっさらい
（ひとつひとつ床の上におろしていく）
おはさみおはさみ
おはさみおはさみ

おはさみおろして
おっさらい
（ゆびの間にはさんでいく）

お手しゃみお手しゃみ
お手しゃみお手しゃみ
お手しゃみおろして
おっさらい
（手の上に五こあげる、落としたら駄目）

おみなおっさらい
（注）お手玉歌で、床の上に置くのと、指の間にはさむのと、手の上に載せるのと三通りの技がある。

○だいしん

伝承地　北群馬郡小野上村小野子
伝承者　佐藤　菊次（T1）女性

おひとつ　おひとつ　おひとつ　おーみな
おみな　おみな　おみな　だいしん
だいしん　だいしん　だいしん　のせかい
のせかい　のせかい　のせかい　のっくり
のっくり　のっくり　のっくり　あげなん
ご　あげなんご　あげなんご　小豆はかり
小豆はかり　小豆はかり　小豆はかり　小豆もはかった
ら　お米つき　お米つき　お米つき　お米も
ついたら　こぬか出し　こぬか出しこぬ
かも出したら　こぬかつめ　こぬかつめ
こぬかつめ　こぬかもつめたら　お米とぎ
お米とぎ　お米とぎ　お米もといだら
おんず（お水）がっきり　おんずがっきり
おんずがっきり　おままたき
（次のように続く）
おかまおろし・・・
おぜんおろし・・・
おはしつけ・・・
おさらつけ・・・
おままたべ・・・
おぜんあげ・・・
・・・・・・・・・
（注）昔の農家の食事の順序をこまかく歌いこんだお手玉歌で、それぞれの仕草をまじえて行う。

○動物の歌

伝承地　北群馬郡吉岡村字大久保陣場
伝承者　羽鳥　善市（M40）
岡田　やゑ（M39）
田中登美子（T3）
小渕シゲ子（T8）
石井　モト（T9）
小沢　正（T11）

「バッタ」
バッタ　バッタ　はた織れ
バッタ　バッタ　はた織れ

「トンボ取り」
トンボ　トンボ　目をまわせ
トンボ　トンボ　目をまわせ

「スイッチョ」
肩させ　裾させ　寒さがくるぞ
肩させ　裾させ　寒さがくるぞ
（注）バッタは二本の長い足を指で持って遊んだ。

○仲間集めうた

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

「鬼ごっこするもの」
鬼ごっこするもの　この指止まれ
鬼ごっこするもの　この指とーまれ

○自然の歌

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

「夕やけこやけ」
〽夕やけこやけ
明日天気になぁれ

「大寒む　小寒む」
〽大寒む　小寒む
山から小僧がとんで来た

○道具のない遊び歌

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

「篭め　かごめ」
〽かごめ　かごめ
篭の中の鳥を
夜明けて出しょうか
日暮れて出しょうか
つんつんと　つんむぐれーい

「上り目」
〽上り目　下り目
くるりと廻して　猫の目

「にらめっこ」
〽にらめっこしましょ
笑うと負けだ　やややのや
（または）
笑うとぬかす　あっぷっぷ

「おしくら」
〽おしくらまんじゅう
押されて泣くな
泣くやつはぬかす

「からす」
〽からす　からす　勘三郎
足洗ってどこへ行く
あっちの山は火事だ

「坊さん」
〽坊さん坊さんどこ行くの
わたしゃ田圃へ稲刈りに
わたしも一緒に連れしゃんせ
お前をつれてはじゃまになる
後ろのチョンマゲだあれ

「通りゃんせ」
〽通りゃんせ　通りゃんせ
ここはどこの細道じゃ
天神様の細道じゃ
ちょっと通してくだしゃんせ
ご用のないもの通しゃせぬ
この子の七つのお祝いに
お札を納めに参ります
行きはよいよい　帰りはこわい
こわいながらも
通りゃんせ　通りゃんせ

「上[1]・下[2]たたいて」
〽上[1]・下[2]たたいて
四[3]つ穴つついて
イッセッセイッセッセ
イッセッセイッセッセ
（注）左右の手・こぶしの上・下を他の手指でつついた動作で遊ぶ。

「俵のねずみ」
〽俵のねずみが米食ってチュウ
チュウチュウチュウ
お父[1]さんが呼んでも
お母[2]さんが呼んでも
ぬけっこなしよ
井戸のまわりで

お茶碗かいたのだぁれ

「花いちもんめ」

〽勝ってうれしい　花いちもんめ
負けてくやしい　花いちもんめ
ふるさとまとめて　花いちもんめ
だれかさんがとりたい　花いちもんめ

○ほたる

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽ほたるこい　やんぶしこい
あっちの水は　にがいぞ
こっちの水は　甘いぞ
ほっほっほたるこい

（注）やんぶし＝源氏蛍のこと

○社寺づくし

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽一番はじめは一の宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々鎮守様
七つは成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の高野山
十で東京　招魂社（または
心願寺ともいう）

○月づくし

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽正月せ　障子開ければ万歳が
つづみを打つやら歌うやらオヤ歌うやら
二月せ　二月の初午おまいりで
稲荷の太鼓が鳴ってますオヤ鳴ってます
三月せ　桜花よりお雛様
飾って見事な内裏様オヤ内裏様
四月せ　死んでまたくるお釈迦様
竹のひしゃくで甘茶かけオヤ甘茶かけ
五月せ　ごんごん桜の前掛けを
正月かけよととっておいたオヤとっておいた
六月せ　ろくに田の草あるまいに
そんなにお腹が立つかいなオヤ立つかいな
七月せ　質屋のお蔵は混雑で
入れたり出したり流したりオヤ流したり
八月せ　蜂に刺されて泣いていた
何かお薬あるまいかオヤあるまいか
九月せ　草の中にもひき蛙
姉さん一匹あげようかオヤあげようか
十月せ　重箱かかえてどこへ行く
わたしゃ恵比寿講のおよばれにオヤおよばれに

○一かけ二かけ

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽一かけ二かけ三かけて
四かけて五かけて橋かけて
橋のらんかん腰をかけ
はるか向うをながむれば
十七・八の姉さんが
花や線香手に持って
姉さん姉さんどこ行くの
わたしは九州鹿児島の
西郷隆盛　娘です
明治九年の戦いに
戦死なされた父上の
お墓参りにまいります

お墓の前で手を合わせ
なむあみだ佛とおがみます
（注）お手玉の時のうた

○十三・七つ

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽お月さまいくつ　十三・七つ
まだ歳は若いな　若子（わかご）を生んで
だァれに抱かしょ　お万に抱かしょ
お万はいないぞ　お万は何処へ行った
油買いに茶買いに
油屋の前で　すべってころんで
油一升こぼした　その油どうした
太郎どんの犬と　次郎どんの犬が
みんななめてしまった
その犬どうした
太鼓に張って
あっち向いちゃドンドコドン
こっち向いちゃドンドコドン

○まりつき唄

伝承地　佐波郡東村国定
伝承者　江原　まさ（M36）

〽向う通るは　よしべじゃないか
鉄砲かついで　脇差して
丸木の橋の下に　赤いものが流れて
そりゃなんだ　こらなんだ
おいらんの　じゅばんの袖か
からす紅屋の　看板じゃ

○まりつき唄

伝承地　佐波郡東村国定
伝承者　江原　まさ（M36）

〽いぼせんきせん
きせさんのかみさんは
糸より細い
細けりゃうめろ
梅の木の下へ
石どうつんで
かねどうつんで
ぐるっとまわって
いっかんさ

○まりつき唄

伝承地　佐波郡東村国定
伝承者　江原　まさ（M36）

〽おおせさん　おせどのさん
しろむこどん　どーん　どーんとなるかねは
なるかねい山の山道で
暗いや暗いや雨がふる
雨じゃなかろが雪だろが
雪をまるめて昼寝して
昼寝のたもとをたが縫った
はちまん長者の小娘が
八つで紅かねつけさせて
十で熊野へのぼらせて
熊野の道で日が暮れて
今晩どこに泊りましょ
今晩あそこへ泊りましょ

○羽根つき唄

伝承地　佐波郡東村国定
伝承者　江原　まさ（M36）

〽おひよ　おはよ
お姫と女郎と　どこへござる
お江戸へござる　お江戸の道で
羽根のはえた鳥と
羽根のはえない鳥と
ぎしぎし　ばさばさ

ぐるっとまわって　いっかんさ

○縄とび唄

伝承地　佐波郡東村上田
伝承者　岡田はつ子（S6）

〽ぴいしゃと　ぴいしゃと
さんだいせ
おらがかみより　さんだいせ
かいこにすまない　まきたばこ
はいれよ　はいれよ
にげろ

○たけん（竹）がえし唄

伝承地　佐波郡東村上田
伝承者　岡田はつ子（S6）

〽ひとたて　ふたたて
みたて　よたて
いつたて　むたて
ななたて　やたて
ここのたて　とたて
ひとたての　ふたたての
みっつのよ

（注）長さ三〇センチほどの竹札を数本づつ左右の手ににぎり、これを唄に合わせて、素早く交互に、にぎり替えていく遊び。

○たけん（竹）がえし唄

伝承地　佐波郡東村上田
伝承者　岡田はつ子（S6）

〽ひとたて　ふたたて
みいたて　よたて
いつやのむこうさん
なにゆってやかまし
ここらでちょっと
おさらいなされよ
みっつのよ

○まりつき唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽一ばんはじめは一の宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大やしろ
六つは村々鎮守さま
七つは成田の不動さま
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の弘法主
十で東京博覧会

○まりつき唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽伊勢　新潟　三河　信州　神戸
武蔵　名古屋　函館　九州　東京

○お手玉唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽いちれつだんばんはれつして
日露の戦争が始まった
さっさと逃げるはロシヤの兵
死ぬまでつくすは日本の兵
五万の兵をひき連れて
六人残して皆殺し
七月八日の戦に
ハルピンまでも攻め入って
クロパトキンの首を取り

東郷大将万々歳

○お手玉唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽ひい　ふう　みい　よう　いつ
むう　なな　やあ　この　とう

○お手玉唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽おひいと　おひいとおろして
おっさあらい
おふたおろして　おっさあらい
おみいつおろして　おっさあらい
およおつおろして　おっさあらい
おいつつおろして　おっさあらい
おむうつおろして　おっさあらい
おならおろして　おっさあらい
おやあつおろして　おっさあらい
ここのつおろして　おっさあらい
とうまでおろして　おっさあらい

○おはじき唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽いっすんほんよ
にいすんほんよ
さんずんほんよ
よんすんほんよ
ごすんほんよ
ろくすんほんよ
ななすんほんよ
はっすんほんよ
きゅうすんほんよ
じっすんほんよ

（注）おはじきのこと当地ではキシャゴと呼んでいる。

○縄とび唄

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽（くみこちゃん）おはいんなさい
じゃんけんぽんよ
負けたらすぐにお出なさい

（注）（　）内、とぶ番になった子の実名。

伝承地　前記に同
伝承者　前記に同

〽大波小波糸まいちゃ
くうるくる

○かごめ

伝承地　佐波郡境町島村
伝承者　町田ちか子（T8）

〽かごめ　かごめ
かごの中の鳥は
いついつでやる
月夜の晩に
ツルとカメとすべった
うしろの正面　だあれ

○まりつき唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山　まさ（M35）

〽いちじょ
にんじょ
さんじょ　さくら
しじょ　しまだで
いっさっさ

○まりつき唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山　まさ（M35）

〽とんとん　とのさま
どちござる
おんたけ　女郎衆の
帯買いに
帯もよいが　じもよいが
じもよいが

○手遊び唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山　まさ（M35）

〽一かけ二かけて三かけて
四かけて五かけて橋をかけ
橋のらんかん手をかけて
はるかかなたを眺むれば
十七、八の小娘が
花と線香を手に持って
もしもし姉さんどこ行くの
私は九州鹿児島の
切腹なされた父上の
お墓参りに参ります
お墓の前で手を合わせ
なむあみだぶつと拝むれば
お墓の中から幽霊が
ゆうらりゆうらり
ジャンケンポン

（注）まりつきやお手玉遊びにも唄われた。

○手あそび唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山たけじ（S3）

〽うちのコンペトさんは　涙がポロポロ
ポロポロ
ポロポロ涙を　たもとでふきましょ　ふきましょ
ふいたたもとを　洗いましょ　洗いましょ
洗ったたもとを　干しましょ　干しましょ
干したたもとを　たたみましょ　たたみましょ
たたんだたもとを　しまいましょ　しまいましょ
しまったあとから　ねずみがガリガリ　ガリガリ
ガリガリたもとを　くず屋に売りましょ　売りま
しょ売ったお金で　おそばをツルツル　ツルツル
ツルツルおそばが　おのどにつっかえた　つっか
えた　ゲーッ

○ほたる取りの唄

伝承地　佐波郡境町下渕名
伝承者　秋山　まさ（M35）

〽ほう　ほう　ほたるこい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水はあまいぞ
ほしけりゃとんでこい

○尻取り唄

伝承地　佐波郡境町境
伝承者　坂本　清子（S7）

〽色はに金平糖　金平糖は白い
白いはうさぎ　うさぎははねる
はねるはのみ　のみは赤い
赤いはほうずき　ほうずきは鳴る
鳴るはラッパ　ラッパは黄色い
黄色いはバナナ　バナナは高い
高いは十二階　十二階はこわい
こわいはゆうれい　ゆうれいは消える
消えるは電気　電気は光る
光るはおやじのはげ頭

○子取り唄

伝承地　佐波郡境町境

伝承者　坂本　清子（S7）

〽勝ってうれしい　はないちもんめ
負けてくやしい　はないちもんめ
あの子が欲しい
あの子じゃわからん
この子が欲しい
この子じゃわからん
（みよちゃん）が欲しい
ジャンケンポン
勝ってうれしい　はないちもんめ
負けてくやしい　はないちもんめ

○遊び唄（その他）

伝承地　佐波郡境町境

伝承者　坂本　清子（S7）

〽一　二　三
二の四の五
三　一
二の四の
二の四の五

（注）庭に線を引いて長四角を作る。更にその中を一～五まで区画する。唄に合わせて該当数字の区画内に、ピョン、ピョンと、とび移って行く遊び。

○縄とび唄

伝承地　佐波郡境町境

伝承者　坂本　清子（S7）

〽おじょうさん
おはいんなさい
ありがとう
ジャンケンポンよ
あいこでしょ
負けたらすぐにお出なさい

○鬼ごっこの唄

伝承地　佐波郡境町境

伝承者　坂本　清子（S7）

鬼の子（一人）、みんなから少しはなれた所に、背をむけてしゃがむ。みんなは手をつなぎ、鬼の方を向いて横にひろがる。遊び開始！。

鬼「ごっとごと」
みんな「今鳴った音なあに」（鬼近づきながら）
鬼「まきを燃やしている音」

みんな、鬼から遠のく。以下問答ごとにみんなの動きは同じ。

鬼「ごっとごと」
みんな「今鳴った音なあに」
鬼「出刃ぼうちょうをといでる音」
鬼「ごっとごと」
みんな「今鳴った音なあに」
鬼「お前をつかまえて食べる音」

ここでみんな、バラと逃げる。鬼は追いかける。つかまった子が次回の鬼。この遊びを当地では「ごっとごと」と呼んでいる。

○毬つき歌

伝承地　佐波郡玉村町五料

伝承者　徳江　つや（M41）

トントンたたくは　誰さんじゃ
新町こうやの　いそちゃんだ
いそちゃん　いそちゃん　なに来たの
じょんじょが切れて　買物に
今ごろ　じょんじょは　ありません
歯欠け下駄でも　はいといで
ビッコシャコ　ビッコシャコ
まず　まず　一貫　かし申した

「木挽き」
山深くで木挽きによって木の製材をした。この時に木挽き唄を歌った。

一、西毛地域の概観

西部地区の民謡は、日本じゅうのどの地域でもそうであるように、生活の近代化、都市的生活様式の急速な浸透にともなって、その総量が大きく減りつつあるように思われる。

民俗学で一般に指摘されていることだが、日本社会の近代化につれて、生業など経済活動の側面にかかわる民族伝承は早くから消えて行くが、祝儀や信仰など人間関係にかかわる民族伝承はかなり根強く残る。

西部地区ではとりわり労作歌が著しく減っており、今回調査ではほとんど収録することができなかった。この要因のひとつは、言うまでもなく、農業の機械化にともなう仕事の仕方の変化が、この地域で格別進行していたと考えられるかもしれない。

一方、西部地区でひじょうによく残っていたのが念仏、和讃である。また、わらべ歌も多数収録できた。

一、労作歌

西部地区は、利根川に向かって烏川、碓氷川、鏑川、神流川といった多くの河川が次々と合流している。築堤に人々が駆り出された時によく歌ったという高崎の「たこつき」はごく素朴な掛け声であるが、治水の要衝であったこの土地の地理的背景が忍ばれる。

また、富岡では「木遣り」、万場町では「地形」が収録されている。

一方、この地域は豊かな農作地帯であるにもかかわらず、農作業に関する歌は予想以上に衰退しているもようである。田植え歌など、「昔は人が歌っているのを聴いた」という話はいくつかあったが、実際に歌い覚えている人には往き会わず、今回の調査ではまったく収録できなかった。

しかし、本県より五～六年先だって行われた東京、埼玉など、より市街化されている都県の民謡調査で、「麦打ち歌」をはじめ多数の農作業歌が収録されていることを考えると、労作歌の衰退は、必ずしも都市化（都市的生活様式の浸透）のみに起因するものとは言い切れない。本県の音楽風土の特殊性として、口説系統の民謡がとりわけ盛んであるが、あるいは、生活のなかで歌を営むエネルギーが口説などに吸収されて、労作の時に歌う歌が早くから衰退したのかも知れない。

二、祝い歌

祝儀の歌も、他県に比べて少ないように思われるが、妙義町で「餅つき小唄」、高崎市で「数え歌」が収録できた。

倉淵村では「春駒」が収録された。この歌は利根の春駒とよく似ており、かつては全県的に流布していたことをうかがわせる。

三、行事歌

小正月の行事である「道祖神まつり」や十月十日の「とうかんや」の歌が収録されている。これらの行事は群馬県下のほとんどの地域で、子供たちの思い出の行事として、今日でも盛んに行われている。高崎と前橋とでまったく違った節回しがあるなど、旋律のヴァリアント（異体）も少なくない。

四、念仏・和讃

西部地区の民謡で特筆すべきは念仏・和讃である。高崎市、藤岡市、富岡市、妙義町、甘楽町、などにわたって、かなり多くの伝承例が報告

されている。今回の調査で得られた念仏・和讃は大別して①月待ち講、②地蔵盆、③送り念仏の三種がある。

月待ち講は、当地では「二夜さま」と呼ばれている。毎月二十二日の夜に、各家々から婦人が「宿」となる家に集まり、勢至・観世音菩薩などの掛け軸を飾り、念仏・和讃をあげたのち会食・歓談する「二十二夜講」である。他県では「二十三夜講」として二十三日に行う地域が多い。いずれも「月待ち講」の一種である。

本県では男の「庚申組」に対して女の「二夜さま」と言われているように、月待ち講は本来は女性の物忌み・お籠りの行事である。

高崎市八幡の「二十二夜」の歌詞には、こうした精進潔斎が歌われている。また、一般に月待ち講について、女性の月経との関係も指摘されているが、同じ八幡の「産体様」の歌詞は、安産祈願の内容をもっている。

高崎・京ヶ島の「地蔵尊まつり」は、関西を中心に七月二十四日に行われている「地蔵盆」の系統と思われる地蔵盆が子供たちを中心に行われているのは、地蔵が子供と関係の深い仏だからとも言われる。京ヶ島の「地蔵尊まつり」の和讃のなかに「賽の河原」が見られることも、これと無関係ではないだろう。京ヶ島の和讃は、子供が歌う歌とは思えないほど節回しが見事であった。

全般的に、念仏の類いは旋律が悠長であるが、とりわけ八幡の「十三仏」は会衆が甲乙の二手に分かれ、素朴な旋律を一フレーズごとに繰り返しながら延々と歌い続けるもので、融通念仏の古態をしのばせる興味深い例である。

この他、念仏とは違うが、祈りの歌として上野村で「雨乞い唄」が収録されている。貴重な収録である。

四、口説

上州と言えば「八木節」が挙げられるように、本県は口説の盛んな土地柄である。「八木節」だけでなく、数多くの口説が歌われている。西部地区の調査では、高崎市、富岡市、箕郷町、万場町の伝承を収録した。

口説は、伝統的な物語を歌った曲だけでなく、その時代の世相や人々の意識を歌った曲が少なくない。言わば生きている民謡の典型とも言えよう。高崎市の「義民五万石」もその例である。また、今回は割愛したが、かつてある商店が宣伝のために作詞した「上州音頭」もあったようで、昨今、テレビのコマーシャル・ソングがヒット・チャート入りして人口に膾炙するのと同じ社会現象として理解できるのかもしれない。

五、芸能の歌

群馬県内では獅子舞がたいへん盛んであるが、そのほとんどは埼玉、栃木など関東一帯でみられる三匹獅子舞いの系統と見られる。この時の囃し歌が藤岡市、妙義町、倉淵村、上野村で収録されている。

六、わらべ歌、子守歌

わらべ歌は日本じゅうどこへ行っても、またどの年代の人でも、何かしらの歌を伝承している。本調査でも、他のジャンルに比べ、曲の数で大部分を占める。ただ、全国的に共通した曲目が多い。例えば最近の民謡調査では、調査対象となる年代の人々の多くが大正生まれであるため(明治後期の人々を親に持つから)、一九〇〇年頃のベスト・セラー、徳富蘆花の「不如帰」を歌い込んだ「一番初めは一の宮……」などがよく聴かれる。

しかし、歌好きな人からは、かなりユニークな曲目も収録されている。安中市、南牧村で、明治三〇年代生まれの人のわらべ歌が収録されたのは貴重である。

わらべ歌はまた、さまざまな遊びと結びついている。お手玉や鬼ごっこなどのなかには、現代の子供たちにもぜひ教えたいようなおもしろい遊び、あざやかな技巧の遊びが少なくない。

二、調査民謡

A 労作歌

○地形（じぎょう）

伝承地　高崎市木部町
伝承者　塚越　敏生（T12）

〽エーンヤラヤーレ
（囃子）エーンヤラヤーレ
〽それでは皆さんエーンヤラヤーレ
（囃子）エーンヤラヤーレ（以下略）
〽みんなで揃ってエーンヤラヤーレ
〽といきましょエーンヤラヤーレ
〽力を合わせてエーンヤコラヤーレ
〽しっかり引いとくれエーンヤラヤーレ
〽この屋の地形がエーンヤコラヤーレ
〽しっかり固まりエーンヤコーラヤーレ
〽立派なおうちがエーンヤラヤーレ
〽出来ればみんなもエーンヤラヤーレ
〽父ちゃんも母ちゃんもエーンヤラヤーレ
〽仲良くやろうぜエーンヤラヤーレ
〽あとは棟梁にエーンヤラヤーレ
〽任せて終わりだエーンヤラヤーレ
〽しっかり突けたぞエーンヤラヤーレ
〽どうやらこの辺（へ）でエーンヤコラヤーレ
〽やめよと思うがエーンヤラヤーレ
〽もひとつおまけだエーンヤコラヤーレ
〽エーンヤラヤーレ

（注）家屋の基礎固めに、地形（じぎょう）と呼ばれるやぐらを組んで作業をした時に歌った。

○たこつき

伝承地　高崎市木部町
伝承者　塚越　敏生（T12）

〽ヨーイ　ヨーイ
（ヨーイ　チョーダ）囃子以下略
〽どーんといこうか
〽うんまく頼むぞ
〽しっかり突こうぜ
〽ヨーイ　チョーダ
〽他所見をしねえで
〽もっと待ちゃげて
〽まっすぐ持ちゃげろ
〽かあちゃんと違うぞ
〽まがっちゃ駄目だぞ
〽土方を殺すにゃ
〽刃物はいらねえ
〽雨の十日も
〽降ったら終わりだ
〽かかあを質屋に
〽入れても駄目だぞ
〽からすが鳴いてる
〽どうやらこの辺（へ）で
〽一休（ひとやす）するかな
〽ヨーイ　ヨーイ　ヨイト
（ヨーイ　ヨーイ　ヨイト）

（注）堤防の土固めなどで歌った。

○木遣り

伝承地　富岡市富岡
伝承者　新井　嘉幸（S・5）
小林　充（S・9）

三田　明（S・11）
治田啓次郎（S・11）
須原　正（S・10）
小林　貞雄（S・23）
山田　進（S・2）

真鶴

兄キヤリ
〽オーオーオー。イヤルヨー。
側
〽エーエーエー。ヨーオー。
手古
兄キヤリ
〽オーイヤーレテー
側
〽テーコーセー　エーエィエー。
　ホー　ヤーアーネー。
弟キヤリ
エーイホー。
〽シメハヨーイゾー。
側
〽コーレハセー　エーエィエー。
　ホー　ヤーアーネー。
兄キヤリ
エーイホー。
〽目出ーターク一。
側
〽コーレハセー　エーエーエー。（略）
弟キヤリ
エーイホー。
〽ゴクローナガーラー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
兄キヤリ
エーイホー
〽手古ーデー　ハヤーセー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
弟キヤリ
エーイホー。
〽千代ニー　八千代ニー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
兄キヤリ
エーイホー。
〽ヤーレーコレハー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
弟キヤリ
エーイホー。
〽中ノーッーナー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
兄キヤリ
エーイホー。
〽ソローエーテー。
側
〽コーレハセー　エーエイエー。（略）
弟キヤリ
エーイホー。
〽モーシトーツー。
側
〽コーレハセー　おエーエイエー。（略）

○木挽歌

伝承地　群馬郡倉渕村三ノ倉
伝承者　戸塚伝市郎（M38）

〽七間三尺その日の役よう
あとをひくのはあの娘の為よう
〽元締め喜べお（大）江戸が焼けたよう
板出せぬき出せ角も出せよう
〽山に小屋かけ生木をたいてよう
辛棒するのもぬしの為よう

（※以下収録）

〽親方金貸せ前引の刃が折れたよう
金が貸せなきゃ「アラス」担いで
「じょうき」たくよう

〽木挽きは寒かろ山には住めと
木の実やかやの実は食べやせぬよ
お米のご飯に頭つきよ

〽情夫（いろ）にもつなら木挽きはおよし
仲のよい木をひきわける

〽上州三ノ倉は西行さんの地獄よ
ゴクラクコヂンジョへ立帰る

〽前は利根川ようわたれば地蔵よう
ここが思案の松戸橋

〽鹿沼アラスにツバメのヤスリ
合わせりゃ互いに切れたがるよう

〽親方金貸せ又刃が折れたよう
金が貸せなきゃ一まわり

（注）この歌は別名、「三ノ倉節」・「下野節」ともいう。

○椚（くぬぎ）石切歌

伝承地　多野郡新町
伝承者　田島一男（S19）

一、おらがお山で切り打す石は
花の都で基礎となるヨー

二、椚お山でハッパがひびきゃ
一丈五尺の竿石でるヨー

三、おらがお山の石工の顔は
恵比寿大黒福の神ヨー

○地形（じぎょう）搗き歌

伝承地　多野郡万場町万場
伝承者　矢野　信吾（M37）
斎藤芳三郎（M41）

一、目出たや　目出たや　高砂の
尾の上の松を白にとり
その技を称となし
爺さんとお婆さんで
餅をつく
ハーエンヤラ　ハレワイサーノエーン
ヨイヤサ　ヨイヤサ

二、綱をとりたか車力方
上なる桜を鶴となし
下なる石を亀として
ハーエンヤラ　ハレワイサノエーン
ヨイヤサ　ヨイヤサ

○十石木挽き歌

伝承地　多野郡上野村乙父
伝承者　中沢藤次郎

〽ハアー木挽きさんかい
お山にも住むがよ
木の実草の実食べやせぬ
ホーズリコン　ズリコン

ハアー山木挽きさんかい
えー山小屋住まいよ
朝も早うから割き分ける
ホーズリコン　ズリコン

B　祭り歌・祝い歌

○七草の歌

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山勇（T10）

七草なずな、唐土の鳥が、日本の国に、渡らぬさきに、七草なずなの庄たたき

○野辺の送り

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山勇（T10）

野辺よ野辺よと　野辺よ尊
野辺から先はただ一人
死んで冥土にゆく時は
弥陀、釈迦、如来が出迎えに
死ねば一夜も泊めおかず
耳も聞こえず　目も見えず
文目も分かぬ闇路ゆく
南無阿弥陀仏　阿弥陀仏

（注）葬儀にて、棺が門口を出るとき歌った。

○数え歌

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山勇（T10）

一わも進上　わしゃ市立てぬ　商人なんだとて、
市立て　参りゃんこそ　わしゃ市立てぬと　また
でんぐりかわしょ

二わも進上　わしゃ庭掃かぬ　お寺の坊さん　庭
掃いて　参りゃんこそ　わしゃ庭掃かぬと　また
でんぐりかわしょ

三わも進上　わしゃ竿刺さぬ　鳥刺しなんだとて
竿刺し参りゃんこそ　わしゃ竿刺さぬと　また
でんぐりかわしょ

四わも進上　わしゃ嬶寄せぬ　年寄りなんだとて
口皺寄せ参りゃんこそ　わしゃ嬶寄せぬと　また
でんぐりかわしょ

五わも進上　わしゃ碁は打たぬ　丁半なんだとて
碁を打って参りゃんこそ　わしゃ碁は打たぬと
またでんぐりかわしょ

六わも進上　わしゃ牢には入らぬ　盗っ人なんだ
とて　牢入って参りゃんこそ　わしゃ牢は入らぬ
と　またでんぐりかわしょ

七わも進上　わしゃ質置かぬ　貧乏人なんだとて
口質置いて　まいりゃんこそ　わしゃ質置かぬと
またでんぐりかわしょ

八わも進上　わしゃ鉢開かぬ　乞食なんだとて
鉢開いて参りゃんこそ　わしゃ鉢開かぬと　また
でんぐりかわしょ

九わも進上　わしゃ桑食わぬ　お蚕なんだとて
桑食って参りゃんこそ　わしゃ桑食わぬと　また
でんぐりかわしゅ

十わも進上　わしゃ銃は打たぬ　兵隊なんだとて
銃打って参りゃんこそ　わしゃ銃は打たぬと　ま
たでんぐりかわしょ

（注）婚礼、新築等の祝宴で歌った。

○道祖神の歌

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本きし（M45）

寝しゃっせ　寝しゃっせ
夜餅食って寝しゃっせ

（注）道祖神祭の前夜に子どもたちが歌ってまわる。

起きしゃっせ　起きしゃっせ
道祖神がつん燃える

（注）道祖神祭の朝、子供たちが歌ってまわる。

○十日夜の歌

伝承地　高崎市石原町

伝承者　松本きし（M45）

〽とうかんや　とうかんや
とうかんやはいいもんだ
朝蕎麦切りに昼団子
夜餅食っちゃぶったたけ

（注）もぐら追いとして、子どもたちが棒で庭先をたたいてまわる。

○二十二夜様

伝承地　高崎市八幡町

伝承者　堀口ハナ（M42）ほか

〽帰命朝礼ありがたや　二十二夜様持つ人はナム
〽ひみずあらため精進し　菩薩を拝したもうべレナム
〽如意輪菩薩のおがんには　あまたの女人を助けんとナム
〽血の池地獄に身を沈め　池より蓮華が現れてナム
〽連華の花に身をもたれ　右のおん手にみどりごをナム
〽左のおん手に　おん乳房　ささげたもうてありがたや
ナム　アミダンブ
ナムアミダンブツ　ナムアミダンブ

○地蔵念仏

伝承地　高崎市元島名町

伝承者　関芳明（T9）

・地蔵尊

〽帰命頂礼地蔵尊　提灯花笠さしかけて　鐘や太鼓に笛を入れ　勇んで念仏　ホラヨーイヨイ　申し付けるとよ　南無阿弥陀仏ナム

・立ち和讃

〽帰命頂礼この家に　名残りの種は蒔かねども　名残り惜しさは富士の山　花にもつれて立ちかねる　ホラヨーイヨイ　立ちにけるとよ　南無阿弥陀仏ナム

・一夜の宿

〽帰命頂礼この家に　一夜の宿を申せしは　この家の悪事と災難を　除かせたまえや　ホラヨーイヨイ

・田植

〽十七が今年初めて田植して　しかもその田の出来の良さ　丈が七尺穂が五尺　何たら駒にも八穂一駄　八穂で一石取るならば　これをお背戸に倉七つ　倉の番守は誰と誰　一に子雀　二に燕　三に鳶
ホラヨーイ　ヨイ

・辻和讃

〽帰命頂礼地蔵尊　何の所願で辻に立つ　何も所願は無いけれど　余り世間が邪見さに　念仏すすめに　ホラヨーイヨイ　辻に立つとよ　南無阿弥陀仏ナム

（注）地蔵尊まつりにて、地蔵様を持ち運ぶ小学生がうたう。「立ち和讃」は出発する時、「一夜の宿」は次の家に到着した時、「田植」「辻」は道中に、「地蔵尊」はあらゆる場で歌われる。道中うたう詞は他にも二〇首ある。いずれの詞も同じ旋律。

○あと念仏

伝承地　高崎市木部町

伝承者　塚越敏生（T12）

一、かけ念仏

〽南無阿弥陀仏

二、十三仏

〽不動、釈迦、文珠、普賢、地蔵、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿閦、大日、虚空蔵、南無十三仏、南無阿弥陀、三世の諸菩薩、南無阿弥陀

三、三編返し

〽南無阿弥陀仏（3回繰り返し）

四、十王十態

〽十王十態　南無阿弥陀

五、融通念仏

〽融通念仏　南無阿弥陀

（注）各節とも十三回繰り返す。葬儀の際、精進落し等すべての次第が終わった最後にうたう。

○十三仏

伝承地　高崎市八幡町

伝承者　堀口ハナ（M42）他

〽ナムアミダンブツ。（三回繰返す）

〽南無不動明王。ナムアミダンブツ。

南無釈迦如来。ナムアミダンブツ。

南無文珠菩薩。ナムアミダンブツ。

南無普賢菩薩。ナムアミダンブツ。

南無地蔵大菩薩。ナムアミダンブツ。

南無弥勒菩薩。ナムアミダンブツ。

南無薬師如来。ナムアミダンブツ。

南無観世音菩薩。ナムアミダンブツ。

南無勢至菩薩。ナムアミダンブツ。

南無阿弥陀如来。ナムアミダンブツ。

南無阿閦如来。ナムアミダンブツ。

南無大日如来。ナムアミダンブツ。

南無虚空蔵大菩薩。ナムアミダンブツ。

ナムアミダンブツ

（注）甲乙二つのグループに分かれて歌い、句点（。）で示した単位ごとに甲乙が同じ旋律を繰返す。

○融通念仏

伝承地　高崎市八幡町

伝承者　堀口ハナ（M42）

〽融通念仏一辺申せば、父ごの御恩も送るべし

ナムアミダンブツ　ナムアミダ

（反復句以下略）

〽融通念仏二辺申せば　母ごの御恩も送るべし

〽融通念仏三辺申せば　三途の川をものがるべし

〽融通念仏四辺申せば　死出の山をば拝むべし

〽融通念仏五辺申せば　極楽浄土も拝むべし

〽融通念仏六辺申せば　六道の辻をも迷うまじ

〽融通念仏七辺申せば　七厄災をものがるべし

〽融通念仏八辺申せば　蓮の蓮華も拝むべし

〽融通念仏九辺申せば　九品の浄土も拝むべし

〽融通念仏十辺申せば　十悪罪をものがるべし

〽お念仏申せばおい徳に　血の池地獄ものがるべし

〽三世の諸菩薩ナムアミダ　山げに法華経けつぶん経ナムアミダンブツ　ナムアミダ

ナムアミダンブツ（3回くりかえし）

○四方がため

伝承地　高崎市八幡町

伝承者　堀口ハナ（M42）他

〽帰命頂礼ありがたや　四方がためのいわくにはナム

〽東は薬師の十二仏　南は千手観世音ナム

〽西は四方弥陀如来　北は釈迦牟尼如来様ナム

〽中央守護する不動尊　東西南北守護すればナム

〽まをなすこともなかりけり　益々お家はご繁盛ナムアミダンブツ　ナムアミダンブ

〽ナムアミダンブ

○お茶和讃

伝承地　高崎市八幡町

〽帰命頂礼この御座で　お茶やお茶うけ品々のナム

〽下さる供養は有難や　ただ今いただくこのお茶はナム

〽新茶か古茶か宇治の茶か　お家繁盛のとくやまかナム

〽鶴亀縁のこのお茶は　色は山吹香りよくナム

〽松の緑に竹雀　梅に鶯啼く声はナム
〽花も開くが身も開く　ましてお家なお開く　ナム
アミダンブ　ナムアミダンブツ　ナムアミダンブ

○和讃

伝承地　藤岡市上日野鹿島
伝承者　武田万岳（M40）

唱えあげ奉る犬供養御和讃に
〽帰命頂来　犬念仏
時は大同元年の
十月半ばに唐土より
帰還のみぎり空海は
祖国のみやげに麦のたね
無布施の盗みに犬の子は
ほえつわめきつ聖人に
いどみかかれば飼い主は
聖人様への申し訳
犬を殺して詫びにける
その麦たねは日の本に
一粒万倍実を結び
衆生を養い命だね
されば哀れな犬の子は
魂まつりてとこしえに
残すいわれの犬供養
弘法大師の御人徳
げにありがたや大施行
南無大師編照尊
南無大師編照尊
白ブチ黒ブチ　ナンマイダー
おまけに赤ブチ　ナンマイダー

（三回くり返す）

〽願わくはこの功徳をもって普く　一切に及ぼし、
われらと衆生と皆ともに仏道を成ぜんことを

○三和讃

伝承地　富岡市下丹生
伝承者　吉田こと（M43）
渡辺けい（T7）
棚橋しげ（T2）
吉田きち（T8）
吉田きぬ（T14）
高橋と志（T7）
黒崎すゑ（T8）

第一番　入定節

帰妙頂礼　御当家の
位牌の前を拝すれば
一に香燈　二にお花
三にしきびの枝折りて
あげて念佛唱うれば
十三佛の御影差す
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

第二番　追弔節

帰妙頂礼　親の日は
朝早起きて　身を清め
みあかしあげて　香をたき
我が身はいづくへおつるとも
ふた親様を極楽へ
導き給え　地蔵尊
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

第三番　八葉節

帰妙頂礼御家の
墓所に植え置く古木梅
枝は九重　花は八重
中なる小枝に　鶯が
西に向いて　ほうほけきょ
さぞや佛も　たのもしや

南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

○七草の歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　市川八十夫（T6）

七草なずな
唐土のトリが
渡らぬ先に
何たたく　セリたたく

（注）以上を七草がやわらかくなるまでくり返してうたう。

○十二階松くずし

伝承地　群馬郡箕郷町柏木沢
伝承者　坂井源造（T5）
坂井忠勝（T12）
坂井相造（S16）

〽歌えや　囃せや　お大黒
一本目には　池の松
二本目には　庭の松
三本目には　下りの松
四本目には　しがの松
五本目には　五葉の松
六つ昔の高砂や
尾の上の松や　そねの松
七本目には　姫小松
八本目には　浜の松
九つ小松を植え並べ
十で豊国の伊勢の松
この　松くよの松にて
情け有馬の　松が枝に
ふどけばなびく　相老の松
又いつもの約束で
時待つ　日を待つ　客を待つ
りんりの松に　ちぎりをこめて
福大黒や　舞納め

（注）聞き伝えによると、明治の始め頃から地芝居が盛んで、その前座として踊ったのが、今まで残ったものだという。町の無形文化財である。扇子を五本使って松の形を作る踊りがある。

○上州名物もちつき小唄

伝承地　妙義町菅原
伝承者　吉岡鶴一（T4）

一、わたしゃ上州の（ヤレ）
もちづきの生まれ
山が育ちでも
実がある
ヤレスッチョコ　チョンガイナ
また
ヤレスッチョコ　チョンガイ
二、色気離れた（ヤレ）
ぼんさんでさえ
木魚のわれめを
思い出す。
ヤレスッチョコ　チョンガイナ
また
ヤレスッチョコ　チョンガイナ

○御和讃

伝承地　甘楽郡妙義町諸戸
伝承者　土屋　裕之（T8）
設楽　広（T8）
町田みち子（T15）
奥平　絹代（S5）
伊藤　ふじ（M45）
須貝　とき（T15）
竹田久美恵（T14）

彼岸の御和讃

山川険しき世なれども
佛の教え一筋に
彼岸に至る幸せよ

ああ天地に日はうらら
苦労の救いここにあり
あまねく施し・・・

・・より励む諸人
彼岸の花の美しさ

ああ爽やかにこの歌に
・・・・夢ならず
心を定めて腹立てず

祖先に祈り上げてこそ
彼岸の浮ぶ親心

ああ今開くその悟り
ああ嵐もしばしゆきもせず

人の導きみ佛を
・・をねごう者は皆
南無帰依佛と唱えよや

浮き世の波を乗り越えて
清き恵みに就くのには
・・棹さす者は皆
南無帰依法と唱えよや

悟りの道に渡るべし
道を伝えし諸々の
・・に頼る者は皆
南無帰依僧と唱えよや

○御和讃

伝承地　甘楽郡妙義町諸戸
伝承者　土屋　裕之（T8）
他六名前記に同じ

○御詠歌

伝承地　甘楽郡妙義町諸戸
伝承者　土屋　裕之（T8）
他六名前記に同じ

三法の御和讃

心の闇を照らします

良寛さま

花は菜の花　菫花（すみれ）
げんげの花の咲いている
良寛さまは毬をつく
代る代るに子供らと

かすみたつ
のはたち春日も
子供らと
手毬つきつつ
おどり暮しつ

朝な夕なに眺めいる
波間に浮ぶ佐渡島
良寛様は恋しいの
佐渡は死なれた母の里
幸せだろうかお母さん

みずくきの
あとも涙に
かすみけり
まい日昔の
ことをおもえば

暮れた山道落ち葉道
ほろほろ栗のいがの道
良寛様はひき止める
月は暗いといがですべるから

つきをよみ
ひかりをなして……

○和賛

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M42）
高橋　よし（T11）
高橋　まつ（T12）
井沢　ツガ（S3）
井沢　花江（S9）
井沢　アイ（S10）
高橋すみ子（S9）

お祝い和賛

帰命頂礼　おめでたや
尾上（おのえ）の松の　美しさ
三階松の　はぶりまさ
上には鶴が　舞い遊び
下には亀が　水遊び
側には高砂御夫婦が
箒と熊手を持ちまして
金銀宝を掃き入れて
お家は益々御繁盛
お祝い和賛でおめでたや

○和賛

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M42）
他六名前記に同じ

彼岸様

帰命頂礼　彼岸様
こころざしする　おんかたに
一に福徳　あたうべし
二には　子孫を繁盛と
三に　災難　ふみよけて
年に　二度来る彼岸様
七日七夜の回向して
極楽浄土へおくりあげ
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

○和賛

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M42）
他六名前記に同じ

追弔和賛

人のこの世は　長くして
変わらぬ春と　思えども
はかなき夢と　なりにけり
熱きなみだの　真心を
御霊の前に　捧げつつ
面影しのぶも　かなしけれ
しかはあれども　み佛に
救われて行く　身にあれば
おもい患う　事もなく

紀ノ国室生の那智山
峰より落つる滝つせの
深きちかいぞ頼もしき
本尊如意輪観世音
仰いで唱うる御詠歌に
ふだらくや紀州津波は
み熊野の
那智のお山に響く滝つせ

○和賛

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M42）
他六名前記に同じ

礼打和賛

西国第一番に打つ札は

とこしえかけて　やすからん
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

○和賛

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M43）
他六名前記に同じ

三和賛

唱え奉る　三和賛　御和賛に
帰命頂礼御当家の
位牌のまえをながむれば
一に香爐　二にお花
三にしきみの枝折りて
上げて念佛となうれば
十三佛のみかげさす
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
帰命頂礼　親の日は
朝は早起き　身を清め
みあかりてらし香をたて
わが身はいずくに落ちるとも
ふたおや様は　極楽に
導きたもう地蔵尊
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

帰命頂礼　御当家の
墓所に植えおく　古ぼく梅
枝は九重　花は八重
中なる小枝に　鶯が
西に向こうて　ほけきょよむ
さぞや佛もたのもしき
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

○和賛彼岸様

伝承地　甘楽郡甘楽町秋畑
伝承者　安藤　せん（M42）
他六名前記に同じ

帰命頂礼　彼岸様
こころざしするおん方に
一に福徳　あたうべし
二には子孫を繁栄と
三に災難　ふみよけて
年に二度来る彼岸様
七日七夜の回向して
極楽浄土へ　送りあげ
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

○雨乞い唄

伝承地　多野郡上野村乙父
伝承者　三沢　義信（M45）

先唱　神寄の雨雲乙父沢泣き晴れ
　雨を三粒たのもうぞ
（唱和）雨ためえ竜王ナ
神寄の明神橋
乙父沢山諏訪さま
乙父神社に集まり
竜王権現様と相談して
雨を降らせて給うれ
（唱和）雨ためえ竜王ナ
おしめり十分あったなら
乙父村の百姓は
コッパのような餅ついて
油のような酒呑んで
三日四日も正月だ
（唱和）雨ため竜王ナ
それでもおしめりないならば
神寄耕地のおくまん（熊野）さん
柿平耕地明神さま

乙父耕地の諏訪さま
森戸耕地の明神さま
遠西耕地の諏訪さま
中村耕地の諏訪さま
小春耕地の諏訪さま
田平耕地の諏訪さま
柿平耕地のおくまんさん
乙父沢耕地の諏訪さま
乙父沢耕地の諏訪さま
乙父神社に集まって
雨をふらす御相談
（唱和）雨ためえ竜王ナ
それでもおしめりないならば
乙父郷の百姓は
豆の葉もゴソゴソ
小豆の葉もゴソゴソ
なにひとつとれないぞ
榛名神社への早飛脚
榛名のお池のお水をば
ハス葉に包んで乙父郷へ撒いたなら
なんにもかんにも豊作で
乙父さまは大よろこび
（唱和）雨ため竜王ナ
いまの調子はよい調子
いまの調子で渡すぞ

音頭とりが次の者と代わってもらう
受け継いだ者が
いまの調子で受取った。

C　踊り歌・舞謡

○二段落とし

伝承地　高崎市下小鳥町
伝承者　廣岡三四郎（T14）
　　室岡右喜雄（T13）
　　神成　一男（S4）
　　梅山　国雄（T15）

義民五万石

〽サーテ一座の皆様方よ
なにか一席うかがいまする
かかる外題は何よと聞けば
ここにめずらし義民の話
五万石なるあの騒動を
時間くるまで読みあげまする
明治・大正・昭和の御代で
丁度今年が百有余年
こんな住みよい世となったのも
もとを正せば明治の二年
明治二年の高崎県で
五万石なる城下の者は
待ちに待つたる明治の御代の
御一新とはなったるものの
高崎県下のその圧政に
重き年貢を取り立てられて
正に塗炭のその苦しみに
耐えて百姓我慢をすれど
かて、加えて天候が不順
喰うに食なく途方にくれて
四十五ヶ村百姓衆は
もはやこれまで我慢がならず
ここに中居の三喜造さんは
なにか減租の道なきものか
練るや夜毎のその対策に
これを知ったる百姓衆は
むしろ旗をは押し立てまして
城下お城へ迫らんものと
穀気立ちたるその有様に
民の難儀を救わんものと
かねて用意の嘆願書をば
竹に差し込み差し出したれど
さらに願いは聞き入れられず
されどこの尽捨ててはおけず
四十五ヶ村回状まわし
ここに中居の三喜造さんと
六郷村にて小塙の文治
大類では高井の喜三郎
四十五ヶ村四千人の
人におされて代表となりて
いとし妻子と水盃を
かわす姿はけなげなものよ
されど一揆は未然に知れる
強訴・直訴は許されがたく
首謀者三人引き立てられて
長野堰なる無縁の堂で
哀れ三人打ち首となる
されば明治の初めの頃は
法規法令新旧みだれ
期待不安のその世の中で
起きた一揆がこの五万石
さあて皆さんその翌年は
明治四年で廃藩置県
藩知事さまは東京に移り
年貢税率全国同じ
悲しこのとこ一年二年
早き遅きがこの世の別れ
人は死すともその名は残る
今が世までもその名は残る
今が世までもその名は残る

（注）三段落としでも出来る。霊を迎え、送るのであるから静かに歌い、静かに踊るように指導された。
簡単な手踊りがあるが、二段落し、三

段落とし 石投げと音頭により多少手踊りも変る。楽器は、笛、太鼓、鉦。

○獅子舞歌

伝承地　藤岡市下日野
伝承者　新井敬次（T9）

花がかり

〽天神様の梅の花に
花の甘露の「露のめずらし（くり返す）

〽春駒を庭の桜につなぎ止め
「駒がいさめば花が散り候（くり返す）

〽お庭に名残りは惜しけれど
「おいとま申して戻りこうささら（くり返す）

（注）花を立てた回りで獅子舞をする時、数人で歌う。

○獅子舞歌

伝承地　藤岡市下日野
伝承者　新井　彦（S10）

小庭

〽京からくだる唐絵の屏風
「しゃんと一重に立ち並べよな（くり返す）

〽これのお客を眺めれば飛騨の匠が建てたげな、くさび一つで四方固めて

〽いざさら　われらもきりをかえ候

〽十七が黄金のしゃだんに手をかけて
「今の若さになにを申すやら

〽獅子どもがいかにお宮が恋しくとも
「おいとま申して戻りこうささら（くり返す）

（注）一曲の場面を一庭といい、数人の笛吹きと歌い手がいて、笛休めの時に歌が歌われている。

○獅子舞歌

伝承地　藤岡市上日野
伝承者　新井　武喜（M36）
　　黒沢　一郎（T4）

女獅子隠し

〽我が殿がたかをそろえて　奥山で鳴りを鎮めて
「鈴が音を聞く（くり返す）

〽春雨に庭のほこりをうたしめし　庭がよいとて
心ゆるすな

〽いざさらば　我も我らもきりを返そう

〽鶏こが今宵ばかりに柴山に　明日は野に出て「名残り柴山（くり返す）

〽十五夜のちしこの色は変わるとも　女獅子男獅子
「心変わるな（くり返す）

〽思いもがけない朝霧が降りて　ここで女獅子を
「隠されたな（くり返す）

〽なにと女獅子を隠しても　ついに一度は「めぐり合わせろ（くり返す）

〽霧に女獅子を隠されて　心ならずの「狂い獅子かな（くり返す）

〽男獅子こそこよしの庭にあこがれて　沢を登りし
「恋の歌読み（くり返す）

〽十七の胸につぼみし二つもの　一つ給われ「この薬に（くり返す）

〽南無薬師　思いし妻に逢わせて給われ　錦の御戸帳
「掛けて参らしょう（くり返すー）

〽天笠天の愛染川原のはたにこそ　宿世結びの「神のたたりだ（くり返す）

〽まことに宿世の神ならば　女獅子男獅子を「結び合わせろ（くり返す）

〽笛吹きの匂い袋の緒がとけて　麝香がこぼれて
「匂いおもしろ（くり返す）

〽薬師のごむそうはやめて候　尾花の蔭に「見えるうれしや（くり返すー）

〽奥山で鳴る神立ちの　お出やるごとくは「このごとくだ（くり返す）

〽奥山で笛と太鼓の音がすれば　女獅子男獅子が
「肩をならぶる（くり返す）

〽松山の松に　からまるつた草も　縁が切れれば
「ほろりほぐれる（くり返す）

（注）「女獅子隠し」の曲は長時間に及び、笛を休める時に数名で歌が歌われる。

○拳骨踊　曽我兄弟

伝承地　富岡市曽木
伝承者　入山トキ代（S8）

入山八重子（S10）
入山　房江（S10）
曽根てる子（S10）
中山　晴江（S15）
小井戸明子（S16）
飯塚　昭子（S17）

〽頃は建久四っの年
五月雨半の空曇り　サテ
駿甲相に誇りて
日本で名高き富士狩や　サテ
時の大将頼朝が
無聊慰むそが為に　サテ
伊豆と相模の諸大名
御狩の催しありし時　サテ
河津の撫子兄弟が
兄の一萬祐成と　サテ
弟箱王時致が
元服為して勇ましく　サテ
十八年が艱難を
今吹き返す天津風　サテ
激しき雨を幸と
模様も派手なる蝶千鳥　サテ
人目を包む蓑笠に
忍び込んだる狩陣屋　サテ
礫の合図に少将が
差し出す燈火吹き消して　サテ
知るべのお山は此方ぞや
時分はよしと兄弟は　サテ
難なく工藤の首をあげ
御寝所目がけて進み行く　サテ
道に仁王の忠常が
兄の祐成討ちとむる　サテ
弟時致大童
女の姿にゃ目もくれず　サテ
行かんとするを五郎丸
むんずと許り組み付いて　サテ
互いにへし合い捩り合い
時致縁をば踏みはずし
縄目の身とはなりにけり
頼朝公の御前にて
孝の道をば述べたつる
感ぜぬ者こそなかりける
実に千載孝行の誉
欽慕欽慕欽慕愉快愉快

○拳骨踊　忠臣蔵

伝承地　富岡市曽木
伝承者　入山トキ代（S8）
他六名前記に同じ

〽頃は元禄十四年
月は変れど同じ日の　サテ
空も師走の十四日
卍巴と降る雪を　サテ
天の与えと勇み立ち
だんだら筋の火事羽織　サテ
鎧の頭巾に身を固め
山よ川よの合言葉　サテ
吉良の屋敷の裏表
雉無く聞く鉄の門　サテ
寝耳に水の陣太鼓
轟く呼笛やときの声　サテ
女童にゃ目もくれず
刃向う敵を斬り払い　サテ
際なくさがす炭部屋に
仇師直首をあげ　サテ

主の御墓に手向つつ
容をあらため手を仕え　サテ
三年以前の御恨み
今こそ晴らし奉る　サテ
やがて臣等も御供と
西上のもとに腹切りて　サテ
常磐の松や萬松山
同じ御山の墓の上　サテ
骨は朽ちても名は朽ちぬ
人の情や泉岳寺　サテ
香の煙や松の露
今ぞ絶え間はなかりける
実に千載忠義の誉
欽慕欽慕欽慕　愉快愉快

○盆踊り（二段落とし）

伝承地　群馬郡榛名町上室田
伝承者　樋口　勝広（S9）
武井義一郎（T15）
樋口吉太郎（T8）
樋口　徳治（S24）

まま子三次

〽国は武蔵で秩父の郡
真門村にて百姓の喜八
元は由ある百姓なるが
親の代よりれい落としたし
田地田畑人手に渡し
今じゃ小作の日傭をとりて
送る月日は貧苦にせまる
今年又ぞろ北アメリカの
異国騒ぎに品川沖は
新規築立てお台場普請
これを聞きたる百姓の喜八
土をかついでかせいでこよと
支度整え我が家を出ずる
後に喜八が後添えおたく
ままの三次を明け暮れ共に
つらくあたれば三次郎こそは
親に孝行素直な生れ
生の親より育ての親を
機嫌とりとり後片づけて
母がつめたる弁当もって
草紙になって寺子屋へ急ぐ
三次精出し手習いしょうと
人形書く子に恥かく子供
頭かく子にけつかく子供
習字するのは三次が一人
習い残れどもう昼どきと
皆が弁当三次も共に
重を開いて昼食せんと
著を取らんとしたその時に
飯にたかりし頭の蠅が
ころりころりと皆死にうせる
これを見るよりお師匠様は
三次その飯しばらく待ちな
蠅の死んだはただごとならず
犬を呼ばわり試さんものと
犬はその飯食うより早く
もだえ苦しみ血へどを吐いて
すぐにその場に命を捨てる
さては三次の毒弁当は
確かおたくの仕業であろと
胸に納めてこれ三次郎や
今日はこちらに泊まってゆきな
言えば三次はありがた涙
聞いて下さいお師匠様よ
親の恥をば話すじゃないが
家に残れる妹たちは
赤いべべ着て毎日遊び
夜はおこたへねんねをしたり
おんぶされたりだっこをしたり
お乳飲んだり甘えるけれど
それを私はぶち叩かれて
寒い寒中に雪降る日にも

くされ袷せに足袋をはかず
水でぞうきんかけさせられて
顔も手足もひびあかぎれて
実につらいはま母親は
こうも常々非道にすると
湯屋で評判世間でうわさ
聞いて師匠はびっくり致し
されは尚更泊まってゆきな
言えば三次はありがた涙
今夜泊まるとあの母さんに
ぶたれたたかれせめくがつらい
三次泣く泣く師匠に別れ
家へ帰ればまま母おたく
今日の弁当皆食べたるか
はいの三次の言葉はにごる
まこと言わなきゃこうしてやると
すぐにかしわのけん棒持って
打ってかかればけん棒はずれ
そばにあったる三角薪を
力まかせに打ちすえまする
どうかかんにんして下しゃんせ
今日の弁当食べようとしたら
これを見るよりお師匠さんは
外の弁当食べさせました
泣いてわびるを耳にも入れず
三次体を荒縄かけて
土間に伏せたるあの大釜よ
湯玉煮えたつえん熱地獄
中へざんぶと打ちこみまする
かかるところへ手習い師匠
家の三次はどうしたものと
聞けばおたくは何知らぬ顔
家の三次は帰りがおそい
帰りの道草なまけておろうと
どうかお師匠お叱りませと
言えば師匠は不思議に思い
あちらこちらを見廻すうちに
土間に伏せたるあの大釜のそばへ
寄らんと致せばおたく
お火はこちらへとります程に
言えど師匠は耳にも入れず
おたくつきのけあの大釜の
ふたをとりのけ驚天いたす
三次姿は海老のように赤く
あわれなるかやゆであげられた
そこで師匠はお検死願う
すぐに検死の役人衆が
前へ来たればおたくはうしろ
裏の田んぼに追いつめられて
しめたしめたの声もろ共に
こころにおたくは引き立てられて
竹の矢来で十間四面
中に立てたが張りつけ柱
そこでおたくは張り上げられて
槍の穂先ででんがくざしよ
まま子持ったる皆人さんに
お気にさわるか知れないけれど
まま子持つ身のいましめでござる

やんやい

（注）二段落とし、石投げ、とあり、手踊りがある。盆や秋祭りには、大きな家の庭で歌い踊った。又、部落が合併したため、毎年のきめごとを確認する為の「大規約」という日があり、この日には三本杵で餅をつき、歌い、踊ったりした。楽器は、太鼓（又は樽）と笛。

○判官流ささら獅子舞川浦獅子舞の唄

伝承地　群馬郡倉淵村川浦
伝承者　中沢文五（T1）

〽前に来てお前がかりを眺むれば
みがき立てたるひえん柱
〽この宮はひだのたくみが建てた宮よ

くさび一つで四方かためた

京からくだりのかなえのびょうぶ
ひとえんさらりと、ひきたまわった

獅子の子は京で生まれて伊勢育ち
こーさしたは伊勢のおんはらい

さくらぎを二つにひきわけ
もんにたてても花が咲きそろう

七つの拍子やれ八つ拍子
九つ拍子に天狗拍子

もみじ散りて雲がたつ
これのところは花の都よ

奥山に立てた小笹のみごとさは
これのところが、花の都

天じくの天の川原のはたにこうそ
千草むすびのかりの戸をたてた
えんが切れればほむりほぐれる

ささらが見たくばいたどを出し
やれ板戸の上でもささらの三拍子

〳〵松にからまるつたの葉も
えんが切れればぽつりほぐれる

これのお庭をながむれば
こがねこくさが足にからまる
いざさらば、われらもちりにからまる

思いもよらぬ朝ぎりかおりて
それでめじしをかくさると申すことな

なんぼめじしをかくしても
ついに一度はめぐり合うとな

やくしのごむしょがついしれて
めじしおじしの肩を並べる

山がらが、山がおいとて里に出て
これのおにわに羽根を休める

白さぎが海のとなかへ巣を立てた
波にゆられてぱっとたち揃う

（注）「倉潟村の民俗」から歌詞を一部引用
（収録は〳〵印部分のみ）

○判官流ささら獅子舞水沼獅子舞の歌

伝承地　群馬郡倉潟村
伝承者　富田　林（S4）

獅子舞

子供

(1)宮廻り
宮廻り三面れいれんぎり
しりかしらおかざきひきはしゃぎり

(2)つじかため
つじかためよめご
かつぎおかざきひきはしゃぎり

(3)しりながら
しりながら獅子の子
おんべひきはしゃぎり

大人

(4)ぎんぎゃく
ぎんぎゃく入は十の字がっくり
しんぎょうびょうしひきはしゃぎり

(5)ささぐい
ささぐい入はささぐい
太郎やひきはしゃぎり

(6)うたぎり
うたぎり入はざっこふみ
うたぎりひきはしゃぎり

(7)つるぎ

つるぎ入はつるぎの舞
つんつんほねかえりひきはしゃぎり

(8)女獅子かくし

かさほこ廻り女獅子かくし
十の字（座って）
からばちおかざきひきはしゃぎり

唄の部

㈠宮廻り

(1)この宮は　この宮は
飛騨の大工の建てた宮
楔一つで四方固めた
楔一つで四方固めた

(2)緋炎の柱　緋炎の柱
さても見事に磨きたてた
さても見事に磨きたてた

㈡辻固め

お庭の様子心静かに眺むれば
さても見事な辻固めよ
さても見事な辻固めよ

㈢しりながら

(1)天竺てんの　天竺てんの
愛ぞめのかわらのはたにこそ
筑紫むすめかみのたたれよ
筑紫むすめかみのたたれよ

(2)女獅子との女獅子との
伊勢や熊野のご利生をもって
おさんの紐をばおときあれや
おさんの紐をばおときあれや

(3)獅子の子は　獅子の子は
生まれおちると伊勢育ち
腰に差したは伊勢のおはらい
腰に差したは伊勢のおはらい

㈣ぎんぎゃく

(1)ぎんぎゃく舞は　ぎんぎゃく舞は
腰に差したる小脇差
鍔も目貫もみな黄金よ
鍔も目貫もみな黄金よ

(2)このほどは
舞いぬ舞いぬと思えども
足がひき足で跳ぶに跳ばれぬ
足がひき足で跳ぶに跳ばれぬ

(3)奥山で　奥山で
けんけんほろりと鳴く鳥は
これぞ後家衆の籠の鳥
これぞ後家衆の籠の鳥

(4)お稲荷様は　お稲荷様は
前の障子をひきあけて
まえのささらを目にかけます
まえのささらを目にかけます

㈤笹喰い

立てた小笹の見事さよ
いどむ心は花の都よ
いどむ心は花の都よ

㈥うたぎり

ざっこみ
(1)京から下った唐絵のびょうぶ
ひとえにさらりと引回した
ひとえにさらりと引回した

(2)半分笛　半分笛
まいりきて　まいりきて

(3)これのお庭を眺むれば

(4)黄金小草が足にからまる

(5)いざさ吾らもきりをかぎての

㈦つるぎ

剣の舞は　剣の舞は
さても見事に舞いたりや
悪魔しょうげを踏みや静める
悪魔しょうげを踏みや静める

㈧女獅子かくし

(1)思いもよらぬ思いもよらぬ朝霧が
おりてそこで女獅子をかくしとられた
なにと女獅子をかくしても

遂に一度はめぐり合わせる
遂に一度はめぐり合わせる
(2)薬師の虚無僧がいましれて
女獅子男獅子が肩を並べた
女獅子男獅子が肩を並べた
(3)奥山の　奥山の
松にからまる蔦の葉も
縁起が切れればほろりほぐれる
縁起が切れればほろりほぐれる
(4)山がらが　山がらが
山が憂いとて里に出て
これのお庭で羽を休めた
これのお庭で羽を休めた
(5)越後では　越後では
なにが　ご遊山
茶屋の小娘と
小包小枕で寝た夜が遊山
小包小枕で寝た夜が遊山
(6)ふぞろの宿で　ふぞろの宿で
宿の娘に目がくれて
たつたにたたれぬふぞろの宿よ
たつたにたたれぬふぞろの宿よ
(7)白鷺が　白鷺が
海のとなかに巣をたてて
波にゆられてばっと立ちそろう
波にゆられてばっと立ちそろう
(8)余り踊れば光も散る
いざや若衆花見に行かい
いざや若衆花見に行かい

伝承者　生方倉之助（M36）
堀内　勇（T15）
生方田美夫（T15）
三沢　文雄（S4）
生方　明（S9）
他に五名

○豊年盆踊り音頭

伝承地　群馬郡倉淵村三ノ倉
伝承者　戸塚伝市郎

〽さあて一座の踊りこさんよ
出たよ出ましたばんから野郎が
〽今年しゃ豊年だよ穂に穂が咲いて
今年しゃ豊年だよ穂に穂が咲いて
〽道の小草もあの米がなる
道の小草もあの米がなる
〽さればこれから文句にかかる
さればこれから文句にかかる
〽かかる文句はなんやと聞けば
国定忠治を読み上げまする

（注）四、五年前までは、盆踊り唄として、うたわれていた。

平井権八

〽国は中国その名も高き
武家の家老に一人のせがれ
平井権八なおのりこそは
夫のけんかがいこんとなりて
同じ家中の本庄氏を
切って立ちのきあづまをさして
下る道にて桑名の渡し
わずかばかりの船賃故に
あまた船頭にとりかこまれて
すでにあやうきそのおりからに
これをみかねた一人の旅人
平井助けて我が家につれる
それは名におう東海道で
その名熊高　山ぞくなるが
それと権八夢さらしらず
その家うちには美人がござる
その夜権八ねまへとしのび
もうし若さんさむらいさんよ

○盆踊り（九つぶち）

伝承地　群馬郡箕郷町中善地

この家のあるじはとう賊なるを
知って泊まるか知らずでおるか
今宵お命あぶのうござる
わしも三河のほう家の生まれ
去年秋からこの家にとられ
長の月日を涙で暮らす
家名大事かさぞ両親が
あんじしやんすであろうと思う
お前見かけてお願い申す
どうぞ後生じゃ情のほどに
わしを連れ出しこの家を逃げて
故郷三河へ送りてたべと
くどきたてられ権八どのは
さすが由あるさむらいなれば
その夜わけから残らずきいて
さらばこの家の主をはじめ
手下とう賊みな切り殺し
そこでお前をおん連れ申す
二人ひそかに約束かため
娘かめ菊　立ち出てゆきやる
それと知らずに熊高どのは
手下あまたにささやきかける
今宵とめたる若ざむらいは
腰にさしたるひとふりこそは
こがね作りで名作ものよ

彼をあざむきつれ来りしは
これをうばわん　心のたくみ
奥の一間にねかせておいた
もはや時刻も夜中の頃よ
奥の一間に切りこむなれば
それと権八抜く手も見せず
主　とうぞく　手下のやつら
ついに残らずみな切り殺し
そこでかめ菊　手を引きつれて
駆れし三州矢荻の長者
一部しじゅうの話をなさる
長者夫婦は　よろこびいさみ
どうぞ我が家のむこにもせんと
すすめけれども権八こそは
なおも志かんの望みであれば
長者夫婦にことわりおいて
いとまごいして立たんとすれば
今はかめ菊せんかた涙
ぜひもなくなく金とり出して
心ばかりのはなむけなりと
言えば権八きのどく顔で
心ざしとていただきおさめ
花のお江戸へ急がれ下る
ゆけばほどなく川崎宿で
音に聞こえし万年屋とて

ここでしばらくお休みなされ
さればこれから品川までは
道は何里ととおたずねなさる
道はわずかに二里ほどなれど
鈴が森とて難所がござる
そこで助七　助八たちは
親をうたれしそのあだ　かたき
平井権八うちはたさんと
何の苦もなく殺してしまい
今は権八　安緒の思い
こころゆるみし　わかげのいたり
初回ざしきのそのはじまりに
いつか見たよな顔つきなりと
思う心が先へもつうじ
いっそかわいい若さむらいと
思う座敷もはやいけすぎて
床についたるそのむつごとに
さてはかめ菊　権八さんか
いちどわかれて　又おうことは
先の世からの約束なりと
思いついたるいぜんの話
二世も三世もその先までも
かわるまいとて互いのちぎり
それが悪事のおこりとなるか
人を殺して金とることが

夜毎日毎にたびかさなれば
なおもつもりて中仙道で
上州絹売り弥平を殺し
百両あまりの金うばいとり
なおもくるわへ　しのんで通う
悪事、万里で権八みぶん
今は天地に身のおきどころ
泣くも泣かれず覚悟をきめて
ご奉行様へと名のりでいでる
あわれなるかな権八みぶん
鈴が森にておしおきとなる
それを聞いたる輔隨院長兵衛
平井権八さらした首を
かかえもろうて目黒の寺へ
うずめほうむり　えこうをなさる
そのうわさをば聞く小紫
人目しのんでくるわを出でて
ひるも心は目黒の寺の
平井権八墓場の前に
何と白無垢　白しよう束で
二世をたすけてたまわりかしと
すがた懐剣のんどにあてて
なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
おつる涙は　ちぐさの露と
のちの世までも話しに残る

（注）地芝居の好きな古老がいたが、この人がごぜさんのあとをついて、歌や踊りを覚えてきて、村の若いもんに教えた。盆になると万灯を立て、それを囲んで歌い踊った。今は盆踊りにやるだけである。楽器は、笛と太鼓である。

○伊勢音頭くずし

伝承地　群馬郡箕郷町中善地
伝承者　生方倉之助（M36）

伊勢音頭

〽さても目出度い　うぐいす鳥は
浜辺の松の二の枝に
しばかや集めて　巣を作り
十二卵を産みそろえ
十二いっしょに身を開く
親子めでたく立つ時は　金の盃いただいて
えびす大黒　お酒もり
長柄のちょうしに泉酒
ふしぎの貝のまいざかな
ついでまわせば山奥へ　山奥へと命よ
長いほい　長いとのみおさめ
ささやれさんのせ――よいがな
ありゃりゃんりゃん　これは伊勢え――

青物づくし

さてもな珍し　八百屋の店で
あまた青物ある中で　二又大根いうことに
あんなカボチャの野郎めに
はらませられて　わしゃくやし
聞いていたのがとうがらし
ねぎやわさびもとんで出て
これこれもうし大根さん
そんなに　おなかが苦になれば
わたしと一緒に横町の　そば屋の角まで
ちょいとおいで、あげてね　おろしてほいからみにしてあげる
ささやれさんのせ――よいがな
ありゃりゃんりゃん
これは伊勢　このなんとでもせ――

二十四孝の歌

さても厳しき寒中に
もうそう竹の竹の子を
掘ってこいとの仰せにて
是非もなくなく立ち立でて
鍬をかついでみのとかさ
それは何故　母のため
末は吾が身の為となる
その忠心が天に知れ　兄弟ヨウ共にホイ

共に武士となる
ささやれさんのせ――よいがな
ありゃりゃんりゃん　これは伊勢の名
なんとでもせ――

（注）お伊勢参りに行った人が、習い覚えておゆろしをもらい、帰って来て村の衆に教えたのが今に残った。扇子を持って踊る優雅な踊りがある。

○数え歌

伝承地　群馬郡箕郷町中善地
伝承者　生方倉之助（M36）

中善地かぞえ歌

一つとや　人びと互いに助け合い
平和の里なる　中善地
二つとや　古き永禄年間に
善地の姓から　善地村
三つとや　箕郷の町でも古くから
果樹園と蚕じゃ　ひけとらぬ
四つとや　世にも名高き老松は
群馬の松です　駒寄に
五つとや　伊香保温泉へはひとまたぎ
榛名の山をば　うら庭に
六つとや　昔ながらの月波社
祭神　大山津見の神
七つとや　中を流れる車川
群馬の地名の発祥地
八つとや　やぼな村でも昔から
気だてと踊りにゃ　ひけとらぬ
九つとや　苦楽を共にと村人は
互いに協力　楽園地
十とや　遠い昔から今日までも
手拍子そろえて　盆踊り

（注）歌詞は昔からのものとは変わってきている。盆踊りの時にはいつも歌い踊って来たが、近年は踊れる人が少なくなり、たまにしか踊られない。扇子を持つ優雅な踊りが伝えられている。

○女獅子がくしの歌

伝承地　甘楽郡妙義町菅原
伝承者　神宮　幸雄（T?）

一、我がとのは奥山で高を揃えて
ならをしずめて
鈴の音をきく　鈴の音をきく
一、春雨庭のほこりを
打ちしめし
庭がよいとて心ゆるすな
いざさら我等も
霧をかいそう
一、うずらこうが今宵ばかり
芝山に明日は野に出て
なぐり芝山　なぐり芝山
一、十五の山のちちごの
色はかわるとも女獅子男獅子
心かわるな　心かわるな
一、思いもがけなく朝霧が下りて
そこで女獅子を
かくし取られた　かくし取られた
一、霧に女獅子をかくされて
心ならずも
くるう獅子かな　くるう獅子かな
一、男獅子こそ恋の道に
あこがせれてさわを昇りて
恋の歌よみ　恋の歌よみ
一、十七、八のこむねにさがりし
二つもの一つたもれや
恋の薬に　恋の薬に
一、南無薬師思いし妻に
あわせてたもれ錦のみこちよ
掛けてまいらしよ　掛けてまいらしよ
一、天竺天の相染河原の
はたにこそ宿世結の

神のたつりな　神のたつりな

一、誠に宿世の神ならば
　女獅子男獅子を
　結び合せて　結び合せて
一、笛ふきの香袋のおがとけて
　じゃこうこぼして
　匂おもしろ　匂おもしろ
一、薬師の御無草早めて候
　大花がくれに
　見えるうれしや　見えるうれしや
一、奥山でなるいかづちの
　おでやる如くは
　此の如く　此の如く
一、奥山で笛とたいこの音すれば
　女獅子男獅子が
　肩をならべる　肩をならべる
一、国からは急げもどれの
　文がくるおいとま申して
　もどりこささら　もどりこささら

○高根の舞

伝承地　甘楽郡妙義町菅原
伝承者　東間知代雄他8名

〽神々を神入れ給ふ神かどに
神かどに広ろく参らん綾も錦も

八幡山いでの山吹き咲きさかり
咲きさかりほめの喜び千代の御神楽

春は花夏は卵の花秋は菊
秋は菊冬はもみじを見るぞ目出たし

氏子おば栄も長き末はるか
末はるか今より後も思ふ如くに

つるかめのふみならしたる千代の後神楽
ふみなればままの事しのぶ富ぞ栄えん

○笹森稲荷神社代々神楽教詞

伝承地　甘楽郡甘楽町福島
伝承者　山口松太郎（T3）
　斎藤　市郎（T5）
　斎藤　武夫（T4）
　山田　處男（M45）
　堀口　大蔵（T3）
　松井　一松（T10）
　青柳　初雄（T15）
　松田　司（T12）

〽差し来たる潮の華を汲んで
互神の神楽を延く
八人の矢を止め殺々の鈴の音
底到の鼓の声
稔の鈴を振り立って神の眠りを覚えます
御神楽を斯の如くに仕給へば神も喜び
天の岩戸を押し開き天照皇大神宮
内宮が八十満社　外宮が四十満社
北に賛宮鈴ヶの御前磯部の社
天の岩戸あさまヶ岳
月の宮日の宮小安の宮百二十満社の御神
熱田大神皇孫矢剣大福天
日やり日の宮ケンダトウ
右往左往一の御前龍の宮八満社
凡ての天孫降臨を始め奉り
八百万神の二十八宿地の三十六斤
南戸北戸の三まいを照らす
左青龍右白虎
前は詞釈後は憲ム経内教華
六十余州の大小の
神祇の祓を清め申す
御岳教
トウガミエミタマヒガンゴンシーソン
リーコンタケ・ハラヒタマヒキヨメタモウトモウス（三回くり返す）

○獅子舞うた

伝承地　多野郡上野村塩の沢

伝承者　三沢　義信（M45）

ヒラの部

廻れ廻れ水車　遅く廻りて
関戸を廻るな　関戸を廻るな
京から降る　唐絵の屏風一重に
サラリト引きや廻した　サラリト引きや廻した
七ツ子が今年初めてササラする
良くはないけれどお目に掛け候　良くはないけれどお目に掛け候
太鼓打ち太鼓良打て人が聞く
他家のお人のお目が恥かし　他家のお人のお目が恥かし

森ヒラの部

参来て西の階打ち上がり
六社のお宮を拝むうれしや　六社のお宮を拝むうれしや
此の宮は何たる大工が建てたやら
木ばな木ばなに花を彫り候　木ばな木ばなに花を彫り候
白鳩が一の垂れ木や二の垂れ木
三の垂れ木で羽を休める
夏来れば森も林も蝉の虫
夏来れば森も林も蝉の虫
鳴を鎮めて唄の節聞け　鳴を鎮めて唄の節聞け
殿様の門の柱は白金で
黄金扉でお庭輝く　黄金扉でお庭輝く
何時迄も遊びたけれど陽の暮る
お暇申して戻りござさら　お暇申して戻りござさら
あれ見さい雨が降るそで雲が立つ
お暇申して戻りござさら　お暇申して戻りござさら
此の程は　参る参ると申したが
お暇申して戻りござさら　お暇申して戻りござさら
七夕も参る参ると申したが
お暇申して戻りござさら　お暇申して戻りござさら
参り来てこれのお宮を見申せば
四方八ツ棟ひはだぶき黄金扉で
お庭輝く　お庭輝く

ツクバ獅子の部

我親の植え立て育てた姫小松
技をたおめて羽子を休め　技をたおめて羽子を休め
十七のたけた姿に目がくれて
今のササラの切りを違えた　今のササラの切りを違えた
しゅうと殿如何に嫁御が憎いとて
岩をはかまに縫えと出しやれた　岩をはかまに縫えと出しやれた

D 座興歌

○神田節

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山　勇（T10）

〽何だかんだの神田橋　朝の五時頃見渡せば破れた
洋服に弁当箱さげて　てくてく歩くは月給九円（くえん）
自転車とばせる紳士を眺め　ほろりほろりと涙を
流し　神よ仏よよく聞きたまえ　うちでは山の神
麻糸つなぎの手内職　十四の娘は煙草の工場　匂
いはすれどもキザミも吸えず　いつもお金はない
務省　かくこそあるなれ　生存競争の活舞台

（注）滝廉太郎作曲「箱根山」の替歌

○カンカンノー

伝承地　多野郡上野村乙父
伝承者　古橋　三郎

かんかんのふきうれんす
きうはきうれんすきうはきうれんす
さんちょならへ
さァいほう、にいくわんさん
いんひんたいたい　やんあァろ
めんこがほうて
しんかんさんもへもんとはいい
ひいはうはう
てつこうにいくはんさん
きんちろめいしいなァ
ちうらい
ひやうつふほうしいらァさんばァ
ちいさんさんばんひいちいささい
もへもんとはいい
ひいはうひいはう
カンカンノー（別歌調）
カンカンノウ　キウレンス
キュワキュデス　サンショナラエ
サイホウニイカンサン、イッピンタイタイ
セアンロ　カンコガ　ヲハウデ
シンカンサン　ハァハァ　モエモントウエ
ヒイハウハウ

○カンカンノー替え歌

神田のう急火です
半鐘なるべェ
西風逃げさんせ
一家大概焼けたんべ
めんくが悪うて心配さ
もえようとは火ィ灰々
かんかんのう　きゆのです
きはきです
さんしょならえ
さあほおい、みりかんさん
いつぴんだいだい
やははんろ　ちんぴがからくて
すりかんさん
トテッラ　ジャン　シャン
トテッラ　ジャン　シャン

E　語り物・祝福芸の歌

○春駒歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　塚越　真一（T4）
　　戸塚伝市郎（M38）

（前唄）
〽サアサのりこめはねこめ蚕飼の三吉
のったらはなすなしっかとかいこめ
（本唄）
春の始めの春駒なんぞ
夢に見てさえよいとや申す

十七八なるねえさん方が
しまの前掛紅染のたすき

ひと羽はけば一千両が蚕飼い
ふた羽はけば二千両が蚕飼い
（※）以上収録歌詞

左に袂に三日三夜
右に袂に三日三夜
両方合わせて六日六夜
六日六夜のその間にて

暖め申せばぬくとめ申す
三日に見初めて四日に青む

五日にさらりとおいでのお蚕は
お出がよければくべき種は

桑のめぐみが良いとや申す
これより南は八反畑

（注）利根郡川場村門前の唄とほとんど同様で、一部歌詞が異なる程度である。

○川丈十三里くどき節

伝承地　多野郡万場町
伝承者　町田　清七（T11）
松田庚子松（M33）
宮崎　福蔵（M40）
新井　清七（T5）

端唄1、ハアーハアーエー
お手が揃えばたのみィますぞぇー
2、ハアーハアーエー
揃うた揃うたよ踊り子が踊うてょー
3、ハアーハアーエー
稲の出穂よりなおよく揃うてよー
4、ハアーハアーエー
用意がよければお願いするよー

段文
ハアーさても一座のお客様よ
私みたいなとんまな者がー
一寸この場を借りうけまして
ハアー何か一言読みあげまする
文句ちがいや仮名まちがいは
ひらにその儀はお許しなされ
ハアー許しなされば文句にかかる
古い文句にさて候らえど
甘楽くどきで読みあげまする
ハアーここに新版山中くどき
国は上州甘楽の郡（こおり）
神流川をば恋路にたとえ
ハアー水は源浜平より
色の白井にわしゃほれこんで
関所やぶって碓根平まで
ハアー横原はらんで中越しまでも
小春の心より私の心
思案中村気は乙父郷よ
ハアー乙母づれに乙川和こえて
桧の峠を手に手をとって
髪の勝山、新羽ときけば

ハアー野栗判官よくにた殿子
　尾附しょたいに土地平原にて
　こうも神ケ原、三津川を
ハアー渡るおもいは魚尾ことばかり
　高八木、青梨、気は相原へ
　こよい一夜は小平どまり
ハアー黒田しんくにやわしょいとわねど
　万場またんせ生利の坂も
　今日とすごえて麻生こえて
ハアー大寄相木だだひと筋に
　法久、坂原、峠もこえて
　保美濃、譲原とてよりも
ハアー主と私は鬼石の宿で
　ともに仲よく暮ましょうよ
　ともに楽しく送りましょうよ
端唄1、ハアーハアーエー
　もはや定規のお時刻なればよー
2、ハアーハアーエー
　下手な私は段止めましてよー
3、ハアーハアーエー
　またので縁で読み上げますよー
4、ハアーハアーエー
　後は御先生によろしく頼むよー

F 子守歌

眠らりょか

○大黒様

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山　勇（T10）

〽大黒様という人は　一に俵を積み上げて
二でにっこり笑って　三で盃いただいて
四つで世の中良いように　五つでいつもにこにこと　六つで無病息災に　七つで何事なきように
八つ　で屋敷を広めて　九つお倉を建て並べ　十でとうとうおさまった

（注）正月に、家の中で、あやしながら歌った

○子守歌

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本　きし（M45）

〽ねんねんほろろよ　ねんほろよ
坊やは良い子だねんねしな　ねんねのおはとを歌いましょ　泣かずにねんねん　ねんねしな
〽坊やは乳母なく母もなし　雪は降る降る夜は長しねんねんほろろと泣いたとて　どうしてねんねはおまんに抱かしょ
おまんはどこに行った
油買い茶買い
油屋の前で　すべって転んで
油一升こぼして
赤いべこよごした
おっかちゃんにおこられて
おっとちゃんにほめられた

○子守歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽ねんねん　ねこのけつに　ガニがはいこんだ
やっとこさっとこ　引っぱり出したら　またはいこんだ
〽ねんねん　ねこのけつに　ガニがはいこんだ
一匹だと思ったら　二匹はいこんだ
二匹だと思ったら　三匹はいこんだ
（以下、数をふやしながら続ける）

（注）背中に子どもをおぶって、寝かせるようにしずかに歌う。

○子守歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽お月さま　いくつ　十三、七つ
（まだ年は若いね）
七つの年に　ねんねを生んで
だーれに抱かしょ

G　わらべ歌

○お手玉歌

伝承地　高崎市八幡町
伝承者　篠原　ミイ（T6）

一つや　しんとく丸が可愛さに　継親様に折られて
二つや　ふた親様があるならば　こういうこともあるまいに
三つや　三つの年からかあちゃんに　別れてゆくのもつらいもの
四つや　よその人まで可愛いと　涙をこぼさぬ者はない
五つや　いつまでこうしていたとても　こういうこともあるまいに
六つや　無理にすすめて暇もらい　西国四国で歩きましょ
七つや　泣き泣きのみこむわが妻は　帰りににっこり笑いましょ
八つや　山に寝ようか野に寝ようか　狼様にのまれよか
九つや　ここはどこだと聞いたなら　ここは安中もりのした
十とや　歳神様のお祭は　今月来月再来月

○お正月門松

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本　きし（M45）

〽お正月門松　二月は初午　三月ひなさま　四月は釈迦様　五月はおのぼり　六月てんのん　七月七夕八月はっさく　九月は菊月　十月おいべす講　霜月師走　ひょうたんふくべ　こまもんじゃ一貫よ

（注）正月の羽根つきの歌

○お正月三日の日

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本　きし（M45）

〽お正月三日の日　大師様のお祭で　おばさんのところへ行ったらば　おイモの煮えたのつん出してもひとつおくれと言ったらば　大きな目玉でにらんだ

○おんさかさかさか

伝承地　高崎市倉賀野町
伝承者　高山　勇（T10）

〽おんさかさかさか　酒屋でどん　四谷でどん　あすは赤坂通り町　サラサラ落ちるはお茶の水　お茶の水のまん中で　十七島田の姉さんが　お駕籠に乗ろうとまごついて　ひい　ふう　みい　よいつ　むう　なな　や　この　と

唐から下ったお茶屋さん　お茶は一枡いくらでしょう　三百三十三匁　いまちと負けないか　ひちゃらかほい　そんなに負けたら損だもの　お前のことなら負けてやる　ああ嬉しや　こう嬉しい　隣のおじさんちょいとおいで　登り山登って　下り山下って　見えたか見えないか　目の隠し

（注）まりつきの歌

○正月せ

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本　きし（M45）

〽正月せ　障子開けたら万歳が　鼓を打とうか打つまいか　オヤ打つまいか

〽二月せ　二月三日は寺参り　あすは彼岸のお中日　オヤお中日

〽三月せ　桜花（おうかばな）よりおひな様　飾って見事な内裏様　オヤ内裏様

〽四月せ　死んでまた来るお釈迦様　竹のこびしゃくでつつし花　オヤつつし花

〽五月せ　ごんごん桜の前掛を　正月しめよと裁ておいた　オヤ裁ておいた

〽六月せ　ろくに田の草取らないに　そんなにおな
かがすくのかい　オヤすくのかい
〽七月せ　質屋のお蔵は混雑で　入れたり出したり
流したり　オヤ流したり
〽八月せ　蜂に刺されて泣いて来て　何かお薬ある
まいか　オヤあるまいか
〽九月せ　草の中にはひき蛙　姉さん一匹くれない
か　オヤくれないか
〽十月せ　十五やお月さん見てはねる　うさぎが餅
ついて喜んでる　オヤ喜んでる
〽十一せ　十一ひのちは蔵開き　お蔵を開いて祝い
ましょ　オヤ祝いましょ
〽十二とせ　十二の神楽は火がとんで　ぽっぽと燃
えるは恐ろしい　オヤ恐ろしい
〽十三せ　三千世界をたずねても　親より恋しいも
のはない　オヤものはない
〽十四とせ　縞の財布に金入れて　お馬こち来い金
くれる　オヤ金くれる
〽十五とせ　十五になる子の学生が　学校へでるの
でお祝い日　オヤお祝い日
〽おてんとしょう　まずまず一貫かしましたよ

（注）まりつき。正月に歌った

○一人来な二人来な

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本きし（M45）

〽一人来な二人来な　見てきな寄ってきな　いつ来
てみても　ななこの帯を　八の字に締めて九文の
足袋を　丁度にはいて　まずまず一貫かしました
よ

（注）まりつきの歌。最後の行は「くるりと
まわって一貫しょ」とも歌う。

○とんとん手まりの

伝承地　高崎市石原町
伝承者　松本　きし（M45）

〽とんとん手まりの音の数
ひい、ふう、みっつ、四つ、五つ、
六つと数えて七つになると
私は尋常一年生
ああ嬉しいな嬉しいな

（注）まりつき

○羽根つき唄

伝承地　高崎市常盤町
伝承者　秋山　和子（T5）

〽一人きな
二人きな
三人きたなら
よ四っといで
いつ五きてみても
なな七この帯を
八の字にしめて
く九るりとまわって
一貫しょ

○お月様

伝承地　高崎市常盤町
伝承者　秋山　和子（T5）

〽お月様えーらいな
お日様の兄弟で
まんまるくなったり
くしの様になったり
春夏秋冬日本中を照らす

○監獄のうた

伝承地　高崎市常盤町
伝承者　秋山　和子（T5）

〽四面煉瓦に囲まれて

わが前橋の監獄は
ひき割り飯に茶をかけて
おかずは菜葉に生味噌よ

○縄とび歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽大波　小波
ぐるりと回って　ねこの目

（注）長い縄の左右を二人で持って横に振りながら「大波小波」、回転させながら「ぐるりと回ってねこの目」と歌う。続けて一回、二回三回と回す。

○縄とび歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽おじょうさんお入(はい)んなさい
ジャンケンポン
負けたら　さっさとお出なさい
お次ぎ　お入り
ジャンケンポンヨ　（あいこでしよ）
負けたら　さっさとお出なさい

○縄飛び歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽万世一系(ばんせいいっけい)　皇国の
せかいは世界にはんけさし
五月の二十七日は
海軍戦史　ためしとて

○縄飛び歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽郵便屋さんの博覧会で
もうかれこれ十二時だ
一時　二時　三時　四時　五時　六時　七時　八時　九時　十時　十一時　十二時

○鬼ごっこ歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽今年のぼたんは　よいぼたん
お耳をからげて　スッポンポン
もう一つおまけて　スッポンポン
○わたしまぜて
×だめ
○どうして
×だれかさんの姿は　蛇のようだ
○わたし　×違う
○わたし　×そう
○キャーッ

○尻取り歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽いろはに金米糖　金米糖は白い
白いは兎　兎ははねる
はねるはノミ　ノミは赤い
赤いはほおずき　ほおずきは鳴る
鳴るはおなら　おならはくさい
くさいはうんこ　うんこは黄色い
黄色いはバナナ　バナナは高い
高いは十二階　十二階はこわい
こわいはお化け　お化けは消える

消えるは電気　電気は光る
光はおやじのはげ頭

○尻取り歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽陸軍の　乃木さんが　がい戦す　すずめ　目白
ロシヤ　野蛮国　クロパトキン　金玉　マカロー
フ　ふんどし　しめた　高じゃっぽ　ぼんやり
李鴻章　しょうたればあのまんこの毛

○まりつき歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽家の隣の　三毛ねこは
おしろいつけて　紅つけて
小さな橋を渡る時
人に見られて　ちょいと隠す

（注）まりをつきながら歌い、最後に「かくす」で、まりをすその中に隠す。

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

一つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
二つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
三つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
四つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
五つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
六つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
七つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
八つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
九つ　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ
十　リットラ　ラット　リットセ　すが法華経の
高千穂の　チョンガラメ

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽千里のおばさん　遊ぼうよ
おばさんは用があって遊べない
そんなこといわないで遊ぼうよ
おばさんのおこんじょ

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

一つや　俊徳丸はかわいそうに
　まま親さまにいのられて
二つや　二親様があるならば
　こういうおこともあるまいに
三つや　三つの年から母さんに
　別れて行くのもつらいもの
四つや　よその人でも他人でも
　涙をこぼさぬ者はない
五つや　いつまでこうしていたとても
　こういう病気は治るまい
六つや　無理にすすめて暇もらい

西国四国歩きましょう
七つや　涙ながらの後徳は
　ととさんさよなと人がいう
八つや　山に寝よか野に寝よか
　おおかみ様に食われよか
九つや　ここはどこだと聞いたらば
　泉の宿だと人がいう
十や　年神様のお飾りは　みかんかちぐりやぶこうじ
　千両万両億万両
　まずまずいっかん　貸し申した

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽一かけ　二かけて　三かけて
四かけて　五かけて　八かけて
橋の欄干　手を腰に
はるか向こうを眺むれば
十七、八の姉さんが
花や線香　手に持って
姉さん　姉さん　どこ行くの
わたしは九州鹿児島の
西郷隆盛　娘なり
明治十年　戦いて
討たれて死んだ　父親の
お墓参りに　参ります
お墓の前で　手を合わせ
なむあみだ仏　あみだ仏

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽一番　初めは一の宮
二また　日光中禅寺
三また　佐倉の宗五郎
四また　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つ　村々鎮守様
七つは　成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の弘法さん
十で　東京心願寺
これほど心願かけたとて
浪子の病は治るまい
武夫が戦争に行くときに
白い白い真っ白い
ハンカチ振り振り　ねえあなた
早く帰ってちょうだいな
ごうごう　ごうごうと　鳴る汽車は
武夫と浪子の　別れ汽車
二度と逢えない　汽車の窓
泣いて血を吐く　ほととぎす
泣いて血を吐く　ほととぎす

○まりつき歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽オンサカ　サカ　サカ　酒屋でドン　四谷でドン
明日は赤坂　通り町
さらさら落ちるは　お茶の水
お茶の水の真ん中で
十七島田の嫁さんが　白いハンカチ　白足袋で
おかごに乗ろうと　つまづいて
〽ヒーヤ　フ、ミーヤ　ヨ、イーツム、ナーナ　ヤ、コーノト
トウから下った　お芋屋さん
お芋は一升いくらです　三百三十三匁

いまちっとまけないか　ヒッチャラッカホイ
そんなに負ければ損だもの
お前のことならまけてやる
ああうれしや　こううれし
隣のじいや　ちょいとおいで
隣のばあや　ちょいとおいで
芋の煮付けで　お茶飲もう
登り山登って　下り山下って
見えたか　見えないか　目の隠し

○はねつき歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英世（T12）

〽一人来な　二人来な
三人来たらば　寄っといで（寄ってきな）
いつ来てみても　ななこの帯を
八の字にしめて　九文の足袋を
ちょうどよく　はいて
パッコンパッコン　通りよ

○お手玉歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）

大石よし江（S3）

一ちょ　がっきりしょ　一ちょ
二ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ
三ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ
五ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ
六ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ　六ちょ
七ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ　六ちょ　七ちょ
八ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ　六ちょ　七ちょ　八ちょ
九ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ　六ちょ　七ちょ　八ちょ
九ちょ
十ちょ　がっきりしょ　一ちょ　二ちょ　三ちょ
四ちょ　五ちょ　六ちょ　七ちょ　八ちょ
九ちょ　十ちょ

○お手玉歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）

大石よし江（S3）

〽一つ　ガーラガラ
二つ　福寿草
三つ　みかんの木
四つ　ようじの木
五つ　いちょうの木
六つ　むくれんじ
七つ　南天葉
八つ　八重桜
九つ　小梅の木
十で　丸めて　あまちんぐり　かっちんぐり　お
こしが白くて
ちょうどいっかん貸した
貸した　貸した　貸した

○お手玉歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）

大石よし江（S3）

〽おひーと　おひーと
おひーと下ろして　おっさらい
〽おふーた　おふーた
おふーた下ろして　おっさらい
〽おみんなさらって　おっさらい

〽おちにーく　おちにーく
おちにく下ろして　おっさらい
〽おてしゃーみ　おてしゃーみ
おてしゃみ下ろして　おっさらい
〽おひだーり　だーり
だらりこどんよ
〽なかよし　つまよし　おっさらい
〽ひーり　ひーり　ひーり
ちょんぎり　おっさらい
〽おでんぶーち　おでんぶーち
おでんぶち下ろして　おっさらい
〽ちっちゃい橋　くーぐれ
ちっちゃい橋　くーぐれ
（でっかい橋　くーぐれ
でっかい橋　くーぐれ）
〽どの玉でも　突きやんせ
〽いい玉もらった　いい玉もらった
下ろして　おっさらい
〽さら屋敷
〽さらりといっかん　どうじゃいな

○お手玉歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）

大石よし江（S3）

〽正月セ　障子あけたら万歳が
鼓を打とうか打つまいか　オヤ打つまいか
〽二月セ　二日・三日は寺参り
明日は彼岸のお中日　オヤお中日
〽三月セ　桜花よりおひな様
飾って見事な内裏様　オヤ内裏様
〽四月セ　死んでまた来るお釈迦様
竹の子びしゃくでつつじ花　オヤつつじ花
〽五月セ　ごんごん桜の前掛を
正月締めよと裁て置いた　オヤ裁て置いた
〽六月セ　ろくに田の草あるまいに
そんなにお腹が立つのかい　オヤ立つのかい
〽七月セ　質屋のお蔵は混雑で
入れたり出したり流したり　オヤ流したり
〽八月セ　蜂に刺されて泣いてきた
何かお薬あるまいか　オヤあるまいか
〽九月セ　草の中にはひきがえる
姉さん一匹下さいな　オヤ下さいな
〽十月セ　重箱抱えてどこ行くの
わたしゃ田んぼへ稲刈りに　オヤ稲刈りに
〽十一月セ　十一・二日は倉開き
お倉を開いて祝いましょ　オヤ祝いましょ
〽十二月セ　十二のお倉に火がついて
ぼっぼっと燃えるは恐ろしや　オヤ恐ろしや
〽十三月セ　十三世界を尋ねても
親ほど恋しいものはない　オヤものはない

○集団遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）
関口　芳江（S3）

○花いちもんめ

○となりのおばさん　お茶飲みおいで
×鬼が恐くて行けません
○×それがよかろか　どの子が欲しい
○あの子が欲しい
×あの子じゃわからん
○この子が欲しい
×この子じゃわからん
○ミッちゃんが欲しい
×ヨッちゃんが欲しい
○勝ってうれしい　花いちもんめ
×負けてくやしい　花いちもんめ

（注）二組が向き合い問答しながら相手の子を取り合う。

○手遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽セッセッセーノ　ヨイヨイヨイ
オチャラカ　オチャラカ　オチャラカホイ

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽だれかさんの頭に
ちょんがら虫がたかった
それを落とすと　はげっちょになーる

（注）友だちの髪にごみなどがついたのを見つけると、歌いはやす。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽ドレミッチャン　耳だれ　目がくっちゃくちゃ
頭の横ちょに　はげがある
はげはシラミの運動会
ハエが止まると　ちょいとすべる

（注）「目がくっちゃくちゃ」を「目がやぶ目」ともいう。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽一年生が芋掘って　二年生が煮て食って
三年生が酒飲んで　四年生が酔ばらって
五年生がごまして　六年生が牢屋に入った

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　関口　芳江（S3）

〽おっちゃんどこだい　山方かい
弁当なんだい　焼き餅かい
おかずはなんだいじり焼きかい

（注）工事人夫などが休んでいる時に、からかう歌。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽月夜の晩に　火事があって
水道の水で　消したなら
木兵衛の金玉　どろだらけ

（注）三節以下を「水木さんの金玉焼いてどろかけた」ともいう。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽だれかさんとだれかさんが寄り合って
寄り屋の前で　屁ひった
いくつひった　十ひった
遠くの山へ　ひりこんだ

（注）最終節を「火が飛んだ」ともいう。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽一つ二つ　三べの子
三つ　よって　くそかき棒

○遊び歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽うなぎ　どんぶり鉢　渡れば渡れ
うなぎ　どんぶり鉢　渡れば渡る
うなぎ　どんぶり鉢　渡れば渡れ
うなぎ　どんぶり鉢　渡れば渡る
（以下くり返す）

（注）十人以上の子が二列に向き合って手を取り、その上に一人づつ乗せて腹ばいにして、胴上げして先へ渡しながら歌う。

○遊び歌

伝承地　藤岡市上落合
伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽草履　きんじょ　きんじょ
お玉が　たんぐり　たんぐり
おくりのくいの
うん　そうさあな
〽草履　きんじょ　きんじょ
お玉が　たんぐり　たんぐり

小用（しょうよう）に行く時　便所に行く時
逃げっこなーしょ

（注）鬼ごっこ遊びで、草履を隠して鬼に見付けさせる時に、回りではやしたてた。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越英代（T12）

〽これをだれかに　上げようか
かがつくから　考えよう
よがつくから　よそう
そがつくから　損だ
だがつくから　だめ
めがつくから　めっこ
こがつくから　こっつん

（注）物を見せて人にくれるふりをして、じらしながらくれないで歌う。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽あぶく立った　煮え立った
煮えたかどうだか　食べてみな

まだまだ煮えないよ
〽あぶく立った　煮え立った
煮えたかどうだか　食べてみな
ウンガ　ウンガ　ウンガ

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽一ちゃんちの　二ちゃんが
三ちゃんちで　四（よ）こいて
五（ご）めんもいわずに　いっちゃった

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷
伝承者　堀越　英代（T12）

〽これをだれかに　たからんしょ
かんしょ
かんしょのおみやげ　まだ来ない

（注）何かの物を見せて、くれるまねをして、はぐらかしてやらない遊び。

○遊び歌

伝承地　藤岡市本郷

伝承者　堀越　英代（T12）

〽どっちがよかんべ
神さまの　いうとおり

（注）二つの物を交互に指で突きながら歌い、最後の「り」で突いたほうがいいといって取る。

○遊び歌

伝承地　藤岡市上落合

伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽そうだ　そうだ
そうだ村の村長さんが
ソーダ飲んで死んだそうだ
葬式まんじゅうは　でっかいそうだ
中にはあんこがないそうだ

（注）子どもが二、三人で声はり上げて歌うだけで動作はない。

○遊び歌

伝承地　藤岡市上落合

伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽見世物小屋の　おばさんが
しょっぱい声を　はり上げて
とんと落とした　からくりは
むかしゃ　東海道で初上り
おかごでお供で　ホイノホイノホイ

（注）数人の子が帰り道などで、声をはり上げて歌うだけ。

○遊び歌

伝承地　藤岡市上落合

伝承者　浅見　之枝（T9）
大石よし江（S3）

〽めくらの友よ　知らぬ間に
隠れた人が　一人ある
その名はだれで　ありましょか
頭に何とかちんの　付いた人
頭にあの字の　付いた人

（注）集団で手をつないで輪になり、中に鬼が一人目隠ししてしゃがみ、後に隠れた人を当てさせる遊びの時に歌う。

○数え歌

伝承地　藤岡市本郷

伝承者　堀越　英代（T12）

〽福　徳　宝　貧乏　金持　幸い

（注）着ている着物の枚数を上から数えて、四枚なら「貧乏」だという。六番目「幸い」を「大尽」ともいう。

○悪態歌

伝承地　藤岡市本郷

伝承者　堀越　英代（T12）

〽おっかあ　おっかあ　銭くんな
一銭もらって　鉤買って
おっかあのまんこを　釣り上げた

○手まりうた

伝承地　富岡市下丹生

伝承者　吉田　こと（M43）
渡辺　けい（T7）
棚橋　しげ（T2）
吉田　きち（T8）
吉田　きぬ（T14）
高橋　と志（T7）

牛若丸

石原和三郎作詞

〽父は尾張の露と消え
母は平家にとらえられ
兄は伊豆に流されて
おのれひとりは鞍馬山
仇の平家亡ぼして
我が家源氏を興さんと
昼は学問剣術は
人目もしのぶ夜の業
七つ道具を投げ出して
弁慶あやまる五条橋
金売吉次がお共して
落ち行く道は奥州路
（以下略）

○手まりうた

伝承地　富岡市下丹生
伝承者　吉田　こと（M43）
他六名前記に同

〽一番初めが一ノ宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々鎮守様
七つは成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の高野山
十で　東京博覧会

黒崎　すえ（T8）

○手まりうた

伝承地　安中市上間仁田
伝承者　高橋松寿（M37）

ランプ屋さん

〽ランプ屋さん
わたしゃあなたに
ホヤホヤほれた
シンのシンのシンの
あることみてほれた
カサがあるとはつゆ知らず
・・・ひっつられて
いたわいな　チョイトネ

○手まりうた

伝承地　安中市上間仁田

天神さま

〽天神様と云う人は
お名を菅原道真
学問深く徳深く
君の忠義の心あつし

○手まりうた

伝承地　安中市上間仁田
伝承者　高橋松寿（M37）

〽丸山土手から東をみればねー
　みればねー
御門のはしとびらに
おさよさんと　書いたとねー
　かいたとねー
御門のとびらに
およめさんと　書いたとねー
　かいたとねー
ちょうど一かん　かしたよ
ちょうど一かん　かしたよ

伝承者　高橋松寿（M37）

○お手玉かぞえ歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山スエ子（M43）
浜名　トラ（T6）
原田　まさ（M43）
荻原ナツメ（T4）

〽一番初めは一ノ宮
二また日光中禅寺
三また桜の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々鎮守様
七つは成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の高野山
十で東京博覧会

○羽つき歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山スエ子（M43）
他三名前記に同

〽ひとりきて　ふたりきな
三人来て　よって来な
いつきて　みても
ななこのおびを
やのじにしめて
くるりとまわって
いっかんしよ

○はねつき歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山スエ子（M43）
他三名前記に同

〽一月門松
二月初午
三月ひな様
四月はしゃか様
五月はおのぼり
六月天王
七月たなばた
八月はっさく
九月は菊月
十月おいべすこ
霜月師走
ひょうたんふくべ
小まもの一貫しょ

○はねつき歌

伝承地　群馬郡倉淵村権田
伝承者　丸山スエ子（M43）
浜名　トラ（大6）

〽正月三日は大師様のお祭りで
おばさんところへ行ったらば
芋をにてつんだした
もう一つおくれと言ったらば
ばばあがよこ目でにいらんだ

○あやおり歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山　スエ（M43）
浜名　トラ（大6）
原田　まさ（M43）
荻原ナツメ（大4）

〽おいべす様という人は
一に俵をふんまいて
二ににっこりわあらって
三に酒を作って
四つで世の中よいように
五つで泉のわくように
六つで無病そくさいに
七つで何事ないように

八つで屋しきをたいらげて
九つでこぐらをぶっ立てて
十でとっくりおさまった

○まりつき歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山　スエ（M43）
浜名　トラ（大6）
原田　まさ（M43）
荻原ナツメ（大4）

〽正月は松立てて竹立てて
小供のよろこぶお正月
だんなのきらいな大晦日
一夜あければ元旦で
年始のご祝儀申しましょ
おたばこぼんお茶もって来い
吸物なんぞ早もって来い
ひい　ふう　みい　よう　いつ
むう　なな　やあ　ここ　とう
とうがら下ったお芋屋さん
お芋は一升いくらだね
三百三十三もんめ
いまちとまけねかーちゃらかぼん
ああうれし　ああうれし
となりのおじちゃんにちょっとおいで
となりのおばちゃんもちょっとおいで
しぼり山をしぼって下り山を下って
めえたかめえねか目のかくし
ここで一貫かしました

○まりつき歌

伝承地　群馬郡倉淵村権田
伝承者　丸山スエ子（M43）
浜名　トラ（T6）
荻原ナツメ（T4）

〽向こうの小山で鳴く鳥は、
チュウチュウ鳥かめんどりか
忠三郎のみやげに何もろた
銀のかんざしもおらった
屏風の除においたらば
チュウチュウねずみがひいてった
どこからどこまでひいてった
鎌倉街道の真中で
一ぬけ二ぬけ三ぬけ桜
桜の下で坊ちゃんが
蜂にチンコさされて
痛えとも言わずかえいとも言わず
ただ泣くばかり

（注）他のまりつき歌によくみられる歌詞で、「一貫かしました」、「一貫かし申した」等が最後につかない。思い出して歌ってもらったため、わすれてしまったのか。

○まりつき歌

伝承地　群馬郡倉淵村権田
伝承者　丸山スエ子（M43）
浜名　トラ（大6）
荻原ナツメ（大4）

〽おらがおばごはよいおばご
目にかっぱに茶の小袖
針の山にもねて見たが
松葉にさされて目があけぬ
ここはどこかと聞いたれば
ここは安中森の下
森の下のお茶屋の娘が
一つでは乳をのみそろ
二つでは乳にはなれて
三つでは水をくみそろ
四つでは用を足しそろ
五つでは糸を取りそろ
六つではむこをとりそろ

七つではななこのお機をおりそろへ
八つでは約束そろへて

（注）大正5、6年頃にはやったまりつき歌であるという。

○しつけの歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　丸山スエ子（M43）
浜名　トラ（T6）
原田　まさ（M43）
荻原ナツメ（T4）

〽カラスがカアカア泣いている
スズメがチューチュー泣いている
障子が明るくなってきた
早くおきねとおそくなる
着物をきかえおびをしめ
たらいに水をくみ入れて
ようじを使い口そそぎ
顔をばていねいによく洗い
きれいになったらおはようと
（元気に）あいさついたしましょう
ごはんをしずかにいただいて
かみや手ぬぐい忘れずに
持ったら行きましょ学校へ
さっさと歩いて遅れずに
今日も行きましょ学校へ
今日も行きましょ学校へ

（注）途中の（元気に）と最後の一フレーズはうたう都合上、つけ加えたものである。

○坊さん坊さん

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　朝香　丞（M41）

〽坊さん坊さんどこ行くね
私たんぼへ稲刈りに
それなら私もつれやんせ
御前つれてがじゃまになる
後のちょんまげあててごらんよ

（注）唄い手によれば、カゴメカゴメの遊びと同様の遊びをした時に唄ったと言う。

○かたつむりの歌

伝承地　群馬郡倉淵村全域
伝承者　朝香　丞（M41）

〽でんでんむしむしかたつむり
御前の頭はどこにある
角出せやり出せ
頭出せ

○ももたろうの歌

伝承地　群馬郡倉淵村三ノ倉
伝承者　朝香　丞（M41）

〽桃太郎さん桃太郎さん
御腰に付けたきみだんご
一ツ私に下さいな
やりましょう　やりましょう
これからおにのせいばつに
ついて行くならやりましょう

（注）「やりましょうやりましょう」の部分を「それやるぞ、それやるぞ」として歌う場合もある。

○お正月の唄（もち）

伝承地　多野郡新町
伝承者　土屋ムツミ（M31）

一つ　火鉢でやいたもち
二つ　ふくふくふくれたもち
三つ　みごとなさとうもち
四つ　吉野のさくらもち

五つ　いつかのかたいもち
六つ　むしゃむしゃたべたもち
七つ　七草ぞうにもち
八つ　矢島のかしわもち
九つ　こうやのあわのもち
十　父ちゃんたべたもち
（注）家族でもちやきしてうたう。歌曲は自由

○カゴメの唄

伝承地多野郡新町
伝承地　土屋ムツミ（M31）

籠目籠目
籠の中の鳥は
いついつ出やる
夜あけの晩に
鶴と亀がすべって
後の正面誰
（注）普通のカゴメの唄とちがった節奏である。

○数え唄

伝承地　多野郡新町
伝承者　田島　くに（大12）

〽正月セ障子あければ万才か
つづみと太鼓の唄の声サ唄の声
二月セ二度三度の墓まいり
明日は彼岸のお中日
三月セ桜花にもおひな様
かざって見事の内裏様サ内裏様
四月死んで又来るお釈迦様
きれには茶にこま茶かサこま茶か茶
五月セこんこんばやりの前掛を
お正月掛けようと取っといたサ取っといた
六月セろくに田の草取らないで
こじょ飯たべると泣いていたサ泣いていた
七月セ質屋へおいらが金借りに
入れたり出したり流したりサ流したり
八月セ蜂にさされて泣いている
姉ちゃんお薬ないかいなサないかいな
九月セ草の中にも虫がいる
兄ちゃんこの虫とってくれサとってくれ
十月セ重箱たたいてどこへゆく
わたしやおいべす講のおよばれにサおよばれに
十一月セ……（以下略）

○お手玉遊び

伝承地　多野郡万場町
伝承者　三沢　義信（M45）

一つ　がらがら
二つ　福寿草
三つ　蜜柑の木
四つ　楊子の木
五つ　銀杏の木
六つ　ムクロジ
七つ　南天の木
八つ　八重桜
九つ　小梅の木
十で　まるめてあまちんぐり
かっちんぐりで一貫貸しました。

○ひとがら遊びの歌

伝承地　多野郡万場町
伝承者　三沢　義信（M45）

ひとがら　ふたがら　めくらが世に出て
いつしかむくれてななせんやりましょう
ここらでとりましょう

○お手玉遊び歌

伝承地　多野郡万場町
伝承者　三沢　義信（M45）

小豆はかり　小豆も計ったが

小豆とぎ　小豆もといだが
お米はかり　お米も計ったが
お米とぎ　お米もといだが
おまんまたき　おまんまもたいたが
お釜おろし　お釜もおろしたが
おまんまうつし　おまんまもうつしたが
お膳おろし　お膳もおろしたが
お皿おろし　お皿もおろしたが
お膳すえ　お膳もすえたが
おまんまたべ　おまんまも食べたが

○数え歌

伝承地　多野郡万場町
伝承者　三沢　義信（M45）

正月とセー　障子明ければ万才の鼓の音やら
　歌の声　歌の声
二月とセー　にんじもんじの寺詣り明日は
　彼岸のお中日　お中日
三月とセー　桜花よりおひな様　飾って
　見事な内裏さま　内裏さま
四月とセー　死んで又来るお釈迦様竹の子
　柄杓で　つつじ花
五月とセー　ごんくまいりの前掛を
　正月かけよと取ってき来た
正月かけよと取ってき来た
六月とセー　ろくに猩さんが知らないで
　前掛ないとて腹立てた
七月とセー　質を出すやら入るやな質屋の
　番頭さんがいそがしや
　番頭さんがいそがしや
八月とセー　蜂にさされて眼があかぬ　何か
　薬はあるまいか
九月とセー　国に薬はないけれど
　おうめさんのはぐそがよくなおる
　おうめさんのはぐそがよくなおる
十月とセー　重箱かかえてどこえ行く
　お梅さんのはぐりのお使に
　お梅さんのはぐりのお使に

○ひとなげの歌

伝承地　多野郡中里村
伝承者　三沢　義信（M45）

一、ひとなげ二(ふた)なげ三なげ
　よなげいつやのむすこさん
　ななやでやかしここのはとんで
　大阪見物みづの夜
二、ひとかえてふたかえ三かえし
　四かえしいつやのむすこさんが
　ななやでやっかましこののはとんで
　大阪見物三つの夜
三、ひとねじりふたねじりみねじり
　よねじりいつやむすこさんが
　ななやでやっかましここのはとんで
　大阪見物みつつの夜
四、ひとまえふたまえみまえ
　よまえいつやのむすこさんが
　ななやでやかましここのはとんで
　大阪見物みつつのよ
五、ひとたてふたたてみたてよたて
　いつやのむすこさんがななやでやっかまし
　ここのはとんで
　大阪見物みつつの夜
六、ひとかつきりふたかつきり
　みかつきりよかつきりいつやのむすこさんが
　ななやでやっかましここのはとんで
　大阪見物みつつの夜

○手まり歌

伝承地　甘楽郡南牧村
伝承者　市川　はつ（T1）

〽三王のお猿さんは

赤いおべべが大好き
テトチャン　テトチャン

○手まりうた

伝承地　甘楽郡南牧村
伝承者　市川はるを（T6）

〽一番初めが一宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々鎮守様
七つは成田の不動様
八つは八幡の八幡宮
九つ高野の高野山
十で東京本願寺

○手まりうた

伝承地　甘楽郡南牧村
伝承者　市川　しげ（T6）

〽一列談判　破裂して
日露戦争始まって
さっさと逃げるはロシアの兵
死んでも尽くすは日本の兵
五万の兵を　引きつれて
六人残して　皆殺し
七月八日の戦いは
ハルピンまでも攻め入って
クロパトキンの首をとり
東郷大将万々歳

○手まりうた

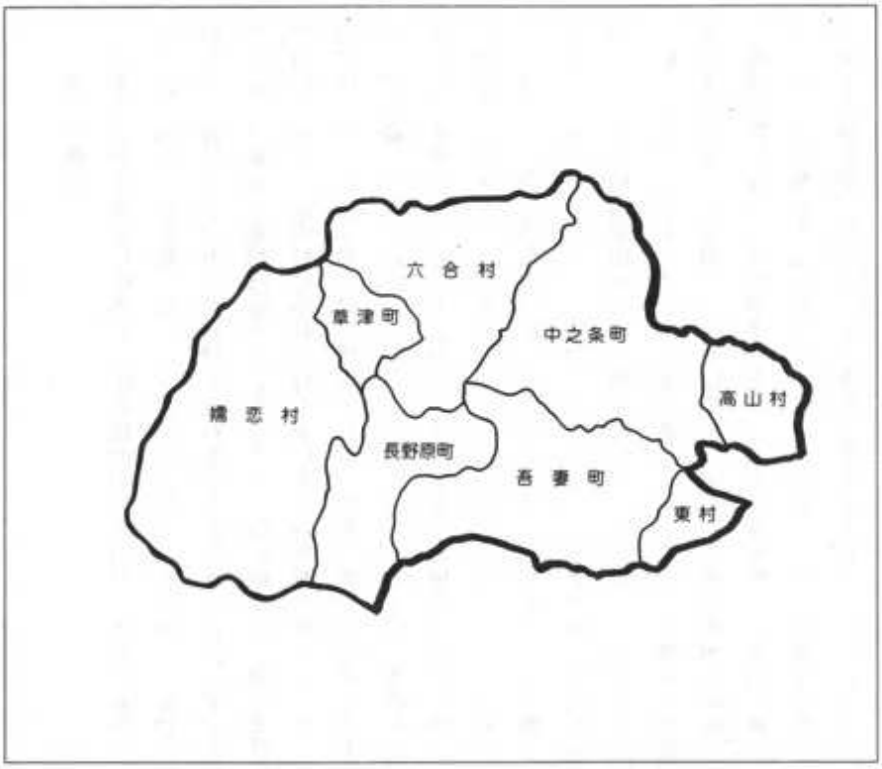
伝承地　甘楽郡南牧村
伝承者　市川　ふじ（M34）

〽トントンつくのは誰さんだ
新町紺屋のうたちゃんだ
うたちゃん今頃どこいね
ジョンジョがないから
ジョジョ買いに
ジョンジョが今頃あるものか
歯つかけ下駄でも
履いといで
それじゃうたちゃんもおはずかし
まず　一かんしょ

○わらべ歌

伝承地　甘楽郡南牧村
伝承者　市川　しげ（T6）

一つとや人々見上げる城山は
武田の遺跡　聳え立つ
二つとや古き記録にしのびみる
笹渡戸のその戦さ　戦さ
三つとや三村連合月形は
明治初年の良き村名
四つとや世は転々と変われども
昔ながらの山と水
五つとや田舎にまでも名を残す
渋沢翁のそのサツキ
六つとや六車村の荷付石
昔の道路しのび見る
七つとや流れも清き底瀬川
黒瀧山の裏通り
八つとや薬師でその名を知られたる
大仁田村を訪ね見ん
九つとや心の塵も拂わじゃ
蓼沼山の涼風に
十とや尊き先祖崇拝の
寺は安養寺と大雄寺



「嬬恋村のオンボヤ」
雪の中で行う嬬恋村のオンボヤ(どんどん焼き)。
村中総出で行い、まゆ玉やモチをこの火で焼いて食べると病気にかからないといわれる。

一、吾妻地域の概観

◇　地域の概要

吾妻郡は県北西部に位置し、頂度鶴の形の尾羽根の部分にあたっている。時計回りと逆に見て行くと、北は中之条町と六合村の一部が新潟と接し、六合村・草津町・嬬恋村・長野原町が長野県との長い国境を形造っている。吾妻町・東村は榛名山北麓を占めて南に群馬郡、東に北群馬郡、渋川市と接し、高山村は小野上村や沼田市、利根郡と界している。全体的に標高が高く冷涼な気候の地域である。地勢は高原か山間部が大部分で、間を縫って河川が流れているが、特に南部を吾妻川が東流しており、深い谷を形成している。上信越国境及び他郡との境界を山々に囲まれていることになるが、だからと言って、この地域が孤立をしていたという訳ではない。明治時代の初期に清水越えの道ができるまでは三国街道は高山村を通っていて、中山宿は栄えていたし、中之条から原町を通って草津温泉へ抜け白根山を経て信州中野に到る草津道や、原町から川原湯を経て大笹へ、また渋川から吾妻川南岸を経て大戸・須賀尾・狩宿・蒲原・大笹・そして信州真田へと続く信州街道、信州沓掛から狩宿を通って草津に到るもう一本の草津道など、主要な街道が吾妻郡内を網の目のように通って物資と人を運んでいたのである。これらの道は中仙道や三国街道の裏街道、脇往還として重要な地位を占めていただけではなく、近世には東の横綱とまで賞賛された草津温泉を始めとする数々の吾妻郡内の温泉へと多くの人を導く道でもあった。これらの道の大部分は現在でも国道・県道となってその重要性を少しも失ってはいない。

民謡は言うまでもなく庶民の歌謡である。庶民がその生活の中で歌い、作り替え、伝承し、そして他地域へと運んで行った。庶民が一個所に定住し、生活習慣を保持して行こうとする意志が強ければ強いほど、古い民謡は伝承され、残って行く可能性が高い。逆に民衆の動きが激しく、外部へ出て行くことに、また外部から新しい文化を受入れることに抵抗が無い地域ほど、古いものが残る可能性は低くなる。県全体の傾向でもあろうが、吾妻郡がたとえ山間部を多く擁していようと決して周囲から隔絶していたのではなく、時代の流れに敏感であったのは当然であった。無論、民謡も激しい変化にさらされて、多くの歌が消え、新しい歌が受入れられていったのであろう。草津節が比較的新しい時代に湯治客によってもたらされた他県の民謡（もしくは寮歌）を元に成立して行った経過は、町田嘉章（佳声）氏や萩原進氏の指摘に精しい所である。民謡の出自や成立事情が分かる例は希有に属するが、吾妻郡の代表的な民謡とも言える草津節が、湯治客の往来によって成立の契機を与えられたことは、象徴的な現象と言えよう。

◇　調査の概要

今回の民謡緊急調査は、国の補助事業として各県単位で継続されているもので、文字と音声と伝承状況の調査票とで記録するという画期的な方法で始められた。現在ではごく一般化した方法ではあるが、資料の公共性と客観性、及び全県規模であることを考えたとき、このような調査は本県では初の意義深い調査である。その意図は急速に失われつつある

古くからの伝承民謡をすべて記録し保存することにあるが、吾妻郡の調査をみた場合、悉皆調査という点では、集められた調査票の数は期待していたよりは少ないものであった。すでに「群馬県郷土民謡集」として各群村誌他の民謡資料で文字化された物が集成され、またわらべ歌その他についても幾つかの言及があるが、量的にはそれらの中の吾妻郡関係の歌の総量には遠く及ばなかったのである。無論数量で競っても仕方がないのであって、今までの集成が本郡関係はわらべ歌に偏っていた傾向があったのを考えれば、今回貴重な資料が得られたのは確かである。のべたった五人の調査員でこの広い地域を回るのであるから、当然手が届かない所もあって然るべきだが、しかしまた、努力不足の誹りを免れないかもしれない。だが地域全体を見渡したとき、このような結果を招いた原因は、第一に生活様式・習慣の急速な変化によって民謡が失われて行く速度が我々の調査を追い越してしまっていたことを挙げねばなるまい。残念ながら遅きに失したかの感も強いのである。調査で回っていて、「惜しかったなあ、後三年早ければよく知っているおばあちゃんが生きていたのに。」などと再三言われた経験を持つのは独り筆者のみではあるまい。民謡採訪で各地を歩いたが、これほど言われたことはなかった。一般に山間部は古いものを残しているかのように考えがちであるが、平野部に住んでいる人間には予想がつかないほどの激しさで、人間の移動がこの地域にあったことを忘れてはならない。人の移動は必然的に文化の伝播と変容をもたらす。民謡だけがそれを逃れるわけにはいかない。もちろん、民謡が失われて行く傾向は全国的なものである。それは一つの文化的損失ではあるけれど、見方を変えれば新たな文化形態を受け入れていく際の必然的な現象と言えるのであって、庶民の当然の選択の結果なのであった。

そういう意味で考えて、今回の調査では貴重な採集例が見られた。以下、二三指摘してみよう。

本県は比較的早い時期から民俗調査が進んでおり、吾妻郡に特徴的な民俗行事等についてはすでに言及が多々ある。本調査報告書でも別に項目があるから、祭礼・行事に係わる民謡についてはここでは触れないこととする。ただ、十日夜（とおかんや）や鳥追いの歌、またごく一般的なものとそのヴァリアンテのみ採集されたわらべ歌の中に見られる佐渡や善光寺といった地名が、前述した地域環境から言って、我々が思っている以上に親しいものとして感じられていたであろうことは想像に難くない。

季節々々に家々を経巡った芸能者の歌として、春駒の歌が採集された。これは今回の調査の貴重な成果の一つとして挙げられる。春駒の歌は、現在利根郡川場村の地元の青年に伝承されているものが有名だが、本来春駒は年頭から春先にかけて、予祝の意を込めた歌と儀礼を携えて、特殊な芸能者が養蚕農家を巡るものであった。かつての主要産業として、また農家の貴重な現金収入源として、養蚕は広い地域に行なわれ、そこを訪れた春駒も多かったはずなのであるが、その担い手が特殊な階層の人々であったためか、節季候（せきぞろ）などと並んで、近世以来季節の芸能者の歌は記録に留められたものがそれほど多くはない。今回の採集例はその点貴重であるのみならず、調査員でもある奈良秀重氏が伝承者として父新八郎氏から承け継いだ、春駒の担い手に関する書付けを伴っている点である。そう遠くはない時代までの春駒の伝承がどうであったかが窺える内容を持ったもので、他の伝承との比較を経てこれからの考究に資する面が大きいと思われる。また歌詞についても、川場村のものと比べると、「日本歌謡集成」巻十二に採られたものの方に近く、内容

も豊富で、より以前の伝承を残した完形に近い歌詞かとも思われる。加えて、明治時代になって歌詞が移り替わって行く状況などを見ると、歌謡が生きているとはどういうことかが理解できる気がするのである。以前高山村に生存していた春駒の伝承者も奈良氏の父親からの伝承を享けていたそうであるから、重要な資料として記憶に留められるべきであろう。歌詞を民謡としてだけでなく、広く芸能としてその芸態の一部と捉えれば、例えば、東北地方の大黒舞いのような祝儀の芸能との関連を見ることができる。無論、本県でも認められる養蚕の神としてのオシラ様信仰との関係も考えなくてはなるまい。民謡はこのように広い視野で比較考察しなければ、その本当の姿はよく分からないのである。本県に広く分布し、かつ独特の芸態を持つものとして、今回も採集例の見られる獅子舞にしても（おそらく他地域でも数多く報告されていると思うが）、歌詞・音楽・芸態・源流伝承などの面からもっと追求されて然るべきであろう。

同様に、断片的ではあったが嬬恋村蒲原で採集された田植歌も伝承という点で興味深い問題を投げ掛けている。管見では県内ではまだ報告されていない歌詞を持っており、詞型には中世に遡る古い面影を宿している。本県では早く町田嘉章氏や富山昇氏が、平野部に伝承されていた古い田植歌を報告している。これらは中国地方に伝承されていた中世以来の伝統を持つ田植歌との関係を考えることができるのだが、本来水田耕作の適地に恵まれているとは思えない蒲原にこの田植歌が残されていた理由を、他の地域での調査結果に対して歌詞及び音楽面での比較を通して検証して見る必要があろう。しかし、遺憾ながら今回の調査では他地域の録音テープ・調査票を手に取る機会がなかったので、今後の研究に期待しなければならない。

その他労作に係わる歌としてはサンヨヅキと称される地形歌と木出し歌が採集された。吾妻郡の地勢上、山仕事で歌われるものや、木挽きや木地師が運んで来た流行り歌の類いが採集されることが期待されたが得られなかった。繭から糸を引く時に歌われる座繰り歌の類いなども同様である。時代の趨勢で労作の形態が激変しているのであれば、これも致し方のないことであろうか。

以上簡単に述べたが、吾妻郡の民謡採集がこの報告を限度とするものではなく、まだまだ可能性を残していることを申し添えたい。それも可及的速やかになされるべきであることは言うまでもない。

最後に、多忙な本務の傍ら困難な調査を続けられた調査員諸氏と、調査に協力して戴いた地域の皆様に感謝とお礼を申し上げて、概要の報告としたい。

二、調査民謡

A 労作歌

○真棒地形のうた（俗称サンヨヅキ）

伝承地　吾妻郡中之条町西中之条

伝承者　青柳　菊（T4）

片貝　伝次（M44）

真　アーア今日のよき日にエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアお地形は末代エンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアかけ声そろえてエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア手綱むらなくエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア千代に八千代にエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア万よろずにエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアまがらぬくるわぬエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアすみからすみまでエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアくまなくむだなくエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　ごばんの目なりにエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアしめろかためろエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア綱子もそろたよエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア稲の出穂よりエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア真棒もあがるしエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアお地形おわらばエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアあすは建方エンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア側建おわらばエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア下では頭がエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアいろはにほへとのエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアあらつかしらべとエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア小屋では若衆がエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア三尺よことびエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア六尺まとびとエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア飛鳥の早わざエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア三方のつじにさエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーア地蔵さんありますエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアおばば通らばエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアにこにこ笑いますエンヤラヤーエー

側　サノエンヤラヤーエー

真　アーアこれがまことのエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア色地蔵さまかねエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア今日もはよからエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア長の旅路をエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーアお世話になりましたエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア小鳥もねぐらへエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア早や陽も西にさエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー
真　アーア真棒もくろがねエンヤラヤーエー
側　サノエンヤラヤーエー

（注）この作業歌は、学校などの大きな建物の建築の基礎（地形と言う）工事時にうたわれたものである

太い丸太を台形に四本立てて上部に丸い鉄の輪をつけその輪に小さな鉄の輪をたくさん通し、その中を直径三〇㎝ほどもある丸太（真棒）を上下するようにし丸太の下部は太い針金などで木がまくれないようにまき、四本柱の上部に滑車をつけ綱を通し、その綱が真棒の下の方へつなぎ、これを基礎工事の溝にまたがせ、真棒に「頭」と呼ぶ中心人物が入り、まわりには八本の綱を持つ「側」と呼ぶ人達が八人それぞれ綱を持ち、真棒の歌にあわせて綱を引き　真棒を上に引きあげはなす。真棒の頭は基礎となる溝の中のぐり石（河原からあげた丸い石）を真棒のあたまでついて建物の土台となる部分をかためていく。現在の機械が出るまではこのような基礎工事が行われたのである。

○筏乗りうた

伝承地　吾妻郡中之条町中之条
伝承者　野村源次郎（M30）

ハア　木屋が来たとだよ
二・三丁かみへよ
俺だされて来いのよ
どんと声がする
ハアーなんだそうだやったな

（注）吾妻川の筏流しは大正期まで行った。吾妻町岩島矢倉河岸から、前橋の大渡りの集木場まで、二日がかりで運んだ。竹材は千葉県野田市の醤油工場へ運んだ。

川の危険な場所では、筏乗りうたは歌わなかった。安全な所と、前橋の集木場へ近づくと歌われた。筏師が集木場へ近づいたことの連絡の意味を歌で表現したのである。

○木出し唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

ヘお手をそろえて
力を入れて
それーけ
ヨーイサ
ハア　木屋にほれるならよ
庄屋か小庄屋よ
金で取れなけりゃよ
どんと米でとれ
オーホーイ
オーホーイ

○田植唄

伝承地　吾妻郡嬬恋村鎌原
伝承者　（女）

〽植えろ　植えろ　早苗植えろ
笠を買うてくれるぞ
あみ笠は　いやでそうろう
はがで　はやる　かなぐち――
（注）歌を唄いながら早苗を植える。

○木挽歌

伝承地　吾妻郡嬬恋村千俣
伝承者

〽一、えじめ　だいこく
おかみさんは　えびす
えりくる　さんよぐち
ホラ　福の神よ
アー　ズルコン　ズルコン

二、えじめ　金かせ
しんかいりょう　やいたよ
それで　かさなけりゃ
げんさいさんのはりだよ
アー　ズルコン　ズルコン

三、もとじめ　金かせ
また　刃がおれた
ついでに　あの子の顔みたい
アー　ズルコン　ズルコン

四、木挽は　山家の
山には住めど
木の実　かやの実
食べはせぬ
アー　ズルコン　ズルコン

○草津湯もみ唄

伝承地　吾妻郡草津町草津
伝承者　民謡きさらぎ会
田村レツ他一一名

（サテ）
草津恋いしやヨーホホーイあの湯煙にヨ
（ハヨイヨイ）
浮いた姿がヨーホホーイ目に残るとかヨ
（ドッコイサ　ハヨイヨイ）

（サテ）
湯もみなじみがヨーホホーイ妹山背山ヨ
（ハヨイヨイ）
松の木の間をヨーホホーイわらび狩りとかヨ
（ハドッコイサ　ハヨイヨイ）

（サテ）
草津よいとこヨーホホーイスキーの名所ヨ
（ハヨイヨイ）
自慢話はヨーホホーイお湯の中とかヨ
（ハドッコイサ　ハヨイヨイ）

（サテ）
湯もみ見たけりゃヨーホホイ草津へおいでヨ
（ハヨイヨイ）
旅の疲れもヨーホホーイ揉んでやるとかヨ
（ハドッコイサ　ハヨイヨイ）

（サテ）
忘れやんすなよーホホーイ草津の道をヨ
（ハヨイヨイ）
南浅間にヨーホホーイ西白根とかヨ
（ハドッコイサ　ハヨイヨイ）

B　祭り歌・祝い歌

○鳥追いの歌

伝承地　吾妻郡中之条町沢渡温泉
伝承者　林　和男（S14）

〽とおりおいだ、とりおいだ
あありゃどおこのとりおいだ
げんじゅうどんのとりおいだ
さあらばもっておいもうせ
あさどり　よおどり
かあしらきってしりきって
しょうべんだあまへさらげえこんで
さあどがしまへ　ほうい

○十日夜の歌

伝承地　吾妻郡中之条町山田
伝承者　安原　真也（S51）
登坂利恵子（S51）
安原　千恵（S51）

〽とうかんや　とうかんや
とうかんやはいいもんだ
あさそばきりにひるだんご
ようもちくっちゃあ
ぶったたけ
とうかんやとうかんや

○鳥追いの唄

伝承地　吾妻郡長野原町川原畑
伝承者　中島　卯作（T7）
中島　美一（T13）

〽鳥追いだ　鳥追いだ
ありゃ　だが　鳥追いだ
ぎんずうどんの鳥追いだ
さらば　よって　追い申せ
朝どり　ようどり
かしら切って　しり切って
塩樽へ　さらげえこんで
三度ヶ島へ　ホーイ

○十日夜

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）
加辺つねじ（M39）

〽十日夜　十日夜
十日の晩は　よいもんだ
あさそばきりに　昼だんご
ようもち食っちゃ　腹だいこ

○七草の唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）
加辺つねじ（M39）

〽七草なずな
とうどの鳥が
おとわの国へ
渡らぬ先に
ストトン　トン

○浅間山噴火記念御和讃

伝承地　吾妻郡嬬恋村鎌原
伝承者　鎌原観音堂　奉仕会
（老人クラブ）

〽帰命頂礼鎌原の　月の七日の念仏を
由来を委しくたずぬれば
天明三年卯の年の
四月初日になりければ
日本に名高き浅間山
にわかに鳴動初まりて

七月二日は鳴り強く
それより日増に鳴りひびく
　砂石をとばす恐ろしさ
ついに八日の巳の刻に
　天地も崩るるばかりにて
噴火と共に押し出し
　吾妻川辺銚子まで
三十二ヶ村押通し　家数は五百三十余
人間一千三百余　村村あまたある中で
一のあわれは鎌原よ
　人畜田畑家屋まで
皆泥海の下となり　牛馬の数を数うれば
一百六十五頭なり　人間数を数うれば
老若男女諸共に　四百七十七人が
十万億土へ誘われて　夫に別れ子に別れ
あやめもわからぬ死出の旅
　残り人数九十三
悲しみさけぶあわれさよ
　観音堂にと集まりて
七日七夜のその間
　呑まず食わずに泣きあかす
南無や大悲の観世音　助け給えと一心に
念じ上げたる甲斐ありて
　結ぶ縁もつき果てず
隣村有志の情にて　妻なき人の妻となり
主なき人の主となり　細き煙を営なみて
泣く泣く月日は送れども
　夜毎夜毎の泣き声は
魂魄この土に止まりて
　子供は親を慕いしか
親は子故に迷いしか
　悲鳴の声の恐ろしさ
毎夜毎夜のことなれば
　花のお江戸の御本山
東叡山にと哀訴して　聖の来遊願いける
数多の僧侶を従えて
　程なく聖も着き給い
施餓鬼の段を設ければ
　残りの人々集まりて
皆諸共に合掌し　六字の名号唱うれば
聖は数珠を爪ぐりて
　御経読誦(どくじゅ)を成し給う
念仏施餓鬼の供養にて
　魂魄無明の晴も晴れ
弥陀の浄土へ導かれ
　蓮(はちす)のうてなに招かれて
心のはちすも開かれて
　泣く声止みしも不思議なり
哀れ忘れぬその為に　今ぞ七日の念仏は
未世に伝わる供養にて
慎み深く唱うべし
　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

○干俣村開拓和賛

伝承地　吾妻郡嬬恋村干俣
伝承者

〽貴妙頂来干俣の古き由来を尋ぬるに
世は永禄の頃よりも拓けしものと
　伝え聞く
干俣村は昔より　二瀬流れし荒川を
只一筋にせき止めて
　干俣村と名付けたり
之にたづさう人々は　皆干俣（川）の
　氏となる
されど雨水度毎に
　流す人畜おびただし
其の災害を除くため
　さわらが沢の掘切りや
川辺に土堤を築きたる
　苦辛の跡や偲ばれん
荒野の果ての災厄は　申年毎の大きさん
雨ふる夜は一ト時も
　眠ることさえ出来ざりき

たまたま続く大日照り
　主食と頼む作物は
皆一面に枯れ果てて
　火のつくような有様に
大豆の皮を粉として
　命をつなぐ糧なれば
主食の中に加えてぞ
　粉豆と呼ばれし哀れさよ
野山に猛きけだものや
　木の芽草の根用捨なく
千草の根をも掘り尽し
　笹の実をこく浅ましさ
貪る餌もつき果てて
　自業自得とあきらめつ
賤しき姿そのままに
　乞食渡世の哀れなり
親の死に目に手を合わせ
　慈悲恩愛も夢のようで
枕ならべて　其の儘に
　たおれし人も数多し
斯くて縁者も死にたえて
　身よりの人もあらざれば
寄るべ涙をともどもに
　無縁仏に落ち給う
此のかんなんを思いつつ
　年に一度は人々よ
香華手向け回向して
　仏の供養希ふべし
南無阿弥陀仏
いにしえを遙かに偲ひ干俣は
　末橘の香り漂ふ

○お盆さんの歌

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

（迎え火を焚きながら）
じいさん　ばあさん
この火のあかりで
笹へとっかまって　ござれー

（送り火を焚きながら）
じいさん　ばあさん
この火のあかりで
笹にとっかまって　けえらっしぇー

○とおかんやの歌

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

とおかんや　良いもんだ
朝そばきんに　昼だんご
夕飯くって　腹だいこ
どーんどんとたたきましょう

○鳥追いの歌

伝承地　吾妻郡六合村小雨
伝承者　高原　茂文（T1）

へありゃあ（あれは）　だーが（だれの）
　鳥追いだ
だいろくどんの鳥追いだ
さぁらばきって　おいもうせ
かーしらきって　しりきって
かぁろうと　さらげえこんで
佐渡ヶ島へ　ホイホイホイホイホイ

C　踊り歌・舞謡

○蟻川太々神楽のはやしと問答

伝承地　吾妻郡中之条町蟻川
伝承者　富沢年松（T13）

一、しらべ
二、みつびょうし
三、国常立命くもきりの言葉
　あまがした、かすみがすそ　あしきあくにん
　いざやはらわん
四、とろろこ
五、たいつり
六、おかっぱ
七、きつね
八、もちなげ
九、どろどろどろ
十、むすびの言葉
　そもそもみかぐらともうするは、あまてらすおおみかみのおとおとのかみ、すさのおのみこと、おこころあらあらしくてよきにあらず、あまてらすおおみかみ　いわとにとじこもり　あしはらに、なかつくにとこやみとなり、てんをとぶとりちにおちる
　ちをゆくけものさんやにまよい、もろもろのかみたちてのおきどころなく、かみあつめにあつめ、かみはかりにはかりたまいてにわにひをたき、きときをうちてあそびごえに、あめのうずめのみこと　さなぎつけたるほこをとり、てぐさとしてささをもちふせたるおけにのぼりて、ひふみよしとまいたまえば、もろもろのかみたち、エタエタとわらいたまえば、おおみかみ、あやうしとおぼしめし　いわとをほそめにあけてみたまいしとき、あめのたじからおおのみことこれをとってひきはなし、しなののくに、みずうちごうり、ようかいざんに、もちかえらせたもうとき、これをみかぐらとつたえてそうろう
　どうどうと　うつやたいこのしらべにも　ああなおもしろの　みかぐらやなあ

○岩本太々神楽の問答

伝承地　吾妻郡中之条町岩本
伝承者　森田昇午郎（T8）

あめわかひこのみこと(ア)、さるだひこのみこと(サ)の問答
(ア)かかるめでたきてんちょう、ちきゅうぶかんえんまんの、かんのうじょうの　きとうもうすところへいでたちしは、なにがみぞとうどうなのれ、なのらんでこのばにすむならば、神道の弓矢の先にかけ、みずからをうらみたもうな
(サ)われはすなわち天津神国津神の使い猿田彦の命なり、山にとっては山の神、川にとっては川の神かないにとってはおきたまの神、かまどにとってはかまどの神、あくまにとってはちまたの翁（おきな）という神にて候
(ア)その神にて候ハば、もったるほこはいかなるいわれにてや候
(サ)そもそもこのほこと申するは、いざなぎいさなみのみこと、あめのうきはしより、のぼこをもってかきいでるの、国かきいずるのくにむかいのほこなり　まず東方には地の神川ずちのみことととなってあらわれて地の雛をつきしずむるのほこなり、また西方にいでては金の神、金山彦の命と現われて金の雛をつきしずむるのほこなり、また南方にいでては火の神ほづつみのみことと現れて火の雛をつきしずむるのほこなり、また北方にいでては水の神みずはやめの命とあらわれて水の雛をつきしずむるのほこなり、また中央にいでては地の神はにやひめの命とあらわれて地の雛をつきしずむるのほこなり
(ア)しからば持ってる、ちゅうけいはいかなるいわれにてや候
(サ)そもそもこのちゅうけいことは、てん地はっぽう

ごぎょうをかね、さんかいさんとくをしょうじ、
ぢがみかなめには、三十一字のことのはを祝いし
ちゅうけいにてや候
ちはやぶる神のやしろに地をふみて、いちじにた
ちしはなにがみぞ、どうどうなのれなのらでこの
ばにすむなれば、このじんつうのほこさきにかけ、
みずからをうらみたもうな
(ア)われはすなわち、あまつかみ、国津神のみつかい、
あめわかひこのみことなり
(サ)そのかみにてそうらはば、もったる弓は如何なる
いわれにてや候
(ア)そもそも、その弓ともうするは、あまつかみより
つたわりし　あめのかごゆみなり　やはまたあま
のはまやなり
(サ)めでたかりしそうろう
(ア)めでたかりしそうろう　しからはあのくもは　あ
くまのくもとみえしそうろう
(サ)しっしゅつらねてそうろう
(ア)ちはやぶるかみのやしろにつるかけて、いるやの
さきにあくまとまらじ
(サ)さかきはや　かぜもおおなき、おいかぜになびか
ぬくものあらめざらまじ

あまつひめ(ア)、てなづちのみこと(テ)の問答

(ア)どうどうと、まさりたったるおきなおば　いかな
る神　にてやそうろう
(サ)こんにちのよき日みかぐらをまつりたてまつる、
われはすなわち、いづもの国、地の川上にすまい
する　てなづちあしなづちのみことなり　われを
たずねたるひめは、いかなるひめにてやそうろう
(ア)あまつひめにてやそうろう
(テ)あまつひめにてそうらわば　あおきがはらのかま
のゆらい、ひとはしりおんかたりそうらへ
(ア)そもそも　あおきがはらのかまともうするは、い
ざなぎ、いざなみのみこと、あまてらすおおみか
み、つきよみのみこと、ひるこのみこと、すさの
おのみこと、いちによさんなんをうみたもうとき、
ひむかのおとのかんむりをたて、なかつけをはや
くし、あそのしもすせの、よきやわらかなる、お
んみのけがれをきよめたまいしより、かまといい
つたえてやそうろう。つたえてやそうろうおきな
にてそうらはば、かぐらのゆらい、ひとはしり、
おんかたりそうらへ
(テ)そもそも　かぐらともうするは、あまてらすおお
みかみのおんおとうと、すさのおのみこと、ひる
このみこと、おんきあらあらしくて、そぼうきわ
まりなく、あまてらすおおみかみは、おんこころ
よきにあらずして、あまのいわやにいらせたもう、
あしはらや、よしはらや、なかつくにとこやみと
なり、てんをとぶとりちにおち、ちをゆくけもの
またさんやにまよい、もろがみたちてあしおきど
ころなくして、あまのいわとのまえにさかきをう
え、にわとりをあつめあおにぎて、しろにぎて、
あまつひめ、いなだひめのふたりのひめをあつめ
しめ、ひずえには、あめのうずめのみことをたて
らいたまいしときに、みことのねっきょうらんぶ
のおもしろさに、もろがみたちのはくくしゅも、
いわやにこだましてあたりはそうぜんたり。あし
はらや、よしはらや、なかつくに、とこやみなら
んと　いわやをほそめにあけてみそなわしとき、
あめのたじからおおのみこと、いわやをとってひ
きはなし、しなののくにはみずうちのこおりとか
くしの山にかえらしめたまいしより、かぐらとい
いつたえてやそうろう
とうどうと、うつやつづみのしらべには　ああな
おもしろや、みかぐらやなあ

○神楽ばやし

伝承地　吾妻郡中之条町下沢渡
伝承者　柏原　勢一（T6）外

一、ひらびょうし
二、みつびょうし
三、みつびょうしくずし
四、てんてこてんこ

（注）諏訪神社の祭典に舞う神楽のはやし方である

○大岩獅子舞うた

伝承地　吾妻郡中之条町上沢渡
伝承者　関　安二（T12）

〽まいりきて、まいりきて
すはのみたらし　ながむれば
池にそりはし、かもがすむ　かもがすむ

〽おしがもが　おしがもか
なにをはむやら　あいのねか草
けそのはがばり　けそのはがばり

（引き歌）

〽我が国は　我が国は
雨がふるげな雲がたつ
いざやもどれよ、花のみやこへ、花の都へ

〽十七が、十七が
神の社殿へ目をかけて
何を申すや、今のわかさに　今のわかさに

〽あの山に　あの山に
月も入るべし

うはやかくれよ、ひきや友たち　ひきや友だち

〽まいりきて、まいりきて
なれのお庭を　ながむれば
小金切石にわかあかやく、にわかあかやく

〽この志くに　この志くに
ささらの上手か　なさるとさいでに
こぼれて　あしにからまる　あしにからまる

〽白さぎや、白さぎや
門のとびらにすをかけて　日さえくれれば
ばあっと立ち候　ばあっと立ち候

〽白さぎや、白さぎや
海のと中にむをかけて、波にゆられて
ばあっとたち候、ばあっと立ち候

〽志くならば　志くならば
どこへ見えても、見それまい
金の足だに　すみのさしがさ　すみのさしがさ

〽ししの子は、ししの子は
生れおちるとかしらふる
それを見まねに　かあしらふり候　かあしらふり候

〽向かえ小山の　向かえ小山の
七子竹　ふしをそろえて
切りをこまかに　切りをこまかに

〽このしくに　このしくに
馬のり上手がござるげで　よるがよ中も
こまの足音　こまの足音

〽あらくわをあらくわを
ちいをそろえて物を作る　秋の続きの
かづがしれぬそ　かづがしれぬぞ

〽まいりきて　まいりきて
これのお馬やを　ながむれば
つなぎそろえた駒が七疋、駒が七疋

〽このしくは、このしくは
よくもあしくも、ほうめやあれよ
今年はじめてならいいで候　ならいいで候

めじしがくしの歌

〽とうろりと　とうろりと　うらら　このほどはまいりきて　まいろうと思えども、橋は引きばしと

ぶにとばれぬ　おい

〽思いもよらずの朝ぎりがおりて　そこで　めじしを　かくしとられた　かくしとられた

〽そなたも男じし　おれも男じし
心そろいて、めじしたずねろ、めじしたずねろ

〽てんじくへ　風のこぎりを　まきあげて
風のたゆまに　おうぞうれしや　おうぞうれしや

〽てんじく天の　むらむらすずめが、
羽先揃えて　羽を返せ　羽を返せ

〽八幡の松にからまる、つたの木も
えんがきれれば　ばらりほうぐれろ、ばらりほうぐれろ

○山田太々神楽のはやし

伝承地　吾妻郡中之条町山田
伝承者　富沢　公男（S23）

一、ひらびょうし
二、みつびょうし
三、きつねのまい
四、もちなげ
五、いれびょうし

○太々神楽のはやし

伝承地　吾妻郡中之条町伴勢町
伝承者　山田　実（S19）

一、みつびょうし
二、ひらびょうし
三、きつねのまいのはやし
四、からすのまいのはやし
五、えびすのまいのはやし

○獅子舞のはやし

伝承地　吾妻郡中之条町西中之条
伝承者　唐沢　良文（S10）外

一、初庭
(一)わたり
(二)ヒーヒャヒャ
(三)トーロリ
(四)ヒャウラ
(五)トーロリ
(六)ホネガエリ
(七)トーロリ
(八)シャギリ
二、中庭
(一)ワタリ
(二)オカザキ
(三)ヒンリト
(四)トーロリ
(五)シャギリ
(六)テララー
三、女獅子かくし
(一)トーロリ
(二)シャギリ
四、末庭
(一)ワタリ
(二)トーロリヒャー
(三)ナガヒー
(四)トーロリ
(五)ウタ
(六)トッピーロットー
(七)トーロリ
(八)シャギリ

○駒岩獅子舞のはやし

伝承地　吾妻郡中之条町四万駒岩
伝承者　唐沢　重平（T13）

一、初庭
㈠ツーリーヒートロー
㈡トヒャラリ
㈢ヒーヒャヒャ
㈣トーロリ
㈤ヒャウラ
㈥ヒンリャリャ
㈦トーロリ
㈧シャギリ

二、中庭
㈠めじしがくし
㈡オカザキ
㈢リンリト
㈣トーロリ
㈤テーララ
㈥シャギリ

三、末庭
㈠ツーリーヒートロー
㈡トンドリシャ
㈢ヒートヒート
㈣トーロリ
㈤トッピ
㈥ロットウ
㈦トーロリ
㈧シャギリ

○獅子舞のはやし

伝承地　吾妻郡中之条町山田
伝承地　篠原仲次（S19）

一、ワタリビョウシ
二、オカザキ
三、ふりこみ
四、ずんでん
五、オカザキクズシ
六、ナゲダシ
七、チャグラ

○乙女の舞うた

伝承地　吾妻郡六合村広池
伝承者　篠原　酉蔵（M42）

へはてのくもはて　うらうらと
とよさかのぼる　あさひこう
神の恵と　おろがめば
その日その日の　とうとしよ
土にこぼれし　草の実の
芽生えて　伸びてうるわしく
春秋がざる　花みれば
神の恵の　とうとしや
（注）四人の女の子が　巫女になり歌に合せて舞をするへおいでヨ

D 座興歌

○草津節

伝承地　吾妻郡草津町草津
伝承者　民謡きさらぎ会
田村レツ他一一名

（チョイナ　チョイナ）
草津よいとこ一度はおいで
（ハドッコイショ）
お湯の中にもコリャ花が咲くヨ
（チョイナ　チョイナ）

（チョイナ　チョイナ）
春はうれしや降る淡雪に
（ハドッコイショ）
浮いた姿がコリャ目に残るヨ
（チョイナ　チョイナ）

（チョイナ　チョイナ）
草津よいとこ夏来てみれば
（ハドッコイショ）
軒ば近くにコリャ四季の花ヨ
（チョイナ　チョイナ）

（チョイナ　チョイナ）
草津よいとこ紅葉の名所
（ハドッコイショ）
紅の流るるおコリャ湯の川ヨ
（チョイナ　チョイナ）

（チョイナ　チョイナ）
草津よいとこ暮れれば湯もや
（ハドッコイショ）
草津湯の町コリャ湯のかおりヨ
（チョイナ　チョイナ）

（チョイナ　チョイナ）
ちょいなちょいなで草津は明けて
（ハドッコイショ）
もんだもんだでコリャ日が暮れるヨ
（チョイナ　チョイナ）

○草津小唄

伝承地　吾妻郡草津町草津
伝承者　民謡きさらぎ会
田村レツ他一一名

（サテ）
朝の湯けむりゆうべの
湯もやヨイトサノ
（ハキタサ）
草津ア湯の町サアサヨイトサノ夢の町
ヤアレモンダモンダヨイトコリャセ
（サテ）

（サテ）
浅間おろしに木立もなびくヨイトサノサ
（ハキタサ）
草津恋しとサアサヨイトサノ
いうてなびく
ヤアレモンダモンダヨイトコリャセ
（サテ）

（サテ）
時雨はらはら草津の宿でヨイトサノサ
（ハキタサ）
ひとり寝て聞くサアサヨイトサノ
湯もみ唄
ヤアレモンダモンダヨイトコリャセ
（サテ）

（サテ）
つもる思いと草津の雪はヨイトサノサ
（ハキタサ）

とけるあとからサアサヨイトサノ
花が咲く
ヤアレモンダモンダヨイトコリャセ
（サテ）
（サテ）
草津恋しや白根の山のヨイトサノサ
（ハキタサ）
雪の消えまのサアサヨイトサノお駒草
ヤアレモンダモンダヨイトコリャセ
（サテ）

○十三月のかぞえうた

伝承地　吾妻郡六合村広池
伝承者　篠原　西蔵（M42）

一つとや一つは一月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
門松なんぞはどでごんす　どでごんす
二つとや二つは二月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
初午なんぞはどでごんす　どでごんす
三つとや三つは三月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おひなさまなどどでごんす　どでごんす
四つとや四つは四月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おしゃかさまなどどでごんす　どでごんす
五つとや五つは五月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おのぼりなんぞはどでごんす　どでごんす
六つとや六つは六月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おみこしなんぞはどでごんす　どでごんす
七つとや七月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
七夕なんぞはどでごんす　どでごんす
八つとや八つは八月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
お月見なんぞはどでごんす　どでごんす
九つとや九つは九月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
菊見なんぞはどでごんす　どでごんす
十とや十は十月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
えびす講なぞどでごんす　どでごんす
十一とや十一は十一月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おとり様なぞどでごんす　どでごんす
十二とや十二は十二月のことなれば
アーコリャコリャ　ことなれば
おもちつきなぞどでごんす　どでごんす
十三とやそんな月はないけれど
アーコリャコリャ　ないけれど
色と酒　色と酒
（注）盃と箸を道具に使い各月の行事を図案化する。

○中山情緒

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　総貫四郎右衛門（T4）
奈良嘉四郎　（T7）

一、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみなたばこまつり　よいよい
はっぱはっぱ山と積んで金は千万両
よおいとよっぴて祝えや音にゃあかい
二、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみな炭焼く煙　よいよい
俵、俵山と積んで金は千万両
よういとよっぴておどれよおいら若い
三、上州中山いいとこだあむし

一度はきてもみなそばがそばが　よいよい
実を粉にくだいて主のため
よういと山は紅葉(もみじ)の錦もえる

四、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみな春はとっても　よいよい
梅　桃　桜とわらび千万本
よういと夜明けにゃほととぎす月は白い

五、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみな夏は青葉　よいよい
峯の涼風(すずかぜ)、せきのせせらぎ
よういとかじかの唄声にほたるはとぶ

六、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみな秋はもみじよいよい
栗柿あけびときのこ千万本
よおいと八千草花は咲き虫はすだく

七、上州中山いいとこだあむし
一度はきてもみな冬はスキーだよいよい
牧場のシャンツェに粉雪はまいたつ
よういと飛べ飛べきじも飛べ山は広い

E　語り物・祝福芸の歌

○春駒の歌

伝承地　吾妻郡高山村中山

伝承者　奈良秀重（T10）

「口上」サアサ乗りこめ、はねこめ蚕飼いの三吉、
十七島田も乗ったら降りるな、占めたらはなすな
〽春のはじめの春駒なんぞ、
夢に見てさえよいとや申す　ソラ
まして現在は上女の駒よ
年もよし世もよしお蚕があたる　ソラ
蚕飼いにとりては美濃の国よ
不破の郡や小野山さとで　ソラ
留たる種はさてよい種よ
ゆうきの種か茨城種か　ソラ
当世優れて種場と言うは
新地島村、信濃の上田　ソラ
奥州本場がよいとや申す
本場の種をよせや集め　ソラ
飼女の女郎衆にお渡し申す
飼女の女郎衆はほめ悦んで　ソラ
袴丈なるあつわたなんぞ
手にかえきりりとしたためこんで　ソラ
右の小脇に三日三夜
左の小脇に三日三夜　ソラ
両方あわせて六日六夜
六日六夜があいだが程を　ソラ
温め申せば熱め申す
三日に見そめて四日に青む　ソラ
五日にさらりとお出のお蚕は
お出はよけれど掃くべき羽根は　ソラ
とらはせんちゅう宙舞う鳥の
八つの風切り手に抜き持ちて　ソラ
千代の小羽根でそろりと掃いて
一羽根掃いては千両が蚕　ソラ
二羽根掃いては二千両が蚕
三羽根と掃いては三千竈よ　ソラ
三羽根四羽根と掃くことなれば
紙にもあまれば竈にもあまる
あまり候や広まりそうろ　ソラ
さらばこの蚕何がなしんじょ
桑の恵がよいとや申す　ソラ
これより南が八段畑
八段畑はみな桑原よ　ソラ
十七八なる姉さんたちが
髪は島田にこじゃんと結うて　ソラ
綾の前掛けにしきのたすき
七九小竹の目篭を持ちて
桑の若葉へお手打ちかけて　ソラ
真などたよめてそろりと扱いて
そろりと扱いては目篭へ結めて　ソラ
結めたその桑お宿へ持ちて
三条小鍛冶宗近様が　ソラ
打ちたる庖丁でさらりと刻み
ちらりばらりとしんぜて廻る　ソラ
あのお蚕様の桑召すようは
昔源氏が馬屋に住んだ　ソラ
こうじ栗毛が牧場に居りて
朝日に向いては末そよそよと　ソラ
夕日に向いては元こりしゃりと
食う様も似たが這う様も似たり　ソラ
さらばこお蚕休をいわう
しじの休が真実蚕　ソラ
たけの休が鷹子に優る
ふなの休がふんだん蚕　ソラ
にわの休が俄に育つ
四度のねせおきなんくせ無うて　ソラ
おん家の広さが七十五間
蔟ゆたかにおりあげまして　ソラ
雑なくくせなく蔟にあがり
蔟にあがりてつくりしまゆは　ソラ
加茂や河原や片品川の

荒瀬にすんだる小石の重さ　ソラ
重さもおもいが堅さもかたし
重さ堅さのこのよいまゆを
選りてみよとて量りて見れば
大まゆが千石に小まゆが千石
種まゆ共には万々石よ
万々石なる繭山かざり
これのおん家の乾の方に
七十五間の仕事場建てて
物の上手をお宿へ集め
美濃の国では綿かけ上手
上州の国では糸操り上手
京の西陣九州の博多
桐生、足利機織り上手
三日三夜にまゆ練りあげて
六日六夜に綿かけあげて
七日七夜に糸操りあけて
明る八日はお機にあがかる
昔たいまの中将姫は
綾が上手で錦が上手
月形日形に女笹に男笹
雲に水昌、霞に千鳥
梅に鶯織りこむならば
一疋織りては元三尺を
蚕飼繁昌とお稲荷様へ

二疋と織りては中三尺を　ソラ
お伊勢は神明大神さまへ
三疋織りては末三尺を
熊野は三社の権現さまへ
お簾にあげたる残りし絹を
網代かごへとたたみ入れて
琉球産にてりんりとしめて
荷物に造れば百二十五駄
百二十五駄のこの売りものを
京へやろうか大阪へやろうか
大阪は商売繁昌のところ
数多入りくる商人たちが
（右三行は明治の代になり外国との貿易をするについて改正してつぎの三行のようになった）
京へやろうか浜へとやろうか
浜はイギリス、アメリカ人の
数多入りくるイジンやツウジ
田舎長者のこぶくの荷じゃと
ほめや悦び買い取るならば
大判千枚小判が千両
銭かね共には万々両よ
万々両なるかね受け取りて
都ではやるは台八車
台はち車にゆらりとのせて
七福神がお手打ちかけて
布袋　福禄　寿老人さまよ
昆沙門天には弁財天よ
恵比須が音頭で大黒木遣り
木遣音頭でえんさらさらと
これのおん家へ引きくるなれば
銭庫が七つにかね庫が七つ
十四のお庫へ金積みこんで
残りしお金や余りし銭を
お恵比須さまへとお上げやもうす
鶴は千年亀万年よ
これのおん家は万々年よ
お蚕繁昌とお祝いもうす
お蚕繁昌とお祝いもうす

終り

（注）この歌は、高山村中山の人が昭和四年に近所に住んでいた人から直接聞いたものを全部カタカナで書き残したものを、娘のむこが昭和十三年にそれを見て、自分の聞いたことと合わせ一部分書き加えて漢字とかなまじり文にかきなおしたものである。
父奈良長作が農作をしながらとか風呂の中とかで歌ったのを聞いて最初の部分だけ知っていたが、全文を残してあったのでうたう

ことができた。

春駒のうたい方

男二人にて、その一人は板を馬の首から上の形に切り絵を書いたものに、しま模様の布を両手で持てる程度の長さにつけ、たてがみと尾にあたる部分に細長い五色の紙をたくさんつけ、首の部分に鈴を二ー三個つけたものを持ち、それを振りながら調子をとりうたう。

一人は、うちわだいこを持ち桑の小板で鈴の音にあわせながらたたいて調子をとりながらうたう、一人がひとくぎりうたい「ソラ」と言う「あいの手」で交替してうたったものであるという。

○かぞえうた

伝承地　吾妻郡六合村広池
伝承者　篠原　西蔵（M42）

一つとや　人々忠義を第一に　第一に
おおげやたかき　君の恩国の恩
二つとや　二人の親ごを大切に　大切に
思えば深き　父の愛　母の愛
三つとや　幹は一つの枝と枝　枝と枝
仲良く暮せよ　姉妹　兄弟
四つとや　良きこそたがいにすすめあい
すすめあい
悪しきをいさめよ　友と友　人と人
五つとや　偽りいらぬが子どもらの子どもらの
学びの初めを身につけよ　目にそえよ
六つとや　昔を考え今を知れ　今を知れ
学びのはじめを　こころえよ　おもいでよ
七つとや　難儀をする人見るときは見るときは
力のかぎりは　いたわれよ　あわれめよ
八つとや　病は口より入ると言う　入ると言う
飲みもの食い物　気をつけよ　こころせよ
九つとや　こころは必ず　たかくもて
たとえ身分は低くとも　軽くとも
十とや　とおき祖先のおしえおもうおしえおもう
守りてつくせよ家のため　国のため

○せえもんがたり

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

それきた　やれきた
きたともうして
お客でなし、ひきゃくでなし
まいとしまいるまめぞうだ
まめぞうがきたなら
なにかやらずばなるまいと
いれものこばちをたずねるそうな
いれものこばちがないならば
みでもはちでもはんぎりでも
せえふろこがのそこぬけでも
まめぞうはいやとはもうしません
アアポカポカ

○せえもんがたり

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

東海道てば南海道
南海道てば東海道
東海道のまんなかで
くるくるほうずが三人でた
一人のほうずがしんぎょうよんで
一人のほうずがころものほうがで
一人のほうずはしごとがないと
みちなかふんばらがって
しょんべんちょっとこいたれば
はちがちんこちっくりさした
あいたたたつうつうつう
いとうてやあめてねえらんねえ
おいしゃさまにみせたれば
わかいもんのこんだから
よこねのはじまりだと
いったねかたいようさん

F 子守歌

○子守歌

伝承地　吾妻郡中之条町山田
伝承者　田村はな（M28）

〽ねんねんこもりはどこへいった
あの山こえてさとへいった
さあとのみやげになにもろた
でんでんたいこにしょうのふえ

〽なあくな、だあまれ
きいじのこ
なあくとながさきよめにやるよ
だまるとだるまさんかってあげる

○子守歌

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

〽ねんねんしなさい　とこなさい
ねんねて　起きれば良い子だよ
ねんねん　子守りはどこへ行った
あの山越えて　里へいった
お里のおみやげ何買った
でんでんだいこに　しょうの笛
それを　たたいて　遊びなさい

○こもりうた

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

〽ののさんいくつ
じゅうさんななつ
まだとしゃわかいな
わかごをうんで
だあれにだかしょ
おまんちゃんにだかしょ
おまんちゃんはどこいった
あぶら買いに茶買いに
あぶらやの前で
すべってころんで
あぶらいっ升こぼして
ああかいおべこよごして
おっかさんにおこられて
おとっつぁんにほめられた
そのあぶらどうした
たろうどんのいぬと
じろうどんのいぬが
みんななめてしまった
そのいぬどうした
たいこにはって
あっちいいっちゃあどんどことん
こっちいいっちゃあどんどことん

G わらべ歌

○まりつきうた

伝承地　吾妻郡中之条町赤坂
伝承者　田村　てう（M33）

〽むかいやあまでわらびおおるは
ひとのよめか、むうすめか
むすめなあれば、もらいもうして
かどになあのかたあたせて
うちむうぎをうたせもうして
おてにまあめがこうこのつ
ここのうつじゃ、よめごじたくで
とうじゃとのさんにもらわれて
じゅういちじゃ、たまのようなる
おこをもうけて、
なのかななばんさあかもり
さかもうりがおいたなあらば
つづみたたいてはやしましょ
そうこでいっかんかしまあした。

○まりつきうた

伝承地　吾妻郡中之条町赤坂
伝承者　田村　てう（M33）

〽おらがおせどの　よい（良い）なりさあまへ
かみかほとけか　おしゃりんさあまへ
おしゃりうまれて、おいろがくうろい
おいろくろけりゃ　けしょしてたあまれ
たまいすずりばこ、まきえのふうでは
ふでがよれたら、じょろやへなあわれ
じょろのおなかへ　おきくがひいとり
おきくどこゆく　ぶんごのまあちへ
さあさおかまいな、おかまいな
こんやはどうこへとまろうか
ちゃちゃっぽのきのしたで
たあたみさんじょう、ねこさんじょう
こがねのさかずきぶんだして
ととさんいっぱいあがらんか
かかさんいっぱいあがらんか
そうこでいっかんかしました。

○まりつき

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）
　　加辺つねじ（M39）

〽むこう山のなき鳥は
ちゅうちゅう鳥か　めんどりか
ちゅうどの　ぼうのみやげ
なになに　もろた
金のかんざし　もろた
やぶのかげに　おいたらば
ちゅうちゅうねずみが　しいてった
どこから　どこまで　しいてった
かまくらかいどうの真中で
一ぬけ、二ぬけ、三ぬけ、さくら
さらの木の下で
金のかんざし　見つかった

○まりつき唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）
　　加辺つねじ（M39）

〽おまぐち、けまぐち、あいかわ、ちかわ
おいおい　そめかわ信濃原　善光寺
あっちの　みいしゃら
こっちの　みいしゃら
しんこう　みいしゃら
ほかけ舟が　二ちょ続く
三ちょ続く
その舟に　おん女郎乗せて
おん客乗せて　あとから

やかたがおしかける　おしかける
おしかける
おいどのなかやのなか娘
色白で　目元化粧して
いささか　庄屋へもらわれて
その庄屋が　はでの庄屋で
きんらんどんすが　七重ね
七重ね、八重ね　そろえて
そめておくれよ　こうやさん
こうやのやくなら、そめてもあげよか
はってもあげよか
おかたはなにほどおつきやる
かたすそは　うめのおり色桜のおり色
その女は　めんぼくないとて
からす川原へ　身を投げた
身は沈む　髪はうくうく
手箱どんどん　流れて
その手箱を　あけて見たれば
ようじ三本　筆二本
その筆で　字書いてみたれば
おなかじょうろと　書けました
おや　書けました
そこで　一貫かしました

○まりつき唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

〽おん正々月正月は
松を立て　竹を立て
かざりの下から出た鳥は
羽根が十六、目が一つ
目が一つとなったれば
道や道路の真中で
誰、誰れが石投げた
男の子供が　石投げた
男の子供は　にくいな
女の子供は　かわいな
かわい、かわいとはしかけた
そこで　一貫貸しました

○じょうり　きんじょ

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

〽じょうりきんじょ　きんじょ　きんじょ
おたまが　たっくり　たっくり
火の元用心　橋の下のしょうぶが
咲いたか咲かぬか　今咲きそろう
みょうみょうぐるまを
手にとって見たれば
おくさんじゅ

○一段あがり

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

〽一段あがり　二段あがり
三段あがって　東を見れば
よいよい子が　三人通る
一度よいのが　いとやの娘
二度よいのが　二のやの娘
三度よいのが　ささやの娘
ささやの娘は　だてしゃでござる
赤ちりめんを　おこしにまいて
白ちりめんを　たすきにかけて
前のおかわり　しゃくに行ったれば
波にうたれて　死んだとさ
せんそう　まんそう
うたたのたったのた

（注）歌を唄いながら、あやとり、まりつきをする。

○おいもやさんの唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

〽しいやふう　みいやよ
いつむが　なながや
このがとお
とうからくだった　おいもやさん
おいもは一升　いくらかね
三十五文に　まけてやる
今ちと　まからか
しちゃらか　ホイ
そんなに　まければそんがいだ

○うさぎのもちつき唄

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）

〽このしゃばに
テンと　イタチと
ネコさえなけりゃ
俺が　やだもの
いやさかさ　ペッタンコ

○へびもむかでも

伝承地　吾妻郡長野原町羽根尾
伝承者　黒岩　とし（M41）
　　加辺つねじ（M39）

〽へびもむかでも
どおけどけ
おれは　かじやのめえむこだ
なたがま三丁　鎌三丁
みんな　といで持ってきた
胴中　切られて
びりつくな　びりつくな

○お手玉かぞえ唄

伝承地　吾妻郡嬬恋村干俣
伝承者　千川ゆり子（S2）

〽一番初めは　一の宮
二また　日光中禅寺
三また　佐倉の宗五郎
四また　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つは　村々鎮守さん
七つは　成田の不動さん
八つ　八幡の八幡さん
九つ　高野の弘法さん
十は　東京博覧会
十一　越後の本柱
十二は　浪子の墓参り
十三　桜の吉野山
十四は　四国の琴平さん
十五は　御天の天王さん
十六　ロシアの大戦争
十七　松本電車城
十八　浜辺の白うさぎ
十九は　九条の竹子姫
二十は　二宮金次郎
（注）歌を唄いながらお手玉をする。

○悪態唄

伝承地　吾妻郡嬬恋村干俣
伝承者　千川　健一（S23）

〽鎌原地獄にコヨ小宿
死んでも行くまい袋倉
田代は田が無い、米が無い
戸棚を開ければ　イモだらけ
イモ食っちゃブー
豆食っちゃスー

○ひとつとせ

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

一つとせ　人の通らぬ山道を
ちょうきっつあんと　おなっつぁんの
通り道　通り道

につとせ　二殿大根離れても
ちょうきっつぁんと　おなっつぁんは
離りゃせぬ　離りゃせぬ

三つとせ　見れば見るほどよいおなご
ちょうきっつぁんの惚れるは
むりはない　むりはない

四つとせ　よろいで通うちょうきっつぁん
とぼうで待ちるは
おなつどの　おなつどの

五つとせ　いつもはえらの　かんざしを
おなつにさせて
しなを見る　はなを見る

六つとせ　無理に結んだ腰帯を
ゆるめておくれよ
ちょうきっつぁん　ちょうきっつぁん

七つとせ　何かほしいか　おなつどの
働やこうばい
たてかがみ　たてかがみ

八つとせ　柔らか着物を着せたいが
ちょうきっつぁんの　こしめに
金がない　銭がない

九つとせ　ここで死のうか腹切るか
おなつをつれて
駆け落ちか　まいりましょ

十とせ　とかく女房にあいなれば
相盃でもいたしましょ
いたしましょ

（注）とぼう＝玄関　待ちる＝待つ
方言です。
お手玉（世立では『アヤあげ』と言う）
遊びのとき歌った。

○ホトトギス（かぞえうた）

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

一番初めの一の宮
二また　日光ちいせん寺　（中禅寺）
三また　さくらのそうごろさん
四また　信濃の善光寺
五は　出雲の大社
六つは　村々きんじさん　（鎮守さん）
七つは　成田の不動さん
八つ　八幡の八幡さん
九つ　高野のこうぼうさん
十は　東京しんがん寺
それほどしんがん　かけたとて
なみ子の病気は　なおらんか
ぼうぼうぼうぼう　なる汽車は
なみ子と　たけおの別れ汽車
二度と会われぬ　汽車の窓
鳴いて血を吐く　ホトトギス

○いちかけ　にかけ

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

いちかけ　にかけて　さんかけて
しかけ　ごかけ　橋をかけ
橋の欄干　腰掛けて

歩く向こうを　眺めれば
十七、八の　ねえちゃんが
片手に花持ち　せんこう持ち
ねえちゃん　ねえちゃんどこ行くと
わたしは　九州鹿児島の
西郷隆盛　その娘
明治十年戦争に
ぶたれてみれば父親の
お墓参りにまいります

○おーまんさま

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

おけとった　おけとった
さんごの盃　おけとった
これから　どなたにさしなりますか
あいだらむこうの
こかげのこえだえづくりの
おーまんさまへと渡します
おーまんさまへは　ゆてが悪くて
ほとの　だれかさんに渡します。

○ほうほけちょ

伝承地　吾妻郡六合村世立
伝承者　山本　きそ（M44）

ほーほーほけちょや　うぐいすや
あなたの　人相のべるとき
十二の卵を　産みはなし
親と兄弟をてばなし

○まりつきのうた

（ほととぎす＝たけおとなみこのうた）

伝承地　吾妻郡六合村広池
伝承者　篠原　酉蔵（M42）

一は　上州　一の宮
二また　日光　中禅寺
三また　桜のそうごろう
四は　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つは　成田の不動さん
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野のこうぼうさん
十で　東京　しんがん寺
これほどしんがんかけたれど
なみこの病は　なおりゃせぬ
たけおが戦地へ　向くときは
白いリンズの　はんかちを
うちふりながら　ねぇあなた
早く帰りてちょうだいね
ごうごうとなる汽車は
たけおとなみこの別れ汽車
二度と会えない汽車の窓
鳴いて血をはく　ほととぎす

（注）中心部に綿を入れて　周囲を糸で巻いたマリをつく。

○わらべ歌（おてだまうた）

伝承地　吾妻郡六合村小雨
伝承者　高原　茂文（T1）

一番　初めが一の宮
二また　日光中禅寺
三また　桜のそうごろう
四は　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つは　村の鎮守様
七つは　成田の不動さん
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の高野山
十は　東京　しんがん寺

（注）歌に合せて　お手玉をする。

○しりつぎうた（しりとりうた）

伝承地　吾妻郡六合村広池
伝承者　篠原　酉蔵（M42）

一番楽しいお正月
学校へあつまる四方拝
はいはいもしもし電話口
口から病は入りやすい
やすいえんぴつすぐおれる
るすばんたのんだおばあさん
さんかくばいで五十七
七里が浜にゆいが浜
はまぐりとるのはしおひがり
がりがりかじるはおせんべい
べいべい言葉はやめなさい
さいどうつつみをポンと打つ
うつくしいのは花の山
山から子ぞうが泣いてきた
北と南に海がある
あるへいとうやらこんべいとう
とうふは四角でやわらかい
海軍　陸軍　飛行隊

○まりつきうた

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　奈良嘉四郎（T7）
綿貫四郎右衛門（T4）

ほんだよほんだよ　一ちょめとほんだよ
二ちょめとほんだよ　三ちょめとほんだよ
四ちょめとほんだよ　五ちょめとほんだよ
六ちょめとほんだよ　七ちょめとほんだよ
八ちょめとほんだよ　九ちょめとほんだよ
十めとほんだよ
つうかみつうかみ　一ちょめとつかみ
二ちょめとつかみ　三ちょめとつかみ
四ちょめとつかみ　五ちょめとつかみ
六ちょめとつかみ　七ちょめとつかみ
八ちょめとつかみ　九ちょめとつかみ
すうすりすうすり　一ちょめとすすり
二ちょめとすすり　三ちょめとすすり
四ちょめとすすり　五ちょめとすすり
六ちょめとすすり　七ちょめとすすり
八ちょめとすすり　九ちょめとすすり
十めとすすり
おまんがかんざし
ささねばささしてせっせっせ
にいよせこんばん中山峠の寺衆が女房がしかたがね
下のおばさんつづみがほしく
上のおばさんたいこがほしく
てらぶさんかい長羽織
仕立ててやるときゃよいけれど
質屋へやるときゃあいそもねえ
しちこまこまげてしょなしょなと
橋かけて
その橋おいとさんが渡りそめ
ツーゴーミーがヨーでイツがムーでナナがヤーで
ココがトーで　まずまずいったんかしまあした。

○まりつきうた

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

こんこんこそでは、ひゃくななつ
これほどま（も）とめてやるからは
よめにいっても　でてくるな
あさははやおき　とをあけて
四十二まいのとをあけな
すまからすままではきだして
じいさん、ばあさんおきとくれ
けさのおかずは、なんにしよ
ひしこにあぶらにかんぶうき
まずまずいっかんかしまあした

○あやんごとり歌（おてだま）

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　奈良嘉四良（T7）
綿貫四郎右衛門（T4）

〽向う横丁のおいなりさんを
ちょいとおがんで渋茶をのんで
渋茶よこよこ横目で見れば
栗のだんごかお米のだんごか
お団子団子人目をぬすんでちょいとなめた
先ず先ず一たんかしました

○あそびのうた（おにぎめ）

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

〽どんぶりばちこしょ
いちこにこなめたがじゅうもんしょ
せきのはたへちゃわんおいて
あぶない　あぶない
のんのんのへほの花が咲いた
つうぼんだ、おかじょがおうぬけ

（注）数人の子供が片方のにぎりこぶしを出して円形にそろえ、指で一つ一つさしながらこの歌をうたい、だんだんぬかしていき二人になるまで何回でもくり返す二人になったら次のうたをうたって「おに」をきめる

〽お寺のさらば
ひとさら　ふたさら　みさら　よさら　いつさら　むさら　ななさら　やさら　ここのさら　とさら　とさらのうちでじゃのめのからかさかぶったもんがおうにだ。

（注）残った二人は片方の手と手の指を組んで、食指で歌にあわせて片方ずつさしながらうたう

○あそびの歌（おにぎめ）

伝承地　吾妻郡高山村中山
伝承者　後藤あき子（M43）

〽じょうりけんじょけんじょ
おたまがたんぐりたんぐり
はしのしたのしょうぶかさいたかさかねか
まださきそろわん
みょうみょうぐるまにてをとってみたれば
ちょいとぬうけろ。

（注）数人の子供が、片方のぞうり（はきもの）をぬぎ円形にならべて、一人が棒か指で一つ一つさしながらこの歌をうたい一つ一つずつぬかしていき、二つ残るまで続ける

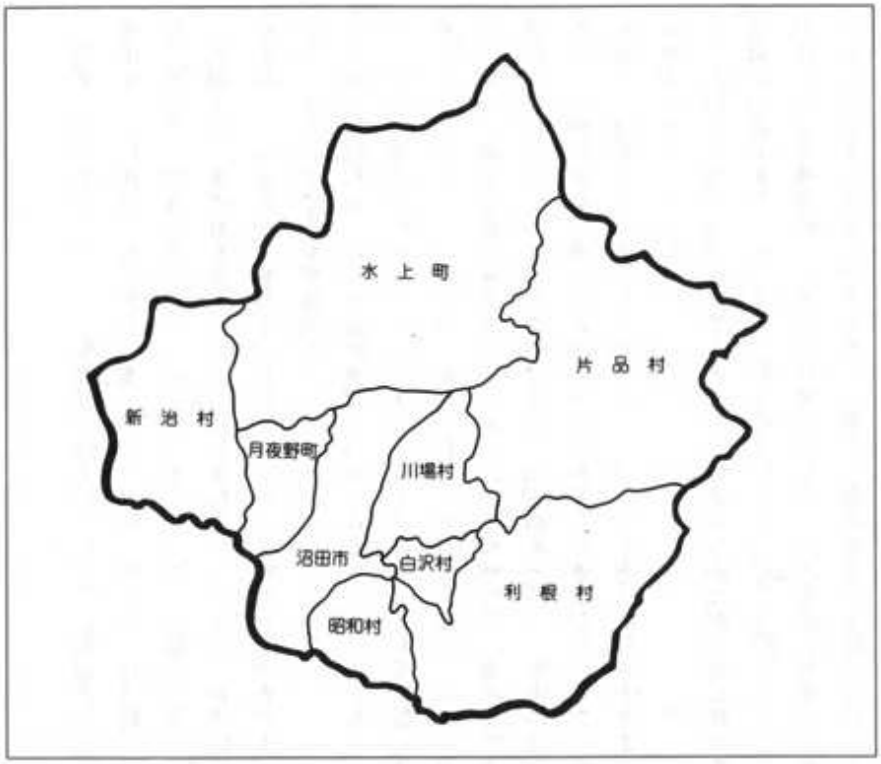
残った二つのぞうりを上へ投げあげて落ちたとき裏の出た方をおにとするあそびである

○あそびのうた

（あくたれうた（わるくちうた））

伝承地　吾妻郡高村山中山
伝承者　奈良嘉四郎（T7）
綿貫四郎右衛門（T4）

〽ひとりふたりさんめのこ
よってねぶりくそかきぼう
はしのしたのどうぐそ
おがらにつっかけひんなめた
かいてはしるむくいぬ
あとをつっかけかんがらす
ええん、ええんとないたんべや



「大正期の馬子」

馬の背でカンキン(酒しぼりの袋など)を、三平峠を越えて運び、帰り荷は会津から酒、米などを運んだ。

一、利根地域の概観

利根郡は県北部に位置し、福島県、栃木県、新潟県に隣接する県境の郡である。沼田市、月夜野町、水上町、白沢村、利根村、片品村、川場村、新治村、昭和村の一市、二町、六村からなっている郡である。

利根郡は一部の村を除いては、雪国的特長を持っており、脊梁山脈といわれる三国連峰が、裏日本と表日本を二分している。その表日本の最先端にあるのがこの利根地方なのである。

この利根郡には、いくつかの重要な街道が古くから開けており、それらの街道が隣接の県から、さまざまな文化や諸芸能、そして民謡も運ばれて来たのである。一例であるが三国街道をあげてみると、この街道は古く関東と越後を結ぶ重要な街道であった。大和朝廷が、東国の蝦夷征伐のために、本県上野国を本拠と定め、三国街道を通って蝦夷の鎮静にあたったのである。更には戦国の武将である上杉謙信などが、この街道を通って関東へ兵を送ったのである。三国街道は古代からさまざまな深い歴史性を持っていた。

また物資の重要な流通路でもあった。佐渡の金山支配である佐渡奉行往来の街道でもあった。この三国街道は別名佐渡往還と呼ばれていたが、当時いかに佐渡金山への奉行の往来の激しかったかを伺い知ることができる。しかし、佐渡金山からの金は他の一部の輸送路を経て江戸へと運ばれた。更にこの街道は、北国大名たちの参勤交代には欠くことのできない交通路であった。又、片品から三平峠を越えて会津への流通路が古くから開けており、利根村からは栃木への流通がなされていた。いずれにせよこれらの流通路を経て、前述したとおり経済、文化、諸芸能が盛んに利根地方に運び込まれて来たのである。

利根地方の気候は、冬季になると裏日本側の雪を季節風が運んで来て、降雪量は特に多い。利根地方の初雪は十一月頃から始まり、終雪は四月頃までである。一年の約半分近くは雪との生活というのが、この地方の特長といえよう。

そのため冬季になると、家にこもっての生活が多く、暖房用に、かつては莫大な量の薪を各家で集め、家の軒下や木小屋と呼ばれる燃料小屋に収納して置き、それを燃料とした。現在は石油やガスを用いるようになったが、しかし今でも薪など山の木を使って燃料としている家もある。

雪の中への外出は、かつては藁で作った藁ぐつを利用した。藁ぐつには雪に埋れないようにと、カンジキをはいて行動したのである。このカンジキを「ワカンジキ」と呼んでいる。

このような気候的なことから、隣接の県と行ききする場合も、雪のない春から秋が多かった。例えば屋根ふき職人、馬子、ゴゼ、薬うり（毒消し売りともいった）、木挽き、木流し職人、するす挽き職人、田植や養蚕などの季節労働者で、これらの人々は少なくとも民謡やさまざまな芸能の伝播者であったのだ。

次にあげられるのは、この郡では隣接県との婚姻関係が深く、特に新潟県とは顕著で、越後系統の民話やわらべうたの多いのも、婚姻関係によるものと考えられる。水上町平出に住む浜名マサさん（明治三十四年

生まれ）は、親族に新潟から嫁に来た者がおり、その方から伝承した等のものもあり、今回も多くのわらべうたや民謡を採集できたが、こうした婚姻関係により伝承されているものが、この地方には多い。

また利根郡に、他の地方にくらべて温泉の多いこともあげられよう。この地方の温泉の歴史は古く、湯治客も全国各地から来訪している。

利根地方各地の温泉を取り巻く自然の景観は格別で、こうした環境にある温泉だけに、文人等の多くが訪れている。昭和四年三月には、詩人の尾崎喜八と高村光太郎が、三国峠に程近く、谷深くにある法師温泉に。昭和八年ころには、直木三十五と川端康成もこの法師の湯に訪れており、更に若山牧水や与謝野鉄幹夫妻も、この湯を訪れているのである。鉄幹は水上湯檜曽にも来訪している。更には彫刻家の高田博厚は水上の温泉を三度も訪れている。中でも昭和四十三年には、十二月二日から二週間もの長期に渡って滞在しているのである。これは高田博厚がロマン、ロランの小説「ジャンークリストフ」の翻訳をするためであったという。利根の渓谷美といで湯の調和は、文人たちに深い趣となったにちがいない。すばらしい自然と風土にある利根地方には、民族芸能の多くが伝承されているが、中でも民謡やわらべうた等は顕著である。その特徴としては、自然が残され開発があまりなされていない面もあるが、それ以上に着眼したいのは、前述した通り県境の地方であり、隣接の新潟県や、福島県などが芸能の宝庫といわれる地方であることにも一因があろう。

芸能の豊富な隣接県と、利根地方はさまざまな流通があり、それによって、民謡やわらべうたなどが、豊富に伝播されたのである。

一例であるが、民謡をこの面から見るならば、新治村の盆踊り唄（四つ足踊り）は、新潟からの蚕びようや、田植人夫が新治村にかつてやって来て伝えたものといわれる。田植が済むと盆踊りの時期。新潟の人々も自分の国の盆踊りを歌い、披露し、それが新治に定着したのだという。新治村には古い盆踊りうたがあったというが、新潟の四つ足踊りの盆踊りうたが好まれ、古い在来の盆唄は消滅してしまったと伝えられる。新治村の四つ足踊りの盆踊り唄を調査探究してみると、この四つ足踊りが新潟県南魚沼郡浅貝に、また二居、三俣、小千谷市からも採集できた。新潟の盆踊りの方が掛け声や拍子が荒っぽい感がある。

なお、大正初年頃新治村に四つ足踊りよりも、少しテンポの早い六つ足踊りの盆踊りうたが入って来た。現在はこの六つ足踊りを、盆踊りで行っている。四つ足とは踊りの中で手拍子一つ打ってから、四歩あるくので四つ足。六歩あるくと六つ足という。

また、月夜野町の「月夜野盆踊」がこの地で歌われる以前には、やはり古い盆踊りうたがあり、これを「盆どり」と呼んでいた。しかしこの月夜野盆唄が入って来ると古い盆踊りうたは消滅してしまった。古い盆踊りうたは、利根地方で現在でも伝承されているものと同系。月夜野盆唄は、新潟県石打大字関に、万延六年四月二十九日生まれの関豊吉が、明治に入って月夜野町月夜野三〇四番地に移り住み、月夜野盆唄をこの地に広めたのである。はじめに月夜野盆唄といわず「盆どり」と呼んでいたという。関豊吉は美声の持ち主であり、故郷新潟県石打の盆踊り唄を、新天地である月夜野に広めたのである。関豊吉は昭和十八年十二月八日、七十四歳で月夜野で他界している。このように利根郡の民謡、いや群馬の民謡を正しく規定して行くには、こうした伝承過程を綿密におさえて行く必要がある。利根地方の民謡やわらべうたが、隣接の県からの影響が大きかったことを理解したいものである。

次に今回の調査で採集できた範囲で「利根地方の民謡とわらべうたの概観」について、簡単に述べる。利根郡での民謡やわらべうた等、今回

の調査で採集できたのは、二百三三曲であった。調査期間の都合上、数箇所未調査になってしまったのは残念である。

さて、調査した町村で特徴的な民謡やわらべうた等について、順次簡単に述べる。

(1)白沢村

○白沢村では生枝の獅子舞うたが先ず上げられよう、この獅子舞は沼田真田城主より拝領したという伝伝がある。獅子頭は左甚五郎作と伝えられているが（さだかでない）、この獅子舞にまつわる獅子舞うたは、実に優雅である。格式高い獅子であることがうなずける曲想を持つ。

○次に下古語父地区のわらべうたの手まりうたで「上の姉さん手まりが上手」と歌い出すのは、リズムもゆったりで、段物でうたわれ江戸期の手まりうたと思われる。

○平出地区の木登りうたは珍しい。歌詞は「ザッサコ、ザッサコ桃木、桃がなったらくれるぞ」と歌い出す。わらべうたの中でも木登りの附帯的のものは、県下でもこのうただけであろう。

○高平地区の酒造りうた「酒屋流し歌」は、新潟から今でも杜氏が高平地区の酒造屋に来て酒造りを毎年行う。「上州人が実際に酒造りをしながら、歌い伝承している。」そのうたが地域に歴史的に定着していれば、群馬の民謡と規定できようが、真似うたには注意を要する。

(2)利根村

○東追貝地区の月待信仰にまつわる、二十三夜講で歌われる如意輪観音ご詠歌は、現在も毎月行っており、詞章内容も実にしっかりしており、高く評価できる。

○平原地区の盆踊りうたで「来るか来るかと川下見れば」と歌い出されるこの歌は、八木節以前にこの地方で歌われた古い盆踊り唄で、同系統の盆踊り唄が利根郡全域にみられる。

○穴原地区の石臼挽きうたであるが、石臼挽きうたや、するす挽きうたは県内全域でも誠に少ないのであるが、今回の調査で採集できたのは、大きな収穫であった。「おめでたいぞえこの石臼は」と歌い出されるが、音律からみて葉歌系統のうたのように見受けられる。

(3)片品村

この村では、石を芯棒として用いる地搗きうた、桑もぎうた（この地方は雪が深く桑の木が冬季枯れてしまうので、桑の木を高桑といって、高さ四m程に仕立てる。養蚕期にはこの高桑に登って、桑の葉をもいで収穫するが、この時のうた）や、木流しうた、草刈りうた、馬子唄など多くの採集となった。ただし、桑もぎうたと草刈りうたの施律が同一で、葉うたの曲節でうたわれている。

(4)川場村

○門前地区の春駒うたは、県下でこの地区だけで、男衆によって伝承されている。古くは養蚕県群馬には、春駒うたが各地で盛んにうたわれていたが、この地区だけに伝承されているのは尊いことである。

○萩室地区の桑もぎうた、まゆかきうたなど採集できたが、同一施律ですべて盆踊り調のうたであった。九十歳をすぎた老人の歌だったので、音程も不確実。

○湯原地区の縄とびうたで「松ボグリがあったとさ」と歌いだされるこのうたは、ゆったりとした節奏で、ごくめずらしい歌であった。

(5)月夜野町

○師地区に伝承されている「くずかきうた」は、今回の調査の大きな収穫であった。このうたは、県下でもここのみであろう。この地方では冬季になると、山から落葉を集めて来て、牛馬小屋に入れ、踏ませて堆肥にし、田畑にほどこして肥料とした。この歌は山で落葉を熊手で集める時に歌われるうたである。

○月夜野地区の子守唄で「ねんねん、ねじまのやぐら乙女」と歌い出されるこの歌は珍しい。同地区の子守唄で「よいよい横浜丸焼けだ」と歌い出されるこの歌は、昭和八年八三歳で他界した、後閑ハチさんから教えてもらった子守唄であると、この歌の演唱者は伝承過程を語っていた。古いうたである。

月夜野盆唄については、前述してあるのでここでは略す。

(6)水上町

水上地区は民謡の多いところ。過去に桶引きうた、木流しうた、土入れうたなど珍しい民謡が採集できたが、今回の調査では採集できなかった

○平出地区の道祖神うたは、雪の中で歌われる。道祖神の日には、厄年の者が雪の中で激しい格闘する。格闘が激しければそれだけ厄を落すのだと。この時うたわれるうただけに貴重。

○青木沢地区の子どもが、遊びはじめの時に「宝暦元年やかん年」と歌い出す、この長いうたは誠に珍しい。更にこの地区のお手玉うたの仕草で、お手玉を空中に投げておき落ちて来る間に、手の平でくちびるを、タンブルブーと歌いながら振えさせる。この仕草のお手玉うたは他にない「ひとつひをなめ、タンブルブー」と歌い続ける。

(7)新治村

○生越地区の絵書き歌で「三角またきて四角、四角はとうふ、とうふは白い」と歌いはじめるこの歌は、歌いはじめは絵書きうたのリズムであるが、途中からことば遊びうたへと変わって行く。しかし、最後まで絵を書き続けるところをみると、絵書きうたの附帯目的でうたわれてはいるが、絵書きうたと口遊びうたの不純混合のうたである。こうしたうたは意外に古い歴史をもつ。

○須川地区の竹なんごうたで「一なげ、二なげ」と歌い出される数え歌形式のうたは珍しい。なんごはお手玉のことで、竹なんごは細く割った竹（食事でつかうはしのように）で行うのである。同じ須川地区のまりつきうたで、まりをつきながら激しく身体表現をするのは、まりつきうたの中でも、上級のものである。

○湯の原羽場地区の日枝神社の獅子舞うたで、初吉利、仲吉利、後吉利の形式が備った特徴のある中で正確に伝承されている獅子舞うたは貴重である。

(8)昭和村

○森下地区の盆踊りうたは、八木節と呼ばれているが、この八木節は、古くこの地にあった盆踊りうたと、八木節が不純混合したもので、節奏も八木節になり切れないゆったりしたもので、踊り手の掛け合いうたの中に、古い盆踊りの形式がそのまま残されている。

○川額地区には、正月のうた、盆のうた、十日夜のうた、年末のうたなど歳時うたが、そのまま伝承されているのも、これ又貴重で、この地区で年中行事等を今も大事にしているゆえんであると思われる。

(9)沼田市

○上沼須地区の数えうたで、曲の終わりの部分に、ブラブラと蝿子ことばを入れているのは珍しく、更にこの歌の詩章内容がすべて「ゆれる」物を数えうたで歌っているのがおもしろい。例えば「九つとや、子ども大将大いばり、お腰の刀がブラブラ」。この地区のわらべうたで「一平さんが荷いしよって」と歌い出される、口遊びうたは明治以前から伝承されて来た古いうたであるという。

さて、利根でただ一市の沼田で、今回の調査で、民謡があまり採集できなかったことは、誠に残念であった。更に各市町村での採集も局部的な調査であったような傾向であったかも知れない。しかし、今後残されたと思われる地区の調査については、個人的にも継続していきたいと思っている。

今回の民謡緊急調査にあたり、県文化財保護課から、われわれの地区調査の現場にまで多々出向いて、調査の助力になって下さった陰の努力が、今回多くの民謡を採集することの基礎になったと思われる。この面を高く評価したい。

二、調査民謡

A 労作歌

ハァー　越後出る時やエー
涙でヨー　出たが
今じゃ越後のエーナンダ　風もやだ

伝承者　中沢春日江（T10）

〇臼挽き唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村志ヅ江（T13）

〽おらはここの嫁こじゃもん
いくら邪見の親じゃけど
可愛いとのごの親じゃもの
おらはここの嫁こじゃもん

（注）手で臼を回しながら粉などを挽く時に唄われた

ハー流しヨー　出たときゃエー
鬼かとヤ　思うた
抱いて寝てみりゃエーナンダ　猫のようだ

ハァー　宵のヤ　もとすりゃエー
夜明けのヤ　甑（コシキ）
造りますぞいエー　ナンダ　良いお酒

〽おめでたいぞへ
この石うすは
入れてまわせば
粉ができる

（注）石臼で粉を挽く時に唄いながら臼をまわす。粉は「子」も意味する。

〇酒屋流し唄

伝承地　利根郡白沢村高平
伝承者　阿部　淳一（S2）

〽ハァー　朝のヨ流しはエー
どなたにヤ　となた
かわい殿御のエーナンダ　声がする

ハァー　娘ヨ島田にエー
蝶ちょがヤ　とまる
とまる筈だよエーナンダ　花じゃもの

（注）冬期酒造りの時、高流しにて大桶等を竹で作った、ささらで洗う時の作業唄。

〇木流し唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽木屋は宿がいよ材木は下へよ
後にのこるはよドント切れクラジよ

〽メンパかかえてよとび竿さげてよ
河原歩くはよドント木屋乞食よ

〽木屋の着物はよ半天姿よ
長い着物にゃよドント縁がないよ

〇臼挽き唄

伝承地　利根郡利根村穴原

〽木屋に惚れるならよ小庄屋かしきよ
　金でとれねえでよドント米でとるよ

〽国を出る時はよ涙も出たがよ
　今じゃ紀州のよドント風もいやよ

（注）片品村には幕末時代に紀州藩の用材人夫が入り込み、その系統の木流し唄が多い。用材人夫の中にはそのまま婿には入って落ちついた者も少なくない。
　曲も明るく軽快でリズミカルである。歌詞は全国的に共通しているものが多い。

山で木が伐られ、小流に一本づつ流され、水量の多いところではじめて筏に組まれ、片品川から利根川まで運んだ。筏で組まれた材木のうえで歌われたもので大正末までこの運搬は盛んだった。

○桑摘唄

伝承地　利根郡片品村越本
伝承者　笠原マキノ（T3）

〽馬鹿にしゃんすな　枯木だとても
　藤がからまりゃ花が咲く
　ア　グイーン　グイーン　だ

〽可愛い男の来る晩は知れる
　千両せきだでじゃあらじゃらと

〽可愛い可愛いと言って鳴く鳥も
　鉄砲あたればいちころだ
　ア　グイーン　グイント

〽どうせガサガサと言われるからは
　出来る限りは浮気する

〽夕べしたせか　頭がやめる
　二度とすまいぞ箱枕

〽太田　越本　中里越えて
　新井よいとこ　三松橋
　ア　チョイナ　チョイナダ

〽声はかれても　ガサではないよ
　今の流行の　流行風邪
　ア　グイーン　グイーンダ

〽日稼とりとて　大きな鳥よ
　家の桑の木　巣をかけた
　ア　グイーン　グイーンダ

〽〇〇〇〇〇〇〇〇と言うて泣く鳥は
　鳥のうちでも助平鳥
　ア　グイーン　グイーンテナ

〽心せけども今この身では
　時節待つより　他はない
　ア　グイーン　グイーンダ

（注）片品村の端唄は、大正時代頃まで言われた端唄と、同じ意味であり、小唄のように気軽に歌えるものが多く、節や文句も覚え易く曲は軽快である。野良や山仕事など、外で働く時に気分よく歌った。
　※「せきだ」は下駄の一種
　「カサ」は病気（性病）の一種

○米つき唄（木挽唄）

伝承地　利根郡片品村越本
伝承者　笠原マキノ（T3）

〽奥山で一人で米つくあの水車
　誰を待つやらア　くるくると
　　ヨイショ
　こぬかこぬかでよコウ苦労するよ
　いつか又　チョイチョイ
　世に出てママとなる
　チョイチョイチョイガナ

チョイチョイ

(注) 水車小屋での作業中、また宴席等でも歌われたという

○草刈唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽可愛い男と朝草刈に
草の無い山七めぐり

〽水の流れがさかさになれば
流れて行きたい桧枝岐

〽可愛い男は待つ夜にゃ来ない
待たぬ夜に来て門に待つ

〽一にはきがり二つにつかみどり
三にばらりとかかえかり

〽国を出るときゃ涙で出たが
今じゃ越後の風もいや

〽来るか来るかと待てども来ない
浜の松風音ばかり

〽可愛い男が二度来るならば
一度はお駕籠で送りたい

〽三松橋から大蛇が出ても
伊閑町通いはやめられぬ

〽来るか来るかと三松の橋で
待てど暮せど来はせない

〽男振りより金より心
金で買われぬ心意気

〽男よいのに惚れるな女子
男よいのにゃ実が無い

〽男伊達なら片品川の
水の流れを止めてみな

(注) 草刈唄は大正時代頃まで歌われた端唄と同じ。歌詞はこれと言った定まったものではなく、次々に替え歌が作られ、その数は多い。内容は恋に関するものが多い。人によっては桑もぎ唄とも言う。

野良や山仕事など外で働く時気分よく歌った。

○桑もぎ唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽太田越本中里越えて
ここが新井の三松橋

〽蚕あがれば沼田の町へ
連れていくから辛棒しな

〽蚕三十日は旦那さんのメカケ
おかみさんとは仲たがい

〽親の意見も一度はハイト
あとは出雲の神次第

〽可愛い男と夏吹く風は
そよといれたいわが寝間へ

〽可愛い男に謎かけられて
解かにゃなるまい朱子の帯

〽可愛いけれども門に立ちゃ乞食
門に立つまい　立たせまい

〽可愛いけれども貴方は仇

固いわたしを迷わせた

〽固いわたしを迷わせておいて
ほかへ手を出す義理しらず
〽可愛い可愛いが家まで知れて
うちの親達ァ寝ずの番

〽家の親達ァ寝ずの番しても
逢わずに帰した事はない
〽可愛い男の子でさえあれば
産んで死ぬとも　はらみたい

(注)　草刈唄と同じ
人によって草刈唄、桑もぎ唄と言っていた。

○地搗唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽ここはどこよと大工さんに聞けば
アサンヨー　アサンヨー
ここは大事のおん床柱
アサンヨー　アサンヨー

〽ここはどこよと棟梁さんに聞けば
アサンヨー　アサンヨー
ここは大事のおん隅柱
アサンヨー　アサンヨー

〽あの娘良い娘だほたもち顔で
アサンヨー　アサンヨー
きな粉つけたらアラなおよかろう
アサンヨー　アサンヨー

〽伊勢にななたび熊野へ三度ョー
アサンヨー　アサンヨー
愛宕さまへは月参り
アサンヨー　アサンヨー

〽おらが隣の味噌玉娘　嫁にやるとて
洗濯までしたが臍が出臍でやれ
笑われた

(注)　家の土台を据える時の地搗の時に歌われた。
櫓をたてて石の芯棒を真中におき藤のつる等で芯棒を引きあげ一気におろし地搗をした。
指導は棟梁があたり、作業人の呼吸を合わせて作業した。ほとんど棟梁が歌ったとの事である。
地搗は村の人達が手伝った。慣れない村の人達なので危険が伴うので、棟梁は真剣で歌い続けたと言う。
作業が済むと棒は村の神社に納めた。これを「芯棒がえし」と言って酒と米を供えた。村人なら酒と米を備えれば誰でも使えたと言う。神社に納めておいたのも地搗きの時に怪我の無いようにとのおもいであろう。

○木挽唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽ハァー元締め金貸せ鋸の葉が欠けたよ
ついでにあまめのよメンダ顔みたいよ
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽ハァー山で床とりゃよナ木の根が枕よ
おつる木の葉がよナンダ夜具となるよ
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽ハァー嫁に行くとてよナ長持いらぬよ
どうせサー木挽さんのよナンダ嫁じゃものよ
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽大工さんよりよ木挽さんはいやだよ
仲のよい木をよ　引きわける

ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽木挽さんよりよ　大工さんはいやだよ
シンの心がよ　曲り金
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽旦那大黒よ　おかみさんはエベスよ
できるその子はよ　福の神
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽木挽さんかのよ　山にも棲むがえ
木の実カヤの実よ　食べはせぬ
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

〽元締めよろこべよ　ホタに羽が生えたえ
運賃要らずによ　とんでいく
ハァー　ズリンコ　ズリンコ

（注）越後や信州からの木挽き職人より伝播されたものであろう。何れも荒い男が山中で心の憂さをまぎらわすために歌われたものなので恋の歌が多い。歌詞から、木挽き職人が元締め、旦那といった親分に統率された渡り職人だったことがわかる。

○片品馬子唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽一夜五両でもハァ馬方いやだョー
ハァー馬のハァー手綱で日を暮らす
ハイ　ハイ

〽尾瀬の沼へはハァー夏来てごらんョー
ハァー鶴もハァー涼みで舞い遊ぶ

「コラどこ通る真中通りゃがれ
三平峠だもうすぐ尾瀬だよ
一日に三升の糠ばか食やがって
屁ばっかしやがって　コラ」
ハイ　ハイ

〽一夜五両でもハァー馬方いやだよ
ハァー七日七夜のよ露を踏む
ハイ　ハイ

〽上州なれどもハァー高崎や江戸だ
ハァー江戸にゃませどもよ女郎居ない
ハイ　ハイ

〽一夜五両でもハァー妻持ちゃやだよ
ハァー妻の思いがよ恐ろしい
ハイ　ハイ

〽めでためでたよハァーこの座はめでた
ハァー鶴がおしゃくまでよ亀が飲む
ハイ　ハイ

〽上州よいとこハァーおらがの里はよ
東白根で西武尊
ハイ　ハイ

（注）碓氷郡の坂本の雲助唄、神奈川の長持唄に類すると言われている。曲はその辺から移入されたものであろうが、詞は尾瀬を中心に地元で作られたものである。

尾瀬沼に大正末まで「荷つぎ小屋」があり、片品からは布、南会津からは酒や米が運ばれ、荷つぎ小屋から運搬した。馬10頭位が一群となり、三平峠を越してなだらかになると先頭の馬子から歌い出し、一節終わると次の馬子が歌うというように歌い続けられた。

○桑とり唄

伝承地　利根郡川場村萩室
伝承者　角田　ゐい（M33）

〽唄を歌えば　世間の人が
あまりお転婆と　さとりゃがる

〽唄を歌って　御器量が下がるなら
まっと私は　歌いまァす

〽唄を歌ったで　給料が払えなけりゃ
私は芸人に　なりますよ

〽晩に来るなら　裏からおいで
表は車戸で　音がする

〽晩に来るなら　草履でおいで
下駄じゃ　二の字の跡が付く

（注）蚕どきの桑摘み唄

○繭かき唄

伝承地　利根郡川場村萩室
伝承者　角田　ゐい（M33）

〽蚕（かいこ）　三十日は　来ると云うに
来たり泣いたり　泣かせたり

〽町のチャンコは　太功記の十段目
土岐　明智が　出て困る

〽可愛いい男に　十次郎させてィ
そばで初菊　して見たい

〽蚕　三十日は　旦那の妾（めかけ）
お上（あが）さんとは　仲違（たが）い

（注）養蚕での上蔟（じょうぞく）と繭かきは身体を休める間すらなく、朝早くから夜業へとつづく。繭かきをしながら歌っての眠気覚しである。

○桑摘み唄

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽眠りゃ　おこされ
おこされりゃ　眠る
実につらいよ
蚕（かいこ）どき

〽蚕　上がれば
沼田の町へ
つれて行くから
辛抱しろ

（注）桑コキ唄ともいい、繭かきにも唄った。

○播磨の国

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽播磨の国の　お馬子様は
一臼ついちゃ　トントントン
二臼ついちゃ　トントントン
三臼目にゃ　孕んで
四臼目にゃ　子が出来た
女子生んだら　ふんづぶせ
おの子を生んだら　取り上げろ
取り上げ婆（ばば）さん　名を何んと
八幡太郎と　とけまんしょ
八幡太郎の　おん馬舎（まや）に
お馬を幾匹　繋いだ
三十三匹　繋いだ
草を幾駄（だ）　刈り込んだ
三十三駄　刈り込んだ

（注）間引き唄。

○寒い朝

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋みよし（T6）

〽寒い風だよ
チョボイチ風だ
しわり
ごわりと風が吹く

（注）木ノ葉（落葉）をかき集めるとき、おとこし（男の人）が歌ったもの。

○スルスびき唄

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽ゴンゴン　スルス
隣の嫁ご
夜なべに　一升ひき出した
それに敗けまいとって
俺も一升　ひき出した
（家の嫁ごも　ひき出した）

（注）スルスびきは籾摺り。
一升＝一俵。

○木挽唄

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽こびき　かりょうは
ハーァ　のん気なもんだよ
ハー　ずいこん　ずいこん
今朝も　早よから
木を　ひくよう

（注）木挽の動作に応じて唄う。

○地挽唄

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽エンヤコーラ　ヨーショート
おかちゃんのためなら
エンヤコーラ
おとうちゃんのためなら
エンヤコーラ
もうひとつ　おまけに
エンヤコーラ
今夜も酒飲んで
エンヤコーラ

（注）地挽の調子に合せて唄う

B　祭り歌・祝い歌

○お正月

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）
〃　君江（T15）

〽お正月は　いいもんだ
オンボロ　ひいても
いいもんだ
お米のマンマに
トトせェて
木ッ葉のような
餅食って
お正月は　いいもんだ

（注）夫婦斎唱

○十日夜

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）

〽十日夜　十日夜
十寝て起きれば　おいべす講
朝ソバ切りに　昼ダンゴ
夕餅　食っちゃァ　腹太鼓

○お念仏

伝承地　利根郡白沢村高平
伝承者　小野　一（M35）

〽帰命頂礼地蔵尊
十より下の幼子は、なしたる罪があるでなし、地獄の境なる西の河原へはなされて、夜さへ明ければ幼子は、石をあつめて塔を積み、砂をあつめて塚をつく、鬼ほど邪慳なものはない。積んだる塔をば踏みつぶし、また積め積めと責めかける。幼心の悲しさに、お地蔵菩薩のおころもの袖や袂に取りすがりお助けあれや地蔵尊

（注）十才迄の子どもの葬式の夜、隣組や親戚の人達によって鉦を撞木で叩きながら唱える。

○御和賛

伝承地　利根郡利根村追貝
伝承者　西尾　キン（M33）
外　数　名

〽きみよちよらいありがたや
ういたるしまのかんぜをん
おざわのいとにみをとどめ
ひだのたくみのかたくさび
しまのけしきをながむれば
よそにるいなきろうしようの
しものかたなるながれには
よにもきこえしめいしよにて
ふきわりたきのそのながめ
しうんたなびくありがたさ
みるにけわしきがんくつの
さやのかみさまおたてある
やしゆうつつじにしやくなぎに
えにもまれなるながめなり
ここえさんけいするひとは
むびようそくさいちよめいし
かうんはひにひにさかゆべし
なむだいじかんぜをん
なむだいじかんぜをん
なむだいじかんぜをん

（注）名勝及び天然記念物吹割渓の渓谷内の松林中に観音堂があり、如意輪観音が祀られている。観音堂の由来は古く、堂内の本尊は左甚五郎の作といわれている。この観音堂の例祭が十月十八日に行われ、その時に、御詠歌　御和賛を唱える。

○御詠歌

伝承地　利根郡利根村追貝
伝承者　西尾　キン（M33）
〃　相田　トキ（　）
外　数　名

〽ながいきるいとのおざわにつながれて
ういたるしまのながれざるものなむかんをんなむ
かんぜをん

（注）沼田横堂三十三番の内
追貝浮島観世音御詠歌

〽ながれきておざわのいとにみをとどめ
なをうきしまにまつるかんをん

（注）浮島如意輪観音御詠歌
尚毎月二十三日に海蔵寺境内の観音堂に十数名の人達が集まり御詠歌や御和賛を唱える

○沼田横堂三十二番和賛

伝承地　利根郡片品村越本
伝承者　笠原　りき（M41）
笠原きくの（M44）
笠原　きく（T9）

〽土いずる母は
小溝のその昔
苔筵深き
誓い　頼もし
苦しみの海をば易く
腰本の中田の水に
宿る　月かげ

○薬師様

伝承地　利根郡片品村東小川
伝承者　千明　のり（M42）
倉田　フミ（T2）

〽有難たや有難たや
あなたの前でお通夜して
我が目の見えぬ悲しさに
ご無理な願いをいたします
あなたの利益（りやく）で目が開けば
一生ご恩を忘れじと
いづこの土地に住むとても
にちにち真言唱えつつ
重き眼病の治るうれしさ

○沼田横堂三十一番大御堂和賛

伝承地　利根郡片品村東小川
伝承者　千明　のり（M42）
倉田　フミ（T2）

〽帰命頂来上野の東小川の大御堂
東西参拾壱番の巡礼札所の観世音
これなる御堂のそもそもの
はじめの由来を訪ぬれば
ニンノー（人皇）六十五代目の花山天皇十九才
永延弐年の露の弥生
大御堂と号せしは
飛騨の匠の名工が一日一夜に棟あげて
屋根は会津のイチノカミ棟を造りて屋根となり
内なる天女のその絵馬は
狩野ホーゲン（法眼）川風の筆をとりての
絵の模様　仏法僧と鳴く鳥や
禽獣マコマコ草花や
筆にそめてぞ残しける
お庭の桜や梅の木の枝に止りし
鶯はホーホケキョーのありかたや
雀はちんちん鉦の声
さてうらやかな大御堂
在し給い御尊像
南無ありがたや観世音
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

○七草の唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽七草なずな　唐土の鳥を
夜明けに　出しょか
昼げに　出しょか
ツンツン　つんむぐれ

（注）七草雑炊（七草粥）をつくる朝にセリ、大根、人参、ゴボウ、豆腐（大豆）、コンブ、餅を俎の上で包丁できざむときこの唄を歌う。

○道陸神

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M41）

〽ドウロクジンが
燃え立った
ドウロクジンが
燃え立った
道陸神が　燃えるヨー

○十日夜

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽十日夜　十日夜
朝きり蕎麦に
昼ダンゴ
夕餅食って
ひっぱたけ

（注）旧暦十月十日は、近所の友達と新しいワラを使って地面を叩く藁鉄砲を作った。

○十日夜

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　正雄（T3）

〽十日夜
十日夜
十　寝て起きると
オイベスコ

（注）邪鬼を払い、モグラを追っぱらう縁起物。

○十日夜

伝承地　利根郡月夜野町上牧
伝承者　五十嵐たき（M44）

〽十日夜
十日夜
朝蕎麦きりにや
昼団子
夕餅食ったら
ブッぱたけ

（注）モグラが麦畑の土を起こさないようにするため庭の地面を藁鉄砲で叩いた。

○お正月

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽お正月は　いいもんだ
ボロをひいても　いいもんだ
油の様な　酒呑んで
雪の様な　ゴゴたべて
木ッ葉の様な　トトせえて
お正月は　いいもんだ

○十日夜

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　明田　ねん（T9）

〽十日夜　十日夜
十　寝て　起きると
おいべす講

〽十日夜　十日夜
十　寝て　起きると
おいべす講

朝ソバ切りに　昼団子
夜ゥめし　食っちゃァ
腹でいこ

（注）モグラや悪い虫を追いはらう行事。"でいこ"は太鼓の事。

○道陸神（どうろくじん）

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽道陸神（どうろくじん）だ　ヤーイ　ヤーイ
道陸神だ　ヤーイ　ヤーイ
道陸神だ　ヤーイ　ヤーイ
厄年は　かかって来い
道陸神だ　ヤーイ　ヤーイ

（注）正月十四日の早晩、三本辻の道陸神（道祖神）のところでドンドン焼きが行われる。

○七草の歌

伝承地　利根郡新治村羽場
伝承者　田村　都（M40）

〽七草なずな
唐土の鳥が
日本の国へ
渡らぬうちに
はしたたけ　はしたたけ

○節分の虫封じ

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽四十八虫の　口の焼きもげるように
ドットトット
稲の虫の口焼き　麦の虫の口焼き
黍の虫の口焼き　大豆の虫の口焼き
野菜の虫の口焼き

○おいべす様の歌（おいべす講）

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽一に　俵をふんまたぎ
二に　にっこり笑って
三つ　さかずき取り廻し
四つ　世の中よいように
五つ　泉のわくように
六つ　無病そくさいで
七つ　何ごとないように
八つ　屋敷をたいらげて
九つ　お蔵をおったてて
十で　とっくり　おさまった

○お正月

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽お正月は　いいもんだ
米の飯（まま）に　魚（とと）せェて
いいもんだ　いいもんだ

○七草の唄

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽七草なずな　唐土（とうど）の鳥が
日本のはしを　渡らぬうちに
コンコツコン　コンコツコン

○なり木責め

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽なるか　なんねェか
なんなけりゃ
（なんねェと）
おかゆ　くんねェぞ

○七色の虫

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽七色の虫を焼き殺せェ
トット　トット
・・・（繰り返す）

○お盆

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢久子（T10）
朝倉　シキ、唐沢
フジノ、唐沢シャ
ウ、唐沢美千代、
高瀬　ばん、竹内
まき、竹内　ミヘ、
堀野　りん、山口
重雄

〽盆にゃ　ボタ餅
お盆にゃ　ウドン
夕飯　茄子汁
米の飯

○よしっ子の盆腹

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽嫁と舅の　仲の良いのは
盆ベェーだ

○十日夜

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽十日夜　十日夜
十　寝て起きると
オイベス講
朝ソバ切りに　昼団子
夕飯（ゆうべ）　食っちゃ
ブッタタケ　ブッタタケ
（注）旧暦十月十日の月の出頃、近所の家の庭の地面を藁鉄砲で力をこめて叩き、この唄を大声でドナリながら隣へ隣へと移動する。

○師走女

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽師走　女の
袖ひくな　毛もひくな

○年末の唄

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽お正月は　来る来る
おらァ　ボロ　ズルズル

○七草の歌

伝承地　利根郡昭和村栃久保
伝承者　阿部　孝八（M35）

〽七草　なずな
唐土の鳥と
日本の鳥と
はしたたけ
はしたたけ

（注）まな板の上に七草を置いて、包丁で切りながら唄う。

○十三仏

伝承地　利根郡昭和村栃久保
伝承者　阿部　孝八（M35）

〽ナム　フウドウ　シャァカァ
モーンジュ　フウゲン　ジイゾウ
ミイーロク　ヤァークシ　カンノン
セエーシ　アミダ　アーシュク
ダイニチ　コクウゾウ

○十王十体

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽ジュウオー　ジッタイ　ナム　アミダー
ジュウオー　ジッタイ　ナム　アミダー
（十回くり返し）

○嫁入り歌（高砂）

伝承地　利根郡昭和村栃久保
伝承者　阿部　孝八（M35）

〽高砂ごや　この浦　ふねに
ほをあげて　月もろともに
出でしおの　波のあわじや
島影や
遠くなる　おの沖すぎてえ
はや　すぎのえに着きにけり
はや　すぎのえに着きにけり

C　踊り歌・舞謡

○獅子舞い唄

伝承地　利根郡白沢村生枝
伝承者　萩原　和男（S23）
〃　萩原　靖男（S26）
〃　中村　茂夫（S28）
〃　外　数名

庭見

〽娘子達　ささらが見たくば
板戸を立てて　板戸の上で
ささら三拍子　ささら三拍子

かごの入近江や　かごやま藤の花
花ふり散らして
遊びうぐいす　遊びうぐいす

いつか夜も明け　花の朝霧り
花　朝霧り　みかきの内の
神楽拍子よ　神楽拍子よ

都から　急ぎもどれば
手紙が来て　おいとま申すよ

花の都へ　花の都へ

笹係り
天笠天の鳴る雷ち　常に出ずるや
此のこうどうぐ　此のこうどうぐ

向い小岩のひしく竹　ふしをそろへて
きりをこまかに　きりをこまかに

此の霧りは　いつこの霧だと
人と問わば　都下りの
彼ののかの寺　彼ののかの寺

七ツ拍子　八ツ拍子　九ツコ拍子が
十のね拍子　十のね拍子

（注）舞う時には舞い方、楽方とも黒紋付に袴をつけ、白足袋に一本差しで威儀を正して舞う。

○盆踊り唄

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　吉野　弘造（T13）

〽今夜あたりは来る筈は無いが神のしらせが有難く
親も承諾世間も承知こうなりゃ二人の身が大事今
夜行くから流しもとしてろ杓子流したととんで出ろ大工チョウナ打ちゃ音でも良いが木挽へっぴり腰しゃ見るもいやだ

（注）盆踊りのはやしに唄われる

○くどき節

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　吉野　弘造（T12）

〽サアテ、東西聞く皆さんよ、鈴木主人を読み上げまする、春は花咲く青山辺り、紺ののれんに桔梗の紋は音に聞こえし橋元屋とてあたま女郎のあるその中に、御職女郎の白糸こそは技量良い事諸人にすぐれ愛嬌良ければ皆人々が我れも我もに名指で上がる。分けてお客はどなと問えば鈴木主人と言うさむらいで女房持ちにて二人の子供、今日も明日もと女郎買いばかり、これを見兼ねて女房のお安、ある日我夫、主人に向かいこれさ我夫主人様よ金のなる木を持ちやしゃんすまい、やめておくれよ女房ばかり、言えば主人は腹立て顔で巳が心で止まないもが何をこしゃくな女房の意見又も出て行く女郎買い姿

（注）此の地方では盆踊り唄として唄われている

○盆踊り唄

伝承地　利根郡利根村平原
伝承者　吉野　光治（T8）

〽来るか　来るかと
川しも見れば
川原柳の音ばかり

○盆踊り唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽サァサ皆さん　出て踊りゃんせ
踊って御器量が　下がりゃせぬサ

〽踊って御器量が　下がるとならば
芸者ダルマは　なお下がるサ

○月夜野盆歌

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　川端　きり（T12）

〽田植帰りに　袖妻ひかれ
今宵逢うとの　目で知らす

〽今度来るとき　裏からおいで
表　車戸で　音がするさ

〽表　車戸は　泣きはせねど
犬の啼くのが　わしゃつらいさ

〽踊りおどるなら　品よく踊れ
品の良い人　嫁にとるさ

〽踊りおどるなら　今晩限り
明日の晩から　籠の鳥さ

〽音頭とる人　さぞつらかろが
今宵一夜を　たのみますさ

〽今宵一夜は　浦島太郎
開（明）けてくやしや　玉手箱さ

〽誰か来たよだ　垣根の外へ
鳴いたスズムシ　音を止めたさ

〽憚れて通えば　千里も一里
逢わずに帰れば　また一里と

（注）音頭は太鼓のみ、唄は踊り手がおどりながら歌った。

○月夜野盆唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽月夜野通いは　やめよとしたが
またも来たよの　便りが来る

文はやりたし　書く手は持たぬ
白紙やるから　文と読めさ

逢うは夕顔　うれしいけれど
帰り朝顔　袖に露さ

（注）昔は仮装して踊るのが流行した。

○盆踊り唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽盆だ　盆だちゅうにィ
踊らぬ　奴は
子でも　孕んだか
初産でも　したかァ

○盆踊り唄

伝承地　利根郡月夜野町後閑
伝承者　佐藤　よし（S2）

〽娘十七　八は　させごろしごろ
親もさせたがる　針仕事さ

月の出頃と　約束したが
月は早や出て　雲の影

雨の降る日に　ジョンジョ履いて来たら
ビッチョチョ　ビッチョチョと音がする

孕み女と　三ケ月様は
一夜（いちや）　一夜でまるくなる

月は真ン丸　出ちゃいるけれど
主さん来なけりゃ　真の闇

唄は歌いたし　唄の数知らず
唄の師匠と　寝てみたい

唄の師匠さんと　寝てみたけれど
歌は出ないで　汗ばかり

酒は酒やに　ボタ餅や棚に
金の成る木は　腋にある

主は利根川　わしゃ赤谷川
後閑で逢いでぬ　沼田行きさ

○盆踊り唄

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　正雄（T3）

〽入れて　おくれよ
かゆくて　ならぬ
あたしばかりが
蚊帳の外

○盆踊り唄

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽盆だ　盆だちゅうに
なぜ足袋はかぬ
履けば　汚れる
つま先や　切れる
切れりゃ　また買え
そいつは　新しく

〽踊り　おどるならァ
だいわで　おどれ
踊りゃ　だんだん
ふえても　来るよ
シッチョイ　シッチョイ
シッチョイ馬穴が十三銭
安いと思ったら底ぬけだ
ああ　スットコ
ドッコイショ

（注）伝承者の踊りは手踊りで、手を斜め下に向けて打っており、地の中の霊を呼び出すという古い形を残している。

○獅子舞歌

伝承地　利根郡新治村羽場
伝承者　本多　正美
他十三名

〽（社吉利　初吉利）
廻り逢うたよあとの友達　ヤア順逆よ
此の宮は飛騨の内匠が　建たげで
轄一つで四方しめたよ　ヤア順逆よ
国がらは急げ　戻れのふみが来て
御いとま申して花のみやこへ　ヤア順逆よ

十七が宮の社だんに　手をかけて
何を申よ　今の若さに

我れ我れは　京で生まれて
伊勢育ち　腰にさひたは
伊勢の御祓ひよな

くるりと廻れ廻れ　伊勢あみ
笠の　輪の如くよな
七夕にかりて貸もの綾と錦をかへせ
七夕　かへせ　七夕
太鼓のどふをきりりとしめて
彫をさりと　摺りとめたよな

○獅子舞歌

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽（後吉利　後吉利）
我れ我れは京で生まれて
伊勢育ち　腰にさひたは
伊勢の御祓ひよな
思いも寄らぬに
朝霧がおりて
そこで女獅子が　かくされたよな

こなたも男獅子
あなたも男獅子
心合せて尋ねめされたよ

奥山の　沢の出口で女獅子をは
何とかくしても　尋ね出さばよ
あれ見さいな　女獅子　男獅子の
ふり見さいな　よれつほぐれつ
余念のないもの
くるりと廻れくるりと廻れ
伊勢あみ笠の　輪の如よな
太鼓のどふを　きりりとしめて
彫をさつさ　摺りとめたよな

○獅子舞歌

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽（仲吉利）
廻り逢ふとよ　あとの友達　ヤア順逆よ
仲立の腰にさひたる小脇差
つばも目貫も黄金なるもの　ヤア順逆よ
国からは急げ戻れの　文が来て
御いとま申して　花の都へ　ヤア順逆よ

御所代をあれで見たれば　ひわだぶき
これで見たれば　あやの　のしぶき
我れ我れは　京で生まれ
伊勢育ち　腰にさひたは
伊勢の御祓ひよな
くるりと廻れくるりと廻れ
伊勢あみ笠の輪の如くよな
我らがならいは小切　小拍子　小拍子
太鼓のどふをきりりとしめて
彫をさりとすりとめたよな
（後吉利）
廻り逢ふたよ　あとの友達　ヤア順逆よ
此の森に鷹が住げで鈴の音
鷹は住ねど　御神楽の音　ヤア順逆よ
国からは急げ　戻れの　文が来て
御いとま申して花の都へ　ヤア順逆よ

○盆踊り歌

伝承地　利根郡新治村羽場
伝承者　石坂　ふみ（T2）
石坂寅之助（T40）

〽盆の十三日に　踊らぬやつ（者）は
早く小便こいて寝ればよい
アー　ドッコイ　ドッコイ

○盆踊り唄

伝承地　利根郡新治村猿ケ京

伝承者　多　人　数

ア　ハ

越後出るときや　涙で出たが
　今じゃ本当にマア　風もいやだ

蚤すぎれば　沼田の町へ
　連れて行くから　ちょいとマアしんぼしな

ほれて通えば　千里も一里
　会わず帰れば　本当にマア　また千里

羽場（地名）は　照る照る
　なぐるみ（地名）は　かげる
可愛い主さんが本当にマア　日に焼けるよ

恋いの恋越（地名）なさけの塩原（地名）
　なさけないのが布施の宿サ

盆の十三日に踊らぬやつは
　めめず（虫）に食われて死ねばよい

梅と桜を両手に持てば
　どちらが梅やら桜やら

〈ハァー　三国峠の権現様は
　のぼり下りの客を待つ
ハァー　花が蝶々か　蝶々が花か
　花が蝶々をまよわせる
ハァー　歌え歌えとせめたてられて
　歌が出ないで汗が出る
ハァー　行こうか前橋かえろか沼田
　ここが思案の戸鹿野橋
ハァー　永井吹路を背中に背負って
　ここは猿ケ京のチョイト城下町
ハァー　須川恋しゃお熊様の
　森が見えますほのぼのと
ハァー　可愛い主さんと三日月様は
　宵にチラリと見たばかり
ハァー　こぼれ松葉をあれ見やしゃんせ
　枯れて落ちても二人づれ
ハァー　須川田んぼの蛭でさえも
　入須川よいとこだと飛んでくる

（注）歌に合わせて踊る。

D　座興歌

○かぞへ唄

伝承地　利根郡利根村砂川
伝承者　角田オキチ（T2）

〽一ツとや　東も西も皆山で
合いに畑有る　家も有り　家も有り
二ツとや　深い谷でも春が来りゃ
梅咲く桃咲く桜咲く　桜咲く
三ツとや　水はきれいな砂川で
ソバや大根よく出来る　よく出来る
四ツとや　四里出りゃ沼田の町も有り
九里出りゃ前橋　市も有り　市も有り
五ツとや　いつでも朝霧踏む人の
畑にゃ黄金の花が咲く　花が咲く
六ツとや　むかし尋ねりゃ都人
今では同じお百姓　お百姓
七ツとや　仲良く暮せ話し合い
義理人情尽くし合い　尽くし合い
八ツとや　山では炭たき祝かせぎ
内では粟ヒエ食いかせぎ　食いかせぎ
九ツとや　高野の山より良いところ
ここに神あり仏あり　仏あり
十とや　遠き親類頼るよりや
近き皆さんと暮し合え　暮し合え

○伊勢音頭

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽お伊勢ナァー参りにこの子が出来た
お名をつけましょ　ヤンレ伊勢松と
ササヤートコセーヨイガナ
アラリャンリャン　コレハノセー
コーナンデモセー

〽おばばナァーどこへ行く三升樽さげて
嫁の在所へヤンレ孫だきに
「囃子詞同じ」

〽いざりナアー勝五郎車に乗せて
引けよ初花ヤンレ箱根まで
「囃子詞同じ」

〽遠州ナァーはばの松広いようでせまい
横にくるわじゃヤンレ役に立たず
「囃子詞同じ」

〽伊勢はナァー津でもつ津は伊勢でもつ
尾張名古屋はヤンレ城でもつ
「囃子詞同じ」

(注)　他の地域に伝承されている伊勢音頭と似ている。伝来系統は伊勢参りに行って「仕入れてきた」ものだという。最近まで盛んに歌われていた素朴なものである。
宴席では必ず歌われた歌で、伊勢参りをしなくとも歌い伝えられ覚えた者が多く比較的伝承者は多い。

○伊勢音頭

伝承地　利根郡片品村越本
伝承者　田村ぬい子（T5）

〽伊勢は津でもつ　津は伊勢でもつ
アーヨイトヨイト
尾張名古屋はヤンレ城でもつ
ササヤートコセーヨイガナ
アリャンリャンコレハノセ
コノナントデモセー

〽おばばな　どこへ行く三升樽さげて
アーヨイトヨイト
嫁の在所へヤンレ孫だきに

ササヤートコセーヨイガナ
アリャンリャンコレハノセ
コノナントデモセー

〽いざりな勝五郎車に乗せて
アーヨイトヨイト
引けよ初花ヤンレ箱根まで
ササーヤートコセーヨイガナ
アリャリャンコレハノセ
コノナントデモセ

〽お伊勢な　参りにこの子が出来た
アーヨイトヨイト
お名をつけましょヤンレ伊勢松と
ササヤートコセー　ヨイガナ
アリャリャンコレハノセ
コノナントデモセ

○伊勢音頭頭くずし

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽めでたあ　めでたよ　この家はめでた
鶴と亀とがお酒盛り
そこで鶴さんの言うことにゃ
これこれもうし亀さんよ
わたしの女房にならぬかい
そこで亀さん申すには
あなたの女房にゃわしゃいやだ
そこで鶴さん申すには
足の長いのがいやですか
からだの白いのがいやですか
首の長いのがいやですか
そこで亀さん申すには
足の長いのもいやじゃない
からだの白いのもいやじゃない
首の長いのもいやじゃない
昔古人のたとえには鶴は千年
亀は万年あなたと別れて九千年
後家でよ暮すホイ
暮すがわしゃいやだ
キタヤレサンのセエー
アアゴキトダ　ゴキトダ
（注）伊勢参りにいって「仕入れてきた」ものとされている。伊勢音頭と同じく最近まで盛んに歌われていた。結婚式や酒席で多く歌われた。

伝承者　梅沢千代松（M38）

〽ハアー相撲とる手はいくらもあるが
明日は初日で散けられぬ
アードッコイドッコイドッコイナ

○岩室甚句

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽伊勢じゃ岩室　片町山だ
前のヤエーにごり川ヨーどじょうが住む

〽どじょうがヤエー住むとは昔のことだ
今じゃヤエー世が世でホンニ亀が住む

〽あいのヤエー山には　おすぎとおたま
おすぎヤエー三味ひけホンニたま踊れ
（注）伊勢参りで仕入れたものだという

○相撲甚句

伝承地　利根郡片品村新井

○鴨緑紅節

伝承地　利根郡片品村越本
伝承者　笠原マキノ（T3）

〽花なれば国の土産に一枝ほしや
あげたい心はアラやまやまあれど
ヨイショ
今はつぼみでよコラあげられぬ
咲いたら又チョイチョイ
あげましょう初枝を
チョイチョイチョイガナチョイチョイ

〽鳥なれば飛んで行きたいあの家の屋根に
木の実カヤの実アラ食すとも
ヨイショ
こがれて鳴く声をコラ聞かせたら
よもまたチョイチョイ
あ
チョイチョイチョイがなチョイチョイ

（注）大正から昭和にかけ片品で大流行。

○上州片品追分

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽めでためでたよ　この座がめでたよ
笹に小判が　なりさがる

〽男振りより金より心よ
金じゃ買われぬ心意気

〽私しゃ片品　深山のつつじよ
誰か咲かせて　くれるやら

〽上州よいとこ　おらがの里はよ
東白根で　西武尊

（囃子）
七間場中の田畑を売っても
よいかかあ求めろ　一生のためだよ
この家床の間の三階松に
鶴が黄金の卑をかける

（囃子）
はつさき砂山下駄はいて蹴あげる
その気でなければ　しんしょうはもてない

（注）この囃子は現在はあまり言われない。現在は「お次の番だよ下駄はいて出ろ出ろ」と歌われている。馬子唄と区別されて祝い歌として歌われる。祝宴歌として盛んに歌われていた。

○上州片品おけさ

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　梅沢千代松（M38）

〽おけさェーおけさ正直なら
抱いても寝しょうがよ
おけさ猫のしょうでヤレじゃれたがる

〽おけさェーおけさそれそれ
かもじが落ちるよ
落ちくさるともヤレ手にゃとらぬ

囃子詞
おけさの囃子でキタホイにマタホイ

〽おけさェーおけさ踊るなら板間で踊れよ
板の響きでヤレ三味いらぬ

〽ハイノヤーイヨハイの山にはお杉にお玉よ
どちか姉やらヤーレ妹やら

〽かわいやかわいけれどもあなたはかたぎ
かたい私をヤーレ迷わせた

〽おけさェーおけさみるとてヨシで目をついたよ
よしは名はよしヤーレ目の毒

(注) 佐渡おけさの源流と言える古い唄であるが、発祥も移入過程も不明である。アイヤ節系のおけさであり貴重である。越後の瞽女(ごぜ)から教わったと言う古老もいたが、定かでない。

結婚式等の祝宴では必ず歌われた唄である。おけさの踊りは元録の頃流行した奴踊りの変化したものと言われるが、片品のおけさ踊りはまさにそのものである。踊れる者が少なくなってきており、今ではほとんど踊られていない。

○替え歌

伝承地　利根郡川場村萩室
伝承者　角田　ゑい（M33）

〽越後出(いも)るとき　フンドシ忘れ
長の道中　ぶらぶらト

〽越後出るときゃ　涙で出たが
今じゃ越後の　風もやだ

〽越後ダボだの　金元だのと
言(ゆ)うて泣かせる　上州ダボ

〽越後出てから　フンドシとかぬ
フンドシとかぬが　せがれとく

〽三国峠の　権現様よ
私　ためには　守り神

〽三国峠で　カラスが鳴くが
嬶(かかあ)アが身持ちで　気にかかる

〽花は木に咲く　鳥は木に止まる
私しゃ主さんの　目にとまる

〽いやだァおっかちゃん　畑の芋は
月とつるんで　子が出来る

(注) 宴席唄。

○草津節

伝承地　利根郡川場村生品
伝承者　木村　かち（M24）

〽草津　よいとこ
一度は　おいで　ドッコイショ
お湯の　中にも　コリャ花が　咲くよ
チョイナ　チョイナ

(注) 村内最長寿、教え九十九歳

○朝咲く花

伝承地　利根郡月夜野町下津
伝承者　高橋　誠志（M32）

〽朝咲く花は　朝顔で
昼咲く花は　ヒマワリ
夜咲く花は　何んの花
私と貴方（女）の　愛の花

○お伊勢参り

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽お伊勢参宮に　行くほどに
二人(ふたり)の子供を　あずけるぞ

ぶつな叩くな　泣かせるな
友達来たなら　寄れと云え

友達寄ったら　畳すけ
畳すいたら　お茶たてろ

お茶をたてしな　口きくな
口めに連れて　恥かくな

E　語り物・祝福芸の歌

／○相撲甚句

伝承地　利根郡片品村東小川
伝承者　千明　のり（M42）

〽アー相撲に負けて怪我さえなけりゃ
晩に私が負けてやる
ヒッチョイヒッチョイヒッチョイナッ
（以下囃子詞略）

〽来たらお寄りよ我家ここだ
寄れば茶も出す　酒も出す

〽アー調子変わりはいつでもよいが
心変わりはわしゃいやだ

〽調子おさえてこりゃ又しやんせ
シラで聞きたいこともある

〽姉さしたら妹もさしな
同じ蛇の目のからかさを

〽お前百まで　わしゃ九十九まで
ともに白髪のはえるまで

〽三松橋から大蛇が出ても
主さん通いは　やめられぬ

〽男伊達ならあの利根川の
水の流れを　止めてみな

〽水の流れも止めよで止まる
止めて止まらぬ色の道

〽唄は下手でもおくれはとらぬ
おくれ取るよな　野暮じゃない

〽唄いなされよ　唄いなされよ
唄じゃご器量が下がりやせぬ

（注）越後の瞽女（ごぜ）により伝幡されたという

／○春駒の唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　萩原　ナヲ（M41）
梅沢　ふゆ（M41）

サァサァ
のりこめはねこめこまやの三吉
のったらはなすなしっかとかいこめ

〽春の始めの春駒なんぞソラエソラエ
夢に見てさえよいやと申すソラエソラエ
年もよし世もよしおかいこもあたるソラエソラエ
おかいこにとりては美濃の国でソラエソラエ
美濃の国は蚕の本場ソラエソラエ
信州子種かいばらぎ種かソラエソラエ
それともお家のおてすい種とソラエソラエ
みとこの種を寄せ集めソラエソラエ
かいめ女郎衆におわたし申すソラエソラエ
かいめ女郎衆は受け合いこんでソラエソラエ
はかまだけなるあっわたなぞでソラエソラエ
あたため申せばぬくとめ申すソラエソラエ
三日にうるんで四日に青むソラエソラエ
五日ぞろりとお出のかいこソラエソラエ
さてはこれよりはくべき羽根はソラエソラエ
空を羽根のすその羽根などでソラエソラエ
ちよのごばんの上にとのせてソラエソラエ
一羽根そろえば二羽根そろうソラエソラエ
一羽根はいては一千両のかいこソラエソラエ
二羽根はいては二千両のかいこソラエソラエ
三羽根　四羽根で何千両のかいこソラエソラエ
昔源氏のうまやがありてソラエソラエ
こしに栗毛のあしあとつけてソラエソラエ
これより南が八反畑ソラエソラエ
十七八のあねさんあつめソラエソラエ
かみは島田にこじゃんとゆうてソラエソラエ
銀のかんざしたいまのくしでソラエソラエ
あやの前かけ錦のたすきソラエソラエ
銀のめざるを腰にとさげてソラエソラエ
十二こはしごをゆらりとかけてソラエソラエ
いぬいの方へと向いたる枝をソラエソラエ
ひきとめてしんつみ立ててソラエソラエ
ひとこきこいてはめざるにつめてソラエソラエ
ふたこきこいてはめざるにつめてソラエソラエ

（以下略）

（注）春の彼岸すぎになると、二人又は三人一組となって、各農家を廻り、蚕があたるようにこの春駒の唄を歌い、麦や粟を買い歩いたと言う。萩原ナヲさんは片品村史に春駒の唄を残した萩原重作さんの娘さんであり、父からこの唄を教わったと言う。聞き違い等があり村史の歌詞と違っているが、ここではナヲさんのものをあげた。

／

○春駒の唄

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　桑原　義幸外大勢

前唱

サアサアのりこめはねこめ蚕飼の三吉
のったらはなすなしっかとかいこめ

本唱

〽春の始めの春駒なんぞ
夢に見てさえよいとや申す
　申してうつつは良女が駒よ
年もよし世もよし蚕飼もあたるコラ
蚕飼にとりては美濃の国の
桑名の郡や小野山里で
　とれたる種子はさてよい種子よ
　結城蚕だねか茨木だねかコラ
たやで豊原築前こだね
みとこのたねを寄せや集め
　かゆめ女郎衆にお渡し申す
　かゆめ女郎衆は受け兼んでコラ
はかまはくなるはつばたなんぞ
手にかえきりりとしたためこんで
　左のたもとに三日三夜
　右のたもとに三日三夜コラ
両方合わせて六日六夜
六日六夜のその間には
　暖め申せばぬくとめ申す
　三日に見初めて四日に青むコラ
五日にさらりとおいでの蚕は
おい出がよければはくべき種子は
　これより南は吉祥天の
　大日如来のお山がござるコラ
お山のふもとに小池がござる
小池の中の弁財天の
　ひともとすすきふたもとすすき
　三本すすきに住んだる鳥はコラ
鴨の雄鳥大とや申す
きじの雌鳥小とや申す
　大と小との風切り羽よ
　ふた羽はけば三なる羽よコラ
ひと羽はけば一千万蚕
ふた羽はけば二千万蚕
　三羽四羽とはきましょならば
　紙にもあまれば籠にもあまるコラ
あまり候やひろまり候
さらばこの蚕なにがな進上
　桑のめぐみが良いとや申す
　これより南は八反畑コラ
八反畑はみな桑原よ
このや娘に足駄をはかせ
　しまの前掛紅染めだすき
　髪も島田にこりゃんとゆうてコラ
七九日竹の小ざるをさげて
桑の若葉をお手やわらかに
　しんなとたゆめてさらりとこいて
　ひとこきこいては小ざるに入れるコラ
ふたこきこいてはお宿へかえる
お宿へかえれば手でおしもんで
　あの蚕にちらりこの蚕にばらり
　ちらりばらりと進ぜてまわるコラ
あの蚕この蚕はくわめす様な
物によくよくたとえて見れば

昔源氏の馬屋に住みし
名馬の馬を牧場に上げるコラ
朝日に向いては元そよそよと
夕日に向いてはうらそよそよと
食気にも似たり葉音に似たり
さらばこの蚕休みにかかるコラ
しじの休みはしんじつ蚕
竹に起きてはたかごにまさる
舟の休みはふんだん蚕
庭に起きてはにわかに育つコラ
四度のおきふしなんくせのうて
まぶしがやとて七十五駄
まぶしも小高く折り上げこんで
まぶしに上がりて作りし繭はコラ
利根の河原や片品川の
瀬に住む小石にさもよく似たり
堅さもかたいし重さもおもし
はかりて見よとてはかりて見ればコラ
糸まゆ千石におりまゆ千石
種まゆ共に三千石よ
上州の国では糸引き上手
尾張の国ではまゆむき上手コラ
上手上手が寄り集まりて
三日三晩にまゆむき上げて
六日六晩に糸くり上げて
七日七夜に綿かけ上げるコラ
機織り上手にお渡し申す
昔たゆまの中将姫は
綾が上手で錦が上手
雲にかけはし霞に千鳥コラ
梅にうぐいす織り込む時は
一反織りたる元三尺を
伊勢の天照大神様へ
おみすにかけてうら三尺をコラ
所神社のおいなり様へ
おみすに上りし残りし絹は
坂東つづらにしたためこんで
荷物につもれば七十五駄コラ
所ではやるが大八車
大八車にゆらりとつんで
京へやろうか大坂やろうか
大坂本町ほて屋が店でコラ
荷物渡して金受けとれば
大判千両に小判が千両
白金共に三千両
大八車にゆらりと積んでコラ
綾のたづなに錦のたづな
七福神のおてうちかけて
これを館に引き込む時は
いぬいの方に錫蔵七つコラ
たつみの方に金蔵七つ
合わせて十四の蔵立てならべ
綾の長者に錦の長者
お蚕繁昌とお祝い申す

(注) 門前の春駒は、川場村の青龍山吉祥寺の境に祀る養蚕の守護神、金甲稲荷神社の祭日、毎年二月初午に、門前区内の青年団員が養蚕繁昌を祈って春駒を奉納する予祝行事である。母親役のおっかあ、父役の番太、娘役の踊り子二人、計四人の男性が女装となり、二組で門前約百二十戸を次々と廻り、神棚の前の座敷に上がり、春駒の唄を歌い、踊り子は小さな馬の頭を持ち、おっかあは団扇太鼓を叩き踊る。そして、桑の小枝に色紙を結んで渡すと、家の者は神棚に供え、祝儀を出す。

○鈴木主水

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽鈴木主水という　侍は
女房持ちで　二人の子供
今日も　明日もと
女郎買いばかり

(注) 口説節は、明治頃よく歌われたが、大正頃か

ら急に歌われなくなった。

○飴売り唄

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽ヨカヨカ　飴屋にゃ
誰がなる　ドドンとドンドン
仕事の嫌いな
（三千世界の）
馬鹿がなる　アーコラショ
そのまた嫌にゃ
誰がなる

（注）飴屋は子供の人気者。小さな太鼓を叩きながら、日の丸の小旗を沢山入れた丸い飯台を頭の上に乗せ、その旗棒に水飴をグルグル絡めて売り歩いた。

○春駒の歌

伝承地　利根郡新治村羽場
伝承者　田村　都（M40）

〽春のはじめの　春駒なんぞ
夢に見てさえよいとや　申す
くわの郡や　あの山里に
あの山里に　とめたる種は
結城こ種か　茨城種か
かいの女郎衆に　お渡し申し
かいの女郎衆は　ほめよろこんで
金のかんざし　蒔絵の櫛に
緋の前かけ　花そめたすき
右の小脇に　三日三夜
左の小脇に　三日三夜
両方あわせて　六日六夜
三日に見そめて　四日にあおむ
五日にサラリと　おいでのお蚕は
おいではよけれど　はくべきはねは
空を天中　ちう飛ぶ鳥の
八つの翼を手に押し持ちて
一はねはいては　千枚かいこ
二はねはいては　二千枚かいこ
三はねはいては　三千枚よ
かみにもあまれば　かごにもあまる
あまりそろうよ　このお蚕さまは
このお蚕さまには　何がなんじょ
これより南は　みな桑畑よ
しんなとたよめて　そろりとこいて
お宿に帰りて　手でおしもんで
あのお蚕さまやら　このお蚕さまに
チラリ　ホラリとしんぜてまわる
しじの休みは　ししごにまさる
たけの休みは　たかごにまさる
ふなの休みは　不思議とふとる
にわの休みは　にわかにふとる
よどの休みも　何くせのうて
何んなくくせなく　まぶしに上がる
笑顔　笑顔でまゆかきいたし
家中そろって　まゆかきいたし
大八車に　ゆらりとつんで
おかいこ繁忙と　お祝なさる

○森の石松金毘羅代参

伝承地　利根郡昭和村森下
伝承者　真下安治（S8）

合ノ手
サァサ皆さん出て踊りゃんせ
踊って御器量は下がりゃせぬさ
踊りおどりに来て踊らぬ奴は
早く小便こいて寝るがよいさ
音頭取りはどうしたね
死んだか生きたか沙汰がねエ
死んだら川へつん流せ
生きたら
陸（おか）へずり上げろ

雨はジャンジャン降り大根干しは濡れる
　背中じゃ餓鬼泣く飯は焦げる
鎌沢田圃の蝗でさえも
オソソめがけて飛んで来るさ

詞

一、ハァーチョイト出ました一・六勝負
四角四面の賽子渡世
ヤクザ稼業の股旅者よ
五十三次東海道に
富士のお山とその名も高い
名にも駿河も仁義の世界
清水港の次郎長どんは
子分子方の数ある中で
森の石松一番可愛い

二、ハァー或る日次郎長石松呼んで
思い出すのは七年以前
尾張亀崎悪代官と
恨み重なる仕返し済めば
腰の業物伊達にはいらぬ
先祖伝来五字忠吉と
金子奉納百五十両
神に誓いの金毘羅様よ

三、ハァーなんと御利益あらたかものよ
首尾をよろしく打ち果たしたる
お礼巡りを忘れてなるか
これさ石松お前に頼む
俺の代りに四国の讃岐
往って帰って三百十里
不在の間も寺銭積んで
無事に戻れば一家を持たそ
訳の判った親分さんよ

四、ハァーさても石松旅装束は
松坂木綿に蛇の単衣
紺の帯に一本どっこ
腰に差したは新刀なれど
鬼神丸とて切れるが自慢
二十八人衆の代貸元で
腕と度胸の目ッカチ男

五、ハァー玉に傷だよ石松兄い
飲まぬ時にはお人は良いが
虎になってケンカが早く
そこで親分次郎長が苦労
これさ石松道中だけは
傘の露をも言うとて帰れ
オイサ合点承知のすけ
胸に勇んで石松出ずる

六、ハァー丸に金の字のお礼を背負い
讃岐金毘羅帰りは呑気
名所見物乗り合い船で
そこで評判江州の草津
身受けやまなる鎌太郎さんへ
草鞋ぬいでの股旅仁義
年は若いが話は判る

七、ハァー明日はお立ちかお名残惜しや
今は世にいない清水の姉御
御仏前へと供えてたもれ
などと包んだ香典百両
別に三十両は石松さんへ
草鞋銭だよお笑いなされ

八、ハァーさして一座のおん客様よ
それに踊り子皆さん方よ
もっともっとこの先読みたいけれど
受け持つ時間が参った様子
野郎下れの聞こえぬうちに
儂の方から段止めまして
後は先生によろしく頼むが
　オーイサネェー

(注) 伝承者は音頭とりと三十年やっており、ヤグラの上にのぼり、撥を叩き、音頭をとる合間に唄を歌う。

○名胡桃恋しや

伝承地　利根郡月夜野町石倉

伝承者　小野　勝（M39）

〽名胡桃(なぐるみ)恋しや
八幡様の
森が見えます
ほのぼのと

(注) "名胡桃"は地名。
昔、三河万才(まんざい)が毎年来た。

F　子守歌

○子守唄

伝承地　沼田市恩田町
伝承者　高橋　安治（M44）

〽春蚕おわれば　沼田の祇園
つれて行くから　ねんねしな

祇園祭りにゃ　何買うてやろか
デンデン太鼓に　飴に笛

千石積んだる　あの船さえも
風の吹きようじゃ　出てもどる

風が吹こうが　もどりゃせぬよ
わたしゃこの家の　嫁じゃもん

○子守唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村　はる（T12）

〽ほらよい畑に　西瓜の皮でも
とつときつけときな

七ツ半ばになんでもないときゃ
よっぽど重宝だ

○子守唄

〽寝ろチエバヨー
寝ろチエバヨー
寝ろチエバ寝ないのか
この我鬼め

○子守唄

〽ねんねん猫のけつ蟹がはいこんだ
一匹だと思ったら二匹はいこんだ
二匹だと思ったら三匹はいこんだ
おっかさんがたまげて
お茶こぼした

○子守唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村志ヅ江（T13）

〽ねんねんころりよ
おころりよ　寝ないと
夜鷹にさらわれる

○子守唄

伝承地　利根郡利根村平原
伝承者　吉野　光治（T8）

〽ねんねん　ねこじまの
かんかち　おとめ
おとめがおけつくなりや
おいどいついてぐぞ
おいどじやちんちりちりめん着物
田舎じゃ菜たねの花ざかり

○子守唄

伝承地　利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽坊やはよい子だ早よ眠れ
あれみよお日さまももう眠った
カーカーカラスやチューチュー雀
一緒に眠ろうと飛んでいた
坊やも負けずに早や眠れ
お日さまのめざむる明日まで

○子守唄

伝承地　利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽坊やのお守はどこにいった
あの山こえてお里にいった
里の土産に何もろた
でんでん太鼓に笙の笛
おき上りダルマに立ち人形
くるりと廻るは風車
でんでん太鼓にひかされて
ついとろとろりと眠られた

○子守唄

伝承地　利根郡川場村萩室
伝承者　兵藤みちよ（T4）

〽ネンネンころりよ　おころりよ
ねんねの子守は　どこへ行った
あの山越えて　里へ行った
里のお土産　何もろった
デンデン太鼓に　笙の笛
起きゃがる　ダルマに
眼を入れろ

○ネンネコバッチコ

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽ねんねこばっちこ　さんしょの子は
ヨハイどうしんぼ
ヨハイさんが嫁とって　追ん出した
追ん出す間もなく子が出来た
それでもヨハイさんは可愛がる
〝イイ子になって　ねんねすんだよ〟
（注）この唄の歌詞、曲は古い形を伝えている。

○子守唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽ヨイヨイ
横浜
丸焼けだ
東京じゃ
お女郎が
車ひく

○子守唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽ネンネン　猫じまの
ヤグラ乙女
大きくなったら　江戸へやろ
江戸では
チンチン　チンチリリン
田舎じゃ
菜種の　花盛り

○子守唄

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋みよし（T6）

〽ネンネン　ねこじまの
かんかち　乙女
乙女が　大きくなったら
嫁にやろ
でんでん太鼓に
笙の笛

○お月さんいくつ

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽お月さま

いくつ
十三　七ツ
まだ年や
若い
（注）子守どきや、満月或は美しい大きな月を見たとき思わず口づさむ

○お月さんいくつ

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽おさん　どこへ行った
油買い　茶買い
油屋の縁で　こって転んで
油一升こぼした
その油　どうした
太郎どんの犬と
次郎どんの犬と
みんな　なめてしまった
その犬どうした
太鼓に張って
あっち行っちゃ
ドンドコドン
こっち行っちゃ
ドンドコドン

○子守唄

伝承地　利根郡月夜野町石倉
伝承者　小野　勝（M39）

〽ネンネの　お子守り
どこに行った
あの山越えて　里に行った
里の土産に　何もろた
デンデン太鼓に　笙の笛
お起ヤがれ　コボウシに
豆太鼓

○猫とガニ

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽ねんねん猫のケツに
ガニが這い込んだ
お母さんがたまげて
お茶かけた
お父ッちゃんがたまげて
キセル落とした
這い込んだと思ったら
また這い出した
這い出したと思ったら
また這い込んだ
ねん猫　ねん猫
ねん猫ッこよ

○お月さんいくつ

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽お月さん幾つ　十三　七ツ
まだ年や若いが　若子を生んで
誰に抱かしょ　お万に抱かしょ
お万は何処行った
油買い　茶買い
油屋の道で　すべってころんで
油一升こぼした
どらその油は
次郎どんの犬と
太郎どんの犬が
みんな呑んで　しまい申したハイ
（みんな　ひんなめ申した）
その犬　どこへ行った
太鼓に張られ
あっち向いちゃ　ドンドコドン
こっち向いちゃ　ドンドコドン

○子守唄

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽ネンネの子守は　つらいもの
人には楽だと　思われて
親には叱られ　子にゃ泣かれ
雨風吹いても　宿は無し
人の軒場で　日を暮す
ネンネンころりよ
ネンころり

○子守唄

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽ネンネン　子守はつらいもの
雨風吹くときゃ　宿はなし
他人の軒場に　佇ずんで
家に帰れば　怒られる
おっかあに　怒られ
子にゃ泣かれ
ネンネン　子守は
つらいもの

○子守唄

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　光太郎（T9）
原　よし江（S7）

〽ねんねん猫のケツにカニがはい込んだ
一匹だと思ったら　二匹はい込んだ
二匹だと思ったら　三匹はい込んだ
三匹だと思ったら　四匹はい込んだ
（以下同様十まで）
おかちゃん　たまげて（驚いて）
ちゃちゃ（お茶）こぼしたあ

○子守唄

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　光太郎（T9）
原　よし江（S7）

〽ねんねん　ネコのケツにくいついた
一匹だと思ったら　二匹くいついた
二匹だと思ったら　三匹くいついた
三匹だと思ったら　四匹くいついた
（以下　略）
おかあちゃんたまげて　お茶こぼしたよ
ねん　ねん　ねんねんよう

G　わらべ歌

○遊戯唄

伝承地　沼田市町田町
伝承者　藤井　ふみ（T14）

〽坊さん　坊さん　どこ行くの
わたしは田んぼへ稲刈りに
わたしも一緒に　つれしゃんせ
お前がくると邪魔になる
このかんかん坊主　くそ坊主
うしろの正面　だあれ

○遊戯唄

伝承地　沼田市町田町
伝承者　藤井　ふみ（T14）

〽ガラガラもんじゃ
なんもんじゃ
あしもとやんだら
おめつけよ
月かい　闇かい　わからんかい

（※）おめつけはみつけるの意。

○トンビの唄

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽トンビ　トンビ
羽根下ろせ
トンビ　トンビ
羽根下ろせ

○子供のケンカ

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽子供と子供で　ケンカして
薬屋が　止めても
なかなか　止まんない
人達や　笑う
親達や　怒る

（注）指遊び唄。

○一番始めは一の宮

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）

〽一番始めは　一の宮
二また日光　中禅寺
三また佐倉の宗五郎
――
――　中略
十で東京　真願寺

〽これ程　心願かけたなら
浪子の病は　なおらんか
武夫が戦に　行くときに
白い真白い　ハンカチを
打ち振りながらも　ねェ貴方
早く帰って　ちょうだいね
ゴウゴウ　ゴウと鳴る汽車は
武夫と浪子の　生き別れ
二度と逢えない　汽車の窓
泣いて血をはく　ホトトギス

〽十一　浪子の墓参り
十二は　二宮金次郎
十三　桜の吉野山
十四は　支那との戦いで
十五は　権兵衛の花盛り

（注）お手玉（ナンゴ）唄。利根郡内各町村に類歌多く、略したところも多い。

○一つがんがらり

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

一つ　がんがらり
二つ　ふくちの木
三つ　蜜柑の木
四つ　よえ（宵）桜
五つ　いちょうの木
六つ　むくれん木
七つ　南天木
八つ　八重桜
九つ　小梅の木
十で　とっちんがら
やまちんがら　ごっちんがら
こちり一まき　十三、七ツ
（注）数え唄、毬つき唄。

○禿の唄

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）

一ツ　一とこ　ハゲてきた
二ツ　二とこ　ハゲてきた
三ツ　右から　ハゲてきた
四ツ　横から　ハゲてきた
五ツ　いよいよ　ハゲてきた
六ツ　むやみに　ハゲてきた
七ツ　なかなか　なおらない
八ツ　やっぱり　なおらない
九ツ　こんなに　禿げちゃった
十で　床屋に　用が無い
（注）悪口唄、数え唄。

○一年生の唄

伝承地　沼田市上須町
伝承者　武井　民柄（T13）

一年が　芋掘って
二年が　煮て食って
三年が　酒買って
（酒呑んで）
四年が　酔っぱらって
五年が　五目飯こせェて
六年が　六杯食った
（注）数え唄（以下三曲）

○ブラブラ数え唄

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

一つとや　飛行機見るとて　仰向いて
花ちゃんお下げが　ブラブラ

二つとや　ふるふる　ふるふる　首を振る
象さんお鼻が　ブラブラ

三つとや　皆んで仲よく　遠足に
お腰の弁当　ブラブラ

四つとや　夜見たオバケを　昼見たら
垣根のヒョウタン　ブラブラ

五つとや　一升徳利　ブラ下げて
タヌキの爺さん　ブラブラ

六つとや　迎えに出たらば　父さんが
お土産包みを　ブラブラ

七つとや　何だか頭に　ぶっつかる
オヤオヤ　ヘチマが　ブラブラ

八つとや　闇夜にきれいな　堤灯が
いくつも並んで　ブラブラ

九つとや　子供の大将　大いばり

お腰の刀が　ブラブラ
十とや　とうとう柳に　飛び付いた
柳のカエルが　ブラブラ

○糸屋のおまき

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽一で　糸屋のおまきさん
二で　煮しめ屋のおかずさん
三で　魚やのおタイさん
四で　汁粉屋のあん子さん
五で　呉服屋のお絹さん
六で　ローソク屋のおてるさん
七で　質やのおくらさん
八で　花屋のカオルさん
九ツで薬屋のおキクさん
十で　数珠や、玉子さん

○いちいちの事

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井君江（T15）

〽一(いち)いちの事が
二(に)人に伝わり
さんざんなる事が
四方に広がり
五条の
六尺坊主が
七丈の袈裟をかけて
八が蜘に
くったくしても
じゅうじなるまい

（注）口遊び唄、数え唄（以下三曲）

○市兵衛さん

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽市兵衛さんが
荷　しょって
サンマ買って
シジミくるんで
碁打(ご)って
六番敗けて
質において
恥かいて
クソを踏んで
跳び上がった

○市兵衛数え歌

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽市兵衛
二佐さん
三次さん
しんさん
ごすけ
六助七右衛門
八ちゃん
くにさん
十兵衛さん

○半兵衛さん

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）

〽千兵衛
万兵衛ある中に
一兵衛とは情けねェなア
半兵衛さん

○火吹き竹

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　君江（T15）

〽一ツ　火吹き竹や
　ケツの穴がたより
二ツ　舟乗りゃ
　船頭さんがたより
三ツ　味噌玉
　カビるがたより
四ツ　夜中にゃ
　灯りがたより
五ツ　医者ドンは
　薬箱がたより

○チョッチョ唄

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）

〽チョッチョッ　朝鮮征伐大勝利
リッリッ　李鴻章の禿頭
マンマン　まったく大尽大身上
ショショ　しょうたれ婆ァのボンボの毛
ケッケッ　ケツが三角ササギッチョ
（始めに返る）

○豆腐は白い

伝承地　沼田市上沼須町
伝承者　武井　民柄（T13）
　武井　君江（T15）

〽さよなら三角　また来て四角
三角　四角　四角は豆腐
豆腐は白い　白いは兎
兎は跳ねる　跳ねるは蚤
蚤は赤い　赤いはホウズキ
ホウズキは鳴る　鳴るはオナラ
オナラはくさい　くさいはウンコ
ウンコは黄色い　黄色いはバナナ
バナナは高い　高いは十二階
十二階はオッカナイ　オッカナイはお化け
お化けは消える　消えるは電気
電気は光る　光は爺いの禿頭
（注）夫婦斎唱。口遊び唄、尻取り唄。

○まりつき唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　茂木　いま（T5）

〽無花果（いちじく）　人参　山椒　椎茸　牛蒡（ごぼう）
むかご　七草　やい菜　きゅうり
とうなす

○まりつき唄

〽伊勢　新潟　三河　信州　神戸
武蔵　名古屋　函館　九州
東京

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村　はる（12）

〽きんばつんばなにつんば
今夜はきつねが出る晩だ
きつねこんこんすっこんこん

○遊戯唄

〽がらがらもんじゃ
なんもんじゃ
うしろのしょうめんだあれ

○お正月の唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村志ヅ江（T13）

〽お正月はいいもんだ
おんぼろひいてもいいもんだ

雪のようなままくって
こっぱのようなととせえて
お正月はいいもんだ

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村志ヅ江（T13）

〽たこのはっちゃん　たこあげて
電針柱にひっかかって
父ちゃん母ちゃん　とっとくれ
はしごがないからとれないよ

○遊戯唄

〽お月さん　えらいな
十三、七つ　若子を生んで
だれにだかしょ　おまんにだかしょ
おまんはどこいった　油買い茶買い
油屋の前ですべってころんで
油一升こぼして
おっかちゃんにおこられて
おっとちゃんにほめられた

○まりつき唄

伝承地　利根郡白沢村下古語父
伝承者　椎原　常子（T11）
伝承者　戸部千代子（T10）

〽一かけ　二かけ　三かけて
四かけて　五かけて　橋かけて
橋の欄干　腰をかけ
遙か向こうを眺むれば
十七、八の小娘が　花や線香手に持って
姉さんどこよと聞いたれば
私は九州鹿児島の　西郷隆盛娘なり
明治維新の戦いに
打たれて死んだ父上の
お墓参りに参ります
お墓の前で手を合せ
南無阿弥陀仏と眼に涙
南無阿弥陀仏と眼に涙

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村下古語父
伝承者　小林ふみ子（T12）
戸部千代子（T10）

〽一番始めの一の宮
二また日光中禅寺
三で佐倉の宗五郎
四また信濃の善光時
五つ出雲の大社
六つ村々鎮守様
七つ成田の不動山
八つ八幡の八満宮
九つ東京博覧会
十一二の宮金次郎
十二は波子の墓参り
十三桜の吉野山
十四は日の丸旗を立て
十五夜お月さん雲の影
十六六六地蔵さん
十七質屋の娘さん
十八はちやのはいからさん
十九は九十で空を見て
二十で戦争が始まった

○かぞえ唄

伝承地　利根郡白沢村下古語父
伝承者　椎原　常子（T11）

一ツとや　人も通らぬ山路を山路を
せんちゃんゆかちゃん二度三度二度三度
二ツとや　双大根分かれても分かれても

せんちゃんゆかちゃんは　はなれまい
はなれまい
三ツとや　三日月様は雲のかげ雲のかげ
せんちゃんゆかちゃん松のかげ松のかげ
四ツとや　夜昼通うはせんちゃんよ
せんちゃんよ
千枚せきだもたまるまい　たまるまい
五ツとや　いつかせんちゃん身をもろた
身をもろた
腹帯おくれよせんちゃんよせんちゃんよ
六ツとや　無理に結んだ腹帯を腹帯を
ゆるめておくれよせんちゃんよ
せんちゃんよ
七ツとや　何を言うにも語るにも語るにも
せんちゃんのつんぼにゃ困ります
困ります
八ツとや　山中稲荷に願かけて願かけて
せんちゃんのつんぼがなおるように
なおるように
九ツとや　ここで死のうか腹切ろか
腹切ろか
せんちゃんを連れて逃げようか逃げようか
十とや　徳利下げて御酒買いに
御酒買いに
これもせんちゃんのきげん酒きげん酒

○羽根つき唄

伝承地利根郡白沢村下古語父
伝承者　堀　とり（S8）

〽一人来な　二人来な　三人来たなら
四つといで　五つ来て見ても
七この帯を　八の字にしめて
おしゃれこ十よ

○まりつき唄

伝承地　利根郡白沢村下古語父
伝承者　椎原　常子（T11）

〽上の姉さん　手まりが上手
中の姉さん　手まねが上手
たらんぼさんかい長羽織
仕立てて着る時きゃ良いけれど
質屋へやる時きゃあいそがねえ
質子もこまげて橋かけて
その橋おいとさんが渡り初め
ひい　ふう　みい　よう　いい　むのや
ここのとう　まづまづ一反貸しました

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村平出
伝承者　新木　むら（T14）

〽じょうり　きんじょ　きんじょ
おじょんま　じょんま
橋の下の　しょうぶが
咲いたか　散れたか　まだまだ
しいらの　のうびょうぐるまに
手にとってみたらば
さぶろく　まぶろく
じゅうさん　さぶろく
じょんじょと　ぬけしゃんせ
ぬけたじょんじょは
だあれだあんべ
（注）じょうりは草履のこと。じょんじょは小さい子供達に言う草履のこと。

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村岩室
伝承者　岡村シヅ子（S15）

〽いんど　にまめ　さんじょばい
しじき　ごすかいばいの　ろくでなし
七めん鳥　はっとばせ　くいしんぼ
とっちまえ
（注）きじやご（おはじき）をする時に唄う。

○まりつき唄

〽いちりつとらんらん
らっきょうくってしつしし
ししもちきゃきゃ
キャベツでほい

○遊戯唄

伝承地　利根郡白沢村平出
伝承者　新井　とも（T9）

〽ゴンベェー　ゴンベェー
酒のんで赤くなあれ

（注）土地名でゴンベ（草の名）の根を抜いてこすると赤くなるので、唄いながら根をこする。

○悪たれ唄

〽坊主ぼっくり山芋
山中に寝てて
蜂にチンコをさされた
かいいともいわず

○十日夜

伝承地　利根郡白沢村平出
伝承者　新井　とも（T9）

〽とうかん夜とうかん夜
朝切蕎麦に昼団子
夕めしくっちゃぶっぱたけ
とうかん夜とうかん夜
とうねておきるとおいべすこ

○羽根つき唄

〽おひよおはよどこへおざる
ななこの帯よお姫と女郎と
おしゃれことんよ

○木のぼりあそび

〽グッサコ　グッサコ桃の木
ももがなったらくうれるぞ

（注）木にのぼり、幹をゆすりながら唄う。

○てつこはこ

伝承地　利根郡白沢村平出
伝承者　新井　とも（T9）

〽てつこはこ　てつこはこ
お寺のおばさんお茶のみおいで

（注）お寺の軒などでてつこはこを掘りながら唄う。てつこはこは蟻を食う小さな生き物。

○とんぼ

〽とんぼ　とんぼ
この指とまれ

○ほうてんか

〽ほうてんかなかな
きいちこほい

（注）ねば土をまるめて穴をあけ石の上などにはたきつける。

○指切り

〽指切りげんまんうそゆうと針千本のまーす

○からすの唄

伝承地　利根郡白沢村平出
伝承者　新井とも（T9）

〽からす　からす　とんがらす
お前のうちが焼けるぞ

早く行って水かけろ
水がなければためかけろ

○とんびの唄

〽とんび　とんび　羽根おとせ

○ほたるとりの唄

〽ホーホー　ほうたる来い
あっちの水はにげえぞ
こっちの水はあめえぞ
ホーホーほうたる来い

○かぞえ唄

伝承地　利根郡白沢村下古語父
伝承者　椎原　常子（T11）
〃　堀　とり（S8）

〽一ツや　しんとく丸はかわいさに
まま親さまに祈られて
二ツや　二親さまがあるならば
こうしたなげきはあるまいに
三ツや　三ツの年から母さんに
別れて行くのもつらいもの
四ツや　よその人でも他人でも
涙をこぼさぬものはない
五ツや　いつまでこうしていたとても
こういう病はなおらない
六ツや　むりに進めてひまもらい
西国、四国と歩きましょう
七ツや　泣き泣き我家を出る時は
まま親さまは上機嫌
八ツや　山に寝ようか野に寝よか
狼さまにのまれようか
九ツや　ここはどこだときいたなら
いづみの底だとひき返す
十トや　年神様のお祭りは
今月来月去来月
（注）なんご（お手玉）で遊ぶ時などに唄われた。

○悪口唄

伝承地　利根郡利根村高戸谷
伝承者　高橋　吉郎

〽日本中が米の飯
高戸谷ばかりが
蕎麦（そば）のやきもち
（注）此の地区では現在でもお正月三ケ日にソバのやき餅を供える習慣が残っている。

○唱えごと

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　井上　金吉（S3）

〽世の中の良い時は
駒の角が生ひ揃（そろ）う
（注）此の地方では、お祭りの時これを唱えて神社を回る。

○カラスの唄

伝承地　利根郡利根村平原
伝承者　吉野　光治（T8）

〽カラス　カラス　コンガラス
お寺の屋根でつまんで
お宮のまいでこうろんで
名あをなんとつけましょう
八幡太郎とつけましょう
八幡太郎の馬（うま）んま屋に
馬んまをなんびきつないだ
千びき万びきつないだ

○まりつき唄

伝承地　利根郡利根村平原
伝承者　吉野　光治（T8）

〽トントン叩くは誰さんだ
新町米屋のりきさんだ
りきさんいまごろなんに来た
じょんじょがきれたで買いに来た
いまごろじょんじょがあるものか
三月節句に買いに来い
（注）「じょんじょ」は草履のこと。

○まりつき唄

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　吉野　弘造（T12）

〽いちりつとらいらい
らっきょう食ってシュシュ
とんがらかってキャキャ
キャベツでほい

○かぞえ唄

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　吉野弘造（T12）

〽正月セ　障子明ければ万才が鼓を打つやら歌の声
歌の声
二月とせ　二日三日は寺詣り明日は
彼岸のお中日　お中日
三月とせ　桜花よりおひな様
かざったみことは内裏様　内裏様
四月とせ　死んで又来るお釈迦様
竹の柄杓で包み上げ　包み上げ
五月とせ　ゴンゴン参りの前かけは
正月かけよと取っておいた取っておいた
六月とせ　ろくに取る前に
前掛け無いとてお腹立ちお腹立ち
七月とせ　質屋のお蔵は混雑で
質を取るやら流すやら流すやら
八月とせ　蜂にさされて泣いていた
何んにも薬あるまいかあるまいか
九月とせ　菊の花にも毒がある
その菊とると目にさわる目にさわる
十月せ　重箱かかえてどこへ行く
わたしゃおいべす講のお使いに
お使いに
（注）お手玉で遊ぶ時に唄われる。

○遊戯唄

伝承地　利根郡利根村平川
伝承者　吉野　弘造（T12）

〽一つ　人々礼儀が大事
二つ　深いは親子の道理
三つ　皆さん辛抱大事
四つ　世の中開けて繁昌
五つ　何時でも養生が大事
六つ　村里
七つ　何よりかせぐが大事
八つ　山には草木が生える
九つ　子供は学校が大事
十で　トッチンが　山コンガラ
コッチンガお腰に一巻
十三七つ
（注）お手玉であそぶ時唄われる。

○味噌玉娘

伝承地　利根郡利根村穴原
伝承者　中沢春日江（T10）

〽おらがとなりの　味噌玉娘
嫁に行くとて　せんたくまでしたが
色が黒くて　きらわれました
（注）味噌玉は、大豆をつぶして玉にし、土間などの天上につるして煙にいぶし、真黒にして、味噌に仕込む。

○遊戯唄

伝承地　利根郡利根村穴原
伝承者　中沢春日江（T10）

〽ぢぢいばばあ　寝てろ
嫁はおきて　火もせ
太郎はおきて　田かけ
次郎はおきて　字かけ

○悪たれ唄

伝承地　利根郡利根村穴原
伝承者　中沢春日江（T10）

〽そうだ　そうだ　そうだ村の
村長さんが死んだそうだ
葬式まんじゅう　でっけえそうだ
中にはあんこがねえそうだ

○遊戯唄

伝承地　利根郡利根村穴原
伝承者　中沢春日江（T10）

〽おうくまとんぼ
くまとんぼ
くるっとまわって
またけえれ

（注）子ども達が箒（ほうき）でオオクマトンボをつかまえる時に唄った。

○手まり唄

伝承地　利根郡片品村新井
伝承者　萩原　ナヲ（M41）

〽正月とせ障子開ければ万才が
鼓の声やら歌の声　鼓の声やら歌の声
二月とせ二日　三日は寺まいり
明日は彼岸のお中日　明日は彼岸のお中日
三月とせ桜花よりお雛様
飾ってみるのは内裏様　飾ってみるのは内裏様
四月とせ死んでまた来るお釈迦さま
竹の子柄杓（ひしゃく）で花の屋根　竹の子柄杓で花の屋敷
五月とせごんごん参りの前かけを
姉ちゃんにとられてお腹立ち　姉ちゃんにとられてお腹立ち
六月とせろくにかけない前かけを
お正月かけよととっておいた　お正月かけようととっておいた
七月とせ質屋のお蔵は混雑で
お質を売るやら流すやら　お質を売るやら流すやら
八月とせ蜂にさされて泣いてきた
そこらにお薬あるまいか　そこいらに薬はあるまいか
九月とせここはどこだと聞いたれば
ここはアンナにモーの下　ここはアンナにモーのした
十月とせ重箱かかえてどこへ行く
私はおざんにお使いに　私はおざんにお使いに

○なんご唄

伝承地　利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽ひとつがんがらみ
ふたつ福寿の木
みっつ蜜柑（みかん）の木
よっつ宵桜

いつつ銀杏葉
むっつむくれんじ（木槿子）
ななつ南天じ
やっつ八重桜
ここのつ小梅の木
とおでとっちんからやまちんから
こっちんから
おこしにひとまき　十三　七

浪子は白いハンカチを
うち振りながらネェあなた
早く帰りて頂戴な
ゴーゴーゴーゴーとなる汽車は
武男と浪子の離れ汽車
鳴いて血を吐くほととぎす
鳴いて血を吐くほととぎす

○なんご唄（お手玉歌）

伝承地利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽一ばんはじめは一の宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五は出雲の大社
六は村々鎮守様
七はナナヤの不動様
八は八幡の八幡宮
九つ高野の弘法様
十は東京シンガン寺
　これ程心願かけたのに浪子の
病は治らない　武男が戦争に行く時は

○なんご歌

伝承地　利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽あうじなし　こうじなし
こうやの子どもは
手足が黒くて
踊りが上手

○なんご唄

伝承地　利根郡片品村古仲
伝承者　星野里可子（M43）

〽ひとつ人々礼儀が大事
ふたつふこえば親子のどおり
みっつ皆さん辛棒が大事
よっつ世の中開けて繁昌
いつついつでも養生が大事
むっつムラサキシロいで繁昌
ななつなにより稼ぐが大事
やっつ山に草木が生えて
ここのつ子どもは学校が大事
とおでとおとおゴコクで繁昌

○向う山

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　明田　ねん（T9）

〽向う山に　蕨折るのは
何処の嫁か　娘か
娘ならば　おもらい申して
お手に豆が九ツ
九ツの　豆の痛さに
門へ涼みに　出たらば
向う長者の　若衆様が
腰をしっかと　抱きしめた
ヤレはなせ　ソレはなせ
俺はここの　嫁だぞ

（注）毬つき唄。

○鷲が一羽

伝承地　利根郡川場村萩室
伝承者　兵藤みちよ（T4）

〽むく鳥　い山に
鷲が　一羽ね
いづ差してくりょと
竿　さしゃ
とどかぬ
（注）毬つき唄

○十文亀

伝承地　利根郡川場村生品
伝承者　木村　かち（M24）

〽十文かめ
十文かめ
お前に
幾つ貸した
一貫かしました
（注）村内最長寿、数え九十九歳。

○トンボの唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽トンボ　トンボ
そこらに　止まれ
明日のうちに
飴買って
くれるぞ

○カマギッチョの唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野みつ（T1）

〽カマギッチョ
カマギッチョ
俺のおっ母ちゃんは
めくらじゃねえぞ
（注）カマギッチョはおとなしい生物（カマチョロ、金蛇）

○テッコハッコの唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽テッコハッコ
いたか
隣のおばさんに
お茶呑み　行ったか
（注）テッコハッコは蟻を食う小さな生物。

○タヌキの唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽ゲンコツ山の　タヌキさん
おっぱい吸って　寝んねして
ダッコして　おんぶしてまた　あした

○ハトポッポ

伝承地　利根郡川場村生品
伝承者　木村　かち（M42）

〽ポッ　ポッ　ポウ
ハト　ポッポ
豆が　ほしいか
そら　やるぞ

（注）村内最長寿、数え九十九歳。

○雁の唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽雁（ガン）　雁渡れ
後（あと）の雁は　先になれ
先の雁は　後になれ
仲良く　渡れ

○カラス勘三郎

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽カラス　カラス
カラスの　勘三郎
お前の家が　焼けるぞ
早くケェッて　水かけろ
水が　無けりゃ
タメ　かけろ

○物くれ唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽これを誰かに
タカランショ
カンショ
カンショの　お使い
まだ　来ない

○まじない唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽チチン　プイプイ
痛ェとこは
向う山へ　スッ飛べー

○凧上げ唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽たこ　たこ　上がれ
天まで　上がれ

絵凧に　字凧

○子供のケンカ

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽子供と　子供で
ケンカして
薬屋さんが　止めても
なかなか　止まんない
人達ヤ　笑う
親達ヤ　怒る

（注）指遊び唄。自分の子供には歌のいくつかを教えた。しかし孫には歌っても聞いてくれないので教えない。

○正月門松

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽正月　門松
二月は初午
三月は雛様
四月は釈迦様
五月　お幟
六月　天王様
七月　七夕
八月　八朔
九月は菊月
十月はお恵比寿講
十一月は霜月
十二月は師走
（注）羽子つき唄

○ブンドヤ

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　明田　ねん（T9）

〽ブンドヤ　ブンドヤ
一丁目と　ブンドヤ
二丁目と　ブンドヤ
三丁目と　ブンドヤ
――
十丁目と　ブンドヤ

〽ススレ　ススレ
一丁目と　ススレ
二丁目と　ススレ
三丁目と　ススレ
――　中略
十丁目と　ススレ

〽マワシ　マワシ
一丁目と　マワシ
二丁目と　マワシ
三丁目と　マワシ
――　中略
十丁目と　マワシ

〽おマンの　かんざし
さされば　ささして
セッセと　セー
のうびょう　あれども
てらしょが　ないのでしかたがねェ

〽お志げちゃん
この橋　渡り初め
橋の上にて　転がりて
悲しみ一人は　お志げちゃん

〽上げよ　上げよ
一丁目と　上げよ
二丁目と　上げよ
三丁目と　上げよ
――　中略
十丁目と　上げよ
（注）毬つき唄。利根郡内各町村に類歌多く、他は省略した。

○一かけ二かけ

伝承地　利根郡川場村萩原
伝承者　兵藤みちよ（T4）

〽一かけ　二かけて
三かけて　四かけて
五かけて　橋を架け
橋の欄干
腰をかけ（手を腰に）

はるか向うを　眺むれば
十七・八の　小娘が
花や線香　手に持って
これこれ姉さん　どこへ行くの
私は九州　鹿児島の
西郷隆盛　娘です
お墓参りに　まいります
（注）毬つき唄

○日露の戦い

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　明田　ねん（T9）

〽一月談判　破裂して
日露戦争と　なりにけり
さっさと逃げるは　ロシアの兵
死んでも尽くすは　日本の兵
ロシアの兵と　戦いて
ハルピンまでも　攻め入って
クロパトキンの　首をとり
東郷大将　万、万才
（注）縄跳び、毬つき唄。

○馬鹿チンドンや

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽馬鹿かば　チンドンや
お前の母さん　デベソ
ついでにお前も　赤デベソ
（注）悪態唄。

○悪口唄

伝承地　利根郡川場村門前
伝承者　明田　ねん（T9）

〽池田の学校
ヤボ学校
細くて　長くて
牛のマラ
（注）池田は峠越えの隣の村、現在沼田市発知。
他校生をヤジるとき。

○ダイシンダイシン

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽ダイシン　ダイシン
ダイシンも　はったよ

〽アゲナンゴ　アゲナンゴ
アゲナンも　やったよ

〽小豆とり　小豆とり
小豆も　とったよ

〽米つき　米つき
お米も　ついたよ

〽カマコケ　カマコケ
おカマも　コケたよ

〽釜かけ　釜かけ
お釜も　かけたよ

〽御膳たき　御膳たき
御膳も　たいたよ

〽ママたべ　ママたべ
マンマも　たべたよ

〽釜下ろし　釜下ろし
お釜も　下ろしたよ

〽箸洗い　箸洗い

お箸も　洗ったよ

〽膳洗い　膳洗い
お膳も　洗ったよ

（注）お手玉（ナンゴ）唄

○おコンの嫁入り

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽おコンコンの　お嫁入り
今日の小袖は　百七ツ
嫁に行っても　出てくるな
朝は早起き　夜おそく
窓の明りで　髪結うて
チャンチャン茶釜で　湯沸かし
カンカンお釜で　ママ炊いて
爺さん婆さん　起きなされ
今日のおかずは　何んもんじゃ
ヒジキに油揚げ　がんもんじゃ
それで　まずまず
ちょうど一貫かしました

（注）お勝手の板の間に正座で毬をついた。

○江戸道中

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽おひよ　お早よう
お姫と女郎と
どこへ御座る
お江戸へ御座れ
お江戸の道で
羽根の生えた鳥と
羽根の生えねえ鳥が
ギシギシ
バタバタ
くるりと回って
一貫せ

（注）羽子つき唄。

○長岡の市

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽市の長岡　だいこもち
だいこもちの　床屋さん
床屋の娘　おタネという
おタネの総領　孫三郎
いくら継子が　憎いとて
布団にくるんで　帯しめて
戸棚に入れて、錠かって
息がつまって　死んだとさ

（注）毬つき唄。「だいこもち」は子供が沢山居るという意味か。歌の途中を少し忘れた。

○お嬢さんお入り

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（T4）

お嬢さん　お入ンなさい
鬼ごと致しましょ
ジャンケンポンよ敗けたら　すぐに
お逃げなさい

（注）縄跳び遊び唄。

○お駒さん

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽トントン叩くは　誰さんだ
新町　米やの　お駒さん
お駒は　今頃何んに来た
ジョンジョが切れたで　買いに来た
ジョンジョが　今頃あるものか
カンコが切れたで　買いに来た

カンコが　今頃あるものか
それで　まずまず
ちょうど一貫かしました
（注）毬つきをしながら歌った。「ジョンジョ」は草履、「カンコ」は下駄のこと。

○お駒さん

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽トントン叩くは　誰さんだ
新町　米やの　お駒さん
お駒は　今頃何んに来た
ジョンジョが切れたで　買いに来た
今頃ジョンジョが　あるものか
おっつけカラスが
鳴くだんべェー
ちょっと一貫かしました
（注）毬つき唄。「おっつけ」はやがての意。

○鷲が一羽

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽むく鳥が山に　鷲が一羽ね
いず刺したくりょと　竿取りなおしね
そうじゃ　取れまい
アメヤさんに　とっとくりょ
あやを忘れて　駿河の茶屋いね
伊奈の　船頭さんに
晒の三尺　もらたとね
何んに染めよと　紺屋さんに聞けばね
一に　たちばな
二に　かきつばた
三に　下り藤
四に　獅子牡丹ね
五つ　岩間に千本の桜ね
六つ　紫　色良く染めてね
七つ　南天
八つ　八重桜ね
九つ　小梅をチラリと散らしね
十で　殿様　葵の御紋ね
（注）お手玉、縄跳びの唄。

○竹の節

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽タンタン　竹の節
一丁　ほうれんげ
向いの皆さんち
一丁　かしました
〽タンタン　竹の節
二丁　ほうれんげ
向いの皆さんに
二丁　かしました
（注）お手玉（ナンゴ）唄。

○竹の節

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（T4）

〽タンタン　竹の節
一丁ほうれんげ
雨降り　花が咲いたか
散れたか
わしゃ　知らぬ
隣の伝兵衛さんに
一丁　かしました

○お一つ落して

伝承地　利根郡月夜野町後閑
伝承者　佐藤　よし（S2）

〽おさらにしょ

お手しゃげ　お手しゃげ
落して　おさらにしょ　おさらにしょ
おつかみ　おつかみ
落して　おさらにしょ　おさらのしょ
オチリン　オチリン
落して　おさらにしょ　おさらにしょ
おくぐり　おくぐり
落して　おさらにしょ　おさらにしょ
おかっきり　おかっきり
落して　おさらにしょ　おさらにしょ
オンバサン　オンバサン
オンバサン　ガッキリ

（注）おくまん様（熊野神社）のテンポセンと云う木の実がナンゴ（お手玉）に入れると良かった。小豆はもったいないといわれ大豆を使ったがやりずらかった。五ツのナンゴで遊んだ。

○お一つ落して

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋みよし（T6）

〽お一つ落して　おさらい
おつかみ　おつかみ
おつかみ　おつかみ
落して　おさらい

〽オチリン　オチリン
オチリン　オチリン
落して　おさらい

〽お手のせ　お手のせ
お手のせ　お手のせ
落して　おさらい

（注）「オチリン」で手の甲の中程にナンゴを乗せる。常に五ツは持っていた。

○お一つ落して

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（T4）

〽お一つ落して　おさらい
お一つ落して　おさらい

〽お手し上げ　お手し上げ
落して　おさらい

〽オチリン　オチリン　オチリン
落して　おさらい

〽大山のぼらせ　登った
大山のぼらせ　登った
落して　おさらい

（注）「お手し上げ」でナンゴを手の甲へ上げる。

○ジョンジョケンジョ

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽ジョンジョ　けんじょ　けんじょ
お玉が　たんぐり　たんぐり
火のまた用心に
のんのん　のりくり
花が咲いたか　開いたか
今　つぼんだ

○楠木正成

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（大4）

〽青葉茂れる　桜井の
里のわたりの　夕まぐれ
木の下影に　駒止めて
世の行末をつくづくと
しのぶ鎧の袖の上に

散るは涙か　はた露か
正成　涙をうちはらい
我が子正行(ママ)　呼び寄せて
父は兵庫に　赴かん
彼方のうらにて　討ち死にせん
汝はここまで　来たれども
とくとく帰れ　故郷へ
（注）お手玉遊びをした。

○でんでん虫

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽デンデン　虫むし
カタツムリ
お前の目玉は　どこにある
角出せ　ヤリ出せ
目玉（頭）出せ

○蛍来い

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋みよし（T6）

〽ホ　ホ　ホタル来い
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ
ホ　ホ　ホタル来い
ホ　ホ　ホタル来い
〝寒念　来い〟
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ
ホ　ホ　ホタル来い
（注）〝寒念〟は大きなホタル（源氏蛍）の意。

○蛍来い

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋みよし（T6）

〽ホ　ホ　ホタル来い
寒念　来い
カンネン　カンネン
水くりょ
（注）利根郡内他町村に、類歌が多く伝承されているが、他は省略する。

○猫かき

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（大4）

〽猫や　猫や　猫一匹欲しい
どの猫欲しい
この猫欲しい
なに呉れて育つ
オトトに　マンマ
オトトに　骨がある
むしって　上げる
むしり箸　なあに
柳のお箸
それについてるは
どの猫　欲しい

○猫かき

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　橋本　ふく（T1）

〽猫や猫や　猫一匹欲しいな
どの猫欲しい
この猫欲しい
なに呉れて育つ
おトトにマンマ
おトトにゃ骨がある
むしいて食わしょ
むしり箸なあに
柳のお箸や

それについては　どの猫欲しいな
ちょいと見ちゃ　この猫欲しいな

（注）鬼とり唄。

○トンビの唄

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽トンビ
トンビ
羽根
下ろせ

（注）昔はトビがよく旋回しておりいつまでも舞っていて、獲物を取る以外はなかなか下りて来ない。木に止って休んでいるトビを見たことがない。

○カラスカラス

伝承地　利根郡月夜野町政所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽からす　からす
トンガラス
ウヌが家が　焼けるぞ
早く行って　水かけろ
水が無けりゃ
タメ　かけろ

（注）真赤な夕焼け空にカラスが飛んでいるのを見たとき歌う。「ウヌ」はおまえの意。利根郡内他町村にも類歌が多いが、省略する。

○カゴメカゴメ

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽かごめ　かごめ
籠ン中の鳥は
いついつ　出やる
夜明けの晩に
鶴と亀が　すべった
後ろの正面　だァれ

○松ボックリ

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽松ボックリが　あったとさ
高いお山に　あったとさ
コロコロ　コロコロ
あったとさ
猿が拾って　たべたとさ

（注）縄跳び唄。

○タンポポの唄

伝承地　利根郡川場村湯原
伝承者　星野　みつ（T1）

〽タンポポ　タンポポ
向うの山へ
飛んでけー

（注）野原で遊んでいるとき。

○ラッキョウ

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽ラッキョウ　ラッキョウ
ラッキョウね
（生ラッキョウ）
むいても　むいても
皮ばかり

○陣取り

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽陣取りするもの
この指　とまれ
陣取りするもの
この指　とまれ

（注）遊びの順番をきめたり、仲間を集めるとき、人差指を上げて歌う。その指に早くつかまった者が先に遊べる。

○約束の唄

伝承地　利根郡月夜野町下牧

伝承者　池田　サク（T4）

〽指きり
カマキリ
嘘　云うと
鬼が
ヘラ　ぬくぞぉ

（注）小指と小指を絡ませて、明日は何処へ行こうとかの約束をしてこの唄を歌う。
ヘラは舌のこと。

○通りゃんせ

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽ここは　どこの細道じゃ
天神様の　細道じゃ
ちょっと通して　下しゃんせ
御用の無い者　通しません
この子の七ツの　お祝に
お札を納めに　参ります
そんなら通って　下しゃんせ
行くにヨイヨイ　帰りはコワイ
コワイながらも
通りゃんせ　通りゃんせ

○大寒小寒

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭きく（M41）

〽大寒　小寒
山から　小僧が
とんできた

○凧上げ

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽たこ　たこ
上がれ
天まで　上がれ

（注）凧は手作り。当地は谷川颪（おろし）が吹き、昔は風の日が多かった。昭和の始め頃、伝承者の夫の祖父は六尺凧を組立て「龍」と墨書きし、太い麻縄をなって空高く上げた。ウナリ音もすごかった（現在、栽培禁止の麻も当時は盛んに作られた）。

○猫の目

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽上がり目
下がり目
ぐるっと回って
猫の目

（注）コタツでの団欒やお風呂の中など親子で歌った。

○達磨さん

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽ダルマさん　ダルマさん
にらめっこ　しましょ
笑えば　ぬかす
アブブの　ブー

○字のできる紅葉

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽字のできる
紅葉

○いいとこ床屋

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽いいとこ
床屋の
縁の下

○一番始めは一の宮

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽一番始めは　一の宮
二また日光　中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つ　村々　鎮守様
七つは成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の弘法さん
十で　東京　真願寺
（注）お手玉は小豆が良い。数珠に使う木の実も良かった（名前は忘れた）。大豆は堅くて痛い。ソバの実も入れたし、音の出るよう鈴も入れたがうまく行かなかった。

○伊勢新潟

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽伊勢（いっせ）　新潟
三河　信州
江州　武蔵
名古屋　函館
九州　東京　尾張
（注）大正、昭和始め頃は子供にゴム毬を買ってやれる家はゴク少なかった。寒いときは毬がヘナに（弾まなく）なるが火に焙ると良く弾んだ。利根郡内各町村に類歌多いが、他は省略した。

○伊勢新潟

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽イチジク
人参
山椒
椎茸
牛蒡（ごんぼ）
ローソク（六茸）
菜ッ葉（七草）
葉ッパ
胡瓜
唐茄子
終り
まずまず一反かしました
（注）毬は立ってついた。歌が終わると背中に背

負う。落すとやり直しをした。一反は土地の一反歩でなく反物であろうか、一般には一貫が多い。

○エンヤの唄

伝承地　利根郡月夜野町月夜野

伝承者　真庭　きく（M41）

〽一ッ丁れんが　乗ります
えんや　えんや
二丁れんが　乗ります
えんや　えんや
三ン丁れんが　乗ります
えんや　えんや
四丁れんが　乗ります
えんや　えんや
五丁れんが　乗ります
えんや　えんや
……（以下略）

（注）お手玉（ナンゴ）を手の甲に一つ上げて、二丁れんで二つ、続いて三つ、と数が増える。

○一丁スイ

伝承地　利根郡月夜野町後閑

伝承者　佐藤　よし（S2）

〽一丁　スイ
二丁　スイ
三丁　スイ
四丁　スイ
五丁　スイ

（注）キシャゴ（おはじき）唄。

○一人来な

伝承地　利根郡月夜野町師

伝承者　高橋みよし（T6）

〽一人来な
二人来な
三人来たなら
寄っといで
いつ来て見ても
斜子の帯を
八の字に結んで
オシャレコ
十よ

（注）羽子つき唄。羽子板は薄くて小さく、絵は何だかわからないものが多く、ぬれると消えたりした。郡内に類歌多く、他は省略した。

○一つがんがらり

伝承地　利根郡月夜野町上牧

伝承者　五十嵐たき（M34）

〽一つ　がんがらり
二つ　ふくちの木
三つ　蜜柑の木
四つ　青桜
五つ　銀杏の木
六つ　ムクレン樹
七つ　南天木
八つ　八重桜
九つ　小梅の木
十で　トッケンガラ
ヤマチンガラ　コッチンガラ
おこしに一巻　十三　七ツ
ちょうど一貫かしました

○しんとく丸

伝承地　利根郡月夜野町上牧
伝承者　五十嵐たき（M34）

一ツや　しんとく丸は可愛さに
継親さまに　いのらせて

二ツや　両親様があるならば
こうした事の　あるまいに

三ツや　三つの年に母さんに
別れて行くのは　つらいもの

四ツや　よその人まで可愛さに
涙をこぼさぬ　者はない

五ツや　いつまでこうして居たとても
こうゆう病は　治らない

六ツや　無理にすすめて暇もらい
西国四国と　歩きましょ

七ツや　泣きなき乗り込む様は
帰りにニッコリ　笑いましょ

八ツや　山で寝ようか野に寝よか
オオカミ様に　呑まれよか

九ツや　ここは何処だと問いたなら
一ねんのそこかと　引き返す

十とや　――――（忘れてしまった）

（注）毬つきは糸マリを使った。母とおばあちゃんが作ってくれ、芯には山菜のゼンマイの綿を堅く硬めて入れて美しい糸でかがった。毬つきは正座をして板の間でついた。後にゴムマリとなり、良く弾むので立ってつくようになった。

○いの助さん

伝承地　利根郡月夜野町後閑
伝承者　佐藤　よし（S2）

〽一番目の　いい助さん
いの字が　キライで
一万　一千　一百石
一斗　一斗　一斗豆
お蔵に収めて
二番目に渡す

〽二番目の　にい助さん
二の字が　キライで
二万　二千　二百石
二斗　二斗　二斗豆
お蔵に収めて
三番目に渡す

（続く）

（注）毬つき唄

○馬鹿でも達者

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽馬鹿でも　達者がようがんす
利口で達者は　なお結構

○馬鹿の大足

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽馬鹿の大足
のろまの小足
ちょうど良いのが
ろくでなし

○桃栗三年

伝承地　利根郡月夜野町月夜野
伝承者　真庭　きく（M41）

〽モモ　クリ三年
カキ　八年
ナシの馬鹿めが
十八年

○爺さん婆さん

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（T4）

〽爺さん　婆さん
聞いとくれ
アカネのフンドシ
買っとくれ
（注）ぐるぐる廻って遊んだ。

○爺さん婆さん

伝承地　利根郡月夜野町後閑
伝承者　佐藤　よし（S2）

〽爺さん　婆さん聞いとくれ
アカネの　フンドシ
買っとくれ
あたしの　チャンコに
毛が生えた

○今晩いたカラス

伝承地　利根郡月夜野町下牧
伝承者　池田　サク（T4）

〽今晩いた　カラスが
お墓（墓場）の
団子　食って
ちょいと　だまった

〽人マネ　コマネ
酒やの　キツネ
酒の粕　くれて
追ん出せ　追ん出せ
（注）人の真似をした者をカラカウとき唄う。

〽誰かさんと　誰かさんと
寄り会って
寄り合いの前で
屁を　たれた
（注）男女で遊んで居るところを見つけたときの
カラカイ唄で、知っている子の場合は名前
を入れて歌う。

〽坊主ボックリ　山犬
山ン中で　寝てて
蜂に　チンコ
刺された
（注）からかいの唄。

○坊主ボックリ

伝承地　利根郡月夜野町後閑
伝承者　佐藤　よし（S2）

〽坊主ボックリ　山芋
山ン中で　寝てて
蜂にチンボコ　刺された
痛いとも　言わず
痒いとも　言わず
ただ　泣くばかり

○悪口唄

伝承地　利根郡月夜野町師
伝承者　高橋　よし（T6）

〽マニワの半鐘
ボロ半鐘
低くて
変な音
鍋のケツ　…後半不祥
（注）隣村の人や他校生をひやかすとき歌った。

マニワは月夜野町大字真庭（隣接地名）。

○おっちゃんどこだい

伝承地　利根郡月夜野町役所
伝承者　真庭武兵衛（M44）

〽おっちゃん　どこだい
中山かい
商売なんだい
炭焼きかい
どうりで
お顔が　真黒い

（注）この唄は人を小馬鹿にするときのもの。歌い易いためか良く聞かれた。ここでいう中山は山を越えた隣の山村の地名で、炭焼き人が多くいた。

○月か法師

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽あの山で　光るのは
月か法師か　ホタルか
月なれば　拝みましょ
ホタルなれば
手にとる　手にとる
まず　まず
一貫かしました

（注）座りマリつき唄。伝承者の生まれ育った所は現住所のすぐ近くで、今は藤原ダムの底である。

○さしまんしょ

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽さしまんしょ　さしまんしょう
これから何方（どちら）に　さしまんしょう
お板屋造りの　お格子造りの
白壁土蔵の　アイノ　菊ちゃんに
さしまんしょ
〽受け取った　受け取った
これから何方に　さしまんしょう
お板屋造りの　お格子造りの
白壁土蔵の　アノエ　マサさんに
さしまんしょう

（注）数人でナンゴ（お手玉）遊びをし、相手にナンゴを移すときの唄。

○丼屋の亭主

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽そこ丼屋の　みずやの亭主が
ヘビに命を　とられた
そのヘビは　どこのヘビだ
かなづかアンマ　青大将
金からまりやら　銀からまりへと
ではでんかの　稲光り
まずまず　一貫かしました

○おんさか酒屋

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽おんさか酒屋の　おさかいちょう
花むらよ　じやまくよ
じやまく　おばさん　おしくだり
――――
ヤッコが　米つく
こぬかが　はね出す
ちょうど　一貫かしました

（注）歌の途中を忘れた。

○お指かんじょ

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名マサ（M40）

〽お指かんじょ　かんじょ
お玉に　タコタコ
（お玉にタングリタングリ）
鬼になるとて　腹立つ奴は
地獄閻魔の　もちかけ盗人（ぬすと）
そら抜け　しゃんせ
一皿（ひと）　ふた皿
み皿　よ皿
いつ皿　む皿
なな皿　八皿
ここの皿
十皿（と）
（注）鬼きめ唄。

○草履かくし

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽草履かくし　カンネン棒
まめたに　腰かけ
ズイ棒が　抜けたか
とくえむどん
一皿　二皿
三皿　四皿
五皿　六皿
七皿　八皿
九皿　十皿
そらきめた
（注）鬼きめ唄

○宝暦元年

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽ホーロク（宝暦）元年　ヤカン年
鍋の吉日　茶釜の日
ジャンケンポン
ガラ　ガラ　モンジャ
何文じゃ　ー大勢ー
三文じゃ　ー鬼ー
一文まからんか　ー大勢ー
まからん　ー鬼ー
ねェ（煮）たか　ねェねか
食ってんべェ
まァだ　ねェねェ　グッツグツ
三べん回って　煙草にしょ
（注）問答唄。

○トンビの唄

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽トンビ　トンビ羽根下ろせ
羽根が無きゃ　身を下ろせ
くるりと回って
飛び上がれ　雲まで行って
（舞い上がれ　雲に上がって）
身をかくせ
月まで行って　下りて来い

○アバヨまた明日

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽アバヨ　サバヨ　また明日
お土産一つに　気がついた
父さんと　母さんに
やっとくれ
アバヨ　サバヨ
カラスギヨ
（注）夕陽も沈み、あたりが薄暗くなっていよいよ遊び仲間と別れるときに歌った。

○タンブルブ

伝承地　利根郡水上町藤原
伝承者　浜名　マサ（M40）

〽一ツひとなめ
タンブルブ　タンブルブ
（唇を手の甲でブルブルする）
二ツ　ひとなめ
タンブルブ　タンブルブ
（ブルブル　ブルブルと
二回行う）
三ツ　ひとなめ
タンブルブ　タンブルブ
（ブルブルを三回行う
だんだん忙しくなる
五、六回までつづく）
（注）お手玉（ナンゴ）唄

○占い歌

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽アワワノヤ
じゃんがら　もんがら
米つき　さいわい
ぬけよと　せよ
（注）遊びの中で人選をする占い。にぎりこぶしを一人一人指さして行き、最後に当たった者が選ばれる。

○竹なんご

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

一　ひとなげ　ふたなげ　みなげ　よなげ
　いつなげ　むなげ　ななげ　やなげ
　ここなげ　となげ
二　ひとたち　ふたたち　みたち　よたち
　いつたち　むたち　ななたち　やたち
　ここたち　とたち
三　ひとねじり　ふたねじり　みねじり
　よねじり　いつねじり　むねじり
　ななねじり　やねじり　ここねじり
　とおねじり
四　ひとかえし　ふたかえし　みかえし
　よかえし　いつかえし　むかえし
　ななかえし　やかえし　ここかえし
　とかえし
五　ひとちんがら　ふたちんがら　みちんがら
　よちんがら　いつちんがら　むちんがら
　ななちんがら　やちんがら　とちんがら
六　ひとまい　ふたまい　みまい　よまい
　いつまい　むまい　ななまい　やまい
　とおまい
七　ひとつかみ　ふたつかみ　とっつかみ
　いつつかみ　むつつかみ　ななつかみ
　やっつかみ　ここのつかみ　とおつかみ
（注）竹なんごを扱う時歌う。

○いちばんはじめは一の宮

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽一番はじめは　一の宮
二また　日光中禅寺
三また　佐倉の宗五郎
四また　信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つは　村々　鎮守様
七つは　成田の不動様
八つは　八幡の八幡宮
九つは　高野の高野山
十で　東京　心願寺
あれほど心願かけたのに

浪子の病は　治らない
武男が　戦い行く時に
白い真白いハンカチを
うち振りながらも
ねぇ　あなた
早く帰って頂だいね
ごうごうごうごうと鳴る汽車は
浪子と武男の生き別れ
二度と会えない汽車の窓
泣いて血をはく　ほととぎす
十一　浪ちゃん　墓参り
十二は　二ノ宮　金次郎
十三　佐倉の　宗五郎
十四は　しなのの　楽隊よ
十五は　五万の　美しさ
（一番にもどる）

（注）唄いながら　お手玉をする唄。

○お手まりつき

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽むつななやっこ
とんで　むつななやっこ
にじゅ　にじゅ　むつななやっこ

さんじゅう　さんじゅう
さんじゅうのしょ
つかも　もうもう　つかも
九月の神事

お手ついちゃ　お手ついちゃ
お手　お手　お手ついちゃ
ひざついちゃ　ひざついちゃ
（ひざ　ひざ　ひざついちゃ）
ストトーヨ

（注）まりつきをする唄。

○なわとび唄

伝承地　利根郡新治村須川
伝承者　原　よし江（S7）

〽大波　小波
風が吹いたら山よ
郵便配達
おかみの　御用で
えっささ
ささまの子
こっぱの子

（注）唄に合せてなわを飛ぶ。

○餅の一生

伝承地　利根郡新治村羽場
伝承者　田村　都（M40）

〽あさまが山で　ふかされて
うすい峠で　こずかれて
めんパケ原で　腹きって
鍋の浄土に　落されて
杓子如来に　救われて
椀の地獄に　また落されて
白はし二本につままれて
前歯　奥歯にかみちぎられて
喉の細道　たよたよと
着いたところが　あり原の町
さんざん苦労をしたあげく
末は野に出て糞となる

○まりつき唄

伝承地　利根郡新治村入須川
伝承者　本多みはる（M38）

〽正月とせ　障子開ければ万才が
つづみの音やら　唄の声
オヤ　唄の声
二月とせ　にがしちゃならない福の神
鬼は外へと　おっ払え
オヤ　おっ払え
三月とせ　咲いた梅より桜より
かざって見ごとなだいり様
オヤ　だいりさま
四月とせ　死んでまた来る　おしゃか様
竹の子びしゃくで茶をかける
オヤ　茶をかける
五月とせ　権現参りの前掛けを
お正月かけようと　とっといた
オヤ　とっといた
六月とせ　ろくに田の草とらないで
お米がないとて大さわぎ
オヤ　大さわぎ
七月とせ　質屋通いのどらむすこ
みんなでたかって　ぶっちめた
オヤ　ぶっちめた
八月とせ　はちにさされて泣いている
そこらにゃ　お薬ないかいな
オヤ　ないかいな
九月とせ　草とりすませ　お月見の
田子作りも　忙しい
オヤ　忙しい
十月とせ　重箱かかえて　どこへ行く
おいべすさかなを買いに行く
オヤ　買いに行く
丁度　一かん貸しました

○まりつき唄

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽ひとつでは　ちち飲みそろう
ふたつでは　ちちにはなれて
みっつでは　水を汲みそろう
よっつでは　両足そろう
いつつでは　糸を取りそろう
むっつでは　ころばたそろう
ななつでは　あやとりをそろう
やっつでは　しんらんたたんで
ここのつでは　こうやし染めて
とおで　とのやに貰われて
十一で　玉のようなるお子をもうけて
賀須賀様に　参りましょう
賀須賀様は　港開けば月の三度の
大神薬小神薬
丁度　一かん貸しました

○手まり唄

伝承地　利根郡新治村入須川
伝承者　本多はるみ（M38）

〽いちに　立花ネェー
にに　かきつばたネェー
さんに　さがりふじネェー
しに　ししぼたんネェー
いつつ　岩やの千本桜ネェー
むっつ　むらさき色よく染めてネェー
七つ　南天
八つ　八重桜ネェー
九つ　小梅をチラリと散らしてネェー
十で　殿様　あおいの御紋ネェー
サテサテ　お芽出たよ
ポンポン　テンテン
丁度　一かん貸しました

○手まり唄

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

一ツ　ヒヨドリわらびがたより
二ツ　舟越し　乗り手がたより
三ツ　みかん屋は　みかん箱たより
四ツ　吉原　お客がたより
五ツ　医者様　薬箱たより
六ツ　麦飯　とろろがたより
七ツ　名主様　帳面がたより
八ツ　屋根屋は　はさみがたより
九ツ　こうやは　染物がたより
十八　殿様　ご年貢がたより
　丁度　一かんかしました

ひひふが　みいよで
いつむが　ななやで
ここととや　十三夜
お手玉　おとにし
おくさん　さぶろく
おくひで　ひらくで
　丁度　一かん貸しました

（以下略）

○わらべ歌

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
　林　美也（T4）
　宮田　つね（M43）

おきよ　おはよ
お姫と　女郎と
どこへ　ござる
お江戸に　ござる
お江戸の　道には
羽根のはえた鳥と
羽根のはえねえ鳥が
ぎしぎし　ばさーばさ
くるりと　まわって
いっかんしょう

正月　門松　二月は初午
三月　ひなさま　四月　しゃか様
五月　おのぼり　六月　天王様
七月　七夕　八月　八朔
九月　菊月　十月　おいべす講
霜月　死走

（注）歌に合わせて縄を飛ぶ。

○まりつき唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
　林　美也（T4）
　宮田　つね（M43）

一つとや俊徳丸は可哀想に継母に祈られて
二つとや二親様があるならばこうした事も
　あるまいに
三つとや三つの時に母さまに別れて来たのが
　つらいもの
四つとやよその人でも他人でも涙をこぼさぬ
　者はない
五つとやいつまでこうしていたとても
　こうした病は直らない
六つとや無理に願って家を出た
　諸国西国歩きましょう
七つとや泣き泣き別れて行くものを
　継母様は上機嫌
八つとや山に寝ようか野に寝ようか
　狼さまにのまれようか
九つとやここはどこだと問うなら
　泉の坂に引き返す
十や年取様のおまつりは今月来月
　さらい月

（注）歌いながらまりをつく。

○絵かき唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽三角またきて　四角　四角はとうふ
とうふは白い　白いはお化け
お化けは消える　消えるは電気
電気は光る　光はおじいのはげ頭

○羽根つき唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽一人来な　二人来な
三人来たなら　寄っといで
いつ来てみても　ななこの帯を
八の字にしめて　しゃれかけとんよ
まずまず一かん貸しました

○ゴムまりつき

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽おでんとしょ　手ばたきしょ
ああんにしょ　だっこしょ
おんぶしょう

○まりつき唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽せっせぇの　よいよいよい
いちかけ　にかけ　さんかけて
しかけて　ごかけて　はしかけて
はしのらんかん　こしかけて
はるか向うを　ながむれば
十七、八の姉ちゃんが
花やせんこうを手にもって
姉ちゃん　ちょいとどちらです
私は九州鹿児島の　西郷隆盛の娘です
死んだ父の墓参り

○遊び唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽ゆうさん　もつさん　桃の木
桃がなったら　くれるぞ

〽ほうずき　出ろ出ろ
根があと　出ろ
種あと　出ろ

〽ぢぢ　ばば　ねてろ
嫁　起きて茶わかせ
むこは畑で　ためかけろ

○わらべ歌

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　とく（T5）
林　美也（T4）
宮田　つね（M43）

〽あがり目　さがり目
くるりと回って　猫の目

〽だるまさん　だるまさん
にらめっこしましょ
笑えばぬかす　一　二　三

〽坊さん　坊さん　どこへ行くの
わたしは　田んぼに稲刈りに
お前が来ると　じゃまになる
うしろの　しょうべん
だぁーれ

〽子供と　子供でけんかして
薬屋さんが出ても　なかなか止まらない
人たちは笑う　親たちはおこる
（注）身振り、手振りが有る。

○まりつき歌

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　たけ（T1）
林　のぶ（M42）
林　徳次（M42）

〽ひー　ふー　だー
だるまだがだー
かぶらちんのち

いちじく　にんじん
さんしょう　しいたけ　ごんぼ
なっぱ　はっぱ　きゅうり
とうなす　かぼちゃ

ひー　ふー　みー　よー　いつー
むう　なな　やー　ここ　とう

ごうしゅう
武蔵
名古屋
函館
九州
東京
おわり

○まりつき唄

伝承地　利根郡昭和村生越
伝承者　林　たけ（T1）
林　のぶ（M42）
林　徳次（M42）

○なわとびの歌

伝承地　利根郡昭和村永井
伝承者　千明　トリ（M42）

〽むくどり　いやまに
うぐいすが　一羽ね
さをさしてくれようと
ながして　おいてね

○占い歌

伝承地　利根郡昭和村永井
伝承者　諸田ちよ子（M39）

〽ダッダッポ
俵のねずみが
米食って　チュー
チューチューがチュー
それで　ぬけたんべ
（注）にぎりこぶしを一人が作り、他の者はその中に、人さし指を入れておき一人が歌いながら順に指さしていき最後に当った人がぬける。

〽伊勢
新潟
三河
信州

○まりつき歌

伝承地　利根郡昭和村永井
伝承者　千明　トリ（M42）

〽いっちょうや
にくらしいー
さんざんっぱら
しゃあがって
ごうつくばりの　ろくでなし
ひちめんちょう　はっとばせ
くやしけりゃ　とんで行け

（注）いっちょうや＝一丁目のこと。
はっとばせ＝たたくこと。

○からかい歌

伝承地　利根郡昭和村永井
伝承者　千明　トリ（M42）

〽人まね　こまね
ねこの　まねは
できるが

ねこ　ねこ　おっかのまんこは
どんなだ

カラス　カラス　カン三郎
おまえの家が　大火事だ
早く行って　水かけろ
水がなければ　小便（ため）かけろ
じじい（爺）　ばぁばぁ（婆）
ねてろ
嫁は起きて　茶わかせ
婿は起きて　働け

（注）ねこ＝オケラ（水中にいる虫の一種）

○せんば山の狸

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽あんたがた　どこさ　肥後さ
肥後どこさ　熊本さ
熊本どこさ　せんばさ
せんば山には狸がおってさ
それを猟師が鉄砲で射ってさ
煮てさ　焼いてさ　食ってさ
それを　木の葉で
ちょいと　かくせ

（注）毬つき遊び

○チチンブイ

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽チチン　ブイブイ
痛ェとこ　痛ェとこ
遠くの山へ
飛んでケェー

○一丁目憎らしい

伝承地　利根郡昭和村川額
伝承者　唐沢　久子（T10）
他　九　名

〽一丁目
憎らしい
三んざっぱら
しやがって
五とう
六でなし
七面鳥
はっくらせ
くやしかったら
飛んでけェー

（注）数え歌、キシャゴ遊び

「板倉の土端（どば）打ち」

洪水で堤防が決壊すると、堤防修復の土端打ち作業は女衆によって行われた。

一、東毛地域の概観

東毛と呼ばれている地域は、太田市と新田郡、桐生市と山田郡、館林市と邑楽郡を包括する空間を現在は東毛の語を用いて表現している。

この地域の地理的外観は山田郡大間々町および太田市・館林市・邑楽郡の東部、逆説的には渡良瀬川の右岸にこれらの市・郡は位置し、桐生市は左岸に位置している。

また、太田市の南部に存在する古戸や邑楽郡千代田町、館林市川俣、邑楽郡明和村は利根川に面している。

これから考察すると、東毛は渡良瀬川と利根川に挟まれている地域である。

このことは、しばしば両河川の洪水などによる水害によって悩まされることが多く、これから水の神様を祭った水天宮が各地に散見することができる。

しかし、特に渡良瀬川の沿岸に位置した町村はかつて栃木県足尾町に源流を有する渡良瀬川によって多大の被害を被った。

これは洪水による水害ならば、その被害の程度そのものは、その時点である程度は解決できるが、鉱毒による被害であったことから田畑に堆積した鋼鉱屑の被害であったから、永年にわたり沿岸住民は、その被害に悩まされた。

足尾銅山は江戸時代においては幕府の直轄鉱山として幕府の重要財源となっており、銅貨の鋳造材料ばかりでなく、長崎における中国貿易の主要輸出物の役割を果たしていた。

幕府崩壊後、すなわち明治時代に入ると維新政府の方針であった富国強兵策によって、産業の各分野にわたり西洋の先進技術を導入して日本工業の近代化を計った。

しかし、西洋の近代工業の技術と機械を購入するには民間資本の貧弱が原因となって、政府資本によって導入を余儀なくさせられた。

上州富岡の製糸工場しかり、栃木県足尾銅山しかりであるが、やがて運営が軌道にのると、これら全国に存在した近代工業施設は民間に払下げが行われ、このような環境の中で足尾銅山は古河市兵衛に払下げが行われた。

時あたかも、日本政府の外国進出の波の中に生まれた日清・日露戦争は多大の鉱産物を必要としたことから、足尾銅山は乱掘が続行された。

鉱産物の産出額に追われた足尾銅山は鉱屑の処理もせず、付近に堆積し、放置されたままであったので、これが後年、公害第一号と呼ばれる渡良瀬川鉱毒事件を産み出した。

渡良瀬川の沿岸に位置する大間々町より下流の両岸の町村は永年にわたり除去することの不可能な被害の中に投げ込まれた。

この鉱毒は魚族の絶滅ばかりでなく、稲作等の農作物に大被害を与え、以後、当時農耕は不可能とまでいわれた。

これが栃木県佐野市出身の代議士田中正造の生命をかけた鉱毒農民救済運動に発展し、田中正造の直訴となった。

この時に躍起した沿岸農民は逮捕されて宇都宮刑務所に投獄されるな

ど、農民の悲劇は頂点に達した。

東毛を語る時、この鉱毒事件を除いては語ることができないのが東毛の特色である。

次に東毛を語る時、歴史的外観についてふれておく必要がある。

それは、第一次群馬県が明治四年（一八七一）に成立した時に、当時の東毛三郡（館林町・桐生町・太田町を含む）である邑楽・新田・山田の三郡は栃木県に編入された。

この三郡は、永年続いた上野国の東部にあたる地域であるが生木をさくように栃木県内の三郡となったが、明治九年の第二次群馬県の成立にあたり旧に復して、奈良時代よりの上野国の地域が群馬県となったわけである。

この東毛三郡は明治二十二年（一八八九）の群馬県令第十九号によって、江戸時代に村と称した郷村の合併が施行されて別記の村々が成立したが、これが第一回の町村合併である。

新田郡（下段が江戸時代の村と村数）

太田町
九合村（飯塚村、他八カ村）
沢野村（福沢村、他七カ村）
尾島町（尾島村、他一二カ村）
世良田村（世良田村、他一〇カ村）
木崎町（木崎宿、他四カ村）
宝泉村（西野谷村、他九カ村）
鳥之郷村（鳥山村、他四カ村）
強戸村（強戸村、他六カ村）
生品村（村田村、他八カ村）
綿打村（大根村、他一〇カ村）
藪塚本町（藪塚村、他五カ村）
笠懸村（鹿村、他三カ村）

山田郡
桐生町（桐生新町、他三カ村）
川内村（高津戸村、他四カ村）
広沢村（広沢村、他四カ村）
相生村（如来堂村、他四カ村）
福岡村（浅原村、他三カ村）
梅田村（高沢村、他三カ村）
大間々町（大間々町、他一カ村）
韮川村（竜舞村、他一四カ村）
毛里田村（吉沢村、他七カ村）
境野村（境野村）

邑楽郡
館林町（館林町、他三カ村）
郷谷村（新当郷村、他三カ村）
西谷田村（除川村、他六カ村）
大箇野村（大高島村、他二カ村）
伊奈良村（板倉村、他三カ村）
赤羽村（赤生田村、他一カ村）
千江田村（千津井村、他四カ村）
梅島村（新里村、他三カ村）
佐貫村（大佐貫村、他五カ村）
六郷村（新宿村、他五カ村）

三野谷村（上三林村、他三カ村）
富永村（上五箇村、他五カ村）
永楽村（福島村、他四カ村）
大川村（仙石村、他五カ村）
小泉村（上小泉村、他一カ村）
長柄村（篠塚村、他二カ村）
中野村（中野村、他三カ村）
高島村（藤川村、他二カ村）
多々良村（成島村、他三カ村）
渡瀬村（國野村、他五カ所）
大島村（北大島村）
海老瀬村（海老瀬村）

これらの新町村名のみを承知しているのでは、歴史学や民族学の調査にあたっては、きわめて不便を感ずること多く、やはり、新町村が江戸時代のいかなる村が合併して成立したかを知っておく必要がある。

たとえば、木崎町は木崎宿・中江田村・下江田村・高尾村・赤堀村等合計五カ村によって成立した町名であるが、木崎音頭や赤堀の神楽等を理解するのには、江戸時代の地縁共同体の理解が必要であろう。

先述した木崎町成立当時の戸数は木崎宿が三〇八、中江田村九五、下江田村二九、高尾村二二、赤堀村四二となっているが、これが年中行事を執行する際の基礎となったことを思い知る必要がある。

特に東毛地方における村落においては、行政上、一村がいくつかの知行所に分割統治されていたことが住民の団結を大きく阻害していた。

新田郡九合村の一村飯塚村は幕末においては旗本大沢・松平・落合・久留島・稲生・前田の知行所で六給地であった。

山田郡の韮川村の一村であった竜舞村のごときは一五の天領・知行所に分割統治されていたことから判明するように、江戸時代の村落の統治形体がきわめて複雑であったことを承知しておくべきである。

これらの町村も昭和二十八年制定の「町村合併促進法」により、第二次の町村合併が施行され、その結果、新田郡は太田市・新田町・藪塚本町・笠懸村、山田郡は桐生市・大間々町、邑楽郡は館林市・板倉町・明和村・千代田村（後に町制）・大泉町・邑楽町等の現在の市町村が成立した。

東毛地方の民謡の特徴をあげると、河川に関するものが多い。特に河川工事（堤防工事のうた）は、節奏の共通したものが見られる。更に麦打ちうた等については、栃木系統の節奏のもので、群馬県にある在来の麦打ちと比べて東毛のものは、歌に迫力があり、上州人気質に合った労働うたといえよう。この系統の東毛の麦打ちうたも、佐波郡を境として以西は群馬在来の麦打ちうたとなっている。

また、他の地方では採集できなかったものに千代田町の綿打ちうたや、邑楽町の豊年万作踊りうた、板倉町の桑摘みうたなどがあげられる。

なお東毛地方は水田地帯でもあるが、稲作作業に関する田植うたなどが今回の調査採集で皆無に近い状態だったのは残念である。更に河川の多い地方色から見て、念仏等がもっとあっていいはず。かつては相つぐ水害におかされ、村人や親族などを洪水で失っていく現実に、川沿いの人々は、神や仏にすがって生きねばならなかった。特に信仰が濃厚であった。こうしたことからみても、もっと念仏や和讃があっていいはずだと考えられる。次に東毛各地の民謡やわらべうたで特徴あると思われるものについて、若干あげておく。

○太田市　この地区で先ずあげられるのは草刈りうたである。草刈りうたというと利根郡片品村にある草刈りうたがあげられるが、片品村の草刈りうたは、曲節が少々葉うたに似たものであるが、太田市のものは草を刈る仕事の律動に合ったリズムを持っており、しかもこの地方で、草を刈りながら古くから歌われていたという。このように附帯目的がしっかりしている民謡は、現在貴重である。

更には沖之郷地区の和讃をはじめ、河川工事に関する土端打ちうた、タコつきうたや麦打ちうたなどが、この地区の民謡として上げられる。

また、わらべうたでは、東長岡地区の若林ちえさん（72歳）の伝承のものは貴重である。まりつきうたで「あんたがたどこさ、ひごさ」と歌い出されるもので、（この歌は全国的に広く歌い継がれている歌であるが）曲節の一部に特徴ある歌い方をしているのが珍しい。例えば「せんば山には」とか「やいてさ」の部分である。他地区にみられない、この地区独特の節廻しで歌っている。更に、この歌の詞章の最後の部分は「焼いてさ、食ってさ、おいしかった」と結んでいるのである。普通この歌は「焼いてさ、食ってさ、それを木葉に、ちょっとかぶせ」で終わるのだが、東長岡地区独特の終止符を持っている。

このように「おいしかった」という詞章で終われば、それにまつわるこの部分のメロデーの終止符形も、独特のものとなって終わっているのである。

このように全国的に歌われていたわらべうたであっても、その地方なりに浮動し、地域性を加味しながら特徴のある曲に変容していくところに、民謡やわらべうたの性格があり、その地方性をみることができるのである。

なお、若林ちえさんの伝承の数えうたで、「なんごやおはじきを数えるときに歌われるうた」で、特徴あるものに「ひい　ふう　みい　ようついつ　むう　なな　やあ　この　とう」「ひい　ふう　みい　ようつ　むう　なな　や　この　二十」……これをくり返し三十、四十、五十、と数えていく数えうたは誠に特徴があっておもしろい。

○桐生市　この地区ではまりつきうたや土端打ちうたがある。この土端打ちうたは阿佐美沼の築堤の時、そこの作業員としての参加人の歌で、利根川や広瀬川などの堤防工事うたと同系のものである。また梅田地区の子もりうたと皆沢馬子うたと題して歌っているが、若い方の演唱のため、旋律を美しく歌う方向性があり、土くささが失われている民謡のように思われる。

○館林市　この地区では、日向義民念仏があげられる。この念仏の起こりは館林領内の十数名の者が、暴政に対する直訴を江戸幕府に行い、日向処刑場において全員処刑された。この地方の人々は、この非業な死に方の人々の怨念を果たすべく、この念仏講を「日向義民念仏」として始められたという。詞章もわかりやすく、念仏の曲節もしっかりしている。

○千代田町　この地区は民謡の宝庫といえる程の地域である。利根川がこの地区を流れているだけに、堤防工事うたの種類も豊富。今回の調査では、ザンザ節と棒打ちうたが採集されたが、ならしうたや芝植えうたなど過去の調査で採集できている。更に糸ひきうたやはたおりうたなどもあり、糸ひきうたは邑楽社製糸工場でうたわれていたもので、この邑楽社製糸工場は、当地の川島氏が経営していた工場で木崎にあった。糸ひきうたの詞章の途中に「皆んな川島さんの、そん害だ、そん害だ」と

あるのは、この地の川島氏をうたったものである。又、はたおりうたの中で、歌詞の各終わりの部分に「ピントさした」とあるのが、この地区のはたおりうたの特徴である。実はこの地区で明治中頃からこのうたは歌われて来ているが、もともと群馬にあったものでなく、丹後（現、京都府）の宮津の宮津節が伝わり、この地ではたおりうたとして歌われたもので、歌のリズム、旋律ともに近代的に洗練されており、軽快なはたおりのリズムには、この歌は最適だったのであろう。民謡の浮動性は生きもののようであるし、そこに庶民が民謡を無認識に伝承して来たことも知られてくる。

又この地区で今回の調査で収穫の大きかったのは「綿うち唄」が採集できたことである。

この地区（千代田町）は、明治四十三年の大洪水以前は、畑に多くの綿を栽培をしていた。ゴザの上に竹のスノコを置き、その上で綿打ちのゆみを使って綿をたたいた。

この時うたったうたが「綿打ちうた」なのである。

○薮塚町　この地区では相撲甚句があげられる。大原七区の島田源七（四股名を源次山）は、村の相撲好きの者を集めて、長建寺の庭で昼夜相撲を行った。昼は遊びげいこといい、夜になると見物衆も多いので本番さながらの大相撲となった。この地区では、一月十五日から十日間、星とり相撲を行った。四月の花見時にも星とり相撲となる。星とり相撲で大関を投げたり、上位力士を投げると五十銭もらえた。巡業先で弓とりひきをすれば「弓とり代」、どんすをかけると「どんす代」、相撲甚句をうたうと「甚句代」がもらえた。この地区での相撲がいかに盛況であったかが伺える。

相撲甚句を歌うのは、力士の土俵入り時にうたう。力士はどんすをかけ交互に歌いながら土俵の中で踊るのである。

○新田町　新田町木崎地区の木崎音頭、この盆踊りうたを古くは「盆どり」と呼んでいた。

盆どりと呼ばれた盆踊りうたは、歴史的に古い盆踊りうたである。盆どりと呼ばれた次に木崎節となり、現在は木崎音頭と変転。この盆踊りうたが八木節の源流とされているが、昭和十九年七月二十日出版の『日本民謡大観・関東編』の中で、木崎節について町田嘉章氏が「越後の神保広大寺くずし云々」との解説から、八木節の源流説となり、現在までさまざまな人々から斯様に唱えられている。木崎音頭の民俗学的な面、文学、音楽等の多方面から研究分析して、一つの民謡を規定する時代に来ている。それにしても八木節の流行で群馬の多くの古い盆踊りうたは消滅したが、その時代にも生き続けてきたすばらしい盆踊りうたで、木崎音頭は群馬の民謡の王座の位置にあることは、よろこばしいことである。

○板倉町　この地区には多くの民謡が残されていたが、それを現在伝承する者は少ない。麦打ちうたで「一本打ち」と「合わせうち」の、テンポのちがいに麦打ち仕事の律動によって、その民謡の速度が決まって行く理論を、板倉の麦打ちうたはよく教えている。更にこの地区の民謡で取り上げられるのは、桑つみうたである。群馬は養蚕県とされているが、桑つみうたが案外少ない。板倉地区の桑つみうたは、歌詞・旋律ともにすばらしい。又この地区の念仏踊りは、盆踊りの源流をみていく上で貴重である。念仏に合わせて女衆が扇子を持って踊るという群馬県下でな

かなかみられないものである。曲節も普通の念仏とちがい、わずかであるが歌謡化しているのである。

前述したように、盆踊りの素地をみていく上に欠かせないものであろう。

○邑楽町　この地区であげられるのは、万作踊りである。これに伴う歌が今回の調査で収穫できたのは大きい。この民謡は風流であり、古く盆踊りの時期に、盆踊りと同じように行われていた。この流れは実に広範囲であり、栃木県・群馬県・埼玉県などでも行われていたので、埼玉県の大里、児玉などでも古くは「豊年万作踊り」といわれて、盛んに行われていた。今回の調査で、万作数えうたから、段物に至るこの系統のうたが採集できたのは大きいが、この継承についても忘れてはならない本県の貴重な民謡であり、更には盆踊りうたの源流を探究する上にも欠かせないものであろう。

○明和村　この地区では利根の水害を数え歌型式にうたった「読売りうた（瓦版うりうたともいう）」が採集できた。千代田町でも過去に、明治四十三年の大洪水の悲惨さをうたった読売りうたの一部を採集したことはあるが、今回のように九番歌詞まで採集できたのは収穫であった。この地区の読売りうたの特徴は、普通の数えうたは「一つとせ」と数字の一、二で歌って行くのであるがこれは「イロハ」でうたって行くのである。こうした数えうたは誠に珍しい。おそらく水害の悲惨さを、イロハと順々に四十八番まで歌ったものであろう。このうたの歌い手は明治三十四年生まれの古老なので、曲節は上手とはいえないが、川の流域の地域の特徴ある民謡として貴重である。現在の民謡がステージで演唱されているのとちがい、この地方の過去の民謡が地域と密接に結び付き、人々と共に呼吸していたことがわかる。

明和村の貴重な「読売りうた」の発見は、県文化財保護課のこの調査担当専門員さんによってなされた。今回の民謡調査では、県担当の専門員さん等関係者が、県下各地に自ら足を運び、埋もれた民謡の発見に陣頭指揮を図って下さったことが、東毛地区でもこのようなよりよい民謡の採集ができたと考える。

二、調査民謡

A 労作歌

○豆打ち唄

伝承地　桐生市菱町黒川
伝承者　新井　嘉吉

〽アーコラショーアー魂消だ
駒下駄びっこ下駄
アー桐下駄なんどは滅多に履けない
それでも男は度胸だ愛敬だ
たまねをはり出すたかんぼ殴引き
おみむけ眼鏡の麦藁シャッポ
アーバカトレバカトレ
持つのが小桶提げるのが手桶茶碗に
白茶見たことがない
お池で金魚がいけしゃあゃあに
小便しちゃあ止まりが無い
アーバカトレバカトレアーコラ
ドッコイショー

○土場打ち唄

伝承地　桐生市相生町
伝承者　山洞　高一

〽エンヤラヤーノスイショデキガザンザラ
ヨーアラマタヨナンダイソコイラデネ
朝の六時から弁当箱提げてヨツコラ
ザンザ阿左美通いも楽じゃ無い
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラ
ヨアラマタヨナンダイソコイラデネ
お前百までわしゃ九十九までヨツコラ
ザンザ　共に白髪の生えるまで
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラ
ヨアラマタヨナンダイソコイラデネ
入れておくれよ痒くてならぬヨツコラ
ザンザ　わたし一人が蚊帳の外
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラ
ヨアラマタヨナイダイソコイラデネ
母ちゃん畑の薯はヨツコラザンザ
頭振り振り子を増やす
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラ
ヨアラマタヨナンダイソコイラデネ
主と別れて松原行けばヨツコラザンザ
夏の露やら涙やら
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラヨ
アラマタヨナンダイソコイラデネ来たら
寄りなよ阿左美の沼へヨツコラザンザ
世間知らずの風が吹く
エンヤラヤーノスイショデキガザンザラヨ
アラマタヨナンダイソコイラデネ
早生だ早生だよ玉蜀黍は早生だヨ
ツコラザンザ半年経たずに毛が生えた
エンヤラヤーノスイショダキガザンザラヨ
アラマタヨナンダイソコイラデネ

○馬子唄

伝承地　桐生市梅田町
伝承者　青木　英子

〽よくよ染めたら馬喰さんの浴衣肩にゃ
鹿毛馬
裾には栗毛背中にゃ千両とは書いてある
駒よ何処通る真ん中通れ染田の宿だぞ

お女郎が笑う何が不足ではや立ち止まる

○草刈り唄

伝承地　太田市本町
伝承者　高梨　春枝
柳原　貞子
寿命　サダ
山本うわ子
島田　貞夫

〽可愛いけれども　あなたは仇
かたい私を　まよわせた

上州よいとこ　新田の里は
東金山　呑竜様

私は太田の金山育ち
外に木はない　松ばがり

男伊達なら　あの利根川の
水の流れを　とめてみな

水の流れは　とめよで止まる
とめてとまらぬ　色の道

上州太田の　呑竜様よ
金を借りても　返さんき

思う人には　思われないで
思わぬ人には　思われる

○藻取り唄

伝承地　邑楽郡板倉町板倉
伝承者　新井　七蔵（M38）

〽ハアー
わたしゃ板倉の　藻取り野郎で
お色黒くも味みやしゃんせ

味は大和の　あのつるし柿
味は大和の　あのつるし柿

○麦打ち唄

伝承地　邑楽郡板倉町高島
伝承者　阿部　とら（T3）

一、お江戸さー　今朝でて　春日部泊り
明日のさー泊りは　小山か古河か
（ハー　コナレロ　コナレロ
コナレテドウスル　ダンゴニマルメテ
エドマデコトガセ）

一、あの娘よい娘だ卵に目鼻よー
さぞや親達や　ほんとにかわいい顔よ
（ソレブテ　ソレブテ）

○桑摘み唄

伝承地　邑楽郡板倉町高島・大久保
伝承者　阿部　とら（T3）

一、大久保瓦屋根は　女の夜這い
男　後生楽　寝て待ってるよ
（ジッサイ　ソウダヨ　マッタクダヨ）

二、蚕日雇だと馬鹿にはするな
蚕あがれば尻（又は穴）なめろよ
（ジッサイ　ソーダヨ　マッタクダヨ）

○麦打ち唄

伝承地　邑楽郡明和村新里
伝承者　横塚　かつ（T8）
田口　キク（T8）

一、古河のサー二丁目　根屋の娘
ハァードッコイ　ドッコイ　ドッコイ
油サーとろとろとろ

ハァドッコイ　ドッコイ
腰までつけて　ハアドッコイ　ドッコイ
腰のサー光で　ハアドッコイ　ドッコイ
古河の町照らす
ハァドッコイ　ドッコイ

二、富士の白雪や朝日に解けて
ハァードッコイ　ドッコイ　ドッコイ
解けて流れて　ハァドッコイ　ドッコイ
三島へ落ちる　ハァドッコイ　ドッコイ
三島女郎衆の　ハァドッコイ　ドッコイ
化粧の水　ハァドッコイ　ドッコイ

（注）「フリ棒」に合わせて、前後に身体を屈伸すると同時に同じ処のみ打たず少しずつ廻り乍ら、位置を移動する。

○麦打ち唄
伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

〽ハァドッコイ　ドッコイ
古河のサー二丁目の油屋の娘
ハァドッコイ　ドッコイ
油ナァーとろとろ　腰までつけて
ハァドッコイ　ドッコイ
腰のサー光で　古河の街照らす
ハァドッコイ　ドッコイ
嫁にサー行こうと　洗濯までしたが
ハァドッコイ　ドッコイ
へそがサーでべそでやれ　嫌われた
ハァドッコイ　ドッコイ

○麦打ち唄（合い打ち）
伝承地　邑楽郡明和村新里
伝承者　田口　キク（T8）
石川　ヤス（T7）

〽ハァードッコイ　ドッコイ
お江戸　けさ出て春日部泊まり
ハァードッコイ　ドッコイ
晩の泊まりは　小山か古河か
ハァードッコイ　ドッコイ
同じ旅籠じゃ　ほんとに古河がよい
ハァードッコイ　ドッコイ
古河の女郎衆が　手まねでまっている
ハァードッコイドッコイ

（注）合い打ち唄は、幾人かが向かい合って麦打ちするもので、皆さんの呼吸を合わせることが、特に大切である。一人間違うと、次々と打つ動作が狂って大変である。

○土端（ど）打ち唄（棒打ち唄）
伝承地　邑楽郡明和村新里
伝承者　石川　ヤス（T7）

〽どなたも又　みなさん　ヨウ　ソレー
（掛け）ヨホ、ホイ、コラー　コーラショウ
ソレヨウ　ならしを　又　たのむよ　ソレー
（掛け以下省略）
ソレヨウ　かみちょに　又　たのむよ　ソレー
ソレヨウ　しもちょに　又　くだれば　ソレー
ソレヨウ　ならしが　又　おわれば　ソレー
ソレヨウ　どばうち　又　はじまる　ソレー
ソレヨウ　ちからを　又　あわせて　ソレー
ソレヨウ　しまるよ　又　かたまる　ソレー
ソレヨウ　いかなる　又　どはでも　ソレー
ソレヨウ　みなさん　又　おかげで　ソレー
ソレヨウ　しまれば　又　かんとくさんが　ソレー
ソレヨウ　よいとこ　又　あげてな　ソレー
ソレヨウ　いちよんがさ　又　お天気が　ソレー
ソレヨウ　ゆいので　又　皆さん　ソレー
ソレヨウ　ちょいあさ　又　皆さん　ソレー
ソレヨウ　けんなさ　又　やくばの　ソレー
ソレヨウ　皆さんが　又　きたぞえ　ソレー
ソレヨウ　元気よく　又　やられと　ソレー
ソレヨウ　けんなさ　又　だめだよ　ソレー
ソレヨウ　群馬の　又　名物　ソレー

ソレヨウ　かかあさ　又　天下と　ソレー
ソレヨウ　ぶんぶく　又　茶がまだ　ソレー
ソレヨウ　群馬の　又　こうえん　ソレー
ソレヨウ　つづじが　又　関東一だ　ソレー
ソレヨウ　かんとくさんが　又　見えたぞ　ソレー
ソレヨウ　でづらの　又　しらべだソレー
ソレヨウ　かねさが　又　なったなら　ソレー
ソレヨウ　しまえの　又　あいづだ　ソレー
ソレヨウ　皆さん　又　ごくろうさん　ソレー
ソレヨウ　皆さん　又　おしまい　ソレー

（注）大尺の棒を振り、傾斜の堤を、唄に合わせて2回繰り返し打って、一端直立して休む形をとる。前後に身体を大きく屈曲を繰り返す。かけ声・文句は、番毎若干、即興で変わることもある。

○たこ打ち唄

伝承地　邑楽郡明和村新里
伝承者　石川　ヤス（T7）

〽ソレー皆さん　ソレー元気よく　ソレー
（掛声）ヨホ、ホイ　コーラ　コーラシヨーヨ
ソレーちからを　又　あわせて　ソレー
（掛声以下省略）
ソレーならしを　又　たのむから　ソレー
ソレーいかなる　又　どはでも　ソレー
ソレーしまるよ　又　かたまる　ソレー
ソレー皆さん　又　あげてな　ソレー
ソレーしまれば　又　かんとくさんが　ソレー
ソレーよろこぶ　又　ほめるから　ソレー
ソレー夕べのように　又　もちゃあげて　ソレー
ソレーどうしたね　又　ぐあいは　ソレー
ソレーもちゃげて　又　やればな　ソレー
ソレーおろせば　又　かたまる　ソレー
ソレー江黒の　又　村にも　ソレー
ソレーしっせの　又　お寺だ　ソレー
ソレーこそだて　又　観音様　ソレー
ソレーよい子に　又　育つよ　ソレー
ソレー十二社　又　わたれば　ソレー
ソレー野菜の　又　産地だ　ソレー
ソレーあなたと　又　私は　ソレー
ソレーごもんの　又とびらが　ソレー
ソレー朝にと　又　わかれて　ソレー
ソレー晩にさ　又　あいると　ソレー
ソレー向をに　又　みえたぞ　ソレー
ソレーそことおる　又　おねちゃんよ　ソレー
ソレーちょいとさ　又　やりなよ　ソレー
ソレーよいひと　又　せわして　ソレー
ソレーあげるよ　又　おねちゃんよ　ソレー
ソレー皆さん　又　おかげで　ソレー
ソレーどはばも　又　かたまる　ソレー
ソレーかんとくさんが　又　みえたぞ　ソレー
ソレーでずらの　又　しらべだ　ソレー
ソレーかねさが　又　なったら　ソレー
ソレーしまえ　又　あいづだ　ソレー
ソレー皆さん　又　ごくろうさん　ソレー
ソレー皆さん　又　おしまい　ソレー

（注）重いたこを六人位で一組となり、唄に合わせて、地面をかためた。何組かの人達が、一人の唄手に合わせて作業する。

○綿打ち唄

伝承地　邑楽郡千代田町瀬戸井
伝承者　上村　セイ（M33）

〽姉もさしたがる
妹もさしたがる
同じ蛇目の唐傘を
ピン　ピン　パタ　パタ
ピン　ピン　パタ　パタ

（注）ピンピン　パタパタとは、弓竹で綿をたたく時に出る音を唄ったものである。

○糸ひき唄

伝承地　邑楽郡千代田町瀬戸井
伝承者　上村　セイ（M33）

一番笛に　おきそろえ
二番笛の　鳴ったとき
一つの業に取付いて
唄や話は便ぎでも
糸目のたくさんでるように
もしもこの糸　はらい出し
てきとなったる　その時は
みんな川島さんの
そん害だ　そん害だ

一反畑のごぼう　ほじって
洗ってきざんで味醂で漬けて
四・五・六杯も喰べりゃいい
さぞやお前さんも
シャッキリ立つであろうと
ねえさん島田えビンとさした

○はたおり唄

伝承地　邑楽郡千代田町瀬戸井
伝承者　上村　セイ（M33）

一、竹に一本橋　細くて長くて
ベナベナしなって危ないけれども
お前さんと渡るウ
すべって落ちるとも
なんじょ　いとわない
丹後の宮津でビンとさした

二、声がたたなけりゃおいらがうらの
三、竹に雀が一枝二枝三枝の小枝え
チィチィカァカァ羽がいを揃えて
しなよく止まらりやええ
止めて止まらぬ
三千世界の丁半ちょぼいろ
なんじょいとわない
丹後の宮津でビンとさした
四、星野勘平さんが
ミノ着て笠着て
鉄砲かついで獅子打商売
お軽可愛や
南京床柱
丹後の宮津でビンとさした

○はたおり唄

伝承地　邑楽郡千代田町舞木
伝承者　佐藤貞作（M42）

一、だれか　きたよだ
格子の　そとにヨー
鳥打帽子の影が立つヨー
トカリン　トカリン

二、寒い晩だよ
三星（さんちょう）がひかるヨー
早く十時に
なればよいヨー
トカリン　トカリン

三、こたつやぐらの
柱と亭主はヨー
なけりゃならない
あればじゃまヨー
トカリン　トカリン

B　祭り歌・祝い歌

○祝い歌

伝承地　桐生市菱町黒川
伝承者　新井　嘉吉

〽何時来て見てもこの店は
店が繁盛しておめでたい
明日乗り込む宝船千石万石山に積み
明日乗り込む宝船
店が繁盛しておめでたい
おめでたい

○念仏

伝承者　桐生市梅田町
伝承者　老人多数

〽ナムアミダァーブツナンマイダー
〃
〃
アマイダンゴ・ショバイダンゴ

○とらふのやくし和讃

伝承地　太田市沖之郷
伝承者　中村　みね（S1）
中村　房枝（T6）
中村　ちよ（T13）
梅沢八重子（S1）
荒江　セイ（T13）

〽きみょうちょうらい　あらたかや
薬師如来のごいんぎは
なんてんぢくは　まがたこく
将軍ほおのおんこなり
しゃかむにせそんと　いふ人は
しっただいしで　ござるとき
ぶっぽうしゅぎょうのそのために
だいとくせんに　のぼらるる
だいとくせんの　道すがら
竹の林に　さしかかり
この国　たたくと事変わり
かんきのつよき　国なれば
去年降ったる　その雪が
まだとけきえぬ　そのうちに
また当年も　降り積もり
竹の林に　住むトラも
獲物にかつれてふしいたり
しっただいしを　みるよりも
よき獲物と　こころいて
いわほて爪を　とぎならし
だいのまなこを　いからせて
げにくれないの　したをまき
ただ一口に　ふくさんと
たいしをみかけて　飛びかかり
たいしは　少しもおどろかず
なんじにとらるる　わが命
つゆちるほども　いとわねど
ふぼより　伝わるおんきょうを
ひとめとくじなすあいだ
しばしゆうよを　いたせよと
せなにおいたる　おんきょうを
すなわち　ほけきょうごのまきを
声高らかに　読みあげる
によぜい　しゅくしょほつぼだい
すなわちおんきょう　まきおさめ
トラもじょうぶつ　いたせよと
トラの頭を　はっと打ち
トラの頭が　やつにさけ
さっと　たったるちけむりの
中にみほとけ　あらわれて
昔が今に　いたるまで
とらふの薬師と　あがめられ
なぁむやくし　るりこによらい

なぁむやくし　るりこによらい
なぁむやぁくし　るりこによらい
三度

(注) 和讃するに当たっての順序
一、開経偈（かいまようげ）
二、とらふやくし和讃（本尊）
三、御薬師真言経
（オン、コロコロ、センダリ、マトウギ、ソワカ）
四、追善供養和讃
五、観世音菩薩御和讃
六、送り経音（十方三世一切佛外）
薬師三尊に向かって、全員正座し、先導者の鉦の合図で合音唱する。

○追善供養御和讃

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

一、たまとむすびて　はちすばに
おきたるつゆの　ひとしずく
ながきはひ[ヲ]との　ねがいにて
みじかきものは　いのちなり

二、きのう[ヲ]ありしは　きょう[ヲ]はゆめ
うつつにみゆる　みすがたは
こころのな[ヲ]かの　かげにして
あわせるて[ヲ]こそ　まことなる

三、みなをしづかに　とのう[ヲ]れば
おもいはさ[ヲ]らに　いやましぬ
おのずとに[ヲ]じむ　なみだにも
えにしのふ[ヲ]かき　ゆえをしる

四、は[ヲ]なのいろかに　はえわたり
まごころあ[ヲ]かし　みあかしは
まいらすこ[ヲ]のくゆりかぞ
ほのぼのき[ヲ]よく　かおりつつ
深きがゆえのおん誓い
南無や大悲の観世音

三、本来きよき佛性の
そなわる身をばさとれよと
蓮の華のおんおしえ
南無や大悲の観世音

四、めぐみのなかにつつまれて
うれしさあまるおきふしに
何をばおもいわずらわん
南無や大悲の観世音

○観世音菩薩御和讃

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

一、お慈悲の眼あたたかく
まどかに智恵は満ちわたる
この世の母のおん姿
南無や大悲の観世音

二、心の闇は暗くして
迷はまこと深けれど

○日向義民地蔵念仏

伝承地　館林市日向
伝承者　山口　ハル（M42）
神谷　シン（M43）
桜井　初江（M44）
原　いえ（T1）
他九名

帰命長礼上州の、佐貫の庄の日向村、義民地蔵の御由来は、昔延宝年中に、時の領主の重役が、殿を欺きあるがなし、よこしま非道に目がくれて、民の難儀をかえりみず、領主に納める御倉米、一俵に一斗

の割増しを、権威をかさに言い付ける、百姓達は驚いて、上野下野四郡の、新田山田に築田郡、邑楽郡名手だち、郡奉行に連署にて嘆願願いをいたされど、さらに取上げなきのみか

背く輩はもろともに、牢舎につないでこらすぞと、なおも厳しき取り立てに、民の難儀は如何ばかり、此に義人の十八名、民の難儀を救わんと、家も妻子も命まで、捨てる覚悟で血判し、はるばる江戸のお屋敷に、割増し御免を願出る、国の掟は是非もない、十八人の義民だち、咎の縄をいただいて、笑ろうて牢屋の侘住まい、調べも済めば四郡の、民の難儀は救われる、百姓の身をばばからず、領主の政治批判する、直訴願いの罪重く、延宝四年の辰の年如月半ばの十五日、佐貫日向の仕置場で十八人の義人こそ、見るも無惨の御成敗、今や最期とみる刹那、集まるす（う）万の人々は、南無阿弥陀仏のときの声、悲しき涙ともろともに

たむける香華山をなし、役人どもの顔青く、いと悲しげに賞い泣き、四郡の人の身に代わり、無惨の最期をとぐるとも、そのいさおしは永しえに、苔のむすまで鑑なり、人は一代名は末代、日向の露と消えられし、義人の冥福祈らんと、御恩を受けし四郡の、各村々で出し合うて、地蔵菩薩を刻まれる、時は元禄十年の、

端午の月の中の頃、一夜の夢に生まれきて、義民地蔵とまつられる、流石は義民の生仏、誠心こめて祈るなら、如何なる願いも成就する、南無大悲の地蔵尊（をんかかかさんまゑいそわか）

（御詠歌）

みをすててたみをたすくるぎみんこそぢぞうぼさつのけしんなるらん

○豊年踊り（村つくし）

伝承地　邑楽郡板倉町山口

伝承者　奈良　富三（M31）

〽二人支度が大島揃い
さして行くのが梅原村よ
白帆つづきのあの利根川を
眺めながらも斗合田村よ

歩む姿は美しけれど
顔の江黒に愛想がつきて
それはよけれどあの堤なる
風で柳をなびけるとおり

私とお前じゃ千津井よりも
堅い約束してあるからに
たとえ貧しき麦倉なりと
なれりゃいいのにお前はいやか

なんぼお前が高鳥だとて
元のおこりは天神様よ
一度そわなきゃ今このしまつ
早く板倉雷電様よ

（以下省略）

○豊年踊り

伝承地　邑楽郡板倉町北海老瀬

伝承者　佐山　たま（T12）

一、踊り消すなよ鶏鳴くまでは
鶏が鳴きましょか　夜が明けましょか

二、コケコッコ　バサバサで　ちょいと夜があけても
踊り消すなよ鳥なくまでは

（囃子言葉）

ハアー　ドッコイショの国では
ボタモチャ　コメダヨ
ナカマデシロイヨ　ソレドコイショ

三、鳥が鳴きましたか　夜が明けましょか

コケコッコ　バサバサで　ちょいと夜が明ける

（囃子言葉）

ハアー　三角畑で西瓜の畜生が
娘のまねして　真赤な血をはく
ソラ　ドッコイ　ドッコイ
ソレ　ドコショイ

○地蔵和讃

伝承地　邑楽郡千代田町舞木
伝承者　茂木　フエ（M34）

〈帰命頂礼　前木村
余り世情の淋しさに
このたび　いでし地蔵尊
日頃地蔵を信仰し
南無阿弥陀仏と唱をれば
日限地蔵と現れて
それを聞く人見る人が
我も我もと参り来る
心願かけし　その人に
あなた　こなたの　へだてなく
さっそくご利益なし給う
誠に　ご利益ありがたや
ごりしょうありて　あらたかさ
たてて　この世へ伝えおく
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

○豊年万作の唄

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚・坪谷
伝承者　渡部　幾雄（S23）

〈そうーだよホイ
……
今年ナー、ア、世が良で
豊年だよコラ、万作だよ
早稲手も、ア、十分だよー
中手も、コラ、十分だよ
晩稲手も、ア、十分だよ
樹箕で、ア、計り込む
……
ヤ、レーサ、箕ーでーな
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイ
ナーハヨ、ホイナーー

（注）昔は、女性の上演は禁止されていてすべて男子が歌い踊り演じたが、今では男女どちらでもよい。

○豊年万作節

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚・坪谷
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

（一）

（豊年万作の唄）

〈ハァーア、ヨーホーナーホイ
今年ナー、ア、世が良でヨーホホホイ
豊年だよコラ、万作だよ
早稲手も、ア、十分だよーヨーホホホイ
中手も、コラ、十分だよ
晩稲手も、ア、十分だよーヨーホホホイ
何もかも、コラ、十分だよ
樹箕で、ア、計り込む、
……
ヤ、レーサ箕ーでーな
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイ
ナーハヨ、ホイナーー

（二）

（七福神の唄）

〈ハアーアー、ヨーホーナーホイ
目出度ナー、ア、目出度のヨーホホホイ
宝船、コラ、見えてよ
乗りたる、ア、ご人は、ヨーホホホイ
七福、コラ、人でよ
綾とナー、ア、錦の、ヨーホホイ
帆柱、コラ舞い立てて

黄金や、ア、くがねを、ヨーホホイ
俵を、コラ積みてよ
……
ヤ、レーサ、俵ーを
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイ
ナーハヨ、ホイナー

㈡（伊勢音頭の唄）
〽ハァーア、ヨーホーナーホイ
伊勢はナー、ア、津で持つ、ヨーホホホイ
津はなよ、コラ、伊勢で持つ
尾張ナー、ア、名古屋は、ヨーホホホイ
城でよ、コラ、持つよ
家のナー、ア、財産（しんしょう）は、ヨーホホイ
家内（かない）（妻）が、コラ、持つよ
妻のナー、ア、ふんどしや、ヨーホホイ
紐でよ、コラ持つよ
……
ヤ、レーサ、紐でーでな
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイ
ナーハヨ、ホイナー

㈢（切りの唄）
〽ハアーアー、ヨーホーナーホイ
万作ナー、ア、踊りは、ヨーホホイ
まだまだ、コラ、長いが
余りナー、ア、長居は、ヨーホホイ
踊り子が、コラ、困るよ
続いてナー、ア、わしらも、ヨーホホホイ
諸君も、コラ、皆、大儀
先ずわよ、ア、ここいらでヨーホホホイ
切り、コラ、まするよ
……
ヤ、レーサ、切りまーする
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイ
ナーハヨ、ホイナー
（注）八木節の原点であると風評されている。

〇万作数え唄
伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚・坪谷
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

一つとせ、人を見下ろす、師直は師直は
ア、「かほよ」さ御前に、文をやる文をやる
二つとせ、二巴の定紋は定紋は
ア、主税に大星蔵之助
三つとせ、眉間を三寸、切離し切離し
ア、上と下では、大騒ぎ大騒ぎ
四つとせ、よくよくご運が、尽き果てた尽き果てた
ア、浅野内匠守様へと、ご切腹ご切腹
五つとせ、猪、射たんと、勘平は勘平は、
ア、狙いを込めたる、二つ玉二つ玉
六つとせ、向こうを通るは、四手籠四手籠
ア、お軽は身を売る、祇園町祇園町
七つとせ、泣き泣き通るは、ひいえ門ひいえ門
ア、妹のお軽に、言いきかせ言いきかせ
八つとせ、山科通るは、二人連れ二人連れ
ア、主税は館へ、急ぎ行く急ぎ行く
九つとせ、虚無僧姿の、はん蔵ははん蔵は
ア、我が婿主税が、気にかかる気にかかる
十とせ、殿様屋敷は蔵之助蔵之助
ア、主君の仇が、本望に本望に
十一とせ、十一ー二日は、蔵開き蔵開き
ア、お蔵を開いて、祝いましょ祝いましょ
十二とせ、十二の神楽を、お手に持ちお手に持ち
ア、笛や太鼓で、囃子ましょう囃子ましょう
十三とせ、十三新鉢（あらばち）まだ早いまだ早い
ア、十四の暮れまで、待ってくれ待ってくれ
十四とせ、ようやく十四を、待ち受けた待ち受けた
ア、もう早、よかろと、手をつける手をつける
十五とせ、十五夜お月は、夜に余る夜に余る
ア、踊り子のおちんこは、手に余る手に余る

C　踊り唄・舞謡

○赤堀獅子舞

伝承地　新田郡新田町赤堀
伝承者　関口　渡（M37）
他23名

〽詣り来て、これの糸屋を跳むれば
黄金、小枠で挽くは　十七
（養蚕家にて歌う）
綸宜殿が、これの社殿で昼寝する
参り来るささらを　夢に見て
（社殿で歌う）
千本の槍をそろえて　出で立ちぬ
二十四、五領知行取り
（武士の家にて歌う）
この森に鷹が棲む　鷹は棲まねど
御神楽の音
盤石の岩は　崩れて
明るとも　晴れゆく霧はまだ晴れぬ
（神社にて歌う）
月も日も　西へしまわる
極楽浄土は　西にある
（万日堂にて歌う）

○木崎音頭

伝承地　新田郡新田町赤堀
伝承者　関口　渡（M37）
他23名

長　歌

〽ハァーエお集まりなるみなさん方に
木崎音頭を読みあげまする
北に赤城峰　南に利根よ
ひかえおります　木崎の町よ
このや宿にも　名所が御座る
上の町から　読み上げまする
上の町には　お薬師様よ
仲の町には　金比羅様よ
ここは　新田の義貞公が
冠掛けたる　冠掛けの松
又は名に負う　中江田薬師
江田の小池の　庁葉の芦や
護国豊穣　八幡様に
祈る心や　あの赤堀の
秋の祭の　御獅子の舞は
悪魔払いと　その名も高い
下の町なる　明神様の
桜開けば　その谷くもる
木崎下町の　三方の辻に
お立ちなされる　石地蔵様は
女通れば　石取ってなげる
男通れば　にっこと笑う
これがほんとの　色地蔵様よ

○木崎音頭（旧謡）

伝承地　新田郡新田町木崎
伝承者　八木　富作

〽ハァーエごめんこうむり読み上げまする
雨が三年日照りが四年
むこう飢饉が七年つづき
田地売うか娘を売ろうか
田地小作で売るこたあできぬ
娘売ろうと相談かけりゃ
姉を売ろうか妹を売ろうか
姉はアバタで金にはならぬ
妹売ろとの相談きまる
売られ買われて木崎の宿の
仲の町なるウキバヤシさまえ

五年年季の五五二十五両
つとめする身はさてつらいもの

夜毎よごとにまくらを交わし
今日の旅ばの主さん相手

明日はいずくの主さんなるや
天気悪けりゃあのばあさんが

こわい目をしてまたきめつける
抱いてみたとて聞いてはくれず

客をだましてお金をとって
情けかけぬが商売上手

私しゃ貧乏人の娘に生まれ
かけし願いも皆水のアワ

金がかたきのこの世の中に
金も欲しいや娘も欲しや

二朱や三朱で抱寝をされて
つらいつとめも皆親のため

のぼるやねこさんはハァ針の山だ

○木崎音頭（新謡）

伝承地　新田郡新田町木崎
伝承者　八木　富作
斉藤徳三郎

〽ハァーエお集まりなるみなさん方に
木崎音頭を読み上げまする

北は赤城峰　南は利根よ
ひかえおります木崎の宿よ

このや宿にも　名所がござる
上の町から読み上げまする

上の町にて　お薬師さまよ
仲の町には金比羅さまよ

ここに新田の　義貞公が
冠掛け足る冠掛けの松

又は名に負う　中江田薬師
江戸の小池の　片葉の芦や

護国豊穣　八幡様に
祈る心のあの赤堀の

秋の祭りの　お獅子の舞は
悪魔除とてその名も高い

下の町なる　明神様の
桜開けばその香にくもる

木崎街道の　三方の辻に
お立ちなされしお地蔵さまは

男通れば　にっこと笑う
女通れば石を取って投げる

これがヤー色除けの
色地蔵様だがヤーエー

○カンカン踊りの唄

伝承地　新田郡藪塚本町寺下
伝承者　新井　孝平（M40）

〽カンカンノー
キュノーデス　コリャ
キュワキユ　デス
サンジョナライー　サーハー
ミカンサ　コリャ
テッペンタイコデ　ヤーハー

ノハ　コリャ　ヤーハーノハー
メンコノオサイデツン　ツラツンノツ
オヤマ　カフーリン
ひっくりけえっちゃ　ばっきんだ
ピーピーピットコト　オッペコペーノペ

〽山寺
山寺のー　山寺のーコリャ
鐘つくしょもくが　ひいふのみ
ひいふのみー
つくたびつくたび　ビックリシャックリトー
コリャ　ビックリシャックリトー
オヤヌカ　フーリン　そばやの風りん
ひっくりけえっちゃ　ばっきんだ
ペッペッペットコト　オッペコペーノペ
いぐんべ　帰るんべ
いぐんべ　帰るんべ
そら　うそだんべ
やっぱり　オメコがおったつだんべ
ひっくりけえっちゃ　ばっきんだ
ペッペッペットコト　オッペコペーノペ
ペッペッペットコト　オッペコペーノペ

〽お医者さん
お医者さでも　検査のときは
やっぱり　オメコがおったつだんべ
ひっくりけえっちゃ　ばっきんだ

ペッペッペットコト　オッペコペーノペ

D 座興歌

○広沢新道開通式の歌

伝承地　桐生市広沢町

伝承者　老人会

一、大正聖世第九年節は晴明神無月
紅葉綾なすみづほ秋吾が広沢の只中を
一貫通する新道路開通式の喜びを
祝も嬉しこの良き日歌も嬉し幸ある日

二、昔ローマの繁栄は道路交通発達し
全欧州の文明の中枢となりしためぞかし
吾が広沢の新道路帝国文化の延源と
宇代にほこる時ぞいつ世界に誇る時は何時

○太田甚句

伝承地　太田市本町

伝承者　島田　貞夫（S9）

〽私しゃ　太田の金山育ち
外に木はない松ばかり
ヨイトナー　ヨイトナー

献上松茸　太田のほまれ
昔しゃ　お江戸え十万石で
ヨイトナー　ヨイトナー

下に下にと　格式もって
まかり通った　香が残る
ヨイトナー　ヨイトナー

前は利根川　西浅間山
東金山　呑竜さまよ
ヨイトナー　ヨイトナー

しんぼしなされ　しんぼが第一
しんぼする木にゃ　金がなる
ヨイトナーヨイトナー

烏なきでも　知れそなもんだ
烏その日の役でなく
ヨイトナー　ヨイトナー

浅間山にゃ　煙がたえぬ
わしの胸には　苦がたえぬ
ヨイトナー　ヨイトナー

私しゃ桐生と　小俣の境
始終おまたで　苦労する
ヨイトナー　ヨイトナー

男だてなら　渡良瀬川の
水の流れを　止めてみな
ヨイトナー　ヨイトナー

水の流れは　止めようで止まる
止めて　止まらぬ色の道よ
ヨイトナー　ヨイトナー

ぬるいお茶でも　貴女の手から
さしてもらへば　あつくなる
ヨイトナー　ヨイトナー

糸は千本　切れてもつなぐ
主と切れては　つなげない
ヨイトナー　ヨイトナー

今年糸繰り　来年嫁子
さ来年は子持ちで苦労する
ヨイトナー　ヨイトナー

親はこの世の　生き神様よ
親ほど大事なものはない

ヨイトナー　ヨイトナー

昔なじみと　けっつまづいた石は
にくいながらも後ろを見る
ヨイトナー　ヨイトナー

親の小言と　ナスビの花は
末はひとつもむだがない
ヨイトナーヨイトナー

○相撲甚句

伝承地　新田郡藪塚本町六千石
伝承者　田島　次郎（M45）

〽ああー　よー
ええ物のはじめが　一という
車に積んでえんやらさと引くを
二（荷）という
女のだいやくは　三という
子供の小便　四という
白黒さすのが　五（碁）という
昔のさむらい　六（禄）という
ふるしき包みを持って
のれんのさがった家へ　入ったり出たり
するのを　七（質）という
ぶんと飛んで　ちくりとさすのが
八（蜂）という
年寄りじいさん　ばあさんが
歯のないくせに　もんぐりしゃんぐり
食べるのを　九（苦）という
ええ　かじやさんが　かねをやいて
水の中へ入れれば　よーお　おほほい
ええ　十（ジュウ）というよ
ああ　どっこい　どっこい

ああー　よー
ええ　正月　門に松が立つ
二月は　初午　お稲荷さんは白狐（びゃっこ）立つ
三月　節供で　雛が立つ
四月は　八日で釈迦が立つ
五月五日は　織（のぼり）立つ
六月　天王で　神輿（みこし）立つ
七月や　七夕　笠が立つ
八月や　十五夜　すすき立つ
九月は　菊見で　人が立つ
十月　出雲へ　神が立つ
十一月は　明治節で　どこの門でも国旗立つ
十二月となるならば　みそか勘定で
借金取りが門に立つ
ええ　立たれた　わたしらはよ
おほほい　ええ寒気立つよ
ああ　どっこい　どっこい
ああ　ええ
ええ　当所相撲は藪塚相撲だよ
ええ　あまた見物ある中に
きれいなねぇちゃん　ただひとり
相撲を見ているその時に
蜂が一匹飛んで来て
ええ　娘の穴を　ちくりさそうとした時に
そばに見ていた若衆が
われも　おれもとかけ寄って
その蜂とらんとしたならば
そばに見ている母親が
申し　申し　若衆さん
その子は　わたしの娘だが
その蜂や私が　とりますと言えば
娘の言うことにゃ
かあちゃん、かあちゃん聞いとくれ
昔「こういん」の　たとえでも
ええ　穴んばちゃ
他人のよ　おほほい　手にかかるよ
ああ　どっこい　どっこい
それより　うたがい　なくよりましだ
ひきわり御前の　炊き置きは
いっとき過ぎれば　ばらり　ばらり

○相撲甚句

伝承地　邑楽郡千代田町舞木
伝承者　佐藤　貞作（M42）

〽夕べ長良様で色事が
あったそうじゃないかい
　コラ、ドッチョメ　ドッチョメ
ハァーところえ神主が
やってきて
これこれ両人何をする
ちょぼいちやっちゃあー
いけないぜ
ちょぼいちなんぞじゃございません
聞いて下さい神主さん
そもそも二人の間柄
ほれて三年通って五年
ようやく話がまとまって
村の氏子をふやそうと
これから始めるところです
神主さんはあっけにとられて
氏子ふやすは
よいけれど
神を粗末にヨウー
アアしちゃならぬで
　コラ　ドッコイ
　ドッコイ

○ザンザ節

伝承地　邑楽郡千代田町舞木
伝承者　佐藤　貞作（M42）

一、舞木片町　片側土手よ
　コラザンザ
前は利根川　帆がのぼるよ
　ヨホホイ　ドッコイ

二、鮎は瀬に住む　鳥りゃ木に止まる
　コラ　ザンザ
わたしゃあなたが　目に止まる
　ヨホ　ホイドッコイ

三、エンヤコラザンザで
　疲れた　からだ
　コラ　ザンザ
主の顔みりゃ　すぐなおる
　ヨホ　ホイドッコイ

○火津絵

伝承地　邑楽郡千代田町舞木
伝承者　佐藤　貞作（M42）

一、おーいおーいと親爺どの
その金かしてちょうだいな
ええ市兵衛はびっくりぎょうてん
金ではないぞえ
娘に貰った宵の握り飯
やれやれお先に参りましょうか
アレサつぶとい親爺どの
金と命のひきかえじゃ
ずどんと二つ玉

二、山崎街道の場
おてんとうさんがうらのお月さんに
金のしんせいに
そつちのお星さんは
どちらに行きやさんす
わしもおなじか金のしんせいに
そんなら二人でお同道
しようじゃないか
『モシモシお月さん
あなたに少々が願があって参ったが
何と聞いてはくれまいかえ』
『いつも二人のお揃いで
なんのことかは知れねえが、身に
叶うことなら何なりと
引受けようよ』
『そんなら聞いてくれるかい

私等両人に金を百萬両
かしちゃくれめえかい』
『な、な、なんだって俺に金かせと
今話聞かせてやるから
耳の穴をかさらってよく
聞かっせ』
金かしをするような身分なら
晦日晦日にゃ
隠れはせぬぞい

○お半長右衛門の唄

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

一、そおーだよ　ホイ
お半が、ア、故郷（くに）はない
近江の、コラ故郷でよ
ちくわの、ア、村でない
百姓の、コラ、そう兵衛さんは
有徳（うどく）の、ア、暮らしで
子が無い、コラ、故によ
お伊勢ナ、ア、様へと
ごりがん、コラ、かけてよ
玉のナーア、ようなる
お半が、コラ、出来てよ
今年ナ、ア、お半は
十四とコラ、なればよ
お半を、ア、連れてない
ごりがん、コラ、ほどしに
早急（はやいそ）ア、われます
急げば、コラ、程なく
お伊勢ーとな
ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨホイ
ナーハヨ、ホイナ

二、そおーだよホイ
お半と、ア、長右衛門さんはない
ちょいとなり、コラ、染めてよ
染めたか、ア、良ければ
お半のコラ、身の上
二カ月（ふたつき）ア、三カ月は
袖でも、コラ、隠します
最早な、ア、七カ月
出産時（あらわれどき）コラ、月でな
この身を、ア、どうして
下さい、コラ、まするかと
言えばな、ア、長右衛門さんはない
諸手を、コラ、組んでよ
も、諸（もろ）ー手をし
ハハヨ、ハナ、ハハヨホイナ
ハハヨホイ
ナーハヨ、ホイナー

○粉屋の娘

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

そーだよホイ
おいとこそうだよ
紺の暖簾に伊勢屋と書いてある

十代伝わる
白粉粉屋さ、あのそれ茶屋から

今出て踊るのが
お梅と言うてさ、粉屋の娘だよ

お梅は十六歳
賢く器量よく成程良い娘じゃ

あの娘と添うなら
三年三月でもいやいや一生でも

人の目を盗んで

朝は早起き水も汲みましょ
まんまも焚きます
手鍋を下げましょ良い粉できるまで

ぐるりぐるりと
お梅と一緒に寝るも寝ないで

粉箱こらさっと担いで
花のお江戸え西の都えと

歩かにゃなるまい
おいとこそうだよ婿になりたい

○しちりこちゃん数え唄

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

〽一つとせーようのーえー
ひしゃくにおいづるすげ笠を
巡礼姿で父母を
尋のうかいな
ちりんと、しろりこちゃんじゃ
つんてん　しちりこちゃん
アーつんてんしゃん

つんてんしゃん
……
（繰り返す）

○鬼人　お松

伝承地　邑楽郡邑楽町篠塚
伝承者　渡辺　幾雄（S23）

一、ソーダヨホイ
……
夏目の、ア、段上
白、コラ、三郎は
殿のナ、ア、御用で
花のナ、コラ、東えと
殻付、ア、飛脚で
お下り、コラ、なさるよ
行けばな、ア、まもなく
笠松、コラ、峠よ
山のナ、ア、麓に
水茶屋コラ、ありてな
エビスナ、ア、顔した
亭主が、コラ、ありてな
ここでな、ア、ちょいとな
休息、コラ、致さん

ヤ、ちょいとナー
ハハヨハナ　ハハヨホイナ
ハハヨホイ
ナーハヨ、ホイナー

二、さらばな、ア、白三郎は
この茶屋、コラ、発ちてな
急いで、ア、参れど
峠は、コラ、暗く
一里と、ア、登れば
十二が、コラ薬師よ
薬師な、ア、様へと
ご加護を、コラ、頼む
三里とさ、ア、登れば
笠松、コラ頂上
風もな、ア、通さぬ
松の木、コラ松よ
このナーア、深山で
十（ぢゅう）と、コラ、幾年
住みかと、ア、致さん
おほろに、コラ、見ゆるは
女、ア、盗賊
鬼人の、コラ、お松が
小松の、ア、木陰に
身を伏せ、コラ隠し

オーイ、ア、オーイと
呼ばわり、コラ、まするよ
ヤ、オーイとナー
ハハヨハナ、ハハヨホイナ、ハハヨホイ
ナーハヨ、ホイナー

三、夏目の、ア、段上
白、コラ、三郎は
鬼人の、ア、お松と
知らぬで、コラ、参るよ
お松が、ア、先にと
案内に、コラ、発ちてよ
後から、ア、白三郎が
つるしよう、コラ、参るよ
つるしよう、ア、行けばな
瀬田川、コラ、なりてよ
ヤ、行けばナー
ハハヨハナ、ハハヨホイナ
ハハヨホイ
ナーハヨ、ホイナー

E　語り物・祝福芸の歌

○明治43年水害のイロハ唄

伝承地　邑楽郡明和村矢島

伝承者　泉田　かね（M34）

イの字とせ
いかに戌年悪年ぞ
六日七夜の大雨で
夜の三時に破壊され
ロの字とせ
路頭に迷うよ大水で
家は流されもろともに
屋根の上にと上がられる
ハの字とせ
話を聞いても恐ろしい
こく（穀）や着類も皆浸し
なをさら困るよお味噌まで
ニの字とせ
二階上りて家内中
船を見るをば思い立ち
お助けなさいと呼ばられる
ホの字とせ
ほれて流れる木ぞ重く
続いてひろのは皆浮きて
夜とうになると皆沈む
ヘの字とせ
へるにへらない大水で
家は流されもろともに
屋根の上にと上がられる
トの字とせ
とてもたまらぬこれこそは
村の役員立寄りて
とどの窮状願い出る
チの字とせ
地の雨こそは恐ろしい
給水止をば破壊され
二度の修繕いたされる
リの字とせ
陸の見えるは西北よ
それより水をばたまらせて
何をやるにも通い帳

F 子守歌

○皆沢子守歌

伝承地　桐生市梅田町
伝承者　森下ツヤ子

ねんねんね山の白ねこが
足だをはいておりてくる
足だじゃあぶないジョンジョがいい
ジョンジョの鼻緒をが切れたなら
赤い鼻緒でたててやれ
白い鼻緒でたててやれ
ねろよ、ねろよ、ねんねろよ
ねろってのにねないのか
このがきめ

○子守歌

伝承地　太田市東長岡
伝承者　若林　ちえ（T5）

ねんねん　小山の
　子うさぎは
どうして　お耳が
　なぁがいの
お母さんの　お腹に
　いたときに
しいの実　かやの実
　食べたゆえ
それで　お耳が
　なぁがいの

○子守歌

伝承地　太田市東長岡
伝承者　若林　ちえ（T5）

柴に折戸の
　しずがやに
翁と老女が
　住まいけり
翁は山へ
　芝刈りに
老女は川に
　衣すすぎ

G　わらべ唄

○遊戯歌

伝承地　桐生市広沢町
伝承者　丹羽　フキ（M41）
丹羽　トク（M41）

一つや　後徳丸は可哀相に継母さまに祈られて
二つや　両親様があるならばこういう難儀もあるまいに
三つや　三つの歳に母さまに別れて嫌なこの世に
四つや　余所の人でも他人でも涙流さぬものは無い
五つや　何時までわが家にいたとても、こういう難儀はあるまいに
六つや　無理にすすめて暇もらい、西国四国を歩きましょう
七つや　なんぼわたしが器量良くも、金襴緞子の帯が無い
八つや　山に寝ようか野に寝ようか、狼獅子に食われよが
九つや　ここは何処だと聞いたらば、近江の国だとさ
十や　とんとん戸を叩くは誰さんだ、おうめさんなら入りやっせ

○まりつき歌

伝承地　桐生市広沢町
伝承者　丹羽　フキ
丹羽　トク

あの山で光るものは月か星か
蛍か　月ならば拝みますよ
蛍ならば手に取りて不動様へ
一銭あげて拝みますよ拝みますよ
まずまず一貫貸しました

○まりつき唄

伝承地　桐生市境野町
伝承者　新井　フサ

〽正月とせ　障子開けたら万歳が
鼓みを打つやら打たぬやら
打たぬやら
二月とせ　二日三日は寺参り
明日は彼岸のお中日
おやお中日
三月とせ　桜花よりおひなさま
飾ってりっぱな内裏さま
おや内裏さま
四月とせ　死んで又来るおしゃかさま
竹の子柄杓で花の屋根
おや花の屋根
五月とせ　ごんごん桜の前かけを
正月しめよとかけおいた
おやかけおいた
六月とせ　ろくに田の草生えるまえ
そんなにお腹が立つのかい
おや立つのかい
七月とせ　質屋のお倉は混雑で
入れたり出したり流したり
おや流したり
八月とせ　はちに刺されて泣いて来る
何かお薬有るまいか
おや有るまいか
九月とせ　草の中にはひるがいる
姉さんいっぴき目かけない
おや目かけない
十月とせ　重箱かかえてどこへ行くの
私はえびす講のおよばれに
おやおよばれに
霜月とせ　霜が降るやら凍るやら
通る子供がすべるやら
おやすべるやら
十二月とせ
十二の小そでが飛んできて
ぼっぽと燃えるはおそろしや

おやおそろしや

○かぞえ唄

伝承地　桐生市菱町黒川
伝承者　周東　庫市

〽一番初めは一の宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗吾郎
四また信濃の善光寺
五つ出雲の大社
六つ村々の鎮守さま
七つ成田の不動さま
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の弘法さま
十で東京の心願寺
それほど心願かけたなら浪子の
病気は治るでしょ
ごぉーごぉーと鳴る汽車は
武雄と浪子の別れ汽車
鳴いて血を吐く時鳥

○まりつき歌

伝承地　太田市東長岡
伝承者　若林　ちえ（T5）

〽あんたがた　どこさ
　肥後さ　肥後　どこさ
　熊本さ　熊本　どこさ
　せんばさ　せんば山には
　タヌキがおってさ
　それを猟師が
　鉄砲で打ってさ
　煮てさ　焼いてさ
　食ってさ
　おいしかぁーた

○かぞえ歌

伝承地　太田市東長岡
伝承者　若林　ちえ（T5）

〽ひい（一）　ふう（二）　みい（三）
よお（四）　いつ（五）　むう（六）
なな（七）　やあ（八）　この（九）
とう（十）　ひい（一）　ふう（二）　みい（三）
よお（四）　いつ（五）　むう（六）
なな（七）　やあ（八）　この（九）
にじゅう（二十）

（以下、三十、四十……と同様に繰り返す）

（注）ナンゴやおハジキの数を数える時に歌う。

○ホタル来い

伝承地　太田市東長岡
伝承者　若林　ちえ（T5）

〽ホ　ホォ　ホタル来い
山吹き来い
あっちの水は　苦いぞ
こっちの水は　甘いぞ
ホ　ホォ　ホタル来い
山吹き来い
あんどの光で
飛んで来い

（注）「山吹」は「源氏ホタル」を指す。

十で　東京心願寺（招魂社、博覧会と歌われる場
　　合もある。）
これほど　心願かけたなら
波子の病気は　治らんか
ごうごうごうごうと鳴る汽車は
波子と武夫の　別れ汽車

○マリつき唄

伝承地　邑楽郡明和村千津井
伝承者　石川　ヤス（T7）
　　横塚　かつ（T7）

トコドンブリやのみずやの亭主が
蛇の命をとられて
その蛇はどこだ　聞いたら
カラタチ山の青大将
木にからまり柳に
からまり四月の小枝に
からまり一っ貰かった（しょう）

○マリつき唄

伝承地　前記に同じ
伝承者　前記に同じ

一番始めは　一の宮
二又日光　中禅寺
三又佐倉の宗五郎
四又信濃の善光寺
五つは　出雲の大社
六つ　村々　鎮守様
七つ　成田の不動様
八つ　八幡の八幡宮
九つ　高野の高野山

第四章　資料

一、市町村別・調査員別の掲載民謡一覧

・報告書掲載民謡を市町村別・調査員別に整理したものである。
・A＝労作歌、B＝祭り歌・祝い歌、C＝踊り歌・舞謡、D＝座興歌、E＝語り物・祝福芸の歌、F＝子守歌、G＝わらべ歌。
・テープ番号のない曲は、採録時の録音不良等により、テープに録音してない曲である。
・曲名の欄の（　）内は、テープの標題である。（利根地域）

市町村名〔前橋市〕　調査員氏名　新保一美・矢口恭子・中川博友

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木遣歌	1	城東町	中村常男
〃	田植歌	1	下小出町	船津きくえ
〃	麦打歌	1	〃	〃
〃	麦打歌	1	荻窪町	吉沢佐四郎
〃	糸ひき歌	2	平和町	中村ふじ
〃	〃	2	市内	
B	二十二和讃	1	古市町	高橋サト
〃	二子山由来和讃	2	東大室町	中沢一郎
〃	念仏	1	荻窪町	橋詰あざ
〃	道祖神の歌		総社町	
〃	鳥追いの歌	1	総社町	
C	八木節		古市町	飯野進
〃	十二足		箱田町	吉本友好、菊池将五
〃	石投げ音頭	1	箱田町	菊池将五
C	稲荷藤節	2	泉沢町	喜楽福意
E	春駒歌		荻窪町	吉沢佐四郎
G	一年数え歌		〃	吉沢つる

市町村名　〔伊勢崎市〕　調査員氏名　矢島三郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	田植唄	2	笂井町	細渕わか
〃	麦打ち唄	2	〃	〃
G	毬つき歌		〃	〃
〃			〃	〃
A	田植歌	3	波志江町	細井喜三郎
〃	〃	4	今井町	上柿きよみ
〃	〃		〃	山王町　山口新二郎
〃	麦打ち唄		〃	今井町　矢島いし

A	糸挽き唄		今井町	矢島いし
〃	桑摘み唄	3	山王町	山口新二郎
〃	土端打歌（ザンザ節）	〃	〃	〃
B	御詠歌	14	連取元町	植木みつ江
F	子守歌	3	昭和町	矢島きよ子
〃	〃	〃	連取元町	植木みつ江
G	あそび歌	〃	〃	植木みつ江
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	縄とび歌	〃	上諏訪町	石原愛路
〃	あそび歌	〃	美茂呂町	金子しげ
〃	〃	〃	茂呂町	大沢正男
〃	〃	〃	〃	石原利子
〃	〃	〃	〃	〃
〃	ずいずいずっころばし	〃	茂呂町	石原利子
〃	毬つき歌	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	上諏訪町	植木よし子
〃	〃	〃	宮古町	徳江わか

G	あそび歌	3	宮古町	徳江わか
〃	〃	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	〃	〃
〃	毬つき歌	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	堀口町	浅井恒美
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	栄町	中山幸子
〃	〃	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	縄とび歌	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	縄とび歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	茂呂町	大沢正男
〃	〃	〃	〃	〃
〃	縄とび歌	〃	平和町	下田幸子
〃	毬つき歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	〃	〃
〃	縄とび歌	〃	〃	〃
〃	お手玉うた	〃	〃	〃

G	毬つき歌	3	平和町	下田幸子
〃	手玉歌	〃	若葉町	和久井きみ
〃	毬つき歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	馬見塚町	横堀芳江
〃	羽つき歌	〃	〃	〃
〃	おはじき歌	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	馬見塚町	横堀芳江
〃	毬つき歌	〃	上之宮町	山口とみ
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	昭和町	矢島きよ子
〃	縄とび歌	〃	〃	〃
〃	あそび歌	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
C	八木節(国定忠治)	16	波志江町	中里明康他7名
〃	(上州名物)	〃	秋元操他6名	
〃	(越後口説)	〃	加藤和江他6名	
〃	(五郎正宗孝子伝)	〃	糸井貞秋他6名	
〃	(紺屋高尾)	〃	馬見塚又三郎他6名	
〃	(まま子三次)	〃	品川常雄他6名	

調査員氏名　事務局

			調査員氏名	金子緯一郎
種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	手遊び歌	〃	長沼町	秋山雅子
〃	ジャンケン遊びの唄	3	〃	〃
〃	鬼ごっこの唄	〃	〃	〃
〃	数え唄	〃	〃	〃

市町村名　〔渋川市〕

調査員氏名　生方穣衛・小出森夫

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	湯ノ上よいとこ	9	行幸田	伊藤九平・マキ
〃	ジージーバーバー	〃	〃	〃
〃	木遣り歌	〃	金井	北原留三郎
B	鳥追うい歌	〃	行幸田	清水銀次郎他4名
〃	道祖先神小屋立て揺れの歌	〃	伊藤九平他	
〃	秋ヤ待ちの歌	〃	善養寺マサ子他	
〃	七草の歌	〃	伊藤九平	
〃	道祖神の歌	〃	石原	登坂万平・高橋久平
〃	十日夜	〃	行幸田	伊藤九平・善市
C	行幸田八木節	〃	都丸周作他2名	
〃	神代舞獅子	〃	関口清一	
D	行幸田小唄	〃	伊藤九平・マキ	
G	寿命流し	〃	伊藤九平	
〃	一人来な	〃	伊藤シン他	
〃	なんごの歌	〃	行幸田	藤谷エイ他

G	なんごの歌	9	石　原	木村テル・小谷野ミツ
〃	まりつき歌	〃	中　村	木村テル
〃	ここはどこの細道じゃ		金　井	北原ひさ
〃	一かけ二かけ	〃	〃	〃
〃	かごめかごめ	〃	〃	〃
〃	ほたるこい		石　原	登坂ナミ・松岡セウ
〃	からすからす	〃	行幸田	伊藤九平

市町村名【北　橘　村】　調査員氏名　矢口恭子・新保一美・中川博友

種類	曲　名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	高砂	10	上真壁	萩原直次郎・藤吉
〃	念仏	〃	〃	他2名
E	万歳（かぞえ歌）	〃	〃	仲澤はつ
〃	かぞえ歌（まりつき）	〃	〃	〃
〃	かぞえ歌（お手玉）	〃	〃	高橋フサ
〃	かぞえ歌（羽根つき）	〃	〃	仲澤はつ
〃	教訓いろは歌	〃	〃	高橋フサ
〃	かぞえ歌（羽根つき）	10	〃	〃

市町村名【富士見村】　調査員氏名　矢口恭子・新保一美・中川博友

種類	曲　名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	上州田植唄	5	小　暮	大竹輝男
〃	上州馬子唄	〃	〃	〃
〃	越後松前節（追分）	〃	〃	〃
A	碓氷の馬子唄	5	小　暮	大竹輝男
〃	上州木挽き唄	〃	〃	〃
〃	麦打唄	〃	石　井	本山福司
B	お念佛のご和讃	〃	〃	濱田よしを
〃	ご詠歌	〃	〃	〃
〃	百萬蛇羅念佛	5	〃	本山福司
〃	石投げ音頭	〃	小　暮	大竹輝男

市町村名【子　持　村】　調査員氏名　生方穣衛・小出森夫

種類	曲　名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	われらの鉄道	9	上白井	猪熊秋巳
〃	嫁に行くなら		白　井	埴田あさ子
B	念仏・和讃	9	〃	小見シャウ他2名
〃	雙林寺和讃（入定節）		中　郷	
D	長尾村道遙の歌		白　井	金井ツル

市町村名【小野上村】　調査員氏名　生方穣衛・小出森夫

種類	曲　名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	小野上農協火の用心の歌		村　上	石川シマ
B	正月大凧の歌		〃	〃
〃	中尾獅子舞の歌		〃	石川広吉
D	吾妻小唄		小野子	佐藤菊次
〃	小野上応援歌		村　上	石和イト
G	羽根つき歌		〃	石川シマ

G	一番初めは	村上	斎藤カネ
〃	おっさらい	小野子	佐藤梅乃
〃	だいしん	〃	佐藤菊次

市町村名【榛東村】調査員氏名 矢口恭子・新保一美・中川博友

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	御詠歌「柳澤寺」		山子田	千木良愛子・高橋シメ他12名
〃	道祖神のうた	10	山子田	〃
〃	地蔵和讃	〃	広馬場	大山博三田8名
〃	地蔵和讃	2	〃	一倉敦敏田11名

市町村名【吉岡村】調査員氏名 矢口恭子・新保一美・中川博友

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	もぐら打ちの歌	10	大久保陣馬	羽鳥善市他5名
F	子守歌	10	〃	〃
G	動物の歌	10	〃	〃
〃	仲間集めの歌	〃	〃	〃
〃	自然の歌	〃	〃	〃
〃	あそび（道具のない）歌	〃	〃	〃
〃	ほたる	〃	〃	〃
〃	社寺づくし	〃	〃	〃
〃	月づくし	〃	〃	〃
〃	一かけ二かれ	〃	〃	〃
〃	十三・七つ	〃	〃	〃

市町村名【(佐)東村】調査員氏名 金子緯一郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	まりつき唄	5	国定	江原まさ
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	羽根つき唄	〃	〃	〃
〃	縄とび唄	〃	上田	岡田はつ子
〃	たけん(竹)がえし唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃

市町村名【境町】調査員氏名 金子緯一郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	桑つみ唄	5	中島	小林定吉
B	七草の唄	〃	下渕名	秋山まさ
〃	赤わん節	〃	下武士	吉野勘重郎
F	子守歌	〃	島村	町田ちか子
〃	子守歌	〃	〃	〃
G	まりつき唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	お手玉歌	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	おはじき唄	〃	〃	〃
〃	縄とび唄	〃	〃	〃

G	かごめ	5	烏　村	町田まちこ
〃	まりつき唄	〃	下渕名	秋山まさ
〃	〃	〃	〃	〃
〃	手遊び唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	秋山たけじ
〃	ほたる取りの唄	〃	〃	秋山まさ
〃	尻取り唄	〃	境	坂本清子
〃	子取り唄	〃	〃	〃
〃	遊び唄	〃	〃	〃
〃	縄とび唄	〃	〃	〃
〃	鬼ごっこの唄	〃	〃	〃

市町村名　〔玉村町〕　調査員氏名　金子緯一郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	田植唄	5	南玉原	喜一郎
〃	麦打唄	〃	〃	〃
B	横樽音頭	〃	〃	〃

調査員氏名　矢島三郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	毬つき歌		五料	徳江つや

市町村名　〔高崎市〕　調査員氏名　金城　厚

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	地形	7	木部町	塚越敏生
A	たこつき	7	木部町	塚越敏生
B	七草の歌	〃	倉賀野町	高山　勇
〃	野辺の送り	〃	〃	〃
〃	数え歌	〃	〃	〃
〃	道祖神の歌	6	石原町	松本きし
〃	二十二夜様	〃	八幡町	堀口ハナほか
〃	地蔵念仏	6	元島名町	関　芳明
〃	あと念仏	7	木部町	塚越敏生
〃	十三仏	〃	八幡町	堀口ハナほか
〃	融通念仏	〃	〃	堀口ハナ
〃	四方がため	〃	〃	堀口ハナほか
〃	お茶和讃	〃	〃	〃
D	神田節		倉賀野町	高山　勇
F	大黒様	〃	〃	〃
〃	子守歌	6	石原町	松本きし
G	お手玉歌	〃	八幡町	篠原ミイ
〃	おんさかさかさか	7	倉賀野町	高山　勇
〃	お正月門松	6	石原町	松本きし
〃	正月せ	〃	〃	〃
〃	一人来な二人来な	〃	〃	〃
〃	とんとん手まりの	7	〃	〃

調査員氏名　松浦利隆

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	羽根つき唄	7	常盤町	秋山和子

G	お月様	7	常盤町	秋山和子	
〃	監獄のうた	〃	〃	〃	

調査員氏名　飯塚ツヤ子

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名	
C	二段落とし	8	下小鳥町	廣岡三四郎・室岡右喜雄ほか	

市町村名［藤岡市］　調査員氏名　関口正巳

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名	
B	和讃	4	上日野	武田万岳	
C	獅子舞歌	〃	下日野	新井敬次	
〃	〃	〃	〃	新井彦	
〃	〃	〃	上日野	新井武喜・黒沢一郎	
F	子守歌	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江	
〃	〃	〃	本郷	堀越英代	
G	縄とび歌	〃	本郷	堀越英代	
〃	〃	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	鬼ごっこ歌	〃	本郷	堀越英代	
〃	尻取り歌	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	まりつき歌	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江	
G	まりつき歌	4	上落合	浅見之枝・大石よし江	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	はねつき歌	〃	本郷	堀越英代	
〃	お手玉歌	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	花いちもんめ	〃	本郷	堀越英代・関口芳江	
〃	手遊び歌	〃	〃	堀越英代	
〃	遊び歌	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	関口芳江	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	堀越英代	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	本郷	堀越英代	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	

G	遊び歌	4	本　郷	堀越英代
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	上落合	浅見之枝・大石よし江
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	数え歌	〃	本　郷	堀越英代
〃	悪態歌	〃	〃	〃

市町村名　〔富岡市〕　調査員氏名　横田金治

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木遣り	8	富岡	新井嘉幸他6名
B	三和讃	〃	下丹生	吉田こと他6名
B	拳骨踊曽我兄弟	〃	曽木	入山トキ代他6名
〃	拳骨踊忠臣蔵	〃	〃	〃
G	手まりうた	〃	下丹生	吉田こと他6名
〃	手まりうた	〃	〃	〃

市町村名　〔安中市〕　調査員氏名　横田金治

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	手まりうた（ランプ屋さん）		上間仁田	高橋松寿
〃	手まりうた（天神さま）	〃	〃	〃
〃	手まりうた	〃	〃	〃

市町村名　〔榛名町〕　調査員氏名　飯塚ツヤ子

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
C	盆踊り（二段落とし）	18	上室田	樋口勝広・武井儀一郎外

市町村名　〔倉渕村〕　調査員氏名　君島政美

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木挽歌	10	三ノ倉	戸塚伝一郎
B	七草の歌	〃	全域	市川八十郎
C	判官流ささら獅子舞	〃	川浦	中沢文五
	川浦獅子舞の唄			
〃	判官流ささら獅子舞	〃	水沼	富田林
	水沼獅子舞の唄			
〃	豊年盆踊り音頭	〃	三ノ倉	戸塚伝市郎
E	春駒歌	〃	全域	塚越真一・戸塚伝市郎
G	お手玉かぞえ歌	〃	〃	丸山スエ子他3名
〃	はねつき歌	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	権田	丸山スエ子・浜名トラ
〃	あやおり歌	〃	全域	丸山スエ子・他3名
〃	まりつき歌	〃	〃	〃
〃	〃	〃	権田	丸山スエ子・他2名
〃	〃	〃	〃	〃
〃	しつけの歌	〃	〃	〃
〃	坊さん坊さん	〃	全域	朝香丞

G　桃太郎の歌　三ノ倉　朝香　丞

市町村名【箕郷町】　調査員氏名　飯塚ツヤ子

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	十二階松くずし	8-5	柏木沢	坂井源造他2名
C	盆踊り(九つぶち)	〃	中善地	生方倉之助他9名
〃	伊勢音頭くずし	〃	〃	生方倉之助
〃	数え歌	〃	〃	〃

市町村名【新町】　調査員氏名　千木良英一

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	椚石切唄	3	新町	田島一男
G	お正月の唄(もち)	〃	〃	土屋ムツミ
〃	カゴメの唄	〃	〃	〃
〃	数え歌	〃	〃	田島くに

市町村名【万場町】　調査員氏名　三沢義信

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	地形搗き歌	7	万場	町田信吾・斎藤芳三郎
〃	川丈十三里くどき節	〃	〃	町田清七他3名
G	お手玉遊び	〃	〃	三沢義信
〃	ひとがら遊びの歌	〃	〃	〃
〃	お手玉遊び歌	〃	〃	〃
〃	数え歌	〃	〃	〃

市町村名【中里村】　調査員氏名　三沢義信

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	ひとなげの歌		中里	三沢義信

市町村名【上野村】　調査員氏名　三沢義信

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	雨乞い唄		乙父	三沢義信
C	獅子舞のうた		塩の沢	〃
D	カンカンノー	7	乙父	〃

調査員氏名　神山勇

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	十石木挽き歌		乙父	中沢藤次郎

市町村名【妙義町】　調査員氏名　横田金治

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	御和讃		諸戸	土屋裕之他6名
〃	〃		〃	〃
〃	〃		〃	〃

調査員氏名　真砂知恵子

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	上州もちつき小唄		菅原	吉岡鵜一
C	女獅子がくしの歌		〃	神宮幸雄
〃	高根の舞	2	菅原	東間知代雄

市町村名　【南牧村】　調査員氏名　横田金治

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
G	手まりうた		村内	市川はつ
〃	〃		〃	市川はるを
〃	〃		〃	市川しげ
〃	〃		〃	市川ふじ
〃	わらべ歌		〃	市川しげ

市町村名　【甘楽町】　調査員氏名　横田金治

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	和讃	8	秋畑	安藤せん他6名
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
C	笹森稲荷神社代々神楽教調		〃	福島山口松太郎

市町村名　【中之条町】　調査員氏名　奈良秀重

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	真棒地形のうた	11	西中之条	青柳菊・片貝伝次
B	鳥追いの歌	〃	沢渡温泉	林和男
〃	十日夜の歌	〃	山田	安原真也・登坂利恵子
C	蟻川太々神楽のはやしと問答		〃	蟻川富沢年松
〃	岩本太々神楽の問答	〃	岩本	森田昇午郎
〃	神楽ばやし	〃	下沢渡	柏原勢一ほか
〃	大岩獅子舞のうた	11	上沢渡	関安二
〃	山田太々神楽のはやし	〃	山田	富沢公男
〃	太々神楽のはやし	〃	伊勢町	山田実
〃	獅子舞のはやし	〃	西中之条	唐沢良文ほか
〃	駒岩獅子舞のはやし	〃	四万駒岩	唐沢重平
〃	獅子舞のはやし	〃	山田	篠原仲次
F	子守歌	11	〃	田村はな
G	まりつきうた	11	赤坂	田村てう
〃	まりつきうた	11	〃	〃

市町村名　【長野原町】　調査員氏名　酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	筏乗りうた		中之条	野村源次郎

市町村名　【長野原町】　調査員氏名　千川健一

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木出し唄		羽根尾	黒岩とし
B	鳥追い唄	7	川原畑	中島卯作・中島美一
〃	十日夜	〃	羽根尾	黒岩とし・加辺つねじ
〃	七草の唄	〃	〃	〃
G	まりつき	〃	〃	〃

G	まりつき唄	7	羽根尾	黒岩とし・加辺つねじ
〃	まりつき唄	〃	〃	〃
〃	じょうりきんじょ	〃	〃	黒岩とし
〃	一段あがり	〃	〃	〃
〃	おいもやさんの唄		〃	〃
〃	うさぎのもちつき	7	〃	〃
〃	へびもむかでも		〃	黒岩とし加辺つねじ

市町村名【嬬恋村】　調査員氏名　干川健一

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	田植歌		鎌原	(女)
〃	木挽歌		干俣	
B	浅間山噴火記念御和讃	3	鎌原	鎌原観音堂奉仕会
〃	干俣村開拓和讃		干俣	
G	お手玉かぞえ唄	7	〃	干川ゆり子
〃	悪態唄		〃	干川健一

市町村名【草津町】　調査員氏名　山本忠雄

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	草津湯もみ唄	11	草津	民謡きさらぎ会田村レツほか
D	草津節	〃	〃	
〃	草津小唄	〃	〃	

市町村名【六合村】　調査員氏名　山本清司

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	鳥追いの歌	11	小雨	高原茂文
C	乙女の舞うた		広	池篠原酉蔵
D	十三月のかぞえうた	11	〃	〃
E	かぞえうた	〃	〃	〃
G	まりつきうた		〃	〃
〃	わらべ歌(おてだまうた)		小雨	高原茂文
〃	しりつぎうた(しりとりうた)		広	池篠原酉蔵

市町村名【高山村】　調査員氏名　奈良秀重

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	お盆さんの唄	11	世立	山本きそ
〃	とおかんやの唄		〃	〃
G	ひとつとせ	11	〃	〃
〃	ホトトギス(かぞえうた)		〃	〃
〃	いちかけ にかけ		〃	〃
〃	おーまんさま	11	〃	〃
〃	ほうほけちょ	〃	〃	〃
D	中山情緒		中山	綿貫四郎右衛門・奈良嘉四郎
E	春駒の歌	11	〃	奈良秀重

E	せえもんがたり	11	中山	後藤あき子
F	こもりうた	11	〃	〃
G	まりつきうた	〃	〃	奈良嘉四郎・綿貫四郎右衛門
〃	まりつきうた	〃	〃	後藤あき子
〃	あやんごとり歌(おてだま)		〃	奈良嘉四郎・綿貫四郎右衛門
〃	あそびうた(おにぎめ)	11	〃	後藤あき子
〃	あそびの歌(おにぎめ)	〃	〃	〃
〃	あそびのうた(あくたれうた)		〃	奈良嘉四郎・綿貫四郎右衛門

市町村名 【沼田市】 調査員氏名 真庭雌芳・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	お正月	12	上沼須町	武井民柄・たけい君江
〃	十日夜	〃	〃	武井民柄
G	トンビの唄	〃	〃	〃
〃	子どものケンカ(指遊びの唄)	〃	〃	武井君江
〃	一番始めは一の宮(お手玉唄)	〃	〃	武井民柄
〃	一つがんがらり(まりつき唄)	〃	〃	武井君江
〃	禿の唄(悪口唄)	〃	〃	武井民柄
〃	一年生の頃(数え唄)	〃	〃	〃
〃	ブラブラ数え歌(〃)	〃	〃	武井君江
〃	糸屋のおまき(〃)	〃	〃	〃
G	いちいちの事(口数えの唄)	〃	上沼須町	武井君江
〃	市兵衛さん(言葉遊びの唄)	〃	〃	〃
〃	市兵衛数え歌(〃)	〃	〃	〃
〃	半兵衛さん	〃	〃	武井民柄
〃	火吹き竹(数え唄)	12	〃	武井君江
〃	チョッチョ唄	〃	〃	武井民柄
〃	豆腐は白い(口遊び唄)	12	〃	武井民柄・武井君江

調査員氏名 小野信太郎・酒井正宗

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
F	子守歌		思田町	高橋安治
G	遊戯歌		町田町	藤井ふみ

市町村名 【白沢村】 調査員氏名 小野信太郎・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	臼挽き唄		岩室	岡村志ヅ江
〃	酒屋流し唄	12	高平	阿部淳一
B	お念仏	〃	小野	一
C	獅子舞唄	〃	生枝	萩原和男・萩原靖男・中村茂夫外
G	まりつき唄	〃	岩室	茂木いま
〃	〃	〃	〃	〃
〃	遊戯唄	〃	〃	岡村はる
〃	〃	〃	〃	〃
〃	お正月の唄	〃	〃	岡村志ヅ江

G	遊戯唄	12	岩　室	岡村志ヅ江
〃	〃	〃	〃	〃
〃	まりつき唄	〃	下古語父	椎原常子・戸部千代子
〃	遊戯唄	〃	小林ふみ子・戸部千代子	
〃	かぞえ唄	〃	椎原常子	
〃	羽根つき唄	〃	堀　とり	
〃	まりつき唄	〃	椎原常子	
〃	遊戯唄	〃	平　出	新木むら
〃	〃	〃	岩　室	岡村シヅ子
〃	まりつき唄	〃	〃	〃
〃	遊戯唄	〃	平　出	新井とも
〃	悪たれ唄	〃	〃	〃
〃	十日夜	〃	〃	〃
〃	羽根つき唄	〃	〃	〃
〃	木のぼりあそび	〃	〃	〃
〃	てっこはこ	〃	〃	〃
〃	とんぼ	〃	〃	〃
〃	ほうてんか	〃	〃	〃
〃	指切り	〃	〃	〃
〃	からすの唄	〃	〃	〃
〃	とんびの唄	〃	〃	〃
〃	ほたるとりの唄	〃	〃	〃
〃	かぞえ唄	〃	下古語父	椎原常子・堀とり

市町村名　【利根村】　調査員氏名　小野信太郎・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	臼挽き唄	12	穴　原	中沢春日江
B	御和讃	〃	追　貝	西尾キン外
〃	御詠歌	〃	〃	西尾キン・相田トキ外
C	盆踊り唄	〃	平　川	吉野弘造
〃	くどき節	〃	〃	〃
〃	盆踊り唄	〃	平　原	吉野光治
D	かぞえ唄	〃	砂　川	角田オキチ
F	子守唄	〃	平　原	吉野光治
G	悪口唄	〃	高戸谷	高橋吉郎
〃	唱えごと	〃	平　川	井上金吉
〃	カラスの唄	〃	平　原	吉野光治
〃	まりつき唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	平　川	吉野弘造
〃	かぞえ唄	〃	〃	〃
〃	遊戯唄	〃	〃	〃
〃	味噌玉娘	〃	穴　原	中沢春日江
〃	遊戯唄	〃	〃	〃
〃	悪たれ唄	〃	〃	〃
〃	遊戯唄	〃	〃	〃

市町村名【片品村】　調査員氏名　千明英雄

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木流し唄	9	新井梅沢千代松	
〃	桑摘唄	〃	越本笠原マキノ	
〃	米つき唄（臼挽唄）	〃	〃	
〃	草刈唄	〃	新井梅沢千代松	
〃	桑もぎ唄	〃	〃	
〃	地搗唄	〃	〃	
〃	木挽唄	〃	〃	
〃	片品馬子唄	〃	〃	
B	沼田横堂三十二番和讃	〃	越本笠原りき・笠原きくの・笠原きく	
〃	薬師様	〃	東小川千明のり・倉田フミ	
〃	沼田横堂三十一番	〃	〃	
〃	大御堂和讃	〃	〃	
D	伊勢音頭	〃	新井梅沢千代松	
〃	〃	〃	越本田村ぬい子	
〃	伊勢音頭くずし	〃	新井梅沢千代松	
〃	相撲甚句	〃	〃	
〃	岩室甚句	〃	〃	
〃	鴨緑江節	〃	越本笠原マキノ	
〃	上州片品追分	9	新井梅沢千代松	
〃	上州片品おけさ	〃	〃	
E	相撲甚句	〃	東小川千明のり	
〃	春駒の唄	9	新井萩原ナヲ・梅沢ふゆ	
F	子守歌	〃	古仲星野里可子	
〃	〃	〃	〃	
G	手まり唄	〃	〃萩原ナヲ	
〃	なんごの唄	〃	古仲星野里可子	
〃	〃（お手玉歌）	〃	〃	
〃	なんご歌	〃	〃	
〃	なんご唄	〃	〃	

市町村名【川場村】　調査員氏名　真庭唯芳・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	桑とり唄		萩室	角田ゑい
〃	繭かき唄	14	〃	〃
B	お正月（唱え歌）	〃	湯原星野みつ	
〃	十日夜	〃	門前明田ねん	
C	盆踊り唄	〃	湯原星野みつ	
D	替え歌		萩室角田ゑい	
〃	草津節		生品木村かち	
E	春駒の唄		門前桑原義幸外	
F	子守歌	14	萩室兵藤みちよ	
G	向う山（まりつき唄）	〃	門前明田ねん	
〃	鶯が一羽（〃）	〃	萩室兵藤みちよ	
〃	十文亀	〃	生品木村かち	
〃	トンボの唄	14	湯原星野みつ	

G	カマギッチョの唄	湯	原	星野みつ
〃	テッコハッコの唄	14	〃	〃
〃	タヌキの唄		〃	〃
〃	ハトポッポ		生	品 木村かち
〃	雁の唄	14	湯	原 星野みつ
〃	カラス勘三郎（カラスカラスの唄）	〃	〃	
〃	物くれ唄		〃	〃
〃	まじない唄		〃	〃
〃	凧上げ唄		〃	〃
〃	子供のケンカ（指遊び唄）	14	〃	〃
〃	正月門松（羽根つき唄）		〃	〃
〃	ブンドヤ（まりつき唄）	14	門	前 明田ねん
〃	一かけ二かけ（〃）	〃	萩	室 兵堂みちよ
〃	日露の戦い（なわとび唄）	〃	門	前 明田ねん
〃	馬鹿チンドンヤ		湯	原 星野みつ
〃	悪口唄		門	前 明田ねん

市町村名 〔月夜野町〕　調査員氏名 真庭唯芳・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	桑摘み唄		石 倉	小野勝
〃	播磨の国		〃	〃
〃	寒い風だよ（くずかき唄）		師	高橋みよし
B	七草の唄		月夜野	真庭きく
〃	道陸神		政 所	真庭武兵衛
B	十日夜		政 所	真庭武兵衛
〃	〃		下 牧	池田正雄
〃	〃		上 牧	五十嵐たき
C	月夜野盆歌	13	月夜野	川端きり
〃	月夜野盆唄		〃	橋本ふく
〃	盆踊り唄	13	〃	真庭きく
〃	〃	〃	後 閑	佐藤よし
D	朝咲く花		下 津	高橋誠志
〃	お伊勢参り		石 倉	小野勝
E	鈴木主水		〃	〃
F	ネンネコバッチコ（子もり唄）	13	政 所	真庭武兵衛
〃	子守歌	〃	月夜野	橋本ふく
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃		師	高橋みよし
〃	お月さんいくつ		政 所	真庭武兵衛
〃	〃		石 倉	小野勝
〃	子守唄		〃	〃
G	ダイシンダイシン（お手玉唄）	13	月夜野	橋本ふく
〃	おコンの嫁入り（まりつき唄）	〃	〃	〃
〃	江戸道中（羽根つき唄）	〃	〃	〃
〃	長岡の市		〃	〃
〃	お嫁さんお入り（なわとび唄）	〃	下 牧	池田サク
〃	お駒さん（まりつき唄）	〃	月夜野	橋本ふく
〃	〃（〃）	〃	〃	真庭きく

G	鴛が一羽(なわとび唄)	13	政　所	真庭武兵衛
〃	竹の節(お手玉唄)	〃	〃	〃
〃	〃	〃	下　牧	池田サク
〃	お一つ落して(お手玉唄)	13	後　閑	佐藤よし
〃	〃	〃	師	高橋みよし
〃	〃	〃	下　牧	池田サク
〃	ジョンジョケンジョ(ぞうりかくし唄)	13	政　所	真庭武兵衛
〃	楠木正成	〃	下　牧	池田サク
〃	でんでん虫	〃	月夜野	真庭きく
〃	蛍来い	13	師	高橋みよし
〃	猫かき(鬼とり唄)	〃	下　牧	池田サク
〃	〃(〃)	〃	月夜野	橋本ふく
〃	トンビの唄	〃	政　所	真庭武兵衛
〃	カラスカラス	〃	〃	〃
〃	カゴメカゴメ	13	月夜野	真庭キク
〃	松ボックリ	〃	湯　原	星野みつ
〃	タンポポの唄	〃	〃	〃
〃	ラッキョウ(言葉遊び唄)	13	月夜野	真庭きく
〃	陣取り(遊びはじめの唄)	〃	師	高橋みよし
〃	約束の唄	〃	下　牧	池田サク
〃	大寒小寒	〃	月夜野	真庭きく
〃	凧上げ	〃	師	高橋みよし
〃	通りゃんせ	13	月夜野	真庭きく
〃	猫の目	〃	〃	〃

G	達磨さん	13	月夜野	真庭きく
〃	字のできる紅葉	〃	〃	〃
〃	いいとこ床屋	〃	〃	〃
〃	一番始めは一の宮	〃	師	高橋みよし
〃	伊勢新潟(まりつき唄)	13	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	エンヤの唄	13	月夜野	真庭きく
〃	一丁スイ(きしゃごの唄)	〃	後　閑	佐藤よし
〃	一人来な(羽根つき唄)	〃	師	高橋みよし
〃	一つがんがらり	〃	上　牧	五十嵐たき
〃	しんとく丸	〃	〃	〃
〃	いの助さん	〃	後　閑	佐藤よし
〃	馬鹿でも達者	〃	月夜野	真庭きく
〃	馬鹿の大足	〃	〃	〃
〃	桃栗三年(言葉遊びの唄)	13	〃	〃
〃	爺さん婆さん(身体表現唄)	〃	下　牧	池田サク
〃	〃	〃	後　閑	佐藤よし
〃	今啼いたカラス	〃	〃	〃
〃	(泣いた子のカラカイ唄)	13	下　牧	池田サク
〃	坊主ボックリ(悪口唄)	〃	後　閑	佐藤よし
〃	悪口唄	〃	〃	高橋みよし
〃	おっちゃんどこだい(悪口唄)	13	政　所	真庭武兵衛

市町村名【水上町】　調査員氏名　真庭唯芳・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	スルスびき唄	12	藤原	浜名マサ
B	道陸神	〃	〃	〃
C	盆踊り唄	〃	〃	〃
E	飴売り唄	〃	〃	〃
F	猫とガニ	〃	〃	〃
〃	お月さんいくつ	12	〃	〃
〃	子守歌	〃	〃	〃
G	月か法師か(座りまりつきの唄)	〃	〃	〃
〃	さしまんしょ(お手玉唄)	〃	〃	〃
〃	井屋の亭主(まりつき唄)	〃	〃	〃
〃	おんさか酒屋(〃)	〃	〃	〃
〃	お指かんじょ(鬼きめ唄)	〃	〃	〃
〃	草履かくしょ(ぞうりかくし唄)	〃	〃	〃
〃	宝暦元年(ジャンケンの唄)	〃	〃	〃
〃	トンビの唄	〃	〃	〃
〃	アバヨまた明日(別れの時の唄)	12	〃	〃
〃	タンブルブ(お手玉唄)	〃	〃	〃

市町村名【新治村】　調査員氏名　阿部　孝

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	木挽唄	14	須川原	よしえ
〃	地搗唄	〃	〃	〃
B	七草の唄	〃	羽場	田村　都
〃	おいべす様の歌(おいべす講)	〃	〃	〃
〃	節分の虫封じ	〃	〃	〃
C	獅子舞歌	14	〃	本多正美
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	盆踊り歌	〃	〃	石坂ふみ・石坂寅之助
〃	〃	〃	猿ケ京	多数
F	子守歌	〃	須川原	光太郎・原　よしえ
〃	〃	〃	〃	〃
G	占い歌	〃	〃	原　よしえ
〃	竹なんご	〃	〃	〃
〃	いちばんはじめは一の宮	〃	〃	〃
〃	お手まりつき	〃	〃	〃
〃	なわとび唄	〃	〃	〃
〃	餅の一生	〃	羽場	田村　都
〃	まりつき唄	14	入須川	本多みはる
〃	〃	〃	〃	〃
〃	手まり唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃

市町村名【昭和村】　調査員氏名　真庭唯芳・酒井正保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	お正月	12	川額	唐沢久子外九名

B	七草の唄		川　額	唐沢久子外九名
〃	なり木責め		〃　〃	
〃	七色の虫		〃　〃	
〃	お盆(唱えごと)	12	〃　〃	
〃	よしっ子の盆腹		〃　〃	
〃	十日夜(十日夜唄)	12	〃　〃	
〃	師走女(年末の唱え唄)	〃	〃　〃	
〃	年末の唄		〃　〃	
F	子守唄	12	〃　〃	
G	せんば山の狸(まりつき唄)	〃	〃　〃	
〃	チチンプイ(まじない唄)	〃	〃　〃	
〃	一丁目憎らしい		〃　〃	

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
			調査員氏名	阿部　孝
B	七草の歌		栃久保	阿部孝八
〃	十三仏		〃　〃	
〃	嫁入り歌		〃　〃	
G	わらべ歌		生　越	林とく・林美也・宮田つね
〃	まりつき唄		〃　〃	
〃	絵かき唄		〃　〃	
〃	羽根つき唄		〃　〃	
〃	ゴムまりつき		〃　〃	
〃	まりつく唄		〃　〃	
〃	遊び唄		〃　〃	
G	わらべ歌		生　越	林とく・林美也・宮田つね
〃	まりつき歌		〃　〃	林たけ・林のぶ・林徳次
〃	まりつき歌		〃　〃	
〃	占い歌		永　井	諸田ちよ子
〃	なわとびの歌		〃　千明	トリ
〃	まりつき歌		〃　〃	
〃	からかい歌		〃　〃	

市町村名【桐生市】

種類	曲名	テープ番号	調査員氏名	神山　勇
			伝承地	伝承者氏名
A	豆打ち唄		菱町黒川	新井嘉吉
〃	土場打ち唄	15	相生町	山洞高一
〃	馬子唄	〃	梅田町	青木英子 15-1-2-2
B	祝い歌		菱町黒川	新井嘉吉
〃	念仏	15	梅田町	老人多数
D	広沢新道開通式の歌		広沢町	老人会
F	皆沢子守歌	15	梅田町	森下ツヤ子 15-2-1-1
G	遊戯唄		広沢町	丹羽フキ・丹羽トク
〃	まりつき唄	15	〃　〃	
〃	〃	〃	境野町	新井フサ
〃	かぞえ唄		菱町黒川	周東庫市

市町村名 【太田市】 調査員氏名 木村義一郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	草刈り唄	15	本町	高梨春枝・柳原貞子外三名
B	とちふのやくし和讃	〃	沖之郷	中村みね・中村房枝外三名
〃	追善供養御和讃	〃	〃	〃
〃	観世音菩薩御和讃	〃	〃	〃
D	太田甚句	〃	本町	島田貞夫

調査員氏名 若林宏宗

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
F	子守歌	15	東長岡	若林ちえ
〃	〃	〃	〃	〃
G	まりつき歌	〃	〃	〃
〃	かぞえ歌	〃	〃	〃
〃	ホタル来い	〃	〃	〃

市町村名 【館林市】 調査員 川島維知

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	日向義民地蔵念仏	7	日向	山口ハル・神谷シン外十一名

市町村名 【新田町】 調査員氏名 五十嵐富夫

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
C	赤堀獅子舞	赤堀関口	渡外二十三名	
〃	木崎音頭	〃	〃	〃

調査員氏名 川村勝保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
C	木崎音頭(旧謡)	木崎	八木富作	
〃	〃 (新謡)	木崎	八木富作・斎藤徳三郎	

市町村名 【藪塚本町】 調査員氏名 五十嵐富夫

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
C	カンカン踊りの唄	寺下	新井孝平	
D	相撲甚句	3	六千石	田島次郎

市町村名 【板倉町】 調査員氏名 宮田茂

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	藻取り唄	板倉	新井七蔵	
〃	麦打り唄	16	高島	阿部とら
〃	桑摘み唄	〃	高島・大久保	〃
B	豊年踊り (村つくし)	板倉	奈良富三	
〃	豊年踊り	北海老瀬	佐山たま	

町村名 【明和村】 調査員氏名 木村義一郎

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	麦打ち唄	15	新里	横塚かつ・田口キク
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 (合い打ち)	〃	〃	田口キク・石川ヤス
〃	土端打ち唄	〃	〃	石川ヤス

A	たこ打ち唄	15	新　里	石川ヤス
G	マリつき唄	〃	千津井	石川ヤス・横塚かつ
〃	〃	〃	〃	〃

市町村名　【明和村】　調査員氏名　川村勝保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
E	明治四十三年水害イロハ唄	矢	島	泉田かね

市町村名　【千代田町】　調査員氏名　川村勝保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
A	綿打ち唄	15	瀬戸井	上村セイ
〃	糸ひき唄	〃	〃	〃
〃	はたおり唄	〃	〃	〃
〃	〃	〃	舞　木	佐藤貞作
B	地蔵和讃	〃	〃	茂木フユ
D	相撲甚句	15	〃	佐藤貞作
〃	ザンザ節	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃

市町村名　【邑楽町】　調査員氏名　木村義一郎・川村勝保

種類	曲名	テープ番号	伝承地	伝承者氏名
B	豊年万作の唄	16	篠塚・坪谷	渡辺幾雄
〃	豊年万作節	〃	〃	〃
〃	万作数え唄	〃	〃	〃

二、市町村別・民謡種類別の掲載民謡数一覧表

調査地区	市町村名	種類別掲載民謡数							
		A	B	C	D	E	F	G	計
中毛地域	前橋市	8	5	4		1		2	20
	伊勢崎市	7	1	6			2	62	78
	渋川市	3	6	2	1			10	22
	北橘村		2			1		5	8
	赤城村								
	富士見村	6	4						10
	大胡町								
	宮城村								
	粕川村								
	新里村								
	黒保根村								
	東村(勢)								
	子持村	2	2		1				5
	小野上村	1	1	1	2			4	9
	伊香保町								
	榛東村		4						4
	吉岡村		1				1	9	11
	赤堀町								
	(佐)東村							7	7
	境町	1	2				1	18	22
	玉村町	2	1					1	4
	21市町村計	30	29	13	4	2	4	118	200
西毛地域	高崎市	2	11	1	1		2	9	26
	藤岡市		1	3			2	40	46
	富岡市	1	1	2				2	6
	安中市							3	3
	榛名町			1					1
	倉渕村	1	1	3		1		11	17
	箕郷町		1	3					4
	群馬町								
	新町	1						3	4
	鬼石町								
	吉井町								
	万場町	1				1		4	6
	中里村							1	1
	上野村	1	1	1	1				4
	妙義町		4	2					6
	下仁田町								

調査地区	市町村名	種類別掲載民謡数							
		A	B	C	D	E	F	G	計
	南牧村							5	5
	甘楽町		6	1					7
	松井田町								
	19市町村計	7	26	17	2	2	4	78	136
吾妻地域	中之条町	2	2	9			1	2	16
	(吾)東村								
	吾妻町								
	長野原町	1	3					8	12
	嬬恋村	2	2					2	6
	草津町	1			2				3
	六合村		3	1	1	1		8	14
	高山村				1	2	1	6	10
	8町村計	6	10	10	4	3	2	26	61
利根地域	沼田市		2				1	16	19
	白沢村	2	1	1				28	32
	利根村	1	2	3	1		1	11	19
	片品村	8	3		8	2	2	5	28
	川場村	2	2	1	2	1	1	20	29
	月夜野町	3	5	4	2	1	7	52	74
	水上町	1	1	1		1	3	10	17
	新治村	2	3	5			2	10	22
	昭和村		12				1	17	30
	9市町村計	19	31	15	13	51	8	169	270
東毛地域	桐生市	3	2		1		1	4	11
	太田市	1	3		1		2	3	10
	館林市		1						1
	尾島町								
	新田町			4					4
	藪塚本町			1	1				2
	笠懸村								
	大間々町								
	板倉町	3	2						5
	明和村	5					1	2	8
	千代田町	4	1		3				8
	大泉町								
	邑楽町		3						3
	13市町村計	16	12	5	6	1	4	15	52
70市町村合計		78	108	60	29	13	32	406	719

三、群馬県民謡関係文献目録

文献名	編・著者	発行者	発行年
草津温泉湯もみ唄	戸丸 国三郎	日本温泉協会	昭 四
草津温泉と俚謡	吉本 弘次	草津俚謡会	昭 八
土の唄と民話	伊藤 信吉	四元社	昭一四
鬼石のわらべ唄	関口 正己	（謄写版刷り）	昭二八
安中のわらべうた	木暮 勝弥	（謄写版刷り）	昭二八
郷土芸能と行事	萩原 進	煥乎堂	昭三二
草津湯もみ唄	中沢 晃三	草津町	昭三六
ふるさとのうた	山田 直次郎	みやま文庫	昭三九
村の伝説と亡び行く童謡	鶴渕 螢光	沼田市教育委員会	昭四二
群馬県民謡	群馬県教育委員会	群馬県教育委員会	昭四四
民謡調査第三集	群馬県教育委員会	群馬県教育委員会	昭四四
郷土民謡集 群馬県	群馬県教育委員会	群馬県教育委員会	昭四六
群馬のわらべうた	酒井 正保	音楽之友社	昭四六
毛府桑中歌	住谷 修	上毛民俗叢書	昭四六

群馬県郷土民謡集	群馬県教育委員会	群馬県教育委員会	昭四七
上州の民謡とわらべうた	酒井 正保	煥乎堂	昭五〇
日本民謡全集3（関東・中部編）	酒井 正保他	雄山閣	昭五一
八木節のふるさと	しの木 弘明	境町地方史研究会	昭五二
八木節実態調査（第一次報告書）	群馬県教育委員会	群馬県教育委員会	昭五五
御荷鉾嶺歌の花束2	横田 金治	ふるさとのうた保存会	昭五六
群馬の民謡	県立図書館複製	国文学六月号より	昭五六
八木節由来あれこれ	岡田 喜四郎	電子複社	昭五六
八木節考	大槻 三好	現代書房新社	昭五七
群馬の八木節	群馬県文化事業団	群馬県文化事業団	昭五七
遊びとわらべうた	永田 栄一	青木書店	昭五七
馬子唄を聞く	県立歴史博物館	上毎印刷工業㈱	昭五九
八木節とその源流を探る	台 一雄	岩下書店	昭五九
ふるさとに伝わるわらべうた	笹沢 周作	さんかい印刷㈱	昭六〇
群馬のわらべうた	酒井 正保	柳原書店	昭六二

あとがき

昭和六十二年度と六十三年度の二年度にわたって実施した民謡調査の成果をここに取りまとめ報告書として刊行することができた。ここに至るまでの間、調査に従事いただいた関係者、特に調査員の先生方のご苦労に衷心より感謝申し上げる次第である。また、調査の対象者としてご協力いただいた民謡伝承者のみなさん、お世話いただいた市町村の教育委員会の関係者に深甚なる敬意を表するとともにお礼申し上げる次第である。

群馬県内において歌い継がれて来た民謡は本県地域が関東地方の西北部に位置し、太平洋側と日本海側との交通の主要ルートを占めていることから、独自な発達を示したものはごく希れで、周辺地域特に新潟県方面とかかわりを強く示すものが多いといわれている。しかし、それはそれとして、土地に根づいて長い間、歌い継がれるなかで、この土地の風土と土地の人間性に裏付けられた特色ある民謡も育っているはずである。そうした民謡を悉皆的に調査しようという意図をもって実施されたのが今次の調査であった。それは、この種の調査としては群馬県では、最初の組織的な調査といって良いものであり、多大な成果を得ることが出来た。

しかし、この調査を進めるなかで　多くの関係者から聞かされたところでもあるが、近年の地域社会環境の変化や生活様式の変ぼうから、民謡そのものが忘れられ、歌われるものが極端に少なくなってしまっているのもいなめないところである。もう何年か前に実施できていたらというのが実感である。そうしたなかで実施された調査ではあったが、八五〇余の民謡が採録できた。それは調査にあたられた先生方のご努力の賜もの以外の何ものでもない。

本県等の調査を最終年度として、文化庁が全国を対象に一〇年間にわたって進めて来られた民謡調査事業も完結することとなった。期せずして、六十三年におよんだ昭和の時代は終って、平成の新しい時代を迎えたが、そうしたときに、本調査を完了することができたということは、エポックメーキングなものとしての性格をさらに深めることとなった。感慨一入のものがある。

最後に、本調査にあたって、大変なお骨折りをいただいた調査員の先生方にたいして、事務局として充分に行き届かなかった点の多々あったことをお詫びするとともに、今後とも変らぬご指導・ご協力をお願い申し上げ、あとがきに代えたいと思う。

群馬県教育委員会文化財保護課長　梅澤重昭

昭和六十二・六十三年度調査

群馬県の民謡

―民謡緊急調査報告書―

□発行　群馬県教育委員会
□編集　群馬県教育委員会文化財保護課
□印刷所　松本印刷工業㈱（前橋市）
□発行日　平成元年三月三十一日
改訂二版　平成三年五月一日